THE KAIZO

改造

参月号

1922





改造　三月號　目次



新聞界の覇王

朝刊　夕刊

報知新聞

報知新聞は
最大新聞にして發行部數の多きこと天下に冠たり

報知新聞は
記事の正確報道の機敏を旨とし懇切丁嚀を主義とす

定價
一部金四錢〇一ヶ月金壹圓〇郵送一ヶ月郵税共壹圓拾五錢〇三ヶ月分前金に限り郵税共金三圓廿錢▲郵劵代用五分增

廣告料
五號活字十五字詰一行金壹圓廿五錢▲雜報欄貳圓五拾錢▲一の面及掲載場所指定一行毎に貳拾五錢增

電 丸ノ内
特長五〇編輯局
長五一編輯局
長五二編輯局
長五三編輯局
長五四編輯局
特長五〇一販賣部
長五〇二販賣部
長五〇三廣告部
五〇四代理部
五〇五安信所
五〇六會計部

報知新聞は
社會の改良を大主眼とし國民一般の大なる味方たり

報知新聞は
婦人の好伴侶にして最も家庭的の特色を有し居れり

東京麹町區有樂町二丁目一番地

報知社

東洋一の新聞

アインスタインと相對性理論

理學博士

ニユートン引力を否定して、全科學界を革命せるアインスタインの相對理論は、最早學界に於て絶體のものとなりました。それで現今までの物理學上の公理、定義は根本から轉覆されました。その相

◇四六判布製
◇寫眞七葉

海外書籍購入事業開始

海外圖書雜誌の取次は地國の文明を咀嚼し同時に日本文化を促進する上に非常に意義ある事業であります。從つて之れを一二の營利會社の獨占に委し置くべきものでないと考へます。この意味に於いて今回微力ながら營利を離れてこの事業を創めました。

本事業の特徴

(一)書籍の定價を毎日の正金銀行の建相場で換算して合理的代金を申受けます(二)御申込御壹名毎に先方に注文を發します(三)直接小包で來ますから最も速い時日で御手元に届きます

(注文規則は郵券二錢封入て差上げます)

東京市日本橋區加島銀行ビルデイング三階

大同洋行書籍部

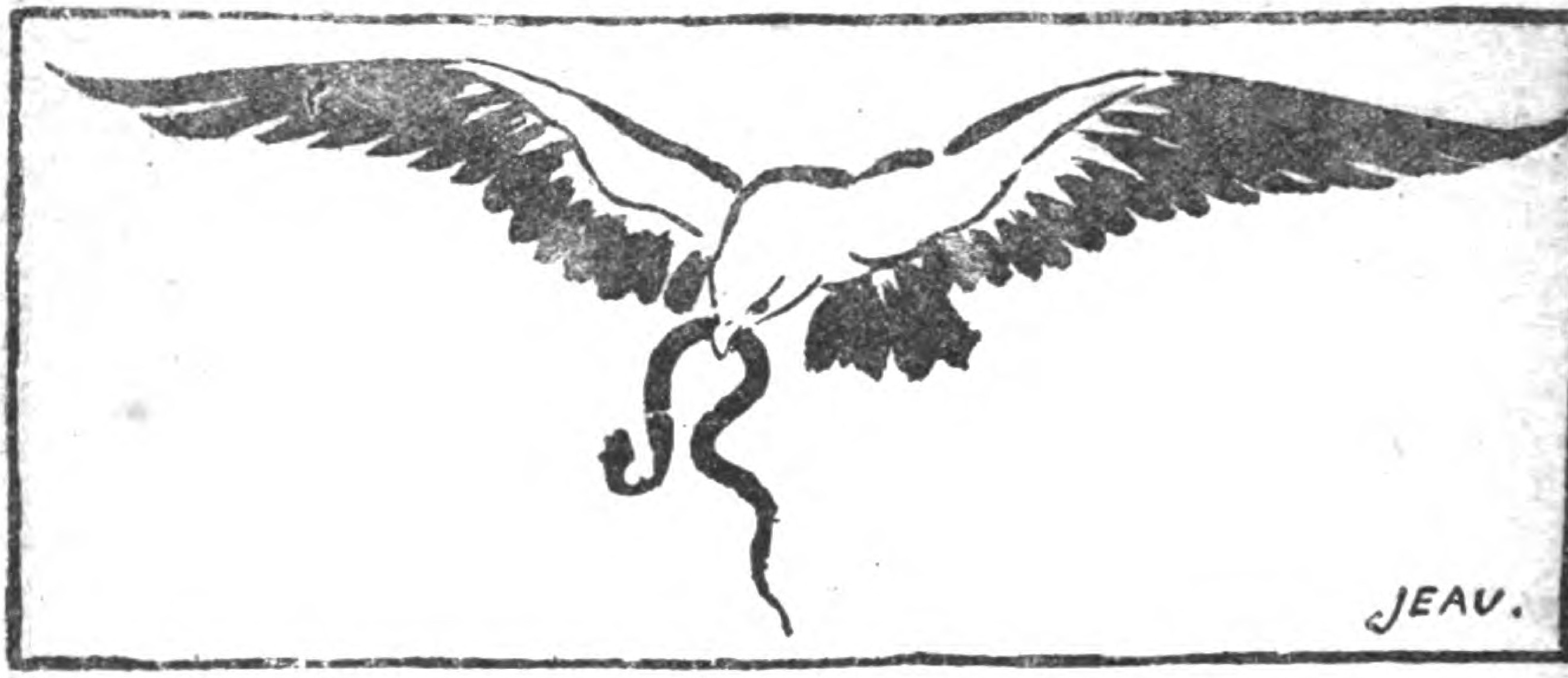
電話本局㊂三八七三、振替東京二三九六五

責任者　石本惠吉

大阪市北區絹笠町大江ビルデング二十六號

大同洋行大阪支店

電話北一三一九六・一三一九七番



＝((改造三月號))＝

世界の光明は何處より至る？

世界の光明は何處より至る？華盛頓よりか、モスコーよりか、いや〱ながら米國から引つ立てを喰つて――そんな不熱心、そんな眞理の敵――の連中が年中ブツ通しで軍縮を協議して見ても、そこには神聖な平和も光明も訪れないであろう。

我が議會に於ける木堂の軍縮意見なるものを一讀せ、人間の本質に觸れない、そして平和思想から出發せない淺薄貧弱なる時代錯誤者の泣言であることを、爾余の加藤、高橋輩は碌々云ふに足らず、唯だ我が政治家がよくもかかる低能者揃ひであることが我々の顏にかかはらぬか、モツト根本をつきつめた眞人の叫びが叫ばれぬか、世界平和のために軍艦を縮減して歸つたら飽くまでその減縮した平和觀を國民に徹底させなくてはいかぬ。しかも使節の人は歸朝すればケロリとお役目のことを忘れたるが如く、或は恥入りてコソ〱歩きするかに見らる。勇氣もなく、自信もなき政治家の行動は概ねかくの如くである、平和への憬れ、光明への憧れはなか〱に道が遠い。

かくするうちに、我等が文明の弟と思ひ、末弟と思つている古き印度はヒタ〱と新生の一大光明をめがけて驀地と進み寄つて來た、昨今は米國あたりでは世界の光明は印度より至る？と騒がれておる、デリーの權威がアーメダバドに移り、印度國民議會の結晶がガンヂーであることは我々にも看取される、彼の玄妙な政策はレーニンに一歩を越し、その人心を收攬する手際もそうである、彼等が目標とする產業自治、印度統一への哲學的步き振りは慥に世界政治の變革に對する一大狼火である、露國のボルセイズムを研究し、佛國のサンヂカリズムに心陶する我思想家たちよ、それを蛇蝎の如く忌む我軍閥、官僚の徒よ、我々の弟分がかく世界的に大業を遂げんとするのとき、我々は心を空しくして何を學ぶべきか、世界の文明は再び三千年の前に歸らんとす、釋迦、ギータの思想以來絕えて見るべきもののなかりしアーメダバドの空に再び一大新星の光りを見ることは我々も豫期しなかつたことである、世界の光明は果して何處よりか至る？

カントの平和論

文學博士　朝永三十郎



私は昨年三月及び今年一月の兩回、雜誌「哲學研究」にカントの平和論に關する二小論文を掲載した。兩者の關係は、前の論文が執筆當時の私の事情の爲めに非常に不完全なものであつたのを後の論文によつて幾分完補せんとしたものであつて、相結付いて初めて完たき形を具ふるに至るべきものであつた。此一編は即ち兩者を結付け且つ處々に改修と增補とを加へた結果である。不完全な形で現はれた二論文を一通り完き形にして置きたいといふこと、カントの平和論を校査する爲めに私が最近に讀んだ、而して尙ほ再讀するや否やが寧ろ疑はれる、若干のカントの、及びカントに關する雜著の内容が尙ほ記憶に鮮かなうちに、それを改修增補の材料に利用しておきたいといふこと、此二つの私自身の要求と、改造社瀧本君の慫慂と相俟つて此一編は成立つた。…………

カントが特に永遠的平和を主題とした著述は一七九五年の「永遠的平和の爲めに」Zum ew'gen Frieden であるが、併し其れは主として永遠的平和をして可能ならしめる諸制約及び其れが實現せらるゝ形式（卽ち彼れの所謂「消極的」及び「積極的制約」を論述したものであつて、平和主義其者の哲學的基礎づけや、永遠的平和が人間歷史に於て實現する仕組み及び過程やは此書のみでは充分に知ることは出來ぬ。併し此兩點を知らずしてはカントの平和論の眞意義、他の平和論に對するその特徵の理解は極めて不完全なるを免かれぬ。殊に第一の點はカントの平和論の最重要な特徵を構成するものであるが其れは此書には論述されて居らぬ。

西洋に於ける平和論の歷史は極めて舊い。主として古代に多く現はれた、理想を過去の黃金時代に置く夢想的、回顧的平和論は暫く措いて（此種の平和の理念は舊約書の創世紀やヘジオドスに既に現はれて居る）、將來的世界平和論のみに就て見ても、其濫觴はアレキサンダーの世界帝國の建設が機會となつてアリストテレース及び「ストア」に既に現はれて居る。近世に入つて、中世の戰亂に依つて暫く姿を潛めてゐた平和思想は、近世歐洲諸國家の固定し始めたことを機會として新たに擡頭し來り、有名なる「フマニスト」、ロツテルダムのエラスムス（Erasmns von Rotterdam, 1466–1536）先づ戰爭に對する戰端を開き、アルベリクス・ジェンティーリスは一五八八年初めて國際戰時法を、フーゴー・グローテイウスは一六二五年戰時及び平和法を論述して法に依ての戰爭防止及び緩和の方法を考究した。但し是等の國際法學者の思想中にはまだ國際聯盟の考案は存じない。此考案は法理學者の側より出でずして實際政治家の側より出でた。卽ちグローテイウスの主著出版後九年（一六三四年）佛王アンリ四世の考案と稱せらるゝシュリーの國際聯盟の所謂「大計畫」（le grand dessein）が現はれた。此計畫によれば、凡ての歐洲基督敎國が聯合して普遍的基督敎共和國を組織し、其共通問題、交渉事件を處理する爲めに六十名より成る評議會を組織し、更に最高裁判所を設置して國際爭議を判決する、といふにある。次でエストフアリアの平和に於て歐洲諸國協同の實際上の最初の試みがあつた。一六九三年「クエーカー」ヰリアム・ペン平和論に關する論文を公けにし、ウトレヒトの和議後一七一三年より一六年に亘つてサン・ピエ

ール（Abbé Charles Irénée Castel de Saint-Pierre）の「永遠的平和草案」（Projet de la paix perpétuelle）卷が現はれ、次でルソーは一七六一年此大著の拔萃「サン・ピエール永遠的平和草案抄」Extrait du projet de paix perpétuelle de St. Pierre を編して平和思想を鼓吹した。

カントの平和論は是等の近世の先行者に負ふところが尠くないといふが、併し又た是等に對して重要な特徴を有つて居る。それは即ち、是等の先行者の或者は實際的立場又は功利的見地よりして立論し其平和計畫が單に政策的意味を有するのみならず其動機が自國本位的又は自家本位的であり、或者は多少の度に於て空想的憬れや感情的博愛主義に動かされて居り、更に純理的に此問題を考究した學者は主として和戰の場合に處する法を論ずるのみであつて、第一に平和は何故に善なるか、戰爭は何故に防止せねばならぬかの明確なる理由の論究、即ち平和主義其者の哲學的基礎づけを缺き、且つ其和戰に關する法をして有効ならしむる必然的制約（例へば國際聯盟といふやうな）の考察、永遠的平和が果して、若くば如何にして人間歷史に於て實現せらるゝかの考察をも缺いで居るに對して、カントは全然實際的立場や功利的見地や空想的憬れや感情的博愛主義やから離れて、同く自己の哲學的立場に立脚して純理論的に其平和主義の基礎を確立し、更に永遠的平和の實現の制約、形式、可能、及び過程を論じ、其平和論の凡ての內容が彼れの哲學の根本精神を以て一貫せられ彼れの哲學の中心概念を以て生命づけられて居ることである。斯くて吾々は、カント哲學の全體系的結構中に於ける彼れの平和論の必然的位置を知らんが爲めには言ふまでもなく、一般平和論史に於けるカントの平和論の特有の位置、其の價値と特異性とを知らんが爲めにも、之れをば平和論に關する著作以外の著作に現はれたる彼れの一般の哲學思想と密接に關聯せしめて考査せねばならぬ。尙又た、カントの平和論に關する著作は皆な通俗的であつて論述の仕方がおのづから嚴密を缺いて居るために誤解や曲解を招き易い。此誤解や曲解を避けんが爲めにも吾々は常に之をば他の純學術的の著作と關聯せしめて見ねばならぬ。

但し斯の如くカントの一般哲學思想と關聯せしめて其平和論を校査するに當て二つの異つた中心點がある。其一は永遠的平和の**妥當**問題、他は人間歷史に於ける其**可實現性** Realisierbarkeit の問題である。批判哲學を一貫した其根本精

神を固守すれば、妥當が哲學に固有な中心問題であつて後者はさうではない。併しカント哲學中に寧ろ傍系として存して居た彼れの歴史哲學思想に於ては此後者が重要の問題となつて居る。何となれば、カントによれば歴史の目的は畢竟此永遠的平和の實現に外ならぬからである。之をカントの著述に就て言へば、第一を校査せんが爲めには「永遠的平和の爲めに」を主として「實踐理性批判」、及び「道徳の形而上學」Metaphysik der Sitten 殊に其第一編「法理學の形而上學的基礎」Metaphysische Anfangsgründe der Rechtslehre (1798) と關係せしめて見ねばならぬ。第二を校査せんが爲めには之を「判斷力批判」、及び Idee zu einer allgemeinen Geschichte in weltbürgerlicher Absicht (1784)、及び Ueber den Gemeinspruch: Das mag in der Theorie richtig sein, taugt abar nicht für die Praxis (1793) 等に關係せしめて見る必要がある。

二

前述の如くカントは其平和論に於て色々の先行者の影響を受けて居るといふが、併し中に就て最重要な關係あるものはサン・ピエールである。カントがサン・ピエールに負ふところが大であるといふことは外的並に内的の證據に依て充分知ることが出來る。一七八〇及び九〇年代に於て永遠的平和の問題を主題とし若くば直接之に論編して居るカントの著作中には是等の先人中サン、ピエールの名及び其國際聯盟の提案が最屡言及されて居るが、併し單に其等の著作のみに止まらず、一七五〇年代以降の、此問題とは直接關係なき、種々の書き物に於ても、色々の機會に其れが引合に出され、而してカントは再三、空想家又は幻想家 Schwärmer としてサン・ピエールを蔑視する論者に對して彼を辯護するに力めて居る、といふことは最近カント研究者の詮索に依て明かにせられて居る (Karl Vorländer, Kant und der Gedanke des Völkerbundes S. 13-27)。更に其思想の内容に就て見て吾々は、後に見るであらうやうにカントがサン・ピエールに負ふところが多いことを直接に看取し得るのである。而してサン・ピエールの思想は以前の法理學者の論述と實際的政治家の考案とを集めて大成したと考へられる者であるから、今カントの平和論の特徴、その何處までが先人に負ふて居る

か、何處が特にカント的であるか、を知らんが爲めに最便利な一方法として之をば對照の對象とするために下に其要旨を叙して置かうと思ふ。

サン・ピエールは彼れ以前にフーゴー・グローテイウス及びホッブス等によつて説かれた、國家の成立に關する契約説を出發點として其提案たる國際聯盟が成立せねばならぬことを論じた。人間生活の自然狀態に就てはグローテイウスとホッブスとは正反對の意見であつた。前者は社交的衝動 appetitus societati を人間本然の性となし、ホッブスは利己的即ち非社交的衝動を人間本然の性として自然狀態をば所謂「凡てが凡てに對する戰爭」bellum omnium contra onocs の狀態とした。前者によれば、國家は人間が本能的に有する社交的衝動が認識の進步に促されて有意的に整理精錬せられた結果であり、後者によれば其れは人間本來の戰爭狀態を緩和して利己的衝動に滿足を與へんが爲めに起つたものである。併し國家が自然狀態よりして契約に基いて成立するとする點に於ては兩家は同樣であつた。サン・ピエールは此契約説を出發點として下のやうに考へた。若し個人同志が（ホッブスが考へたやうに）互に敵視して居た、若くは（グローテイウスが考へたやうに）協同調和の生活を求めつつ而かも其衝動が極めて不完全に充たされて居た、無法の自然狀態よりして、法に依て支配せらるゝ公民社會即ち國家が起つたとすれば、同樣の發展が又た國家同志の間にも起つて數多國家を成員とする協同體が成立ち得ぬといふ理由はないであらう。のみならず、斯の如き國家聯合は小規模に於ては歷史上に既に現はれて居る。瑞西、ネーデルランド合衆國、及び獨逸帝國は即ち其れである。自分の考案は唯之を大規模に、且つ徹底して實行せんとするに過ぎぬ。と、斯く考へて彼れは所謂「永遠的平和案」を提唱したのである。

今此提案中に於てカントの平和論と關聯して重要なりと思はるゝ諸項を擧ぐれば下の如くである。

（一）歐洲の二十四基督教國が永遠的平和聯盟（此處で永遠的といふは單に一戰役を終結せしむるに止まるところの普通の平和締結に對して言ふ）を形造り、更に若し出來得べくんば回教國の君主も之に參加し、而して此聯盟の代表機關として當時丁度平和協議の場處となつて居たウトレヒトに常設國際評議會（sénat）を置くこと。

（二）聯盟は之に屬する國家が其定規に背反せざる限り、其內政に干渉すべからざること。

（三）　各聯盟國は六千名以上の常備軍を有すべからざること。

（四）　一切の領土的變化は、其れが侵略の結果なる場合は言ふまでもなく、相續、贈與、讓與等に依る場合と雖も絕對的に禁止せらるべきこと。

（五）　一切の國際的爭議は國際評議會の仲裁々判に依て調停せらるべきこと。

三

永遠的平和の問題を論じ、若くば之に接觸したカントの重もな著作は前に擧げた通りであるが、其等の中にて私は、カントが特に此問題を主題とした唯一の著述たる「永遠的平和の爲めに」を中心とし、而して其れの所說の不備を補ひ、若くば之と對比することが必要である範圍に於て他の著作を參酌することゝしやうと思ふ。

カントの平和論は大體之を三段に分けることが出來る。第一は平和主義其者の哲學的基礎づけ、即ち戰爭は個人間のたると國家間のたるとを問はず道德上惡であるといふこと、「戰爭あるべからず」なる禁令は實踐理性の要求であることの論述、第二は永遠的平和は如何なる制約の下に可能なるか、又た如何なる形式を以て實現されねばならぬかの考查、第三は此の如き形の永遠的平和は果して、又は如何にして、歷史の進行中に實現され得るかの考察、これである。然るに第一はカントの平和論の最深の基礎をなすものであつて最重要な項であるに拘らず彼れはそれをば「永遠的平和の爲めに」の中には論述して居ない。尙ほ此論述はカントに於てはその法及び國家の概念と最密接に聯關して居る、のみならず、法及び國家に關する彼の思想は、彼の平和論の全體に亘つて基礎となつて居るのであるが、それは此著述の中には充分に明かでない。是等を論述した重な著述は「永遠的平和の爲めに」より後に出でた「道德の形而上學」中の「法理學の形而上學的基礎」であるが、併し其以前の著作にも之に關する彼れの見解は既に斷片的に併し明確な形を以て散見し、而して「永遠的平和の爲めに」の論述は常に之を豫想して居る。其故に先づ此點をば「永遠的平和の爲めに」以外の著作に就いて一瞥して置かうと思ふ。

戰爭は何故に防止せねばならぬか、平和は何故に吾々が追求せねばならぬ目的であるか。カントによれば、戰爭は第一に法の權威を毀損するものであり、更に溯つて考ふれば吾々人間の道德的本分に背戾するものである。此旨を明かにせんが爲めには吾々は先づカントの道德學と法理學との關係より見て行かねばならぬ。

人間理性は自然的及び道德的(廣義)の二重の立法の淵源である。悟性又は理論的理性は自然の立法者であり、意志又は實踐理性は自由の立法者である。自然の法則及び自由の法則即ち廣義に於ける道德法の兩者は共に必然性を有するが、併し前者の其れは不可不の意味であるに對して後者の其れは當爲の意味である。從て人間の行動は道德法に合致する場合もあり、然らざる場合もある(自然法即ち不可不の法則の場合に於ては事實は全然法則に合致するに反して)。合致する場合には行動は合法則的 gesetzmässig 又は合義務的 pflichtmässig である。然らざる場合には反法則的 gesetzwidrig 又は反義務的 pflichtwidrig である。併し等しく合法則的又は合義務的の行動中にも動機其者よりして合法則的なるもの、即ち法則其者を動機とするものと然らざるものとがある。行動が狹義又は嚴密なる意味に於て道德的と言はれ得るは單に前者、即ち其れが法則其者の爲めに營まるゝ場合、或は法則の尊敬又は義務感情より起る場合のみに限る。後の場合に於ては法則は唯行動の內容を規定するのみであつて、其形式又は動機を規定せぬ、即ち法則と行動との合致は單に外的に過ぎぬ。此場合に於ては行動は單に適法的 legal たるに止まり、嚴密なる意味に於て道德的とは言へぬ。

此道德性 Moralität と適法性 Legalität との區別はカントの道德哲學の初步的知識を有する者に恐らく周知のことであるが、カントの法理學は此區別を以て出發するのである。自由の法則即ち廣義の道德的法則中行動の嚴密なる意味に於ける道德性を要求するものをカントは嚴密なる意味に於て倫理的 ethisch と呼び、其れの單なる適法性のみを要求するものを法律的 juridisch と呼んだ。自由の法則は凡て遂行せらるべきことを要求するもの、即ち義務であるが、併し其中には動機又は心術 Gesinnung の如何に關係なく單に外的に遂行され得るものと、動機又は心術に依てのみ遂行

され得るものとがある。たとへば契約の履行も、隣人を愛することも共に自由の法則即ち義務であるが、併し前者は單に適法的に遂行せられ得るに反して後者は心術に依ての外は遂行せらるゝことは出來ぬ。而して外的行動は强制され得るが、併し心術は强制されることは出來ぬから、前者は可强制的 erzwingbar であり、後者は不可强制的である。前者は法的法則 Rechtsgesetz 又は法的義務 Rechtspflicht であり、後者は德的法則 Tugendgesetz 又は德的義務 Tugendpflicht である。而して此の如き法的法則の總體が法 Recht と名づけられるものである。狹義に於ける道德學の問題とするは唯後者即ち不可强制的な內的な意志又は心術の義務のみであり、法理學の問題とするは唯前者即ち可强制的な外的な行動の義務のみであつて、吾々が如何なる意志又は心術を以て此外的義務を遂行し若くば之に違反するかといふ道德の問題は法の問題ではない。

斯くてカントに於ては道德性と適法性、倫理的法則と法律的法則、德的義務即ち心術の義務と法的義務即ち行動の義務との峻別に對應して、嚴密なる意味に於ける道德學又は倫理學と法理學とは峻別さるゝのであるが、併し彼の法理學も道德學と共に其道德哲學の中心概念たる自由の概念、人格の自律の理念を基礎とする點に於て廣義に於ける道德學の一部を形造る。カントに依れば法も亦た道德と同樣實踐理性の要求であつて、實踐理性の內に先天的に妥當する原理を有する。たとへば幸福の獲得といふやうな經驗的關心の所產として導出されずして、人間に普遍的な理性的本分よりして導出されねばならぬ。其本分とは何であるかといふに即ち自ら與へたる法則に依て自らを律するといふことである。此人格の自律の理念に基いて、人は道德的行動の主體 Subjekt des sittlichen Handelns として、自己目的 Selbstzweck 又は目的自體 Zweck am sich であつて決して他の爲めの單なる手段となつてはならぬと共に又た、道德的待遇の客體 Objekt der sittlichen Behandlung としても同樣でなければならぬ。從つて此理念よりして又た共同生活の理念、即ち人は他人をば單なる手段として待遇せず、目的自體として待遇せねばならぬといふ、人間が共同生活を營むに當ての實踐的法則が成立つて來るのである。然るに、人間の自然狀態——無法狀態——に於ては人々恣意 Willkür に支配せられ衝動的に行動するから、其活動の圏域が互に相侵犯しあつて暴力の爭を呼び起す。暴力に訴ふる結果は終局、一方の

戰爭は何故に防止せねばならぬか、平和は何故に吾々が追求せねばならぬ目的であるか。カントによれば、戰爭は第一に法の權威を毀損するものであり、更に溯つて考ふれば吾々人間の道德的本分に背戾するものである。此旨を明かにせんが爲めには吾々は先づカントの道德學と法理學との關係より見て行かねばならぬ。

人間理性は自然的及び道德的（廣義）の二重の立法の淵源である。悟性又は理論的理性は自然の立法者であり、意志又は實踐理性は自由の立法者である。自然の法則及び自由の法則即ち廣義に於ける道德法の兩者は共に必然性を有するが、併し前者の其れは不可不の意味であるに對して後者の其れは當爲の意味である。從て人間の行動は道德法に合致する場合もあり、然らざる場合もある（自然法即ち不可不の法則の場合に於ては事實は全然法則に合致するに反して）。合致する場合には行動は合法則的 gesetzmässig 又は合義務的 pflichtmässig である。然らざる場合には反法則的 gesetzwidrig 又は反義務的 pflichtwidrig である。併し等しく合法則的又は合義務的の行動中にも動機其者よりして合法則的なるもの、即ち法則其者を動機とするものと然らざるものとがある。行動が狹義又は嚴密なる意味に於て道德的と言はれ得るは單に前者、即ち其れが法則其者の爲めに營まるゝ場合、或は法則の尊敬又は義務感情より起る場合のみに限る。後の場合に於ては法則は唯行動の內容を規定するのみであつて、其形式又は動機を規定せぬ、即ち法則と行動との合致は單に外的に過ぎぬ。此場合に於ては行動は單に適法的 legal たるに止まり、嚴密なる意味に於て道德的とは言へぬ。

此道德性 Moralität と適法性 Legalität との區別はカントの道德哲學の初步的知識を有する者に恐らく周知のことであるが、カントの法理學は此區別を以て出發するのである。自由の法則即ち廣義の道德的法則中行動の嚴密なる意味に於ける道德性を要求するものをカントは嚴密なる意味に於て倫理的 ethisch と呼び、其れの單なる適法性のみを要求するものを法律的 juridisch と呼んだ。自由の法則は凡て遂行せらるべきことを要求するもの、即ち義務であるが、併し其中には動機又は心術 Gesinnung の如何に關係なく單に外的に遂行され得るものと、動機又は心術に依てのみ遂行

され得るものとがある。たとへば契約の履行も、隣人を愛することも共に自由の法則即ち義務であるが、併し前者は單に適法的に遂行せられ得るに反して後者は心術に依ての外は遂行せらるゝことは出來ぬ。而して外的行動は强制され得るが、併し心術は强制されることは出來ぬから、前者は可强制的 erzwingbar であり、後者は不可强制的である。前者は法的法則 Rechtsgesetz 又は法的義務 Rechtspflicht であり、後者は德的法則 Tugendgesetz 又は德的義務 Tugend-pflicht である。而して此の如き法的法則の總體が法 Recht と名づけられるものである。狹義に於ける道德學の問題とするは唯後者即ち不可强制的な内的な意志又は心術の義務のでみあり、法理學の問題とするは唯前者即ち可强制的な外的な行動の義務のみであつて、吾々が如何なる意志又は心術を以て此外的義務を遂行し若くば之に違反するかといふ道德の問題は法の問題ではない。

斯くてカントに於ては道德性と適法性、倫理的法則と法律的法則、德的義務即ち心術の義務と法的義務即ち行動の義務との峻別に對應して、嚴密なる意味に於ける道德學又は倫理學と法理學とは峻別さるゝのであるが、併し彼の法理學も道德學と共に其道德哲學の中心概念たる自由の概念、人格の自律の理念を基礎とする點に於て廣義に於ける道德學の一部を形造る。カントに依れば法も亦た道德と同樣實踐理性の要求であつて、實踐理性の内に先天的に妥當する原理を有する。たとへば幸福の獲得といふやうな經驗的關心の所産として導出されずして、人間に普遍的な理性的本分よりして導出されねばならぬ。其本分とは何であるかといふに即ち自ら與へたる法則に依て自らを律するといふことである。此人格の自律の理念に基いて、人は道德的行動の主體 Subjekt des sittlichen Handelns として、自己目的 Selbstzweck 又は目的自體 Zweck am sich であつて決して他の爲めの單なる手段となつてはならぬと共に又た、道德的待遇の客體 Objekt der sittlichen Behandlung としても同樣でなければならぬ。從つて此理念よりして又た共同生活の理念、即ち人は他人をば單なる手段として待遇せず、目的自體として待遇せねばならぬといふ、人間が共同生活を營むに當ての實踐的法則が成立つて來るのである。然るに、人間の自然狀態――無法狀態――に於ては人々恣意 Willkür に支配せられ衝動的に行動するから、其活動の圏域が互に相侵犯しあつて暴力の爭を呼び起す。暴力に訴ふる結果は終局、一方の

人の無制限の自由の爲めに他方の人の自由が蹂躙せられ、目的自體としての後者の品位が毀損せられ、後者は單に前者の爲めに手段としてのみ用ゐられるといふことに了り、共同生活の理念に戻り道德の根本原理に背くやうにある。法は實に此無制限なる自由の相互侵犯を調停し道德的自由實現の障碍を取除き、目的自體としての人格の品位を擁護せんが爲めに成立つたものに外ならぬ。カント自身の語を假りて言へば「法とは一人の恣意が他の人々の恣意と一般的の自由の法則（自然法に對していふ）に從て並存し又は結付き得べき制約の總體である」。(Das Recht ist also der Inbegriff der Bedingungen, unter denen die Willkür des einen mit der Willkür der andern nach einem allgemeinen Gesetze der Freiheit zusammen vereinigt werden kann,-Werke III, Rechtsl. S. 34-5)。斯くて法は自由を擁護せんが爲めに自由の「妨害の抑制」Verhinderna geinesi Hndernisses を務とするものとして必然的に可強制的でなければならぬから、唯可強制的なる外的行動のみに關係して不可強制的な心術又は意志には關係せぬ。乃ち其れは唯行動の適法性の外は要求せざるものとして、即ち前に規定したやうな意味に於て、實踐理性によつて要請せらるるのである。

但し法の此可強制性は單なる個人相互の關係に於ては充分の效驗を有することは出來ぬ。個人の意志を超越した團體全體の集合意志 Gesammtwille があつて、個人の自由の活動をば、他の衆多個人の其れを停止せさる様なる一定限界内に於て制裁することに依て初めて充分の效驗を有し得る。而して此の如き團體は即ち國家である。斯くて嚴密なる意味に於ける法は國家の内に於て、國家に依て、初めて可能である。カントによれば法は團體内に於て個的人格對個的人格の關係に關するときに私法であり、個的人格が團體の全體に對する關係に關するときに公法である。而してカントに依れば私法的關係は自然狀態即ち無國家狀態に於ても成立ちはするが、併しそれは單に豫備的 provisorisch であつて、其れが完全 peremptorisch となるには國家を待たねばならぬ。斯の如くして國家は實踐理性によつて要請せらるゝのである。

斯くて國家は其本性上必然的に強制力を有せねばならぬのであるが、併し他方に於ては本來人格の自由と品位とを擁

護する爲めに成立するものであるから、其强制力は一人若くば一部者の恣意に基いたものでなくして、成員自身の共同立法 gemeinsame Gesetzgebung に基いたものでなければならぬ。國家の强制は成員の自由より出でたる强制でなければならぬ。斯くて國家は其本性上强制力を有すべきものであると共に、其成員に對しては、人間としての（即ち己れ自ら自己に對する立法者たり得る）自由と、公民としての（即ち所屬團體の共同立法に參與する者としての）平等とを認め、彼等自身の共同立法に從てのみ彼等を强制するものでなければならぬ。此意味に於て國家は其成員の相互契約に基いて成立つたものであるといへる。但しカントの契約說は彼れ以前――ホッブス、グローティウス、ルソー等の其れのやうに、契約をば人類發展の一定段階に於て起つた現實の史的事實と考へるのではない。カント前の國家契約說は國家の經驗的史的起原の說明として現はれて居る。即ち人間は原初は無法無國家の自然狀態にあつたのであるが、其れが生活に不便なることを知つて或一定時期に於て互に契約を結んで國家を組織して集合意志に服從するに至つたといふにある。併しカントに取ては契約は時間的出來事でなくして超時間的の理念である。政治に關する「統整的理念」regulative Idee である。カントは自然狀態と國家契約又は國家狀態とが時間的繼起の關係に立つと言ふのではなくして、國家契約は「理念」として常住に自然狀態中に働かねばならぬ、而して其れに照して吾々は國家が其臣民の自由の擁護といふ本分に如何なる程度まで適合して居るかを知ることが出來るといふのである。理性が國家を要請するは唯々人民の自由を確保する機關としてゞある。從つて、國家の本分は其人民の自由、自律の擁護の外はない。此本義に背く國家の行動は如何なることゝ雖も惡でなければならぬ。カントが國家は契約に基いて成立つといふ意味は、國家に於ける正義の標準は、若し國家が事實上契約に基いて成立つと假定すれば決定せられ得ぬであらうと考へらるゝことは決して決定してはならぬといふことである、といふにある。更に他の語を以て言へば、國家の法律の正しきことを決する規準は、全人民が彼等自身に對して決定せぬやうなことは立法者は人民に對して決して決定してはならぬといふことである、といふ意味である。カントの契約說は國家の經驗的成立の說明でなくして國家の職分に對する規範である。

斯くてカントによれば、(一)國家は實踐理性の要求に基き、人間の恣意の衝突、乖離を防止調停して人格の自由と品位とを擁護することを課題として存在する、(二)從て其政治は其れが人民の契約に基いて存立すると考へて行はれねばならぬ、(三)無國家狀態に於ては法に强制力が伴はざるが故に人は何時も他の人との衝突から保護されて居ない、從てホッブスが說いたやうに絕えず戰爭狀態に居ないとしても絕えず戰爭の脅威を感じつゝある狀態にある、絕えず戰爭に對する用意を怠つてはならぬ、從て此意味に於て無國家狀態はやがて戰爭狀態であると言ふことが出來る、從て國家成立の目的は詰り言葉の上ではホッブスが說いたと同じやうに此自然の戰爭狀態を脫するといふにあるといふことが出來る。然るに斯くして成立つた國家相互の關係は今日尙ほ依然として自然狀態、即ち無法狀態、即ち今述べた意味に於て戰爭狀態に於てある。然らば個人間の戰爭は道德上惡であつても國際戰爭はさうではないのか。カントは斷然否と答へる。何となれば、國家は自律的にして目的自體たるべき多數の人格の共同立法に基いて成立つ自主的存在者たるべき以上其自身また他の國家に對しては目的自體でなければならぬ。此意味に於て國々は儼然たる道德的人格である（此處には「他の國家に對しては」又は「此意味に於て」といふ制限句が必要である。何となればカントは其國家論に於ては尙ほ第十八世紀の個人主義を脫し得て居ない。嚴密なる意味に於て目的自體たるものは彼れに依れば人格のみであつて、國家は此人格の本領を確保又は擁護せんが爲めの機關又は方便として存立するものであるからである。カントに於てはヘーゲルに於けるが如き民族精神の概念や、國家が超個人的意義を有するとする思想やはまだ明確に現はれて居ない。國家が目的自體でなければならぬといふ理由は唯目的自體として多數人格の共同立法に基くからといふ外にはない。此事に就ては尙ほ後節に敍說すべき機會がある）。今戰爭に依り、即ち其自身立法に參與したところの法に依らずして、國家同志の要求の正邪が決せらるゝ場合には、究極其交戰國の一方は暴力に依て其意志を曲げるべく餘儀なくせられ、他の一方の爲めに目的自體として認められずして唯の手段と考へらるゝといふことにならねばならぬ。斯くて國際戰爭も個人間の戰爭と同樣實踐理性の要求に背戾すると言はねばならぬ。斯くてカントに依れば戰爭は個人間のたると國際的たるを問はず、道德上の惡であるが、その理由は人格の品位を破壞し自由を毀損するといふ點に存し、人類の福祉を損する

といふ點に存するのではない。此點に於てカントの平和主義の基礎づけは全然其非幸福論的倫理說の上に立ち、世の功利主義的又は博愛主義的の平和論と全然理論的基礎を異にして居る。而して彼れ自身繰かへし特に此事を斷つて居る。

此節主として Metaphysische Anfangsgründe der Rechtslere (2. Aufl. S. 209-242, 305-308, 343-355.) による。其他、

Über den Gemeinspruch: Das mag in der Theorie richtig sein, taugt aber nicht für die Praxis 中の

Verhältnis der Theoie zur Praxis im Staatrecht;

Kritik der reinen Vernutft (2. Aufl. S. 373);

Kritik der Urteilskraft (3. Aufl. S. 294, Anmerkung)

等參照。

四

カントの法及び國家の概念、及び彼れが永遠的平和を道德的要求であるとした理由は明かになつた。次に永遠的平和は如何なる制約の下に可能なるか、又た如何なる形を以て實現せられねばならぬかの考察に移る。之を主として論述したものは「永遠的平和の爲に」である。此著述に於けるカントの所謂「哲學的考案」は普通平和條約の體裁に擬して作られ、其主要部は六「豫備條項」(Präliminaralartikel)三「確定條項」(Definitivartikel)、及び二「追說」(其一は「秘密條項」と題せられて居る)より成り、其れに政治と道德との關係に關する一般的考察二節が附加されて居る。永遠的平和を不可能ならしむるやうな事柄の禁止を目的としたものが「豫備條項」であり、永遠的平和が積極的に實現せねばならぬ形を示すものが「確定條項」である。或は前者は永遠的平和の消極的制約、後者はその積極的制約を示すといふことが出來る。

「豫備條項」及び「確定條項」は下の通りである。

豫備條項

（一）將來の戰爭に對する材料を祕密に保留するやうに作られたる一切の平和は無効たるべし。

（二）獨立の國家は大小を問はず、相續、交換、賣買、又は贈與に依て他の國家の所得とされることあるべからず。

（三）常備軍は時を追ふて全廢せらるべし。

（四）國家の對外的紛爭に關聯して如何なる國債も起さるべからず。

（五）如何なる國家も暴力を以て他の國家の憲法又は政府に干涉すべからず。

（六）戰時中如何なる國家と雖も將來の平和に於て相互の信賴を不可能ならしむるが如き對敵行動、例へば暗殺者又は毒殺者の使用、降服條約の違反、敵國に於ける謀叛の教唆といふが如き行動を取るべからず。

確定條項

（一）各國家の憲法は共和的 (republikanisch) ならざるべからず。

（二）國際法は自由なる國家の聯合 (Föderalismus freier Staaten) に基礎を置かざるべからず。

（三）世界公民法 Weltbürgerrecht は普遍的好遇 (allgemeine Hospitalität oder Wirtbarkeit) の制約に制限せらるべし。

今此諸條項を前に要約したサン・ピエールの提案の內容と對照して見るに、サン・ピエールの第二、第三、第四は多少形を變へて順次に豫備條項の第五、第三、第二となつて現はれて居る。又たサン・ピエールの第一及び第五は後に明かになるであらうやうに「確定條項」第二の中に現はれて居る。さすればサン・ピエールに無くしてカントにあるものは「豫備條項」に於ては第一、第四、及び第六、「確定條項」に於ては第一及び第三である。提案の條項だけに就て見てカントとサン・ピエールとの關係は大體此の如きものである。

「永遠的平和の爲めに」の內容の叙說には一々出處を示さぬ、逐條叙說であるから其必要はない。以下之に倣ふ。

五

先づ「永遠的平和の爲めに」の順序に從つて豫備條項より着手する。是等の條項は何故に永遠的平和の消極的制約として必要であるか、又た如何にして組織的に導出さるゝか。

カントは第一の問題には明かに答へて居るが、後の問題にはさうして居ない。彼れは是等の條項を組織的に導出して居ない。少くとも其事は其著書中に明說されて居ない。彼れは唯從來の平和論に現はるゝか若くば彼自身偶然に思付いた事項を其儘秩序もなく列擧したに過ぎないやうに見える。ペダンティックの誹を受けるまでにも組織を尊重する彼れの傾向は此處には奇態にも現はれて居ないのである。クーノー・フイッシャーは各條項の下に於けるカントの論述より綜合してカントの條項の擧げ方を組織化して、下のやうな方法に依て其等を論理的に展開して居る。(Geschichte der neueren Philosophie. 5. Aufl. Band V. S. 165 ff.) 國際間の戰爭を誘致し平和を攪擾するものは國民相互間の憎惡や、疾視や、恐怖、一言で言へば敵意 Hostilität の感情であるから、永遠的平和を招來せんが爲めには此感情を必然的に刺戟又は醞釀するところの凡ての可能的原因を尋求し排除する必要がある。而して是等の原因を漏れなく尋求せんが爲めには國家間に成立する凡ての可能的關係を考へて其各自に就て考査せねばならぬ。國家間の可能的關係は、(一)自然的即ち一時的(永遠的ならざる)平和の狀態にあるか、(二)互に交戰するか、若くは(三)媾和するか、此三者の何れかでなければならぬ。カントの豫備條項は是等の可能的關係の各自に就て國家間の敵意を刺激又は醞釀すべき事項を校査した結果であると。私も之を以て大體上、カントの眞意を傷けることなくしてその思想を組織立てたものであるとして差支ないと思ふのであるが、併し個々の點に就て見れば此形式に當て嵌まらぬとが屢々あるのである。カント自身が是等の條項の理由と認めたことの中には單に禁止事項が其結果として國家間の敵意を刺激するといふことのみでなく、其事項自體が道德又は法に背戾するといふことも含んで居る。カントが或事を禁止せねばならぬとした理由中には屢々其事が吾々の傾向性 Neigung に不滿を與へて敵意の感情を刺激するといふことゝ、其事自體が實踐理性の法則に戾るとい

ふことが、相並立し、若くば時に相結付いて居るのである。併しクーノー・フィッシャーの組織化は大體上カントの思想を誣ゐぬと思はるゝものであり、且つ極めて巧妙であると思ふから、下にはそれに從つて敍說して行かうと思ふ。

前に擧げた國家間の三の可能的關係に就て順次に考査することに依て吾々は豫備條項を下の如く論理的に展開することが出來る。

第一の場合に就て第二より第五に到る四豫備條項が要求される。國家相互の關係が自然的平和の狀態にある間に於て相互間に必然的に敵意を刺激又は醞釀する事項は、一國家が他國家の政治的獨立を毀損又は侵害することである。但し國家の政治的獨立の毀損には二樣ある。それは卽ち、(甲) 一國家が他國家の權利に對する事實的侵害、(乙) 一が他に對して脅威を感ぜしむるやうな狀態に在ることとである。

事實的侵害に又た二の場合がある。第一は、例へば單に君主の專斷の意志や其親族關係に基く傳習的理由やに依て一國家が國民の意志に反して他國家に併合されることである。但しこれは國家の政治的權利が私法的契約に依存すると考へらるゝ以下正當のことであるが、併し國家は決して君主の私有財產でなくして成員の共同立法に基いて成立つ自律的存在者である、物件 Sache でなくして儼然たる道德的人格である以上、私法的契約に依て其國民の意志に反して相續、交換、賣買、又は贈與に依て他の國家に併合されてはならぬ(これはカントの頃まで歐洲に頻起した事實である)。斯くて第二豫備條項が要求せられる。これは前述の如くサンピエールの提案として要約した第四と殆んど同一である。唯此處では、禁止されたる事項が結果として國家間の敵意の感情を刺激するといふのみでなく、道德的人格たる國家を物件視する點に於て道德上及び法上不正であるといふことに重きを置き、而してそれがやがて敵意の愛情を刺激する原因であるとした點に於てカント特有の論法が現はれて居る。尙ほカントは、國民の權利と同樣其義務も亦私法的契約に依て左右さるべきものではない、從つて例へば一國家の軍隊をば何等かの代價を約して他國に貸し、自國の敵ならざる敵と戰はしめるといふことは此理を無視するものである、といふことを此處に付け加へて居る。

事實的侵害の第二の場合は、一國に對する他國の內政干涉である。國家は各自自主的存在者である。他國が其內事に

干渉するは此自主の侵害である。斯る干渉は其國に内亂のある場合に乘じて屢行はるゝもので、其理由とされて居るものの第一は、其國の内政上の惡弊、不秩序が自國の臣民に「惡例」を示す（今日の語を用うれば危險思想又は危險行動の自國への傳播）といふことであるが、併し所謂「惡例」なるものは其實却て當該國家に有害の結果を齎來す事に依て自國に對して殷鑑を示すものである。此の如き理由は其實唯不法を修飾する爲めの口實に過ぎぬ。のみならず、一般的に言つて、一の自由人格が他の自由人格に與へる所謂「惡例」なるものが唯惡例であるといふ丈けの理由を以て直ちに後者に對する損傷と見らるべきものでない以上、假りに一歩を讓つて一國に於ける斯る「惡例」が他國に惡影響を與ふることがあるとしても、それは其他國の權利を毀損すると見らるべきものではない。但し、一の國家が內亂の結果二つに分裂して其各自が一の國家として全體に對する權利を要求しつゝある場合に於ては、他の國家が自ら正當と信ずる一方を援助することは他の一方の憲法に干渉することゝはならぬ、何となれば此場合前者が正當であると見らるゝ以上後者は無政府狀態であると言へるからである、といふ論は成立ち得る。併し其內亂が如何にかして終結せざる間は其國家は單に內的疾患に惱まされつゝあるといふのみであつて、而かも一刻も早く此疾患を脫して統一を恢復せんとしてもがきつゝあるところの一獨立國家である（當時の革命的佛蘭西を其實例として考へて居たと解せられて居る）から、其分裂した一方を援助するは明かに其國家の自律の侵害であるといはねばならぬ。斯くて第五の豫備條項が必要となる。此條項も亦、國際間の敵意を刺戟する原因を芟除するを趣意とするものであるが、併し其等の原因が何故に國際間の敵意を刺戟するかといへば其れが不法なるが故である。而して其れは何故に不法なるかと云へば道德的人格としての國家の自律と品位、而して畢竟は其國家を構成する人民の自律と品位とを毀損するが故であるといふに歸着する。

次に（乙）の場合に移つて、一國家が他國家に對して脅威を感ぜしめる事項は主として、對外的意味を有する二つの國家的施設に存する。其一は軍備、他は國債である。先づ軍備に就て見れば、如何なる國家も自己及び自己の政治的獨立を擁護する力を有せねばならぬ以上護鄕兵又は民兵制度を取り兵役に堪える國民に一定時期に於て軍隊的敎育及び訓練を施すといふことは必要である。併し常備軍（カント當時までの常備軍は徵兵制度に依つたものでなくして職業的兵士

としての傭兵より成つたものであることを記憶するを要する）は、外に對しては絶えず開戰の爲めに武裝するといふ態度を示して脅威となり、其結果各國互に其數を競ひ、平時但莫大なる國帑を濫費して國民の負擔を過重ならしめ、更に進んで國債の增大を誘致し、其結果結局平和よりも却て短時の戰爭に依て對手國を侵害するが國民の負擔を輕減する所以なりと考へられて戰爭を誘致することゝなる。のみならず常備軍制度は畢竟人を殺し又は殺さるゝ機械又は道具として給料に依て人間を使用するものであつて、人間を物件視し人格の品位を蹂躙するものである（此理由は敵意の感情を刺戟するといふ中に含めることは出來ぬ、單に道德上不正であるといふにある）。是に於て第三の豫備條項が成立せねばならぬ。

次に國債制度は產業發展の爲めには極めて重要なものであつて、此點よりして現代に於ける最有益なる發明の一であるといへる。例へば道路改善、新殖民地經營、荒作に對する用意といふが如き國內經濟の爲めに內外債を利用するといふことは賢こき方法であるが、併し對外鬪爭の爲めの國債は平和攪亂の重大原因である。何んとなれば、第一に之に依て戰爭の爲めの資金調達の可能を大にして開戰を容易ならしめ、一方に於ては君主又は一部野心家の好戰欲（これは人性一般の弱點、傾向性として免るべからざるものである）を刺戟すると共に、他方に於ては國際間に常に一種の不安、恐怖、猜疑の念を醞釀する。のみならず、戰爭の爲めに不生產的なる多額の國債を起す結果は其國をして破產に瀕せしめる。而して一國に於ける斯る狀態は實に前に述べたやうに他國に對しては實に重大な脅威である。斯くて吾々は、こゝに一の循環に逢着するのである。それは即ち、戰爭は國債を要して其極一國を破產に導き、其破產の恐れは又た戰爭を呼び起すといふことである。此循環を脫する方法は唯一つ、即ち絕對に對外鬪爭の爲めの國債を禁止することである。即ち第四の豫備條項が成立たねばならぬ。

以上國家間の關係が平和狀態にある場合に就て消極的制約を考査したのであるが、次に第二の交戰狀態にある場合に就て考査すれば、戰爭に際しては平時に於ては許されざる手段を以て敵國に出來得る丈け大なる損害を與へることを力め得るは無論であるが、併し其手段には限界がある。即ち卑劣、破廉恥（ehrlos）の手段、例へば暗殺者、毒殺者、間

謀の使用、敵國に於ける謀叛の教唆といふが如き行動は絶對的に禁止されねばならぬ。此の如き方法は第一に關係國民間の道徳的信頼を破壊し、憎惡、輕侮の念を過度に昂進せしめて、平和回復の後に於ても尙ほ永續的平和の基礎を危ふする。第二に斯の如き手段は平時に於ても尙ほ行はれ得べきものであり、而して一旦之を用ふれば、其習慣は容易に根絶し難く、平和回復後にも尙ほ用ゐられて、其目的は達せられぬこと丶なる虞れがある。斯くて第六の豫備條項が要求される。

最後に第三の媾和の場合に就て考ふれば、眞の平和は一切の敵意の終熄によつて初めて得らる丶から平和條約は交戰國間の敵意を全然一掃する者でなければならぬ、從て其中に將來の戰爭の禍根を藏するものであつてはならぬ。此の如き條約に依て成立する平和は眞の平和でなくして單なる休戰に過ぎぬ。斯くて第一の豫備條項が成立たねばならぬ。此項は前述の如くサン・ピエール案には含まれて居ないが、カントに此條項を暗示したものは歴史上の實例、殊に「永遠的平和の爲め」の出版と同年、その少しく以前に成立つたバーゼルの平和であつたと考へられて居る。

斯くて永遠的平和を不可能にすべき諸害惡の掃蕩を目的とする諸條項は列擧され、且つ其必要が證明せられた。次に確定條項に移る。

六

「確定條項」は最重要な部分である。其導出し方も組織的である。カントはこれをば其法理哲學に於ける公法の三部、國內法 (Staatrecht)、國際法 (カントは多くの場合普通の慣例に倣つて Völkerrecht の語を用ゐて居るが、併し嚴密には Staatenrecht の語が適切であるとした、何となれば Volk なる語は自然狀態にある團體にも適用せられ、Staat は前述の如く其成員が强制力を有する集合意志の下に結付いたもの丶みの名稱であり而して嚴密な意味に於ける法は唯後者相互の間にのみ成立し得べきであるから)、及び世界公民法 Weltbürgerrecht に應じて組織的に導出した。即ち、第一條項は國內法に、第二は國際法に、第三は世界公民法に關係する。或は、第一は內政治、第二は隣邦政治或は更に

具體的に言へば大體歐洲政治、第三は世界政治を主題とすると言へる。

第一項、「各國家の憲法は共和的 republikanisch ならざる可らず。」 これは實を言へば尙ほ豫備條項と同樣其自身永遠的平和其者の內容を形造るものではない、唯其れに對する豫想に過ぎないが、併し最重要な豫想である。此條項は前述の如くサン・ピエールの提案には全然缺けて居る。而して此處で吾々が先づ注意すべきことは從來現はれた平和論——單にサン・ピエールのみゝに限らずシュリー、キタアム・ペン等のをも含めて——が內政と外政との間の密接なる關係を明確に顧慮して居らぬに對して、カントが明確に之を認識して之を確定條項の劈頭に掲げたことである。

カントの共和的といふは今日普通意味されて居ると同義ではなく、唯立法權が執行權より嚴密に區別せられ、而して其れが代議士を通じて凡ての公民の手にあるといふ意味である。カントの政體論を見るに際して吾々は彼れの用語を普通の慣用法に從つて解してはならぬ。彼れは國家の形式に於て支配の形式 (Form der Beherrschung, forma imperii) と施政の形式 (Form der Regierung, forma regiminis) とを峻別した。國家の形式の區別の仕方には二樣ある。一は國家の最高權力を有する人員の數によるもの、他は人民が施政者(其人員の如何に拘らず)に依て統治せらるゝ仕方によるものである。前者卽ち支配の形式には三つの形式が可能である。卽ち、一人が國家に於ける他の凡ての者に命令するもの、卽ち獨裁政治 (Oligarchie)、平等の權力を有する小數者が合同して他の凡ての者に命令するもの、卽ち貴族政治 (Aristokratie)、凡ての者が合同して其中の各自に、從てまた己れ自身に命令するもの、卽ち民主政治 (Demokratie) これである。後者卽ち統治の形式には共和政體 (Republik) 及び專制政體 (Despotismus) の二つが可能である。前者は立法權が執行權より嚴密に區別せられて、執行者は唯立法機關に依て成立つた法律を執行するに止まるもの、後者は兩者が分離せられず同人の手にあるものである。而してカントによれば後者には執行が私意に依て行はるゝ危險が常に伴ふが故に排斥されねばならぬ。前者が唯一の正當なる施政の形式である。前者に於て初めて、其成員に對して人間としての自由と、公民としての平等とを充分に認め、單に彼等自身の自由に基く共同立法に從つてのみ彼等を强制す

るといふ國家の理念が實現せられ得る。支配の三形式中獨裁及び貴族兩制は、代議制を取ることに依て共和的となることが出來るのみならず、たとへ其形は專制的なる場合と雖も其精神に於ては共和的であることも出來る。所謂天下を一人の天下と見ず天下の天下と見ることとの專制政治、例へばフリードリッヒ大王が自らをば「國家の最高奉仕者」と呼んだ如きはそれである。併し民主制に於ては一切の者が立法者たるのみならず執行者たらんと欲するが故に形に於ても精神に於ても共和的たることは出來ず、必然的に專制的たらざるを得ぬ。斯くてカントは前に限定したやうな意味に於ける民主制を排斥した。斯くてカントの所謂共和政體は君主政と毫も矛盾しないのみならず、カントによれば、立法權の所有者は出來る丈け多く最高執行權の所有者は出來る丈け少なき政府、卽ち代議的君主政體が、自由と强制とを結び付けるといふ法の理念、從つて又た法の確保を職とするところの國家の理念に最適合したものであると考へた。(但し此點に就てはカントの思想自身に幾分不明瞭と矛盾とがあるが。今其考査には立入らない。)

斯の如くカントは彼れの所謂共和政體をば國家の理念に最もよく適合したものであるとしたが、平和の確保も亦彼れによれば此の如き政體の國家の間に於て初めて安固であることが出來る。何となれば、戰爭の爲めに悲慘なる犧牲を拂はねばならぬものは先づ首長に非ずして人民である、戰爭の爲めに租稅を拂ひ、戰後の荒廢狀態を恢復する爲めに勞苦せねばならぬものは治者に非ずして主として臣民であるから、和戰の決定權が人民の手にある場合には、輕々しく戰端を開き、若くば戰爭を永續せしめ、若くば無用の戰備に汲々とするやうな恐はないが、和戰が首長若くば少數者の獨裁に依て決定せられ得る場合には之に反して、些細なる原因に基いて、或は單に君主若くば一部者の名譽慾、所有慾、若くば遊戲衝動よりして、戰爭が起り、又は永續し、又は無用の軍備に國力が浪費されるといふ恐がある。斯くて永遠的平和を招來せんが爲めには關係國家が共和政體であるといふことが重要な要件となる。

第二條項「國際法は自由なる國家の聯合に基礎を置かざるべからず」といふに至て初めて永遠的平和共存の内容を形造るやうになる。カントは此項の論據としてサン・ピエールの根本思想を踏襲して下のやうに論じて居る。吾々は野蠻人

が自然的な、無法則の自由を恣にして、個人相互の乖離を調和する方法を考へず、闘爭を事とするを見て、未開、粗野、人間性の無視として賤み、彼等が早くかゝる自然狀態を脱して公民社會を形造るに至らぬ恐を憐れむ。而して其れは道德上正當なことであるが、併し若し然りとすれば民族又は國家間の關係に就ても亦た同樣の考への起るが當然でなければならぬ。然るに今日の文化民族は尙ほ國家相互の乖離や爭議をば法に依て判決調停する方法を講ぜず、自然狀態即ち戰爭狀態にあるのみならず、何れの國家も一方に於ては、戰爭に關しては如何なる法律的强制にも服從せざることを名譽とし、而して其君主が己れ自らは何等の危險にも身をさらすことを許されずして無數の人民を意の儘に動かし彼等自身の利益に毫も關係なき事の爲めに身命を擲たしめることが其無上の光榮と見做されて居る（これは當時の歐洲の國際戰爭の實狀であつた）といふ狀態にある。斯くて吾々は如何にして蠻野の域を脱し得たと言はれ得るか。斯く考へてカントは歐洲の國際戰爭に對して鋭どき諷刺を加へて、歐洲野蠻人が亞米利加野蠻人と異なる點は唯征服されたる敵の利用の仕方に存するのみ、即ち後者が其征服したる敵を食料に供する代りに前者は之に依て其臣民の數、言ひかゆれば更に擴大されたる戰爭の爲めの道具の數を增加することを知るといふに過ぎぬ、と說いて居る。併し他方に於ては又た、如何なる國家と雖も戰爭問題に關して法又は正義の概念を徹底的に排斥することを敢てし得ない、寧ろ少くとも言辭の上に於ては法概念に對して忠順を表し、グローテイウス、プーフエンドルフ、フアツテル等の國際法家の法典に訴へて自己の立場行動を辯護するといふが常である。これは實に人性に存する道德的素質が國際的野蠻狀態を以て全然滿足して居ないことを示すものでなくて何であらうか。單なる暴力が正邪を決するといふことが不當であることを暝々の裡に認めて居るのでなくて何であらうか。併し此の如き國際法は現時に於ては何等の拘束力をも有して居ない、又た有し得ない理である。何となれば國家は現狀に於ては國家内に於ける個人の如く共同の外的强制の下に立つて居ないからである。斯くて國際法をして實際の效力を有せしめんが爲めには、國際爭議を全然法に訴へて解決して一切の戰爭を永久に終熄せしむることを目的とするところの國際聯合が成立たねばならぬ。各國家は個人と同樣、其自由よりして、即ち或强國の强制を受くる（後に關說すべき『普遍的王國』や今日の帝國主義の場合は其實例である）といふ樣なことなくして、相

結付いて野蠻無法の自由を放棄して一定の法律に服從するやうにならねばならぬ。

さて、此の如く國際的戰爭狀態よりしての國際平和聯合への推移をば人間の自然狀態よりしての國家狀態への推移の比論に依て考へるならば、其所謂國際聯合は一の國際國家 Völkerstaat であつて、而して之に加入する國家は次第に增加して遂には一の世界國家 Weltstaat 又は世界共和國 Weltrepublik を成すに至らねばならぬと考へらるゝであらう。併しカントによれば斯の如き「國際國家は國際法の概念に反する」(Reicke, Lose Blätter aus Kants Nachlass, II. Heft, S. 337)、國際法の理念に從へば不可能であると考へた。何故かなれば、國家は治者と被治者との關係を含むから多數の國家が一國家をなす以上其れ等は皆な被治者として治者に服從せねばならぬ。而かも國家は國家としては獨立の自主權を有せねばならぬ、之を有せざるものは國家と言へぬと考へらるゝから、國際國家なる概念は畢竟矛盾である。一の國家に融合する以上其成員は最早國家ではない、其成員が各自國家の品位を保つ以上は一の國家に融合することは出來ぬ。一切の乖離及び爭議を法律に依て解決して干戈の爭を永久に終熄せしむる道としては「世界共和國」の實現は最適切であるが、併し多數國家が國家として並立する間は其れは望むべからざることである。其處で唯一の可能なる制度は「世界共和國」の積極的理念に對する「消極的代用物」negative Surrogat として、卽ち單に戰爭防止の手段としてのそれの代用物としての國家の聯合 (Föderalismus 又は同盟 Bundgenossenschaft 卽ち「自由國家より成るところの國際聯盟」の外にはない。此の如き制度の思想は國際法の概念と必然的に結付くものである。國際法が効力を有せんが爲めには少くとも此の如き國際聯盟が絕對的に要求せらるゝ。

但しカントの國際聯盟の基礎づけには尙ほ考査の不充分な點があると思ふ。彼れが國際國家又はその擴大の極たる世界共和國をば國際法の概念に反するとしたのは正當である。彼れが斯く言つた場合に意味した國際國家又は世界共和國は多數國家が其自主權を維持しつゝ一の國家に結付くものであるから、それは前述の如く矛盾であり、當然不可能でなければならぬが、併し若し國際國家又は世界共和國を斯く考へずして諸國家が全然其自主權を放擲し其障壁を撤して一の國家に融合したものを假りに國際國家と呼び（此場合國際なる語は最早不適當であるが）、その範圍が擴大の極に達し

たものをば世界共和國と名くるならば、其れは明かに矛盾ではない。從つて數多國家が其自主權を維持しつゝ相對立するといふこと自體に何等かの意義が認めらるれば兎に角、然らざる以上斯の如き意味の國際國家又は世界共和國を不可とする理由はない。前の意味に於ける國際國家の不可能なる理由は「國際」と「國家」とが矛盾なるが故であるから、吾々はカントが爲したやうに「國際」に餘地を與へんが爲めに「國家」を棄てゝ唯の「聯盟」となし國際聯盟を考へることも出來るが、併し又た「國際」を棄てゝ「國家」を殘し後のやうな意味の國際國家又は世界共和國を考へることを出來る。後者を不可能とせんが爲めには「國際」を棄てることが不可能であるといふこと、即ち數多國家が其自主權を維持しつゝ相對立するといふこと自體に何等かの意義を有するといふことが示されねばならぬ。國家間の戰爭を防止する道としては國家の對立狀態を撤廢すること、從て後の意味に於ける國際國家又は世界共和國の實現が最端的な道である。よし其實現が如何に困難なりとするも理念として之を揭示するは毫も不可でないのみならず、專ら quid juris を問題とするカント哲學の精神にはよく契合したことでなければならぬ。而して斯の如き理念が妥當なりや否やといふことは數多國家の對立といふこと自體に何等か重要な意義が含まれて居るや否やに依て定まる。然るにカントは此點を明確に考査して居ないやうである。カントの國家論を見るに、前にも述べたやうにそれは其根本に於ては尙ほ第十八世紀の個人主義を脫し得て居ない。カントに於ては、其自身に價値を有し、それ自體目的であるものは個的人格のみであつて、國家は唯此人格の品位又は本領を擁護確保する爲めの機關にすぎぬ。彼れの直後に於けるフイヒテやヘーゲルの場合のやうに國民的者 das Nationale の價値、民族精神 Volksgeist の意義、國家の超個人的目的等は明確に認められて居ない（但しフイヒテの國家論もカントのと等しく個人主義的を脫し得て居ない、從て最後のものを認めぬ點に於てはカントと同樣である）。國家は人格としての個人の品位を擁護するために不可缺の機關であるが、併し若し國家の意義が唯これのみに止まるならば、其國家は世界國家たると對立狀態に在る國家たることをは問ふ必要はないであらう。前者を排して後者を取らんが爲めには國民的者の意義が認められねばならぬ。個人主義の上に立つカントの國家論の立場からは凡ての民族が各自其特徵をもつて自主的國家として相對峙することをやめて一の國家に融合するといふことは、實

行上の難易は別として理に於ては毫も不可はないのみならず永遠的平和を誘致する道としては最も徹底したものである。其故にカントが國際國家を不可能なりとした理由は唯現實の國家が各自の自主權を棄てゝ之に融合することを欲せず、從て理に於ては正當である國際國家、而して終局には世界共和國も、實際上は之を排斥するが故、といふ外に出でないのである。(Da sie [die Völker] dieses [die Bildung d s Völkerstaats, oder der Weltrepublik] aber nach ihrer Idee vom Völkerecht durchaus *nicht wollen*, mithin, was *in thesi* richtig ist, *in hypothesi* verwerfen, so kann an die Stelle der positiven *Idee einer Weltrepublik* nur das *negative Surrogat* eines den Krieg abwehrenden ......*Bundes* den Strom der rechtsscheuenden, feindseligen Neigungen authalten, doch mit beständiger Gefah ihres Ausbruchs.) 併したとへ現實の諸國家が之を欲せずとするも、其完全なる實現が如何に困難なりとするも、理念として之を掲ぐは前述の如くカント哲學の立場よりしては毫も不當ではないのみならず寧ろその精神によく合致したことである。蓋し此點に關して徹底的ならんが爲めにカントが取らねばならぬ途は二つの外を出でぬと思ふ。それは即ち、其個人的人格主義に徹して國家をば飽くまでも個人の爲めの唯の方便にすぎぬと見做し、絶えず不和、乖離、鬪爭に機會を與へる(此事をカント自身も充分に認めたことは後に尚ほ説くべき機會がある。又た前に引用した場處中の-mit beständiger gefahr ihres Ausbruchs なる文字によりても知ることが出來る)ところの國家間の障壁の徹底的撤廢を最後の目標として斯る意味に於ける世界共和國をば理念とするか、さもなくば個人を優越せる國家の意義を明確に認めて、諸國家の對峙に、而して又た其對峙關係に法の權威を維持せんが爲めの必然的制度としての國際聯盟に、單なる當座の便法といふ以上に合理的の基礎を與へる(即ち in thesi にも正當とする)か、といふことであると思ふ。併しカントは此兩途の何れをも取らなかつた。而して其原因として私は、カントが一方に於ては前述の如く啓蒙期の個人主義に立脚すると共に他方に於ては「國民的者」に重要な意義を與へた「ロマンテイツク」期に於ける其後繼者の共通傾向をも豫示して居るといふ事實を擧げねばならぬと思ふ。彼れの主要傾向、その思想の前景を占むるものは個人主義であつた。併し之と並んでまた諸國家が其自主權を維持して其特有の國民的素質を保存し開展しつゝ相對立することにも重要な意義

を認めて居たやうに思ふ。唯此思想はヘーゲルに於けるが如く明確なる哲學的基礎の上に立つて居ないのみである。カントが諸多の民族の特異性の考察に如何に深き興味を有せしか、而して其れに際して心理的觀察の如何に豐かなる天禀を示せしか、(一)且つ此考察によつて如何に獨逸氣質、獨逸魂 Deutschtum の一短處をも相當に承認すると共に一長處を深(二)刻に意識して其の重大なる文化的使命を認め、フイヒテの Reden an die deutschen Nation を豫示して居るかは彼れの「人性學」及び數多の斷片がよく之を示して居るが、恐らく斯の如き人性學的考察と互に因をなし果をなして諸多の民族の獨異性に重要な價値を置き其等の民族が各自自主權を維持しつゝ相對立することに重要なる意義を認めるといふ彼れの思想が成立つて居ると思ふ。今此思想が如何なる形を以てカントの著作中に現はれて居るかを一瞥して置かう。

カントが考へて居た國家間の可能的關係は下の四つであつた。(一)現在の如き國際的無法狀態又は戰爭狀態。(二)或一强國が威力を以て他の諸國を併合して其强制に依て(即ち今日の語を用れば帝國主義の實行によつて)諸國家の鬪爭を絡熄せしむること、即ち「普遍的王國」Universalmonarchie の成立。(三)凡ての國家が强者の威力に依らず其自由意志に依て一の國家に結合して世界國家、又は世界共和國、又は普遍的共和國を形造ること、(四)對立狀態を維持したる自由國家より成るところの國際聯盟の成立。而して其第一をば彼れが其實踐哲學の原則に基いて排斥せしは前述の如くである。次に彼れは第二の「世界王國」をば明白に排斥した。其理由の第一はたやすく推察され得るであらうやうに其統一及び平和が成員の自由、自律に出でたものでなくして强者の强制に基いたものであるからといふにあるが、併し其他の理由も協力して居る。第一に後に論說すべき「永遠的平和の爲めに」中の「追說」第一にては、施政區域が擴大するに伴つて法律は力を失ひ、且つ其劃一的專制主義が人民の活力と自由の精神とを滅殺し其道德心を痲痺せしめて、終局は無政府狀態を誘致するに至るといふことが擧げられて居る。Religion innerhalb der Grenzen der blossen Vernunft に於ても亦彼れは普遍的王國をば「一切の自由、而して之と共に(其れの結果たる)德、趣味、及び科學が絕滅せねばならぬ」(Alle Freiheit und mit ihr (was die Folge derselben ist) Tugend, Geschmack und Wissenschaft erlöschen müsste)ところの政體、「其處では一切の法律が次第に力を失ひ行くべき怪物」(Ungeheuer, in welchem

die (iesetze allmählich ihre Kraft verlieren) であると說いて居つて全然「永遠的平和の爲め」の所說と一致するのである。第三の世界共和國又は普遍的共和國は斯る非難を避けることが出來るであらう。なぜかなれば統一又は合同が强者の强制に基くといふこと、專制主義であるといふことは此場合にはないからである。世界共和國は「永遠的平和の爲め」に於ては明かに排斥せられて居るが、其理由は前述の如く國際法の概念に反くが故、現在の國家の意志に背くが故といふにある。其他二三の場處 (Reiche, Lose Blätter aus Kants Nachlass II, S. 337, 353.) に於ても同樣である。而して斯く考へた結果カントは第四の國際聯盟をば唯一の取るべき道であると考へたのであるが、併し數多國家の對立といふことが何等かの理由を以て要求せられざる以上は前述の如く更に尙ほ他の可能事項、即ち國家の對立狀態を撤廢して成立つところの世界國家が殘るのである。而かもカントが斯る意味の世界國家を問題とせずして國際聯盟を唯一の途と考へたには、隱々の裡に自由國家の對立といふことに意義を認めて居たのであると思ふ。此の如き思想がカントの著述中明確な形を以て現はれて居る場合は私は知らないが、其「手記遺稿」中に (Werke [Ak.-Ausg.], S. 953)之を幾分か暗示し得る場處がある。こゝでカントは諸科學相互の關係をば諸國家相互の關係に比較して、諸科學が相孤立せずして互に相補ひ而かも各自その圏域を嚴守して決して相混同せざるところの一體系を終局形造らねばならぬことは、恰かも諸國家が全然其獨立を放棄して一普遍的王國(此處では此普遍的王國の代りに普遍的共和國を置きかへても差支はない) に融合することをなさず、各自儼然として自主の中心を形造りつゝ而かもその維持の爲めに自餘の凡ての國家を要し之と協同せずしては存立發達し得ぬといふ關係に於て終局一大國家聯盟を形造らねばならぬと同樣である、と說いて居る。吾々は今此比較を逆用且つ補釋して、カントは諸科學をば共に共基礎を同一の吾々の理性に有するといふ故を以て終局は互に相補不離の關係に立つところの一體系を形造らねばならぬとする共に各自は特異の基礎を有し之に依て他の科學に對して儼然たる獨立を保有し嚴明に他より區別されねばならぬとしたが、之と同樣に諸國家も亦、法の權威を其相互の關係に於て維持せんが爲めには大なる聯合に合同せねばならぬが、併しまた各自その獨異の國民性を基礎として成立つた自主的存在者としての品位を放棄せずして其獨異の素質を維持開展せねばならぬと考へた、とするは前

に述べたカントの民族的特徴の重視と結付けて考へて敢て不當ではあるまいと思ふ。唯此思想は合理的理由を以て前景に現はるゝことが出來ず單に陰々の裡に彼れをして世界共和國を否定して前擧第四の場合たる國際聯盟を取らしめた動機となつて居るのみである。而して其れは彼れが國民的者の重要は意義を認めつゝ而かも明確なる合理的理由に依てしかするを得なかつた結果に外ならないと思ふ。而して此處に彼れが倘ほ個人主義の第十八世紀と民族又は國家の「シュトゥルム・ウント・ドラング」期たる第十九世紀、啓蒙期と「ロマンティツク」期との境堺に立つて居ることを示して居るのである。

カントが「確定條項」第二に於て論じた國際聯合の範圍は理想としては世界中の凡ての國家を含むべきものであるが、而かも併し差當り彼れが目標としたのは彼れが當時其れのみが眞、文化或は少くとも進歩した文化を有すると考へた、最多く國際戰爭の弊に苦んで居た歐洲諸國の聯盟であつた。當時に於ては歐洲諸國と他の諸國との間に戰爭防止を目的とする聯盟の必要は實際は極めて少なかつたのである。斯くてカントは確定條項第一に於ては國內政治を論じ、第二に於ては大體歐洲政治に就て考へたといふことが出來る。併しカント當時と雖も昔時に比すれば地理的眼界と國際的接觸の區域とは遙かに擴大せられ、國家又は民族間の乖離又は戰爭が他の大陸にも亙つて起るといふ恐れは次第に增大せられて居た。即ち彼れも「地球上の一の場所に於ける法の毀損は凡ての場處に波及する」ことを認めざるを得なかた。是に於て歐洲政治より更に一段を進めて世界政治へ進まねばならぬ。國內法より國際法を經由して世界公民法に進まねばならぬ。(三)

(一) Werke (Ak. Ausg.) VII, S. 312ff. XV, 2. Nr. 1497, 1355, 1320, 1497, 1354.

(二) VII, S. 318. XV, 2. Nr. 1497, 1354. Benno Erdmann, Reflexionen, 1, 1, Nr. 622, 627, 628.

(三) カントは遠、隣 (entfernte, benachbarte) の語を對用し、國際法は隣邦相互の關係に關し、世界公民法は遠國たると隣邦たるとに拘らずあらゆる地球上の國民相互の關係に關するとして居るが、併し遠、隣は相對的であつて事情に依つて常に變動するから意味正確でない。今日の用語を用ゐて、國交關係に立つ、即ち條約を締結し使臣を交換して居るものと、然らざるものとを區別

し、國際法は前者相互の關係に關し世界公民法は國交の有無に拘らず地球上の凡ての國民相互の關係に關するとしたらば、區別が一層精確であつたと思ふ。併しカントはさる語を用ゐて居らぬ。

第三條項「世界公民法は普遍的好遇の制約に制限せらるべし」。吾々人間が居住し得べき場所は無限でない、此地球上に限られて居る。此意味に於て凡ての人間は住家を同くする、一種の共同團體に屬すると云へる。從て共同生活の理念は普ねく地球上人類全體の關係をも支配せねばならぬ。即ち若し彼等の恣意の間に乖離がある場合には相互に其れを制限しあはねばならぬ。此制限の制約を規定するものが世界公民法である。

此地球は本來は凡ての人類の共有であり、何人と雖も本原的には他の人以上に地球上一定の場處に對して權利を有しない。從て人は凡て如何なる邦土に於ても、其處で危險な行動さへなくば好遇を要求する權利を有せねばならぬ。此處に「普遍的好遇」といふは吾々が如何なる邦土に行くとしても其人民に依て敵として待遇されぬといふこと、或は訪問權 Besuchsrecht を與へられるといふことである。これはカントに依れば地球が本來人類の共有であつたといふことに基いて世界公民としての凡ての人が有する權利でなければならぬ。從て、例へば蠻地の海濱に於て行はるゝ、近海の船舶を掠奪し、或は難破船の乘員を奴隷とするといふが如き所業、若くばアラビア砂漠の遊牧民族（ベトウィーネ族）が已れに近づく者は凡て之を掠奪する權利を有するとするが如きは、此權利の蹂躪であり、違法である。併し人が單に此地球の住民であるといふ理由を以て廣く地球上の何れの邦土に於ても有し得べき權利は此訪問權以上に出でゝはならぬ、更に精密に言へば、其邦土の住民との交際を試み得る可能制約だけに止まらねばならぬ。此處に所謂好遇は優待の意味ではない。吾々は他の邦土に於て優待されることを要求する權利はない、尚ほ交際其者だけすらも強制する權利はない。吾々は吾々と交際するを好まざる者に對して强ひて其意志を曲げしむることは出來ぬ。唯吾々は交際を試み得る爲めの制約――例へば上陸、通行等――を要求する權利を有し、之を拒むは不法である。

然るに今日の現狀はどうであるかといふに、一方歐洲以外の民族の或者が外來人の訪問權を無視することがあると同

時に、他方外來人――歐洲人は歐洲以外の邦土に於て訪問權より遙か以上のことを要求して居る。卽ち、彼等が亞細亞亞米利加、亞弗利加等の諸邦土に至るや、單なる訪問權の範圍を越えて、其邦人の支配權、其邦土の所有權までも要求しつゝある。彼等に取ては是等の邦土の訪問はやがてその征服と同事を意味する。例へば、或る歐洲人は商業的殖民に籍口して戰士を東印度に送り、土人を抑壓し、饑餓に苦しめ、殺戮し、其諸邦を籠絡、煽動、離間して互に戰爭せしめる等、あらゆる背德の行動を敢てして居る。カントは斯の如き世界公民法違反の事例を擧げて、而して此の如き行動を敢てするものは實に、文化を以て誇るところの民族、而かも「信心を吹聽し、水の如く不正を飮しながら而かも正統的信仰に於て選ばれたものとして認められんと欲するところの民族である」と說いて暗に英國民の對殖民地政策を非難し、而して更に又た斯る歐洲人の不法行爲に對する對策として支那及び日本が鎖國主義を執つたことに言及して、支那は單に是等歐洲人が其の海岸に近づくことのみを許して內地に入ることを許さぬ、日本は單に一の歐洲民族卽ち和蘭人のみに通商を許し、而かも之を囚人の如く待遇して國人との社交的交通を許さぬ、といふが如き事實を擧げて、是等は畢竟前述の如き訪問者の危險をさとつた結果としての賢明な方法であると說いて居る。

尙ほ「法理學の形而上學的基礎」に於ては、カントは「戰時法」の條下に於て「永遠的平和の爲めに」よりも一層徹底して一般に戰勝國家が被征服邦土を殖民地とすることの不法を論じ、明らさまに英國の アイルランド政策を難じ、又た「世界公民法」の條下に於ても「永遠的平和の爲めに」に比して更に明確に、歐洲外の民族の自決、自律の權利を認めて、其土民の承諾なくして、又た公然の契約なくして、其邦土に移在することの不法を論じ、而して土民の無知を利用して斯る事を行ふの非を難じて居る。

七

要するに、國內に於ては共和政を布き、國交關係に立つ國家間（カントは斯る語を用ゐては居ないがカントの精神に基き其思想より曖昧を取除かんが爲めには斯る語を用ふるが適當と思ふ）には聯盟を形作り、地球上一切の人類の間に

は世界公民に固有なる權利として訪問權を認むると共に又た之のみに制限するといふことが、永遠的平和實現の形式である。然らばカントは如何なる程度まで此の如き形に於ける永遠的平和が眞に實現され得ると考へたか。

第一に共和政治は外的制度としては既に實現せられて居る。併し共和政治の精神が完全に充たされ、契約說の理念に完全に契合するやうな政治の實現はカントに依れば不可能である。何となれば、人間は一面理性的存在者なると共に又た他面一種の獸類である。理性的存在者としては凡ての人の自由を制限するところの法則即ち法律を要求するが、併し其利己的、獸的傾向性はその自由を濫用して機會だに許すならば自己のみを其法則の拘束より除外せんことを求むる樣に常に彼れを誘惑する。從つて共同生活を營む人間をして其利己的意志、即ち私心を抑へて普遍妥當的意志即ち法に服從せしめんが爲めには、或權威者を要するのであるが、併し此權威者も亦等しく人間であつて、其私心を制せんが爲めには其自身また他の權威者を要する獸類である。權威者は（其れは一人であるとするも多數であるとするも）一方絕對的なる正義の維持者でなければならぬに拘らず、他方私心に支配せられ易き獸類としての人間である。斯くて法が純粹に、完全に威力を發揮するところの社會の實現は到底不可能である。斯く考へてカントは「人間が造られてあるやうな曲りくねつた木材よりして完全に眞つすぐな者は決して製出する事は出來ぬ」(aus so krummem Holze, als woraus der Mensch gemacht ist, kann nichts ganz gerades gezimmert werden)、「吾々が自然によつて課せらるゝことは唯此理念への接近のみ」(Nur bie Annäbrung zu dieser Jdee ist uns von der Natur auferlegtr)と說いて居る。(一)

第二に、國際聯盟は外的制度としても、丁度此處に提案されて居るやうな形に於てはまだ實現されて居ないが、併しサン、ピエールも說いて居るやうに現に存する其れの先驅はその實現が必ずしも空想でないといふことを示す。のみならず前述のやうに若し「確定條項」第一が充たされて共和政體の國家が漸次增加し、和戰の決が人民の意志に基くやうになるならば、單に人間の道德的自覺の結果としてのみでなく、次節に叙說するであらうやうに又た其自然的傾向性の結果として、其必要は漸次痛切に感ぜらるゝに至るであらう。從つて其成立の可能は充分認められねばならぬ。併し其れが完全に成立して一切の戰爭を絕滅せしめんが爲めには出來る丈け聯合の範圍を擴大して理想としては終局は世界中一

切の國家を包含して普遍的國際聯盟又は「普遍的國家聯合」Universaler Staatenverein となることを要する。併し他方に於ては範圍が擴大すればするほど、其れの管理從て其れの成員の保護は次第に困難となり、最後には不可能となる恐れがある。されぱと言つて若し此の如き聯合が普遍的とならずして若干並存するときには其聯合同志が互に戰端を開く恐れがある。斯くてカントに依れば國際聯盟によつての永遠的平和は畢竟「不可實行的理念」unausführbare Idee である。唯併しながら永遠的平和を目的とするところの政治的原則、卽ち永遠的平和への不斷の接近 kontinuirliche Annäherung の爲めに役立つところの國家間の聯合を取結ぶべき政治的原則は「不可實行的」ではない。(二) 但し茲に誤解を抱くためにカントの用語に就て一言注意して置いたことは、カントは此處のみならず其他の場處に於ても屢「不可實行的理念」なる語を用ゐて居るが、此語はコーエンも言つて居る (Kants Begründung der Ethik. 2 Aufl. S. 452) やうに妥當でない。何となれば理念は——たとへ完全には實行され得ぬとしても——實行さるゝといふことに意味を有するからである。カントは此語の外に時に「不可達成的理念」unerreichbare Idee なる語を用ゐて居るが、此語の方がカントの意味を誤解なく傳へ得ると言へやう。(理念の意味に就て尙ほ本節の末部參照)

最後に世界公民的社會又は世界一家主義 Kosmopolitismus の實現に就てはカントは「人性學」の「人類の性格」(三)の章に於て言及して居る。其論述は精密を缺いて居るが、併し彼れの意見は之によつて明かに窺ふとが出來る。彼によれば世界主義的素質は人性の根柢に存する、從つて人間は世界公民的社會を造るといふ本分を自然より課せられて居るといふ感情を有する。併し其れは人性の他の面たる非社交性（之に就ては次節を參照せよ）の結果完全に實現さるゝことは不可能であると彼は考へて、之をば前と同樣「不可實行的理念」であると說き、尙ほ又た其認識論の用語を借り來つて之をば明かに構成原理 konstitutives Prinzip に非ずして統整原理 regulatives Prinzip であると說いて居る。

斯くてカントに依れば、共和政治も、國際聯盟も、世界公民的社會も、其外的制度と共に內的精神までも完全に達成せらるることは不可能である、從て之を通じて實現せらるべき永遠的平和も亦「不可達成的理念」である。唯、人間は自然的傾向性の結果絕えず、公を去つて私に就き、利己的意志に制せられて法を離れ、個人としても、國家の形を取て

も、常に闘爭狀態、戰爭狀態に陥る恐れがある。此邪遥よりして絶えず吾々を引き戾すものは實に此理念である。吾々に可能なるは此理念の完全なる實現に非ずして其れへの「不斷の接近」kontinuirliche Annäbrung である。斯くてカントの所謂「永遠的」はバウフが解したやうに（Bauch, Immanuel Kant, S. 365）超時間的 zeitlos の義と解するが最もカントの眞意に適ふであらう。カントの永遠的平和の狀態は一定の時間に實現さるべき狀態ではない、永遠の課題、超時間的に妥當する理性の課題である。カントは單に當爲又は理想の力、理念の不可侵性を確信することに於て何人の後にも落ちざるのみならず又た此確信に哲學的基礎を與へたといふ點に於て史上に特異の位置を占むる思想家であるが、併し又たこれが爲めに決して現實に對して眼を閉ぢはしなかつた。否な此理念を實現すべき人性の弱點をかれ程强く意識したものは恐く稀であらう。彼は「實踐理性批判」に於て「吾々の內なる道德法」の feierliche Majestät を說くと共に人性に於ける「根本惡」を說いた、「人格」の神聖（不可侵）を說くと共に「人間」の不神聖を說いた。Idee zu einer allgemeinen Geschichte der weltbürgerlichen Absicht (五) に於ては前にも述べたやうに「人間は獸物」なることを再三反覆して居る。單なる立憲政治の實現に關して尙斯く言はれねばならぬとすれば、更に之れより複雜なる、而して一國家に於けるが如く主長を戴くことの出來ぬ國際聯盟に依ての永遠的平和の實現に就ては一層さうでなければならぬ。斯くて「法理學の形而上學的基礎」の結末に於ては明確に、永遠的平和が事實となつて現はるゝものなるや否やは問題ではない、要は唯、其れは恐らく事實となつて現はれぬであらうが併し現はるゝものであるかの如く行動せねばならぬ、而して其れ、及び其れを招來するに最適合したやうな憲法を造り出さん（卽ち恐くは一切の國家を各別且つ總體に共和的とせん）が爲めに努力せねばたらぬ、といふにあるのみ（Also ist nicht mehr die Frage: ob der ewige Friede ein Ding oder Unding sei, und ob wir uns nicht in unserem theoretischen Urteile betrügen, wenn wir das erstere annehmen; sondern wir müssen so handeln, *als ob* das Ding sei, was viell icht nicht ist, auf Begründung desselben und diejenige Konstitution, die uns dazu die tauglichste scheint, (vielleicht den Republikanismus aller Staaten samt und sonders) hinwirken, um ihn herbeizuführen und dem heillosen Kriefühten...ein

Ende zu machen)(五) と説いてゐる。永遠的平和は「不可達成的理念」である。併し、永遠的平和の理念、或は「戦争あるべからず」Es soll kein Krieg sein の禁令は實踐理性の要請として絶對的妥當性を有する。理想が完全に實現せらるゝや否やといふ問題と、其れが絶對的に妥當するや否やといふ問題とは全然別問題である。斯くてカントによれば・たとへ戦争の終熄といふことの完全なる實現は結句單なる「敬虔なる願望」frommer Wunsch たるに止まるとするも、之が爲めに間斷なく努力せよといふ格率を採用するは決して迷妄ではない、何となれば「其れは義務なるが故」(六)である。

斯てカントは、現實に眼を塞いで人性の弱點を無視し、理想をば其儘直ちに現實に招來せんとするユトピストではない。しか解して彼を嘲笑するもの（政治家や實際家に此種の評家は多かつた）も、しか解して彼を讃美呼號するもの（これは所謂人道的博愛家に多い）も共に誤つて居る。前者に對してはカント自身已にサン・ピエール及びルソーの思想や提案やを空想として嘲笑する當時の政治家、君主等に對してとして前述の趣意を以て答へて居る。(七) 併し又た此理念の不可達成なることを認めたといふ理由を以て永遠的平和に對するカントの情熱と眞摯とを疑ふものがあるならば、其れも亦た大なる誤解である。オツトー・プフライデレルはカントを斯く解して、カントの永遠的平和及び國際聯盟に對する誠實と眞摯とは「永遠的平和の爲めに」於ては一七八四年の Idee zu einer allgemeinen Geschichte der weltbürgerlichen Absicht に比して薄弱となつて居ると主張して居るといふが（Kantstudien I. S. 301.）併し其れは「永遠的平和の爲めに」の後に出でた「法理學」より引證した前の語句に徴するも首肯し難い。其他さきの大戦役中に獨逸人の手に成つたカントの戦争及平和觀に關する小冊子中にも、カントの著書中に於て彼れが戦争に重要な道徳的意義を與へて居る文字（例へば其歴史哲學に關する著書の處々に散見するもの、又は Kritik der Urteilskraft の一箇處 Werke（Vorländers Ausg.）V, S 107 等の如し）を引用して平和に對する彼れの誠實と眞摯とを稀薄にせんとする傾向あるものもあるが、これも前に述べたところに依て否定せられねばならぬと思ふ。カントが戦争に重要な道徳的意義を認めた思想は又た別の立場から考査せられねばならぬものであつて、私は次の節に之に接觸するであらう。

蓋しカントの平和論に對して前述のごとき種々の誤解の起るのは主としてカントの「理念」の意味が充分明かになつ

て居らぬことに基因する、若しそれさへ充分明かになつて居るならば斯の如き誤解の起る理由はないと私は思ふ。カントの「理念」の意味はカント哲學の一般的知識を有するものには周知のことであると思ふが、併し斯の如き誤解を拒ぐためにそれのカント自身の說明を少しく參考して置きたい。それには「純粹理性批判」の「先驗的辯證論」中の一章「理念一般に就て」Von den Ideen überhaupt 中の一節（Kritik der reinen Vernunft 2.Aufl. S. 372-3）が最適切であると思ふ。此處でカントは「理念」（「イデア」）なる語を初めて哲學に導入したプラトーンの理想的國家（Republik）を引例して下のやうに說いて居る。

　プラトーンの「レププリツク」は單に迂儒の腦裡に描かれたのみの空想上の完全狀態の顯著なる實例と見做されて居る。而してプルツケル(八)は、君主は理念を分有せざれば決して善く國を治むる能はずとプラトーンが說きしをば机上の空論として嘲笑したが、併し吾々は寧ろ此プラトーンの思想の根柢に存する深き意味を尋ね更に進んで之を闡明せんと力むべきである。各人の自由を他の人々の自由と兩立せしめ得るやうになすところの法律に依て人間の最大自由（最大幸福ではない、何となれはこれは前者からおのづから續き來るから）を目的とするところの憲法は實に少くとも必然的理念であつて、而して其れは單に一國の憲法の草案に於てのみならず、一切の法律に於てその根柢に置かれねばならぬものである。而して其の場合たとへ、其の實行を妨害するやうな障碍——其の障碍は恐く人性よりして不可避的に起るものよりも寧ろ立法の際純粹なる理念を忽諸に附するよりして起るものが多いが、眼前に橫はるとするも吾々は初めは全然之を考慮外に置かねばならぬ。蓋し吾々が思惟する或制度が現實の經驗と矛盾するといふ理由を以て其れの價値を否定せんとするは凡俗にありがちのことであるが、併し、若し其の制度が適當の時期に理念に從て設定せられ、而して經驗より導出されたるが爲めに極めて粗笨なるところの概念が凡ての善良なる意圖をあだに歸せしめるといふことさへなくば、其の所謂矛盾する經驗も存在せぬといふ場合が多い。斯る凡俗の考へ方に從つて、經驗に矛盾するといふ理由を以て理念の價値を非認するほど有害にして哲學者にふさはしからぬことは無い。立法と執行とが上述の理念に一致して施設さるゝほど刑はたしかに減少するであらう、從て又た(プラトーンが主張するやうに)

其れが完全に整頓せらるゝ場合には刑は全然無用となるとするは全然合理的である。たとへ斯る完全なる状態は事實上決して成立たぬとするも、それに依て人間の憲法をば出來る丈け完全なる状態に絶えず近かしかめんが爲めに此最高限度を模範として揭示するところの其理念は尙ほ全然正當である。何となれば、人間が止まらざるを得ざる最高度は如何、從て此理念と其れの遂行との間に必然的に存ずる間隙の大さ如何といふことは、何人と雖も決定し得ず、又たすべからざる問題である。なぜかといふに、あらゆる定められたる限界を踰越し得るといふことが自由の本性であるからである。

此一節中に「永遠的課題」又は「超時間的課題」、又は「課せられて與へられざる」(aufgegeben sondern nicht gegeben)規範といカントの「理念」の意味が政治問題の實例を以て極めて明瞭に説明せられて居ると思ふ。

理念の本義は課題たるに存する。それが何時完全に實現されるか、或は果して完全に實現され得るかは毫もそれの妥當性を增減せぬ。たとへそれの達成が絶對的に不可能なりとするも儼然たる價値を有する。何となれば、倫理や、法律や、宗教の領域に於ては現實の經驗的事實よりして原理が導出さるべきに非ずして、原理としての理念が初めて斯の如き經驗を可能ならしむるものであるからである。但し理念の實現が不完全であるといふことの原因は人性に不可避的に存することもあるであらうが、併しその最主要な原因は寧ろ、理念の斯の如き意義を認めず、それの完全なる實現が不可能なりといふ故を以て直ちに之を空想として排斥し、其代りに經驗より導出されたる粗笨なる概念を原理とするといふことにある。此理念が人間歷史に於て實現され得る極度が何處にあるかは吾々は知ることは出來ぬ、又た到底知り得べからざることである。何となれば人類が歷史を有するは彼等が自由的存在者であるが故であり、歷史は此自由の漸次的實現であり、而して「あらゆる定められたる限界を踰越し得るといふことが自由の本性であるからである。」

尙ほ此一節中に私が前に既に叙說したやうなカントの法律の概念や憲法の理念やも極めて簡單な文句を以て現はれて居ることは殊更指示する必要もないと思ふ。尙ほこれは前には叙說しなかつたが、カントは彼れの所謂共和政體をば國家の理念に合致した唯一の政體であるとしつゝも、直接行動に訴へ暴力を以て現存の法を破つて之を實現せんとするこ

との不法を說き、政體の改善は革命 Revolution に依らずして進化 Evolution に依らねばならぬといふことを兩三說いて居るが、其の趣意も此一節中の「適當の時期に」zu rechter Zeit なる簡潔なる文字で要愼深く言表はされて居る。唯此處では永遠的平和とか國際聯盟とかいふことには一言も言及されて居ない。併し吾々は此處の「プラトーンのレプリック」なる語の代りに「サン・ピエールの國際聯盟思想」なる語を置き代へても決してカントの意を誣ゆる所以でないと信ずるのである。何となればカントは「純粹理性批判」の前に既にサン・ピエールの國際聯盟が此處に說明して居る意味に於ける理念なることを說いて居り、而かも屢プラトーン、サン・ピエール、ルソーの三人の名を列記して、彼等をば架空なる空想家として排斥する論者を非難して居る。今其の著しき一二の例を擧げて見やう。一七六〇年代のものといふ Reflexionen の一 (Werke 〔Ak.-Ausg〕 XV. S.219, Nr. 488) に此三家をは「感覺の空想家」に對して「理性の空想家」として並べ擧げて (Es gibt phantasten der Empfindung: Verliebte. melancolisch. devote. oder der Vernunft als St. Pierre.Plato. Rousseau.) ある。此處に所謂「理性の空想家」とは何を意味するかは丁度此期に出でた Versuch über die Krankhet des Kopfes (1764) が明白に說明して居る。卽ち下の樣に說いて居る。「情熱に沾れ半俗なる感情を有する輩が想像し得さるほど、原則に依てとして道德的感情に依て熱せらるゝ者は、其等の輩に對しては空想家、幻想家と見える。」斯くて最高貴なる人々が屢凡庸の輩よりして嘲笑を受ける。「アリストテレースが金貸しに嘲笑せられ、エピクテートスが宮廷の役人よりして、ジヤン・ジヤック・ルソーがソルボンヌの學者達よりして」嘲笑せられし如き其適例である。併し此種の空想 Phantasterei は普通の悪しき意味での空想でしくして情熱 Enthusiasmus である、「而して之れなくしては世界に於て何等か偉大なる事は決して成遂げられて居ない」と。卽ちカントが此處に三家をば「理性の空想家」と呼んだ意味は或道德的原則に對する確信に依て强く動かされる情熱家である。更に一七七〇年代のものといふ Reflexionen の一 (XV.S. 406, Nr. 921) にも亦ルソー、プラトーン、サン・ピエールをば「自體に眞なる理念に從つての」(nach an sich wahren Ideen) 空想又は情熱の實例として並擧して居る。是等及び其他の材料に基いてカントが第一批判書以前に於て既にサン・ピエールの國際聯盟思想をばプラトーンの「レプブリツク」と同

様「自體に眞なる理念」と認めて居たことは明かである。今引用した一節に於て彼れがプラトーンを引例したのは此處では彼れは政治問題を主題とせずして純粋なる認識問題を取扱ひつゝあり、而かもプラトーンに端を開いた學說を說明しつゝあつたが爲めであると推察することが出來ると思ふ。從て吾々はまた今引用した一節に於て前者を後者に置きかへても決してカントの眞意を誣ゆることにはならぬと思ふ。さすれば、前に述べ來つた、永遠的平和が永遠的超時間的の課題であるといふ趣意は既に此認識論の主著中に極めて簡潔に而かも充分に現はれて居るといふことが出來ると思ふ。

要するにカントに於ては、從前の思想家に依て歷史の或一定期に起つた經驗的事實として考へられた社會契約が理念即ち超時間的、永遠的課題となつたと同樣に、從來の平和論者の多くが眼前に招來され得ると信じたり若くば信しつあつた永遠的平和、而して斯る意味に解せられて多くの論者よりして反對を受けたりし、若くば受けつゝあつた永遠的平和も亦、明確に永遠的超時間的の課題となつた　これ亦たカントの平和論が他の多くの平和論と異なる重要特徵の一である。

（一）Idee zu einer allgemeinen Geschichte in weltbürgerlicher Absicht. VI. Satz.

（二）Metaphysische Anfangsgründe der Rechtslehre. § 61.

（三）Werke (Vorländers Ausg. IV, S. 264.

（四）VI. S. 10.

（五）III, Rechtslehre S. 185.

（六）III, Rechtslehre S. 185.

（七）IV, Ueber den Gemeinspruch & C. Verhältnis der Theorie zur Praxis im Völkerrecht. S. 187ff.

（八）Brucker, 1696-1770.　哲學史の著を以て名あり、近世に於ける哲學史の祖と稱らる。

斯くて永遠的平和の完全なる實現は不可能、或は少くとも不可保證的であつて、唯之に間斷なく接近することが吾々の義務であるか、然らば前擧の外的制度の實施と此間斷なき接近とは果して可能であるか、又たそれが可能であるとすれば如何なる徑路をふんでなさるゝか。是に於て吾々は平和論の最初の二問題、即ち戰爭は何故に、又た如何なる意味に於て惡なるか、及び永遠的平和は如何なる制約の下に、又た如何なる形を以て實現せられねばならぬかといふ二問題より轉じて、第三の問題に入るのである。此問題を取扱つたのは、「永遠的平和の爲めに」の中に於ては、「追說」第一「永遠的平和の保證」と題する一節である。

永遠的平和の招來には二つの力が協力する。此力あるに依つて吾々は、人間は徐々ではあるが前擧の外的制度を實現し、且つ間斷なく永遠的平和の理念に接近し行くといふことを信ずることが出來る。其一は即ち道德的洞見に基く吾々の當爲の意識である。「戰爭あるべからず」なる實踐理性の絕對的禁令は永遠的平和の招來に貢獻せねばならぬといふ義務を吾々に課し、此義務意識は種々の障礙を排して此理念の實現に努力する力を吾々に與へる。併しカントに依れば、斯の如き道德的洞見なくとも「自然」(カントは之を「大藝術家自然」Die grosse Künstlerin Natur 又は「運命」Schicksal 又は「攝理」Vorsehung等と呼んで居る)が永遠的平和の招來を「保證」する。「自然の機械作用」Mechanismus der Natur 其者が人類をしておのづから此方向に向はしめる、人類が其れを欲する欲せぬに拘らず之を強制して此方向に進ましめる。カントによれば自然は人類をして完全なる國內法、國際法、及び世界公民法によつて永遠的平和といふ崇高なる道德的目的を實現せしむることを最後の目標とし、此目的を達成せんが爲めに其大なる智慧に依て自然界及び人間の自然的傾向性(此傾向性も亦廣義に於ける此處の「自然」の一部である)に於けるあらゆる設備を計畫したかのやうに考へられる。(一) 先づ自然は地球をば到る處に人間が生活し得る樣に設備する。氷洋に沿ふた冱寒の荒地にも尙ほ苔を生ぜしめ、之を以て「オステイアツク」又は「サモエード」族の榮養となり又た其橇を牽くべき馴鹿を飼養する。更にまた其水中には海豹、海馬、鯨等を棲息せしめて、住民に、其肉によつて食糧を、其の脂肪によつて溫暖と燈明とを供給する。炎熱やくが如き荒蕪の沙漠にも駱駝を棲息せしめて人間の交通及び運搬の具となす。斯くて自然は地球上到

るところを人間が棲息し得る様に設備し、而して更に、(二)斯く設備されたる各地に人類を分布せんが爲めに、之に賦與したる好戰的傾向性を利用する。たとへば「サモエード」族は好戰的なる「モンゴリア」族の爲めに壓迫せられアルタイ山脈の同族より割かれて漸次沍寒不毛の北氷洋沿岸に移轉し、歐洲最北部の「フィン」族は「ゴート」及び「サルマティア」族の壓迫の爲めに同族の「ウンガル」族より別れて斯る遼隔の地に移轉するべく餘儀なくされた。而かも、(三)此戰爭欲は又たおのづから人間を結付けて、法が或る程度に於て權威を有するところの團體、即ち幼稚たる形に於ける國家を形造らしめる。何となれば、一民族が他民族と對抗して其壓迫を脫かれ若くば優勝の地位に立たんが爲めには强固なる團結を形造らねばならぬ、而して團結中最强固なるものは一切の成員に洩れなく服從を要求するところの法に基ける團結、即ち國家であるからである。

斯くて自然は三段に亘つて其最高目的を達せんが爲めに「豫備的設備」をなし、更に進んで斯くして成立つたる團體をして國內法、國際法、世界公民法を實現せしむべく進む。先づ第一に國家の權力中最安固なるものは法である。たとへば君主の知慧、意志、又は兵力といふが如きものも主要なる力ではあるが、併し其等は或は恒常的ならず、又た濫用され易い。法は國家の成員相互の關係を整理調和し、其安寧を保証し、又た其團結を固くして他の團體に當らんが爲めには最强き力である。斯くて人間は道德的自覺からでなく、各自の安寧を求め、又は他の團體に對する自己防衛又は優越を求むるといふ其自然の傾向性よりして、道德的に見て正當である。法が最上の權威を有するところの政體を形造り而して終局其最完全なる國內法の形としての共和的憲法を實現するやうになる。自然は道德的理由よりしてでなく人間の自己保存の理由よりして、即ち自然的機械作用の結果として、徐々に彼等をば法に從つて行動し、平和狀態に於て生活せんとするところの善良なる公民に仕立て上げるのである。

第二に自然は諸民族の融合を妨げ之を分立せしめて其の間に國際聯盟の理念を實現せしめんが爲めに一定の手段を用ゐるの國際聯盟は數多國家の並立を豫想する。無論自然に放任するときは其等の國家は戰爭狀態にあらねばならぬ。併しそれは諸民族が悉く一普遍的王國に融合するに比すれば遙かに理性の要求に一致する。凡ての國家若くは其君主は若し

出來得べくんば己れ自ら世界を統一して普遍的王國 Universalmonarchie を形造ること（今日の語を借りて言へば帝國主義の實行）に依て平和狀態を招來せんことを希望する。併し此の如き平和狀態に比すれば、たとへ戰爭狀態にあるとしても多數の獨立國家の並立が寧ろ理性の要求によく合致する。何となれば、前にも既に述べたやうに統治の範圍が擴大するに伴つて法律は力を失ひ、其劃一的專制主義は人民の活力と自由の精神とを減殺し、道義心を痲痺せしめ、終局は無政府狀態を誘致するからである。然るに自然は諸民族の融合を妨げて此好ましからぬ結果を拒がんが爲めに國語及び宗教の相異を手段として利用する。國語及び宗教の相違は實に常に諸國家諸民族の併合に對する最有力なる障碍である。而かも自然は又た斯くして分離されたる諸民族を結合（併合融合　はない）せんが爲めの善巧方便として人間の傾向性を利用する。人間の利己心は利得慾を產み、利得慾の結果商業が起る。而して商業が次第に廣大なる範圍にかける民族間の通商貿易となり行くに連れてそれは國際的戰爭とは調和が困難となる。商業的精神と好戰慾とは到底兩立することは出來ぬ。斯くて政治及び道德よりして全然獨立に、人間の自然的傾向性の機械的作用よりして、次第に國際法世界公民法が力を有するやうになり、永遠的平和の理念が實現されるやうにならねばならぬ。

以上は「追說」第一の大意であるが、同樣の思想は尙ほ Idee zu einer allgemeinen Geschichte in weltbürgerlicher Absicht 及び Ueber den Gemeinspruch: Das mag in der Theorie richtig sein, taugt aber nicht für die Praxis中の Verhältnis der Theorie zur Praxis im Völkerrecht の中にも既に明亮に現はれて居る。但し玆に此二著述の內容や之と此「追說」の其れとの比較やに立入る暇はない。又たそれは吾々の目的に取て切要でもない。唯此論文の初めの部分の叙說（第二節）と關聯して一寸注意して置いてもよいと思はるゝことは、「追說」第一に於てはカントは專ら好戰的傾向が人性に固有であることを高調し（Werke. Vorländers Ausg. VI. S.178-9）之をば自然が利用する重要な手段として居るが、Idee zu einer allgemeinen Geschichte in weltbürgerlicher Absicht に於ては、人間は自然的傾向性として「非社交的社交性」ungesellige Geselligkeit を有する、換言すれば社交的衝動（Neigung, sich zu geselligen）を有すると共に強き孤立的衝動（grosser Hang, sich zu vereinzeln oder isolieren）を有する。而して自然は此反對の傾

向を巧みに利用して、其最後の目的を漸次的に實現すると考へた。「追說」第一の思想はホッブス的傾向に富んで居るが、Idee に於てはホッブスの思想とグローテイウス及びルソーの其れとが結付いて居ると言へる。

尙ほ今擧げた二著述はカントの歷史哲學的思想を寓するといふ點よりして重要なものであるが、併し其れも吾々の當面の問題には關係が少ない。カントの平和論を當面の主題とする吾々に對して重要なとは是等の著作の內容の比較、又は其れを通してのカントの歷史哲學的思想の考査に非ずして、寧ろ前述の「追說」第一の內容又は大體之と歸趣を同じうするところの他の二著述の內容にカント自身如何なる程度の確實性を歸し、如何なる意義を認めて居たかといふ問題である。前述「追說」第一の論旨を見た何人と雖も恐く先づ、其れがカントの論述の他の部分に比して著しく嚴密を缺ぐといふこと、殊に其前半が如何にも空想的要素に富むといふことを感ずるであらう。從て斯の如き根據に依て永遠的平和が如何ほど「保証」され得るであらうか、カント自身之に就て如何ほどの確信を有つて居たであらうか、といふやうな疑問を起すであらうと思ふ。今此點を少しく考査して見たい。第一に此思想は一種の自然目的論 Naturteleologie である、或は之を其一部分として含んで居る。從て其れはカントの目的論觀に基いて理論的認識たる價値を有しないことは無論である。而して現にカントは「追說」第一の末節に於て此「保證」が理論的に將來を豫言するに足るものでないといふことを明白に斷つて居る。然らば此思想は如何なる意義を有するであらうか。此點を推知するに最よき手引きとして役立つと思はるゝ語を私は Verhältnis der Theorie zur Praxis im Völkerrecht 中に見出し得ると思ふ。此論文に於てカントは「追說」第一に於てと同樣、國內法、國際法、及び世界公民法の實現が倫理的自覺に基く吾々の有意的努力よりは寧ろ「攝理」(卽ちカントが「追說」第一に於て「自然」と同義に用ゐた語)の巧妙なる施設によりて成遂げらるゝとして、「吾々の善意志が爲すべくして而かも爲さゞることをば終局には無力（戰爭の爲めに民力涸渇した極陷るべき）が成遂げる」……So muss, was guter Wille hätte tun sollen aber nicht that, endlich die Ohnmacht bewirken と說いた後、この思想をば併しながら「唯の臆說且つ單なる假說」nur Meinung und bloss Hypothese に過ぎぬと斷つて居る。是に於て吾々はカントは臆說及び假說なる語を以て何を意味して居るかを校査せねばならぬ。

カントに於ける此兩語の意味は「純粹理性批判」の「先驗辯證論」に極めて明確に限定せられて居る。カントによれば臆說は承認（眞として認めること、Fürwahrhalten）の一種である。吾々が何事かを承認する、眞として認むるに當て、其理由は客觀的なるか若くは主觀的なるかである。客觀的理由を有する承認は知識 Wissen である。理由は主觀的であるが併し知識と同樣確實なる承認は信仰 Glauben である。信仰は主觀的に充分確實なる承認（ein subjektiv zureichendes Fürwahrhalten）である。而してカントによれば斯る嚴密なる意味に於ける信仰は例へば神の存在、靈魂の不死、善の最後の勝利といふが如き道德的信仰のみである。（斯の如き結論に如何にして到達せしか又それの正否如何の問題には今は觸れぬ。）斯る信仰は科學的確信と同樣に確實であるが、併しそれは理論的基礎の上に立ち得ず、嚴密なる意味に於ける斷定 Behauptung でなくして要求又は要請（Vorderung oder Postulat）である。嚴密に言へば客觀的法式を以て言表はされてはならぬ、例へば「神の存在、靈魂の不死は確實である」といふが如き形を以て言表はされずして「神の存在、靈魂の不死を予は確信する」といふ形を取らねばならぬ。臆說は此兩者に對して、單に客觀的理由に基かざるのみならず、又た主觀的にも不確實なる承認、「意識を以て主觀的にも客觀的にも不充分なる承識」（ein mit Bewusstsein sowohl subjektiv als objektiv unzureichendes Fürwahrheiten）である。カントの永遠的平和の「保證」に關する思想は即ち斯の如き意味に於て臆說であつて、客觀的理由に基き理論的に證明さるゝことが出來ぬのみならず、主觀的に不可疑的なる確信でもない。

次に然らばカントが之をば假說と呼んだ意味は如何。假說とはカントによれば說明根據として或現實的なる確實なる事と結付けられたる臆說である。即ち一種の臆說であるが、併し或現實的なる確實なる事を說明せんが爲めに假りに採用せられたる見解（vorläufig angenmmene Ansicht）である。但しカントによれば斯る假說が學的價値を有せんが爲めには一定の制約を要する。無論假說は臆說であるから、知識や信仰の如く必然性と無制約性とを有するを要しないが、併し少くともそれは不可能であつてはならぬ、可能でなければならぬ。其自身は絕對的確實であることを要しないが、併し其れの可能性は假說又は臆說でなくして絕對的確實でなければならぬ。而して其れが可能ならんが爲めにはカント

哲學の原理に從つてその假想する原因は經驗の形式的制約に契合するもの、可能的經驗の對象でなければならぬ。然らされば其の臆說は悟性の所產たる假說でなくして想像の所產たる幻想 Schwärmerei である。斯くて學的假說は物理的 physisch であつて超物理的 hyperphysisch であつてはならぬ。これが現象の說明の爲めの假說に關するカントの結論である。併しカントは斯く現象の說明の爲めとしての超物理的假說を非認しつゝ尙ほ之に他の意義を認めた。それは卽ち彼れが辯難的意義と呼んだものである。カントによれば反對する二說が對立する場合に、何れが一方を非認して他方を辯護するでもなく、又た双方共に非認するでもなく、唯一方を攻擊非難するのみで他方をば辯護することなくして放置する論法が辯難的論法（Polemisches Verfahren）である。カントによれば超物理的假說は理論的價値を有せぬ。從て之に依て現象を說明することが出來ぬと共に其の上に形而上學的命題を理論的に基礎づけることも出來ぬ。併し理論的以外の理由に依て肯定せらるべき或形而上學的命題をば其反對說に對して辯護せんが爲めに其反對說の潜越を攻擊する武器として意義を有し得る。理論的以外の理由とは卽ち實踐的理由である。吾々は實踐的理由よりして或形而上學的命題を信せさるを得ぬ。然るに此實踐的信仰をば理論的立場に立つて非認せんとする者がある。カント哲學の原理によれば理性は共理論的使用に於ては形而上學問題に對して反對說の何れにも輕重を置くことは出來ぬ。併し實踐的使用に於ては其何れかを承認せざるを得ざる場合がある。此場合證明の義務（onus probandi）は明かに此承認を否定する側にあらねばならぬ。而して超物理的假說は此否定の爲めの證明の不充分を示す爲めに屈强な武器となることがある。超物理的假說は自然科學其の者の內に於ては不可能である。又た形而上學に於ても獨立の積極的命題としては價値を有せぬ。唯消極的、辯難的の意義を有し得る。甲乙兩說が對立して甲は實踐的信仰の上に立ち乙は之を非認せんとする場合に、吾々は或超物理的假說に依て理論上積極的に甲を辯護すること出來ぬ（それは不可能であるから）が、乙の理論的根據を動かすことが出來る。(三)

これがカントの假說の意味、及び彼れが超物理的假說に認めた意義である。今カントの「永遠的平和の保證」は彼自身によれば一の假說であるが、物理的假說でなくして超物理的假說である。「攝理」又は「自然の意圖」といふが如きものは可

能的經驗の對象ではない。而して其れは前述の理由に依て現象を說明せんが爲めに役立ち得べきものでなく、而してカントに依てしか意圖せられたものでもない。のみならずカントは之に依て永遠的平和の實現といふ實踐的信仰を理論的に基礎づけんとしたのでもない。唯此假說の辯難的使用に依て此實踐的信仰に對する反對論の基礎を動かし間接に此信仰を擁護せんとしたのである。カントに依れば永遠的平和の實現は實踐理性の要求として吾々は之を信ぜねばならぬ、之を信ずるは義務である。卽ち前述のやうな意味に於て信仰である。而かも反對論者は人性に存する利己的非社交的傾向性、優勝慾、好戰性等を理由として之をば空想家の幻想や學者机上の空論として嘲笑し非難する。其れがカント以前及び當時の常であつたことはカントが屢プラトーン、サン・ピエール、ルソー等をば空想家、幻想家としての非難に對して辯護せんと努めて居るに依ても察することが出來る。實にカントが言ふが如く、多くの人は、斯る崇高なる形の憲法(共和主義的)の實現は利己的傾向性を有する人間には所詮不可能であるからそれは天使の國家ではなければならぬと主張して居た[三]」のである。カントは卽ち人性此自然的傾向性がやがて共和主義的憲法、及び永遠的平和の理念の實現を誘進する原因となり得る、斯る憲法制定の問題は「惡魔の民族(若し彼等が悟性さへ有するならば)に對してすら解決され得る[四]」問題であると考ふることが出來るとした。それは知識でもなく信仰でもないが、併し其信仰を間接に擁護すべき假說として可能である。而かもカントによれば其れは或程度までは自然及び歷史に關する經驗に依て維持され得る[五]のである。斯くてカントは此假說に依て敵の論據を動かし、而かもそれを爲すに當ては敵の武器を奪取して敵に當るといふ戰法を取り、實踐的信仰に餘地を與へんとしたのである。

(一) Werke (Vorländers Ausg.) VI, S. 143.
(二) Kritik d. rein. Vern: Die Disciplin d. rein. Vern. 2. Aufl. S. 797 ff.
(三) Werke (Vorländers Ausg.) VI, S. 179.
(四) VI, S. 180.
(五) Idee, VIII. Satz.

九、

「追説」第二は、カントは之を「永遠的平和のための秘密條項」と名け、「戰爭の爲めに武裝したる國家は公的平和の可能の制約に關する哲學者の格率に傾聽せざるべからず」といふにある。

永遠的平和の實現は前節に述べたやうに、一方に於ては「自然の機械作用」に誘致せられ之に依て保證せらるゝのであるが、之と同時にまた吾々の理性的、道德的洞見に依て促進せらるゝ。前者の場合には目的の意識は關與せず、人性に自然に具はる本能、傾向性等が期せずして此目的の實現に協力するのであるが、後者の場合には目的が明確に意識せられ、吾々には直接に其目的其者の爲めに努力するのである。此目的の理性的洞見をみづから有し、其の實現の諸制約をみづから認識し、而して之を世に示すことは正しく哲學者の任務でなければならぬ。而して政治家、立法家、君主等は哲學者の此忠言警告に傾聽せねばならぬ。これが此「秘密條項」の意味である。

斯くてカントに依れば、哲學者はプラトーン及び古代支那の哲人政治論、聖人政治論に於けるが如く自ら爲政家又は王者たらざる可らずと言ふのではないが、併し王者の師でなければならぬ。斯の如きは實にプラトーン以來哲學の側よりして爲政家又は王者に對してなされた最尊大なる要望であつて、一見すれば之を眞面目に提言したカントは遂に彼れが常に注意して陷ることを避けんとして居た幻想 Schwärmerei に陷つたといふ誹りを受けねばならぬかも知れぬ。併しカントの提言は實はしかく空想的なものでなく、極めて現代に適切な形を取つて居る。而して此處にカントが此條項をば輕き揶揄と皮肉とを交えて「秘密」と呼んだ理由が存するのである。カントによれば現代の如く公刊の著作、論文に依ての意見發表の道が開けて居る時代に於ては爲政家が態々哲學者の教を聞き若くは意見を徵する必要はない。のみならず、爲政家は萬人の上に立つべき治者としておのづから最高の知慧の所有者であると考へられて居るから、如何に哲學者とはいへ苟くも被治者の位置にある者よりして教を求むるといふことはその威嚴を損するやうに見えるであらう。其故に國家は唯暗默の間に、意見を發表すべく哲學者を奬勵すれば足る。即ち此意味に於て秘密に哲學者に問へば充分

である。哲學者は當然理念の實現を熱望する。從て發表の自由を與へるといふことがやがて其れの奬勵である。斯くて爲政家は暗默の間に國政に關する忠言、警告を哲學者に求め、哲學者は公然又は言明的の諸問に接することなくして之に答へる。其問は秘密の間にして其答は「秘密の忠言」geheime Rate である。

但しカントによれば此條項は必ずしも哲學者の原則のみに注意して政治的權力の代表者たる法律家（此處で謂ふ法律家は現行法の適用を職掌とする者である。更に進んで現行法に改善の必要あるや否やを法の理念に基いて考査する者は法理哲學者である。而してこれはカントの立場からは必然的に道德哲學者でなければならぬ）の發言を無視して可なりといふことを意味するのではない。唯、法の秤と並んで正義の劍を象徵とするところの法律家は普通、前者よりして一切の外的影響を排除せんが爲めのみでなく、盤の何れかゞ輕きに失する場合に劍を以て其重さを補はんが爲めに後者を利用せんとする弊に陷り易い。同時に哲學者ならざる法律家は其職掌上單に現行法の適用のみを務めとして、其れが理念に依つて改善を要するや否やを問題とせざるが故におのづから斯る誘惑にかゝり易いのである。而して法律には權力を作ふに反して哲學には然らざるが爲めに、おのづから前者が過重せられて後者が輕視せらるゝ傾向がある。國家は斯の如き法律家の過重を避けて哲學者が說く原則に聽かねばならぬ。

カントに依れば、君主が哲學し若くは哲學者が君主となるといふことは期待すべきことでなく、又願はしきことでもない。何故かなれば、權力の所有は必然的に理性の自由判斷を不純ならしむるからである。併し君主若くば君主的人民（平等の法則に從つて已れ自らを支配するところの人民）が哲學者を緘口せずして（吾々に此處でカント自身其平和論發表の僅か以前に宗教問題に就て緘口令に苦められたことを想起す）自由に所信を公表せしむることは、理念とその實現の制約とを考察することを本分とする哲學者と、之に準據して他又は自らを治むることを本分とするところの事業的爲政家若くは人民との双方が相待つて各自の職分を盡し得んが爲めに缺くべからざることである。斯くてカントは君主は理念（「イデア」）を分有せざれば善く國を治むる能はずといふプラトーンの政治論の根本精神を踏襲しつゝ、其銳敏なる現實感に依てプラトーンの極端なる哲人政治論を緩和して現代に適切なる形に改作したのである。

リッケルト教授

哲學界の世界的權威者として學界耳目を聳しめつゝあるハイデルベルヒ大學教授リッケルト博士の學説は、最近我國に於ても單に學界のみでなく、一般讀書階級に非常な勢ひを以て歡迎され多大の影響を及ぼしつゝあるは讀者の既に御承知の如くである。我社は曩に本誌への執筆を依頼しておいた處、教授はその非常なる多忙の中より今回特に「文藝と哲學」なる長論文を本誌の爲めに寄稿された、我社は四月號の誌上に此長論文を掲載し得ることを讀者と共に欣快とし、且我思想界に多大の反響を齎らすべきを確信す。教授は尚引續き本誌の爲めに其蘊蓄を傾けらるゝ筈である。左はハイデルベルヒ大學リッケルト教授の下に在る北昤吉氏より本社同人に宛られた通信にして、博士の近況を語るものである。

＊　＊　＊　＊　＊　＊　＊　＊

前略　拙者儀てリッケルト教授へ御交渉中の論文は貴社郵便にて貴社宛御送り申上候處御落手の事と察上候、教授は文章にこる點にて有名にて脱稿まで可なり時日を費したる次第なれば御諒察上願候、次回の論文につき來談あり候間小生は「戰時に於ける獨逸の文化」なる題目にて御執筆あつてはと申し候へ共教授は獨逸一般の文化を論ずるには政治を論ぜざるべからざるが此は自分の不得手なりと答へられ、結局「希臘哲學の發生」につきて起稿さるゝことゝなりしも、其後日本讀者の興味をも參考され、御手紙に在る通り「フイヒテの社會主義の哲學的基礎」と題する一文起草することゝ相成候、各脱稿の上は早速御送り申上べく問題も問題なり筆者も筆者なり日本之學界の注目を惹くこと疑なしと存じ候。

教授は先師ヰンデルバンドの師クーノー・フイッシャがファウストの講義をなしたる故智にならひ目下ハイデルベルヒ舊校舍十三番の教室にてファウストを講じ居られ非常な人氣に候、此の教室は古へはヘーゲルも講じ、後フイッシャー、ヰンデルバンド共に講義せる紀念すべき教室に候、教授は先頃哲學雜誌「ロゴス」にファウスト論を出し學界の注目を惹き居り候のみならず、教授は日本にて誤解するが如く認識論一點張りの「所謂カント學徒」に非ず、カントの哲學の形式を假りてゲーテの人生觀の内容を組織せんとする方向に進みつゝあり、近著「生の哲學」「哲學體系」共にファウストよりの巧なる引用は少しくゲーテに通ずる者の容易く觀取し得る處に候。教授のゲーテに對する態度上の如く、從つて教授の貴社への論文も一時の出來心よりに非ず、根底頗る深しと云はざるを得ず候。教授は神經性の病氣になやまされ寫眞を嫌ふ爲め適當のもの無之候へ共、教授の愛弟にて目下小生の研究に助力されつゝあるリゲル博士自分で取りたるもの一枚所存致し居り小生之をもらひ受け候間近々御送り申上べくもし御利用あらば幸甚と存じ候。（下略）

文化の概念

文學博士　田邊　元

文化、文化生活乃至文化主義等の語が今日の言論界に於ける流行語に屬することは恐らく何人も異論のない所であらう。文化主義なるものが始めて我思想界に提唱せられたのは數年前のことであると記憶する。併し此語、或は一般に文化の語が廣く人々の口に上るやうになつたのは極めて最近の事である。而して此等の語の流行に伴ひ、最初文化主義を提唱せられた人々の説が哲學上カントの批判主義に立脚し、特に現代の西南獨逸學派に由つて代表せらるゝカント主義を基調としたものであることは何時か忘れられて、今日は此等の語に極めて多義曖昧なる內容が盛られ、之を使用する人が果して如何なることをそれによつて意味するかも甚だ解し難く思はれる場合に遭遇することが少くない。固より語は之を使用する人の思想に依つて多少其の意味を異にすること如何なる場合にも免れざる所である。而して或人は自己の隨意に其意味を變更して、己の欲する所を之に由り表現するのであるといふならば其處に議論の餘地は無い。併しながら今日流行する所の文化、文化生活乃至文化主義の語は元來相當に深い哲學的傳統を負ふ語を飜したものであり、今日此の語を極めて無批判的に使用する人も、それが久しく成語となれる『文明』の語に對し何等か新意の優る所あるを信ずるに似て居る。今に於て此等の語の眞に意味する所或は當に意味すべき所を究明するは必ずしも無用の閑事業ではないと思ふ。元來深邃幽玄の意味を有すべき語を流行に由つて淺薄粗笨の內容に轉用することは、之を流行せしむる思想界の淺薄粗笨を語るものでなくして何であらう。私は文化なる概念の眞の理解が哲學の大半を包含すると信ずるものである。餘りに卑俗なる意味の此の概念に盛らるゝを見るとき、一種汚瀆の感を懷かざるを得ない。今普通に使用せ

らる丶場合の文化の意味から漸次其基礎となる所を求めて、終に、其窮極する所を尋ぬるとき、之に出つて我々の世界觀の歸趣すべき方向を知ることも出來ないではないであらう。

文化なる語の最も粗笨なる第一の使用は、我々の物質生活に自然科學の研究成果を應用して之を安易にすることを意味する場合であると思ふ。例へば我々の生活に電氣を應用すること多ければ多き程文化が進むと考へる如き人の意味する所はこれである。其他一般に衣食住の改良を文化生活の要諦とするが如き此考の外に出でない。我々は之を物質主義に於ける文化の意味といふことが出來やう。若し此樣な意味を文化の概念内容とすれば、それは從來文明(Civilization)といふ語を以て我々が意味した所と何等異る所はない。所謂物質文明即ち文化であつてハ唯古き内容を新しき語に盛るのみに過ぎないこととなる。近代の文明が中世の宗教的束縛を脫して人性の自由解放に其誕生を祝つたとき、『知は力なり』の標語を唱へて人知に依る自然の征服利用を新しき學藝の使命と認めたベイコンの精神は、即ち此意味に於ける文化の源泉といふべきであらう。併しながら自然科學の法則的知識を應用し、諸種の發明を按配して我々の物質生活を安易にすることは如何にして客觀的の價値を要求することが出來るか。假りに文化といふ概念の意味する所の内容が種々あり得るとしても、それは必ず普遍妥當的の價値を有するものでなければならぬことだけは否定することが出來ない。若し然らざれば之を以て我々の生活の目的とし、それを追求することを人生の指導となる主義として揭げることが意味を成さないからである。今右の如き所謂物質文明も文化の内容を成すことが出來るとするならば、それは何等かの點に於て普遍妥當性を要求し、客觀的の價値を有するものと認められ得るのでなければならぬ。而して之を可能ならしむる途は人間が本來勞少くして効多き生活方法を望むものなること、換言すれば苦痛を避けて快樂を求むることを其通性とするものなるを前提するより外に無いやうである。これは一見何等の疑念を容るべき餘地も無い程明白な眞理であつて、それにより所謂物質文明の客觀的價値を基礎附けするに足る如く思はれる。併しながら人性を此の如く苦痛煩勞を避けて快樂安易を求むるものとするのは、人間を單に自然といふ見地から見たる場合の設定である。此立場に於ては

人間もその利用する所のものと同じく自然の成員に外ならぬ。如何なる理由を以て自然の一部たる人間が自己と全く對等の關係に立つ自然の他の部分を利用する權利を有するか。宗教的の心情深きものにとつては凡ての被造物が兄弟の如くに思はれるのであらう。斯かる心情の薄きものにとつても尙且生ある者を自己の用に犧牲とすることは忍びざる所がある。況や心情を離れて論理の立場に立つとき、生物はもとより、如何なる自然をも、同じく自然の一成員としての人間が自己の爲めに利用することを權利附ける根據は到底發見せられない。民族の競爭に於て或は階級の鬪爭に於て、或民族なり或階級なりが他の民族或は階級を自己の利益の爲めに壓迫酷使することが許すべからざる不正義であるが如く、單に自然として見られたる人類が他の自然を自己の利益の爲めに犧牲にし、之を使役することも亦不正義でなければならぬ。これが不正義でないとして許される爲めには必ず其處に何等か別の理由が無ければならない。併し其樣な理由は人間を單に苦痛を避けて快樂を求める自然的生類とする立場から與へられるものではない。所謂物質文明を文化の內容とし、其客觀的價値を基礎附するに人間の自然的傾向を以てせんとする試は到底徒勞なることを免れない。固より此の如く言ふのは迂濶にも物質文明の價値を輕視して、それが眞正の文化に寄與する所無しといふ如きことを意味するのではない。唯之を以て文化の唯一眞正なる內容となし、又其價値を單に人間の自然的傾向の滿足に基かしめんとする主張を排せんと欲するのみである。

於此第二に文化の意味として考へられるのは、前の場合の如く我々の物質生活に對する自然の利用といふ限られたものでなく、廣く精神的物質的の兩面に亘りて我々の生活內容を豐富にし、心身の活動を阻害するものから之を解放して、自由に其要求を滿足せしむる內容の創造を文化とすることである。之を一般に生命主義の立場に於ける文化の意味といふことが出來やう。此立場に於ては第一の場合に意味せられた物質生活に對する自然の利用も、それが我々の生活の方法を安易にしその內容を豐富にする限り包含せられ、尙其上に我々の生活を拘束し停滯せしむる如き因襲制度を打破して、常に現在の要求に適應する合理的の生活方法を社會的制度に建立することが其內容を成す。今日文化生活と呼ばれて居るのは正に此の意味の文化を目的とし又內容とする生活を謂ふのであると思ふ。此意味に於ける文化は確に第

一の意味に於けるものよりも其包括する所廣く、且何程深い所のあることは爭はれない。殊に我々の心身の自由なる活動と、それに由る豐富なる内容の創造とを重んずるに於ては、第一の物質的生活に對する自然の利用がとかく受動的享業的の消極的方向に傾き、却つて人性の活潑なる發展を妨ぐる弊あると異り、積極的に生の展開を促進せんとする功あること明である。ベルグソンが實在を生の躍動と觀、その力の發展が緊張を失ひて弛緩するとき物質の世界現はれ、人間の理智は唯之を行動に由つて支配する爲めの手段たるのみ、生活の眞正なる意味は理智の外本能に依り、緊張せる生の流に身を投じて、所謂創造的進化を遂ぐることに由つて體驗せらるとし、リッケルトなどの名けて生命主義（Biologismus）と呼ぶ立場を主張したのは其獨創的なる直觀の分析と相俟つて、此樣な文化の解釋に哲學的基礎を供するものと云つてよい。ジエイムスの徹底的經驗論を背景とする實用主義も精神に於てベルグソンと相通ずるもの、而して今日デュウイが政治問題社會問題に對して下す所の評論も、一切の制度組織を社會の成員が凡て自由に其能力を發揮し、共活動を有効に營み得る爲めの手段と觀る所謂道德的民主々義（Moral democracy）の立場に立脚するのであつて、一切を生活々動の器具とする所謂器具說（Instrumentalism）なるものの現れに外ならない。現代の思想を支配する基調として生命の創造的活動を重んずる傾向の存在することは爭はれないことであり、文化を此活動の創造する内容の意味に解する文化生活、文化主義なるものが現代人の心に訴る所多き標語となるも怪しむに足らないことである。勿論此意味の文化主義なるものも徹底せる社會主義の人々から見るならば、ブルジョアの哲學であり、或は少くともブルジョアに由つて養はるゝ知識階級の哲學である、我々の問題は「如何に生きるか」でなくして先づ「如何にすれば生き得るか」である、生活内容の豐富を要求する前に生活其物の可能を要求しなければならぬ、斯かる文化主義を背景として唱へらるゝデモグラシーもブルヂョアのデモグラシーに過ぎないと非難せられるであらう。實際プロレタリヤにとつては哲學は無用の空理である、空論畢竟何するものぞといふ主張には否定すべからざる深刻の眞理がある。社會主義の忠實なる信奉者が哲學に對して懷く所の反感には我々の充分なる尊敬を以て對しなければならぬ或物が含まれて居ると思ふ。プロレタリヤにとつて無用だと思はれるのは此種の文化主義哲學に限るのではなく、如何なる哲學でも左樣であるといふ點

を除いても尙當面の文化主義、或はその目的とする文化生活がブルジョアの特有物であるといふ批評は事實上肯綮に當つて居る所があることを否定し難い。今日文化生活を說く人は衣食住から社會の習慣制度に至るまで、人間生活の自由なる創造的活動を促進することを目標として改造革新を主張するのであるが、併し其說は生活其物の維持をさへ脅かさるゝ無產階級を度外視して、現存の經濟組織の下に支配階級たる位置を占める有產階級のみの爲めに說かれるのであるかを猜せしめるものが多い。私自身ブルヂョア的文化生活の提唱には反感を懷くこと屢々である。併しながら翻つて考へると社會主義は唯手段としてのみ意味あるものである。過去の歷史を理解する場合にのみ重要なる說明の原理となる唯物史觀論を、自由なるべき人類生活の將來の進行に適用すれば、社會主義を主義として宣傳すること自身が自家撞着を含むといふ如きマルキシスムスの論理上の矛盾を度外視して、ともかく現在の資本主義的經濟組織に遍滿する社會的不正義を芟除することを其含む眞理內容として認むるも、社會主義的經濟組織の實現せらるる時代に主義としての社會主義が不用に歸することは疑ふべからざる所であらう。斯かる經濟上の公正の行はれる社會に於て人類の生活を指導する原理は何か外のものでなければならないことは明である。社會主義は唯此狀態を實現する爲めの手段としての指導原理たるに過ぎない。其故社會主義者も一步進んで其主義の目標とする經濟組織の下に於ける社會生活の指導原理如何を問題とするとき、單なる享樂主義が人類の生活を廢頹に陷らしむることを認める以上、自ら生活の自由創造的なる活動を終極の目的とするに至る。我々は事實社會主義者の言論の中に此事の說かれるのを見ることも一再でない。此點に於て第二の意味の文化主義が其本質上社會主義と矛盾するものでなく、却て之を補ふものとなることも出來るのを觀過してはならぬ。生の創造といふ標語は單なる物質生活の維持增進より一步を進めるとき、直ちに我々の視界に入り來るものである。眞に凡ての社會的不公正より解放せられたる第二の意味の文化生活は、ともかくも第一の意味のものよりも積極的に深き內容を有することは認めなければならぬ如くに思はれる。

併しながら生命の創造的活動增進といひ、其內容の發展といふ如き槪念は一見我々の心を惹くものであつて、其意味も明瞭に規定せられてある如くに思はれるものであるけれども、少しく深く考へるならば我々は種々の疑問に逢着せさ

るるを得ない。先づ生活の創造的內容增進といふも、已に述べた如く一切の社會的不公正より解放せられたるものたらんが爲めには、一人或は一階級の生活々動增進の爲めに他人或は他階級のそれが手段に供せられ犧牲に供せらるゝことの許されざるはもとよりのことであるから、其處には人と人或は階級と階級との宛も契約に由れる如き、制限し制限せらるゝ關係即ち法的狀態が成立しなければならぬ。(此點より考へて社會主義が現在の經濟組織の不公正を打破する指導原理たることを認めても、それは法的社會主義であり、從つて少くとも差當り國家社會主義でなければならぬと思ふ。)之に由り右の意味に於ける文化生活は法(Recht)と云ふ價値を普遍妥當的なる規範として承認し實現するものでなければならぬ。非法的なる文化生活なるものは全體から見て自己崩壞の禍源を藏するものである。然るに法は必ず其規範性拘束性の承認を含まなければならぬ。然らざれば法はその法たる實を發揮することは出來ぬ。然らば法の規範性拘束性を承認するといふことは如何なることを含意するか、カントは動機に拘りなく行爲が法則に一致することを合法性(Legalität)と呼んで之を自律的なる道德性(Moralitat)と區別したが、法を法として承認し之を遵守する意識には、已にカントが對象の性質に由つて規定せられたる意志の屬性とした所の他律ならぬ、理性自身が自己を規定するといふ意味の自律が備はらなければならぬ。法は單に他律的なる合法性としては成立しない。單なる合法性は實は法の精神を失へるもの、法は法を承認して之を遵守するといふ所に已に自律的なる實踐理性を含蓄しなければならぬ。即ち其限りカントの意味に於ける實踐的自由を要求するものであつて、其根柢には道德的意志がはたらくことを必要とする。於此生命の創造的活動を目的とする文化主義も、それが全體としての矛盾を含まざる爲めには、單に生命の創造的活動を增進するのでなく、實踐理性の合法的活動といふ限定の下に生活內容の發展を目的とするものでなければならぬ。次に此限定を暫く度外視して考へるも、生活內容の增進といふことはそれだけでは少くも概念上明確なる目的を意味することは出來ぬやうに思はれる。成程生の創造といふ如き語は我々の心に訴ふる所多く、曖昧ながら或種の意味內容を有する如くに思はれることは爭へない。併し論理的に反省すると、若し其內容の如何を問はず生の自由創造を目的とするのが文化主義であるならば、それは唯生の自由創造を妨ぐる障害を排除する爲めの消極的主張たるに止まり、此消極的條件の滿たされた曉に

は無用に歸することを免れないであらう。何となれば事實上我々の生活々動が內容の創造である以上、其內容の如何に價値の別を認めない限り、其の活動の障害を排除することこそ主義として揭げる値打があれ、積極的に生活々動を指導することは此主義の能くする所ではないからである。如何なる場合にも事實上しかあるものを規範の內容とすることは意味を成さない。右の如き文化主義は決して積極的指導原理たることは出來ないといはなければならぬ。實は生活內容の創造そのものが價値あるのではなくて、其自身有價値なる內容の創造が價値あるのである。單なる生活の增進でなくして、其自身妥當する價値を實現する如き生活の增進が目的なのでなければならぬ。唯自由に生きることが問題なのではなく、如何なる目的に向つて自由に生るかが問題なのである。既に第二義の文化主義が人生に對する積極的なる指導原理として揭げられるとき、實は其自身價値ある內容の創造といふ目的が暗に含蓄せられて居るのでなければならぬ。於此文化生活なるものは單に生活內容の創造を目的とする生活を謂ふのでなく、其自身に價値ある內容の創造を目的とする生活を謂ふのでなければならぬといふことになる。然るに生活內容として其自身價値あるものは千差萬別である。眞正に其自身の價値を有する內容の創造は個性的であることを必要とする。其故其自身に價値を有する內容の創造を人生の目的として文化主義を唱へるとき、其主義に於て云爲することの出來るのは個別的なる內容に關してでなくして、普遍的なる形式に就いてでなければならぬ。既に價値の形式を文化主義の目標とすれば、如何に個別的なる內容を以て此の價値形式を實現する人生の過程を追ふも、其實現に終局はない。常に現實なる生活過程に對して窮まる所なき價値形式充實の當爲が對立する。即ち其自身に有價値なる內容の實現すべき形式は理念として永遠に現實を指導するものとなる。是れ第三の意味に於ける文化主義の概念內容であつて、それは理想主義の根柢に立つものである。其考ふる文化の意味は批判主義的といふことが出來やう。カントの精神を徹底して現實と價値、存在と當爲とを峻別し、前者を後者に由つて根據附けんとするリッケルトの如き人が第二の意味の文化主義を生命主義として排し、それが人生の指導原理たるに足らざることを指摘して、之に代へるに理想主義を以てせんとする論理には何人も正當に反對するを得ざる眞理がある。文化主義はそれが主義としての意義を全うせんが爲めに少くとも批判主義的理想主義的とならなければならぬ。我

國に於て始めて文化主義を提唱せられた人々の所謂文化主義は、實に此様なカントの先驗哲學に立脚する批判主義的文化主義であつたのである。

旣に述べた如く文化主義を主義として主張する以上は、文化が何人に由つても當に希求せらるべき有價値内容なることを前提する。文化にとつては普遍妥當的價値の體現といふことが其本質を成す。然るに普遍妥當的なる價値は唯先驗的なる形式に依屬するのでなければならぬ。何となれば若し内容を含む現實的なる對象の客觀的性質に着目し、それが同じく現實的なる人間精神との因果法則的交渉をなす所に價値の普遍性が成立するものと考へるならば、その因果法則的交渉の認識が眞理として普遍妥當的の價値を要求し得る爲めに、認識の先驗的價値形式を豫想するといふ循環論に陷ることとなり、又若し形式内容未分の體驗が其自身體驗であるの故を以て普遍的に妥當する價値を具有すると考へるならば、全然論理的の根據なき獨斷的假定に立つこととなるばかりでなく、眞の意味に於て價値と反價値との對立を認めことが出來なくなるからである。普遍妥當的なる價値は先驗的なる價値形式に由つてのみ成立する。斯く考へて第三義に於ける批判主義的文化主義を採る人は文化の諸領域に對し夫々固有の形式的價値原理即ち所謂アプリオリを立て、此形式と結合し、之に由つて合理化せられたる内容が價値を實現するものであるとするのである。其所謂文化主義は斯かる價値實現を人生の目的と主張するのであつて、其實現の過程が文化生活である。而して文化生活は各個人各民族が夫々の時に於て個別的なる内容を以て形式上普遍の理想を實現する協同生活の時間的連續を成すに由り、其窮極する所は即ち人類の歴史を形造る。歴史は理想主義の立場に於ける文化の實現過程としてのみ意味がある。同時に又文化は形式上永久に充たさるゝことなき價値實現の過程として、歴史に於てより外現れることは出來ぬ。其實現すべき價値、從つて之に相應する文化の領域も唯歴史に於て之を知ることが出來るのであつて、如何なる價値及び之に相應する文化領域があり得るか乃至ある可きかは、一定の根本原理から之を演繹的に導き出すことが出來るものでない。此處に文化と歴史との極めて密接なる關係がある。哲學に於て明にせられる價値の體系は、將來に於ける文化の歴史的發展に由つて現れ得べき諸々の價値に餘地を殘す所の開放體系 (offenes System) であつて、其體系としての完結性は唯純粹に形式的

なる立場より見たる價値の種別と序次とにのみ成立する。即ち論理上相互拒斥の關係或は正反合の關係に立つ如く價値を形式的に排列して、其排列が內容上如何なる價値の出現するも、之に動かさるゝことなき超歷史的の圖式を形造ることに由り價値の體系が成立すると認められるのである。今之をリッケルトの近著『哲學體系』第一部に據つて實際に例示するならば、氏は先づ文化に於て實現せらるべき妥當價値をその實現の文化財(Kulturguter)の性質に從つて人格的と非人格的、或は人格的と物件的とに分ち、而して之に對する我々の態度は前者の場合に活動(Aktivitat)であり、後者の場合に觀想(Kontemplation)であるとした。人格を對象として活動に由り實現せられたる價値形象に於ては、形式は內容を浸徹し、兩者は一つに融合せられる。之に反し物件を對象として觀相的に實現せられる價値形象にあつては、何處迄も內容が形式に對して獨立性を維持し、形式は內容を單に包圍するに止まる。尙人格は必然『汝』に對する『我』としてのみ其本質を發揮するのであるから、人格に於て實現せられる價値は社會的であり、之に反し單に物件に於て觀相的に實現せられる價値は其自身に於ては非社會的である。而して社會的なる活動的人格の價値は、何處迄も、個性的なる人格に於て實現せられる點に於て多元的であり、觀想的に形式が內容を包圍することに由り實現せられる物件的價値は、如何なる內容も觀想を容さないものはないといふ意味に於て一元的であるといはれる。斯くて先づ價値は一方人格的活動的浸徹形式的多元的社會的なるものと、他方物件的觀想的包圍形式的一元的非社會的なるものとに分たれる。

次にリッケルトは進んで此兩種の各に於てそれに屬する價値の間に序次を立てやうとした。それに根據とせられる原理は完結(一層精しくは完全終結Voll-Endung)といふことである。如何なる哲學もそれが哲學なる以上、萬有全體の學として『完結の哲學』(Philosophie der Voll-Endung)でなければならない。然るに現實は其本性上完然終結を容れざる無際限のものである。其れ故完結といふのは現實に見出される概念でなくして、唯價値形式としての理念に止まる。理念とは部分的なる現實內容に於ては實際に成立する關係が、現實の終結することなき全體に由つて充たされんことを求めるとき、其充實の到達すべからざる目標として極限となつたものを謂ふのである。今此完結の理念に照し合

はせて、價値實現の主體に於ける諸種の價値に序次を附けやうとするのがリッケルトの旨意である。即ち氏は今述べた兩種の價値に就き第一、現實の內容全體を價値形式に由り透徹或は包圍せんとして終結に達する能はざる無終結的全體性の段階、第二、無際限の質料から其有限なる部分を抽き出し、此限られたる內容に於て完結的に價値の實現をなす完結的特殊部分性の段階、第三、前兩者の綜合として全體に於ける價値の完結的實現に相當する完結的全體性の段階を區別した。第一の段階は完結を將來に期するものであるから未來價値と名けられ、第二の段階は現在に於て完結して居るものであるから現在價値といはれ、而して第三の段階は有限なる現實主體の、現在はもとより將來に對しても、其感性的地上的生活に於ては期望すること能はざる超時間的超越的存在に於ける價値であるから永久價値と稱せられる。尙リッケルトは第一第二の兩段階を此第三の超越的存在に於て綜合するのでなく、內在的存在に於て結合する中間範圍を考へて、之を第四段階として居る。此樣にして二種別四階段、即ち都合八級の價値、從つて之に相應する文化領域が形式的に規定組織せられ、而してそれは全く論理的の對立乃至正反合の關係に從つて形式的の統一完結を保持することに由り、內容上開放的なる體系を形成すると認められる。その體系を內容的に充實する價値は、全く歷史的に現實化せられた文化財に依據して發見排列せられる外無いのであつて、リッケルトは今日迄に實現せられつゝある價値を上の八級に次の如く配當した。即ち第一物件的觀想的非社會的種別中の無終結的全體性の段階に認識の價値眞を、第二、同種別中の完結的特殊部分性の段階に藝術の價値美を、第三、同種別中の完結的全體性の段階に神秘的汎神論的宗教の價値たる非人格的聖を配し、次に第四、人格的活動的社會的種別中、その無終結的全體性の段階に道德の價値善を、第五、その完結的特殊部分性の段階に人格の愛に於ける自足的生活の價値幸福を、第六、その完結的全體性の段階に人格神論的宗敎の價値たる人格的聖を配したのである。而して最後に內在的中間範圍に對し、第七、人格的活動的社會的方面に於ては男女の性愛に實現せられる價値が、第八、物件的觀想的非社會的方面に於ては哲學體系に實現せられる價値が對應するとして居る。文化は此等の其自身妥當する價値を實現する內容の總括に外ならない。

今述べたリッケルトの說はカントの立場を徹底して、文化を何人に由つても承認せらるべき普遍妥當の要求を有する

價値實現の内容と考へ、その相異る種々の領域に應じて、現實に對する關係の如何に拘はらず其自身に於て妥當する超越的の夫々特有なる價値形式を對應せしめ、而して之を主觀の作用に内在する意味の理解といふ立場から組織統一したものである。惟ふに先驗形式主義としてのカントの批判論的立脚地から文化の概念を規定するものとしては、氏の説は論理の精緻と斉合とに於て代表的なるものと云つてよからう。併しながら此立場に依れば文化を普遍妥當的なる價値實現の内容として基礎附けするものは形式的なる價値概念であつて、それは唯現實なる内容の要求する意味から、遡つて之に根據を與へる爲めに欠く能はざる先驗的の條件として設定せらるゝものたるに過ぎない。之に關して與へられる規定も右の價値體系組織の原理が示す如く全然外面的なる論理的の規定であつて、それを體系に統一するといふも唯論理的に關係を附するに止まり、夫々の價値を本質上理解して、之を内面的に統一するものではない。例へば藝術の價値美を物件的觀想的非社會的なる完結的特殊部分性の階級に屬するものとし、又道徳の價値善を人格的活動的社會的なる無終結的全體性の階級に屬する價値と規定するも、それに由つて我々は美や善の本質を理解し、其内面的關係を知ることは出來ぬ。文化は唯此樣な立場から、形式的に組織せられた其自身妥當する價値の實現内容といふだけで其意味を明にせらるゝものではない。唯前述の第一第二の意味に附隨した困難を論理上脱却するだけで、積極的に其概念内容を示すに至らない。併し眞に文化の意味を理解する爲めには論理上之を基礎附けする妥當價値の本質を明にして、其内面的相互關係を統一的に把握しなければならぬ。此處に第三の批判主義的先驗形式的意味から尙第四の意味に進まなければならぬ要求がある。併しながら翻つて考へると此の如き要求はカントに由つて其學的認識としての可能が否定せられ、今日リツケルトの如き人が極力哲學の範圍から排斥しやうとして居る形而上學を復興するものではないか。實際形而上學なしに此要求は滿たされないのであつて、而も形而上學は認識の立場でなく唯信仰の立場に於てのみ可能であるとするならば、それは畢竟客觀的妥當性なき獨斷的一家言に止まらなければならないではないか。嚴密に客觀的妥當性を要求し得る文化の意味は右の如き先驗形式的規定以上に出ることが出來ないものではあるまいか。實に此樣な異論乃至疑問は批判主義を採る人々の一致して提出する所であらう。併し私は形而上學が哲學の冠冕をなすものであつて、世界觀

の學としての哲學が何等かの形に於ける形而上學を欠くことの出來ぬものなること、而して文化の哲學的理解も必然に形而上學を要求するものなることを信ずる。文化の眞の理解は形而上學の基礎に於て始めて可能となると考へる所から、私は敢て第四の文化の意味に形而上學的意味の名を命じやうと思ふ。固より形而上學には信といふ要素を含むこと否定出來ない。併し若し一切の信を排するならば所謂批判哲學と雖も果して可能であるか疑はしい。リッケルトも明に認めた如く、理論的價値は之を否定することに由り自家撞着に陷るに由つて間接に其妥當を證することが出來るけれども、一切の非理論的價値は到底此様な理論的證明を容れるものでない。其等の價値の妥當は唯之を信ずる外無いのであつて、若しそれに相應する現實の內容に含まるゝ意味を認めないものがあるならば、到底論理を以て之を說服することは出來ないのである。而して極端にいふならば普通に其妥當が間接論證に由り確立せられると考へられて居る理論價値さへ、所謂「認識論の循環論」なる概念が示す如く、それは論理的價値の妥當を豫想するのであつて、之を信ぜざる絶對の懐疑論者を說破することは出來ないのである。一切の知は信の根據に立つ。批判哲學と雖も全く信を離れて成立するものではない。形而上學が信の要素を含むといふも直に其理由を以て認識たることを拒むことは許されない。次に批判哲學も若し『認識論の二途』として區別せられる先驗論理學と先驗心理學との中前者のみを採る如き立場を徹底して凡て認識のみならず一切の文化領域につき唯超越的に妥當する價値形式の理解を其內容とするに止まるならば、假令其內容が如何に貧弱に終らなければならないとしても論理の一貫を誇ることが出來るけれども、實際に行はれる如く夫々の價値に對する主觀の態度作用を考慮し、それ等の作用が同一主觀に統一せられる體驗の領域を其欠く能はざる出發點とする以上は、到底其限り形而上學的といはれることを免れない。リッケルトの如きも斯かる領域を認め、價値と現實との分裂以前の融合として、普通に現實の彼岸に思念せられる形而上域と區別する爲め之を形而前域と稱して居る。唯氏は飽く迄此領域を朦朧混沌と考へ、哲學は明確なる概念を以て之を分別し論理的に組織するもの、主觀の作用に內在する意味の理解の如きも、分析に由つて成立した概念を以て迂回に由り此未分の領域を概念化して出來るものと見做して居る。併し已に此様な分析の源となる未分の領域に概念的分別をこそ含まされ、其基となる內面的關係を蔵する以上直ちに之を以

て曖昧混沌とすることは出來ぬ。それは未だ概念的に固定分別せられざる内面的動的統一を成するものでなければならない。概念に由り之を理解するとは此原體驗の内面的統一に無限に接近することである。凡て認識の前に與へられたものは、それの解くべき問題を課し進行の目標を示すものである。先に進むとは基に還ることでなければならない。所謂形而前棧の理解は混沌ならぬ内面的統一に接近することである。然るにリッケルトは此様な體驗を唯出發點に於て認めるのみで、それを分析した要素に直に論理の範疇を適用し、之に由つて意味理解の立場から價値の體系を造らうとした。其結果が外面的形式的の規定に止まり、内面的本質に徹しないのは當然の事である。氏の立てた價値の種別序次が一見極めて嚴密なる論理の整齊を具へるに拘らず、少しく價値の本質に省察を加ふるとき多くの疑問を起させるのも怪しむに足りない。例へば氏は價値を人格的活動的浸徹形式的なるものと物件的觀想的包圍形式的なるものとに分つたが、果して純粹に物件的觀想的包圍形式的なる價値があるであらうか。價値は常に何等かの意味に於て人格的であり活動的であり浸徹形式的であることを要しはしないか。例へば藝術の觀照わけても創作に於ける美の價値の如き斯かる規定に由つて充分に理解せられるか。又認識の場合に於ては如何にも物件的觀想的包圍形式的といふ如き規定が當嵌まる如く思はれるけれども、併し仔細に考へると認識の客觀となるものは主觀が其原理に從ひ思惟活動に由つて形式的に生産したものであつて、決して與へられたる内容を形式に由つて包み、何處迄も自己に對立するものとして之を觀想するといふ如き性質のものではない。リッケルトよりも遙に深い解釋をカントの認識論に對して下し、之を對象生産の論理に發展せしめたコーエンの思想などに依るならば、リッケルトの規定は到底其もとの意味に於て維持せられるとは出來ぬ。實は氏のなした價値の二種別は單に對象構成の作用に實現せられる價値と、具體的なる人格の作用統一に於て實現せられる價値との對立に外ならない。前者は抽象的であると同時に其構成作用に規範となる其自身妥當する意味形象が存立し、之れに反して後者に於ては自由なる作用の具體的結合のみが價値を荷ふ所から、氏の立てた如き區別も一應外面的には現れるのである。併し眞に價値の本質を理解し、其内面的關係を明にするとは斯かる規定の能くせしむる所でない。氏は意味の内在といふことを說くに當つても、内容と離れ同時に作用の内面的具體的結合としての人格から抽離して、單な

る作用に意味の內在するかの如き說方をして居るが、內容の自らなる發展を離れて作用の意味なるものは成立することが出來ず、又人格の統一を失つて現實的に作用が意味を內在せしめることは出來ない。氏が所謂形而前學（Prophysik）の體驗段階を哲學の出發點としながら、其內面的本質に徹することを試みずして、外面的論理的形式的規定を之に加へることに哲學の職能を認めやうとしたことは私の極めて不滿足に思ふ所である。氏が哲學の中心に置かうとする意味理解といふ概念の如き、深く考へると果して氏のやうな立場で出來るものかどうか疑無きを得ない。

併しながら翻つて考へると文化を普遍妥當的價値實現の內容の總括として、其豫想する超越的價値をリッケルトの如く論理的形式的に規定することに滿足せず、其本質を理解し相互の內面的關係を明にしやうと企圖する爲めに、學としての哲學の立場を去り形而上學的信仰の立場に移るのは獨斷主義の復興を意味し、其立場から價値の體系化を試みることは、宛もヘーゲル哲學に於ける如く哲學の進步を現在に止めて將來の進步を無意味に歸せしめる恐が無いかといふ異論は極めて重大なるものである。私が敢て第四の文化の意味を形而上學的意味と稱へる以上、此異論に答へて私の主張が單なる臆見に止まらず哲學的の根據を有することを示さなければならぬ。私は此或意味に於て古風なる思想を今完全に確立することが出來るとは思はないが、或程度の基礎附けをするとは必ずしも不可能ではないと考へる。已にリッケルトが明に說いた如く今日價値の相互關係或は段階を說く以上、ヘーゲルの困難に再び陷らない爲めに價値の開放體系の立場に止まらなければならないとは何人も異論の無い所であらう。然らば開放體系の立場に止まりつゝ內容上文化の本質に就て窮極的の規定を與へることが如何にして出來るか。若し歷史的制約の下に現れて居る文化の領域に對應する價値を考へて、其相互關係を現在其等の價値の有する本質の上から段階的に規定し、之を以て文化の單に形式的ならざる規定をなさうとするならば、それは全く暫定的のものたるに止まり哲學的の根據を要求することは出來ないであらう。將來我々は飽迄文化價値の體系が開放的でなければならぬことを認め、現在存する價値が歷史的の制約に依屬すること、如何なる價値が現れるかは豫測を容れざるものなることを承認しなければならぬ。併しながら若し價値が凡て此樣なものであるならば、暫定的でなしに窮極的に價値を考へ、之を以て本質內面的に文化を規定することは全然出來ないこと

になる。果して左様であらうか。私の思ふ所は之と異る點がある。成程個々特殊の價値は歴史的であつて將來を豫測し得ざるものであらう。併し普通に他の價値と並んで特殊的なる價値と思はれて居るものの中に、妥當的價値實現の本質に關係する所の價値がある。此樣な價値は假令他の價値の總體が如何に歴史的に制約せられ將來如何なる新しきものを附け加へるにせよ、一般に妥當的なる價値の實現、換言すれば文化が過程として存續する以上、如何なる場合にも生滅變化に累せらるゝことなく、文化そのものの必要條件として永久不變なものでなければならぬ。他の凡ての特殊的價値が如何にその總體の統一を變ずるも、此樣な價値は凡てそれ等を文化價値たらしむる爲めの豫想乃至根據として欠く能はざる本質的の意義を有する。私は此樣なものとして特に道德的價値と宗教的價値とを考へることが出來ると思ふ。此二つは他の價値の如く特殊の主觀作用に關聯して、他と對立するものとして存立する價値ではない。如何なる妥當價値でもそれが文化に實現せられんとするとき、必然に之を豫想し又根據としなければならぬ價値である。他の價値の如く存するも存せざるも文化そのものの成立を本質的に動かすことなきものでなく、其自身妥當する價値の實現としての文化の成立に對して欠く能はざるものである。私は第四の意味の眞正の文化は此二つの價値を中心として成立するもの、之を唯他の文化價値と同列に考へては文化の形式的規定以上に出ることとは出來ぬと信ずる。或は此の如きは今日普通に解せられて居る前述第一以下の文化の意味と極めて遠き解釋であつて、甚だ固陋なる思想と思はれるかも知れない。又道德的と宗教的と二つを並べて兩者を如何なる關係に置くかといふ疑問も提出せられるであらう。凡て此等の疑を解く爲めには道德的價値及び宗教的價値として私の解する所のものの本質を出來るだけ明にすることが必要である。

リッケルトは如何なる價値でもそれが本來其自身に於て妥當する價値として我々の主觀を超越し、當爲として我々に對立して現實に於けるその實現を要求する場合に、其當爲を承認して之を實現することを一般に道德と稱するのが過廣に失することを指摘し、前述の如く人格が自律的自由を以て意志活動に由り協同生活に於て自己の義務を遂行することとのみを道德と稱した。併し凡ての價値實現は既に述べた如く具體的には皆人格に屬するものであり、人格の意志活動を離れて價値の實現といふことはない。而して其價値が其自身妥當する所であり、普遍妥當性を要求する價値である

以上は、假令當爲と意志との距離が事實上意識せられると否とに拘らず、一方に於ては當爲と他方に於ては之を他からの命令でなく自己が自己に與へる命令として自律的自由に其活動に由り實現せんとする意志とが對立するとは、リッケルト自身認識に關して說く所からも明かである。此場合所謂行爲といふ如きものは少しく深く意志活動の本質を考へるならば所謂道德的行爲の場合に限らず認識に於ても藝術の制作に於ても同樣に存するもの、一般に價値の實現には必ず含まれるものなることを觀取するに難くないと思ふ。又道德が社會的であつて協同生活に於て始めて實現せられるといふことも、具體的なる人格が自覺ある主體となる爲めには『汝』に對する『我』といふ協同關係に入らなければならないから正當なる規定といふべきものであつて、此處に抽象的なる認識や藝術の主體と異る道德的主體の特色があるのであるけれども、道德に於ても自己に對する義務があり、又認識や藝術でも之を文化の內容として具體的にその主體たる人格を考へるときは社會的となる。而して道德に於て義務を其中心とするも、元來義務といふのは正當には形式概念であるから、其內容となるのは凡ての他の價値ある內容が主體たる人格に相對的に一義的なる秩序をなして實現せられることより外にはあり得ない。其故道德の價値は他の價値と同列に對立する一つの特殊なる價値ではなくして、凡ての價値が一つの具體的なる人格に於て實現せられる場合に其人格の個性に應じて個別的なる內容を取る高次の價値である。同時に他の價値を離れては道德の內容は無に歸するのであつて、義務は空虛なる形式となることを免れない。カントや之を繼承するリッケルトなどの道德に對する考が抽象的形式的たる嫌を免れないのも此方面に少くとも說き方の不備がある爲めではなからうか。或は人格に對する尊敬が義務の內容となるといふも、人格は自律的自由の立法者なるが故に尊敬を要求するのであるから、その自から課する道德法或は義務の內容として自己の個性に應ずる他の價値の實現といふことを豫想しなければ依然として空虛に陷ることを免れない。而して人格の個性に應じて道德的義務の內容となる價値もリッケルトの考へた樣な其自身妥當し、他に依屬せずして價値性を要求するもののみでなく、此の如き價値、リップスの語を借りて理想價値ともいふべきものの實現に對して、人間の本質上手段として欠くべからざる價値卽ちリップスの所謂利用價値に屬するものと雖も、それが人間の本質上に根據を有する限り普遍妥當的價値と

じて義務の內容となることを認めなければならぬ。今日社會問題、勞働問題に關聯して極めて重要なる意味を有する經濟生活の價値の如き斯かる普遍妥當的なる利用價値に屬する。此等の價値はそれが利用價値として他の理想價値の手段たる限り價値を有するものたる以上、文化の全體に對して後者よりも從屬的の位置を占るものなることは否定出來ない。經濟問題の解決を以て文化の問題を完全に解決し得となす如き思はざるの甚だしきものである。併し同時にそれが手段として根本的に重要の意味を有するものであり、斯かる普遍妥當的利用價値の實現に從事する人格或は其階級も文化の實現に對して欠く能はざる獨得の役前を演ずるもの、而して其主觀的態度が當爲と意志との一致といふ形式を有する限り、理想價値の實現に從事する人格或は其階級と全然同一の道德的尊敬を要求し得るものなることを認めなければならぬ。然らざれば所謂道德的民主々義は失はれて一種の貴族主義となる。前に述べた如く、經濟問題社會問題を以て文化に關する問題の全部とする立場にも、所謂生活內容の豐富を以て文化の眞諦とするブルジョア的立場にも私が反對しなければならなかつた理由は此點からも明であらうと思ふ。眞の文化は其自身價値ある普遍的理想價値から、之に對する手段として人間の本性上普遍妥當的と認めなければならぬ利用價値に至るまで、各人格が自己の個性に應じて義務の自覺の下に自律的に創造的活動をなす、その普遍妥當的價値實現の內容全體を謂ふのでなければならぬ。其場合に人格活動の目的として如何なる特殊價値が存立するかは歷史に於て知られるのであつて、之を何等かの原理から十全的に演繹することは出來ない。又其間に立てられる關係も內容上の規定は一定の原理から導くことは出來ぬ。併しリッケルトなどの顧慮しなかつた所謂利用價値も理想價値と同樣に人間の本性に根據を有する限り普遍妥當的の文化價値と認めなければならぬ。本來認識の理論價値以外凡ての非理論的價値は假令それが理想價値に屬するも、其必然的存立妥當を論證することは出來ないのであつて、唯歷史的に有意味なる文化の成立から之を前提しなければならないのであるから、利用價値と雖もそれが文化に體現せられ、又人間の本性上必然的なることが要求せられるならば、之を普遍妥當的文化價値と認めるに妨無い。唯何處迄も文化といふ立場からは其自身に妥當する理想價値に對して手段たる利用價値は從屬的の位置に立たなければならぬ。その文化價値たる資格は前者に由つて賦與せられるものたることを忘れることは出來ない。其自

身妥當する理想價値の手段としてのみ意味ある物質生活の價値を以て文化の全内容とする如き思想の維持すべからざることは明である。併し同時にそれにも拘らず道德の立場からは、如何なる文化價値の實現に從事する者も、又天分素質の如何に由り其實現の程度に千差萬別あるも、その文化に寄與せんとする本分の自覺、それに基く心情の善良なることに由つて人格としては道德上同等の價値を有するといはなければならぬ。斯かる道德的人格の夫々の本分を内容とする活動の協同體が文化社會に外ならない。此社會に於てのみ所謂道德的民主々義が實現せられる。文化の原動力たるものは夫々の個性に從ひ本分と定めらるゝ所を以て普遍妥當的價値の實現に貢獻し、窮極に於て理念に止まる所の人類社會に對し協同の責務を果たさんとする道義心でなければならぬ。而して其過程に於て寧ろ個人や階級の夫々自己の個性に應ずる寄與をなす如く、民族國家が其國民性の發揮伸展を以て却て人類社會の文化建設に貢獻し得るもの、これが民族國家の本分なることも疑を容れることが出來ぬ。文化の要求する價値の普遍妥當性から内容の無差別平等を結論するのは極めて普通にして而も重大なる過誤であると思ふ。今日唱へられる文化主義の主張が一方人格の個性を重視しながら、直に人類主義の一面に馳せて、他方に民族性の價値を無視し國家の重大なる意義を忘れることの屢々なるを見るは私の遺憾に感ずる所である。

右述べた如く道德は文化に於て實現せられんことを求める彼此の特殊的價値の如何に拘らず、凡そ文化が普遍妥當的價値の實現を意味する以上、文化そのものの本性上之を貫通する普遍的高次的の價値領域であるとしても、文化の本性上豫想せられる所の普遍的高次的價値領域は單に道德のみではない。右の如き意味に於ける道德は必然その根據として宗教を要求するものであつて、文化は道德の外に宗教を其基柢とすることに由つて始めて其必要條件を滿たすことが出來るのである。抑も道德を形式的一般的に規定すれば已に述べた如く本分の自覺の下に義務を自律的自由に遂行すること、即ち約言すれば當爲と意志との一致といふことが出來る。併しながら我々は果して常に此當爲と意志との一致を實現するものであるか。否、我々は使徒パウロの歎きの如く、わが好しとする善を行はずしてわが憎む所の惡を行ふものである。明に義務の何たるかを知りながら尙慾念にほだされて邪惡に陷るものである。誰か眞に嚴肅に生きるものにし

て、道徳的生活に於ける義務と傾向、當爲と自然、靈と肉との矛盾葛藤に惱まざるものがあらう。まことに道徳的生活は二元葛藤の生活である。血と涙との戰の生活である。爲すべき所を爲し能ふ自由は道徳の要請であつて之を否定することは出來ないけれども、同時にそれは實際上非常に多様なる段階を有するものであつて、其完成は與へられたるものでなく課せられたるものであると考へなければならぬ。而も我々にとりて道徳の假現ならざること、即ち本分の自覺の下に義務を遂行して文化を建設せんとする努力奮闘の徒爾ならず、必ず其完成の理想の實現が約束せられ居るものなることを信ずるは人生を有意味ならしむる爲めに欠くべからざる制約である。此信仰がなければ生きるといふとは全く意味を失はなければならぬ。此様な一方に於ては自己の無力、不自由、罪深さの意識と他方には當にあるべき一切のものの本來的なる實現に對する信仰とが如何にして結び付き得るか。此一見理論的には兩立せざる二つのものの結合こそ宗教核心を成すものであつて、實に否定すべからざる人間内奥の體驗に屬するものである。此現實の世界に於てはたらくは我々の意志は常に不善罪惡のほだしに苦しめられ、僅に時あつて幸にも葛藤を切拔けて我爲すべき善を爲し得るに過ぎないけれども、而も善の完全なる勝利、價値による反價値の完き克服は超越的絶對者に於て超時間的に無始無終に本來實現せられ居るもの、此絶對者の時間的相對的現實界に於ける示現こそ我々の價値實現に由る文化の建設に外ならず、實は我々の價値實現といふも絶對者を離れた我々の自力に依るものでなく絶對者そのものの力に依るのであつて、同時に我々の跪きに跪く道徳的努力にも拘らず沈淪する罪惡の惱みも絶對者に於ては淨化せられて居るといふ信仰が宗教の要諦を成すといふべきであらう。此信仰に由つて絶對者に冥合するとき聖と稱せられる價値が成立する。聖はヴインデルバントなどの明に指摘した通り他の彼此別離とせられる特殊の價値の外に之と並立する價値でなく、凡て文化の豫想となる普遍妥當的價値が超越的絶對者に結合せられるとき其等の價値の獲得する普遍的高次的の價値に外ならない。而して道徳を嚢に述べた如くに解するとき、その價値善は明に宗教の價値聖に於て完成せられるといふことが出來る。宗教は道徳の完成であり、それに保證を與へる根據である。否加之、道徳は前述の如く凡ての普遍妥當的價値の實現に對する人格の態度に成立し、而して聖は如何なる普遍妥當的價値に由つても獲得せられる高次の價値であるから、聖そのも

のが道德の義務內容となる筈であつて、宗教こそ道德の內容を終極的に形成するものといはねばならぬ。此事は人格の協同關係に於て最も明に示されると思ふ。宗教を離れて單に道德に於ては人格が尊敬の對象となるのは唯自律的立法をなす自由の主體たる限りに於てである。然るに自由は寧ろ與へられたものでなく課せられたものなると已述の如く、我々人間は不自由の罪惡狀態に沈淪するものであるとするならば、單に人格の尊敬といふ事は人間の協同生活に決して充分なる相愛平和の狀態を齎すに足るものでない。然るに宗教に於て自らの無力罪障を深く意識し、而もそれが超越的絕對者に於ては淨化せられ救濟せられることを體驗する者は、いかで自らの功を誇り他人の罪を咎め責任を鳴らして、人格の尊敬に値すると否とを云爲することが出來やう。唯無力なる有限者の相互の同情、超越的絕對者の部分的顯現としての同胞の愛に相擁して一つの融合を遂げることが要求せられるばかりではないか。宗教を離れた道德は所謂パリサイ主義の偏狹に陷る。それは一種のエゴイズムであるともいはれる。道德は宗教に由つて始め根據と完成と高揚とを得ることが出來る。而して私は道德と宗教との中間に昔のプロテイノスの所謂叡智的美（intelligible Schönheit）といふ意味に於ける人格的美の領域を考へることが出來ると思ふ。道德的善は二元葛藤の世界に於ける價値であつて、それにはリッケルトの所謂無終結的全體性の規定が當嵌まる。之に反し宗教の價値聖は本來的價値實現の完全絕對者に於ける價値であつて、リッケルトも之を完結的全體性の規定に配した。併し我々有限者に於ても極めて稀に部分的の當爲と意志との本來的融合を體驗することが無いとはいはれぬ。所謂欲する所に從つて則を踰ゆることなき聖者に近づけば近づく程此體驗が多いのであらう。併し有限なる人間である間、換言すれば宗教的の無限絕對者でない限り全體的の聖に達することは出來ぬ。唯部分的に道德法と意志との本來的一致を體驗し得るのみである。これが人格的美といふべきもので、恰もリッケルトの完結的部分性の規定に當るものである。それが道德と宗教との中間に過渡の段階をなす所から、特に獨立した文化の領域を形造らないのも自然に思はれる。善美聖は右の如く解するとき一貫した段階を成すものであつて、而もリッケルトの考へた如く單に外面的形式的圖式の內容的實例たるに止まるものでなく、文化を普遍妥當的價値實現の內容全體と考へるとき之に對し本質的の關係を有し、彼此の特殊價値の歷史的實現の制約を離れて必然的に要

求せられる高次の價値である。文化とは實に此三段の價値體驗を含む處の內容でなければならぬ。殊に其完成が宗教的體驗に存する以上、有限なる小我を沒して絕對者の內に甦ることを求めるものである。自然も此立場に於ては單に利用せられ或は克服せらるべく人生に對立するものでなくして新なる意味に攝取せられる內容となる。私が名けて第四の形而上學的意味に於ける文化としたものは此の如きものでなければならぬ。之に先だつ第一第二第三の文化の意味も其內に止揚せられて居ることは以上の論述で大體了解せられることと思ふ。私は此最後の意味に於てのみ文化が人生に意義を與へ、又之を指導する主義、即ち所謂文化主義なるものの內容となり得るのであると考へる。一言に約するならば文化の問題は畢竟靈の問題に歸するといはなければならぬ。（十一、一、十四）

アダム・スミスと佛國學者

高橋誠一郎

一

デュポン・ド・ヌムール（Pierre Samuel du Pont de Nemours）はフィジオクラート學派の發生と隆興と而して其の末運とを具さに睹た。彼れは嫉妬の眼を以て、アダム・スミスの「國富論」が一千七百七十六年を以て出版せられてから、經濟學界の諸遊星が次第に此の太陽に向つて引かれつゝあるのを眺めた。殊に彼れは大チュルゴオ（Anne Robert Jacques Turgot）の知遇を深く感じつゝあるものである。彼れは曾つて「國富論」に就いて談つて曰く「此の部厚なる四折判兩卷に收められたる尊重す可きも、而も冗長なる著作中に在つて、眞理と看做す可き總べてのものはチュルゴオの Réflexions sur la Formation et la Distribution des Richesses 中に於て看出さる可く、アダム・スミスによつて附加せられたる總べてのものは、敢て誤謬とは云はざるも、而も不正確である」と。(G. Schelle, Du Pont de Nemours et l'école physiocratique, 1888. p. 159.)。後年に至つて彼れは斯くの如き失言を悔ひ、彼れが十分にスミスの著を鑑識することの出來なかつたのは全く英語の知識の不足に基くことを自白してゐる。然しながら最近に至るまでアダム・スミスの「國富論」にチュルゴオの「考察」に負ふ所頗る大なりとは幾多の權威によつて表明せらるゝ所であつた。

スミスは果してチュルゴオに負ふ所大なりしに拘らず、其の書中に於て之れを承認し感謝することを敢てせざりしの非難を受く可きものであるか。洵にスミスが其の書中に於てチュルゴオに何等の感謝をも捧げざりしは事實である。然しながらスミスは當さに彼れに感謝す可き何物かを有して居つたであらうか。チュルゴオが曾つてエスイツタ教徒の爲

めに佛蘭西に誘はれ、此の國に於て教育せられたる二人の支那青年が其の故國に於ける文學及び科學に關する通信を爲すの約束を以て、王室の年金を受け、廣東に歸航を命ぜらるゝに臨んで、彼れ等の爲めに報告す可き問題の目錄を作成し、而して彼れ等をして其の質問の趣旨を明かならしむるが爲めに經濟學に關する一書を起草したのは一千七百六十六年のことである。(同年十二月九日附デュポン宛チュルゴオの書簡參照)。而して之れを Réflexions sur la Formation et la Distribution des Richesses. と題して、當時デュポンの主宰せるフイジオクラートの機關 Éphémérides du citoyen, ou Bibliothèque raisonnée des sciences morales et politiques 誌上に登載したのは一千七百六十九年十一月から一千七百七十年一月にかけてゞあつた。而も同誌は種々なる事情に依つて其の發行が極めて遲延勝ちであつたが爲めに實際には一千七百七十年の一、二月及び四月に至つて初めて世に公にせられたものである。チュルゴオは其の後、一千七百七十六年に至つて之れに正誤を挿入し、單行本として上梓してゐるが、然も此の初版本は僅々百部乃至百五十部を印刷したるに過ぎない。卽ち此の書が初めて出版せられたるはスミスの「國富論」出版と同年であつて、若しスミスが果して之れを參閲したとしたならば、是れよりも六年前に公にせられた「エフエメリード」誌上の論稿に依るの外はない。然るにカンナン氏の調査に據れば、そは一千七百七十六年のエヅンボァロオの辯護士圖書館目錄 (Catalogue of the Faculty of Advocates, Edinburgh, pt. ii) にも存しなければ、又たジエムズ・ボナー博士の製作せるスミスの藏書目錄 (Catalogue of Adam Smith's Library, 1894.) 中にも見當らない。

固よりチュルゴオの思想は幾多の點に於て純然たるフィジオクラートよりも寧ろアダム・スミスに對して接近せるものである。然しながら二個の書中に於て偶々同一の思想を發見し得たからと云つて、直ちに其の一を以て他に負へるものと爲すは大なる早計であると云はなければならぬ。ロージャース (Thorold Rogers) 教授の如きは其の刊行せる「國富論」の序文に於て、特に其の第一卷に於ては殆んどチュルゴオの區分及び論議よりの騰寫に過ぎざる諸章句を見出し得可しと爲し (2. ed, 1880, p. xxiii.)、而して單に全卷の註釋のみに於てもチュルゴオ引用すること七回に及んでゐる。(ibid, vol. I. pp. I, 14, 24, 31. 58, 71, 151-2; Turgot, Reflexion, §§. 90, 3, 39, 32, 67, 6, 10.) 然しながら其の中

第十四頁に揭げたるもののみは幾分チュルゴオより引用せられたる章句に類似せる所がないではないが、然も是れとてもスミスがグラスゴオ時代に行へる「講義」の反覆であるのみならず、そはチュルゴオの章句よりも更らに酷く是れよりも以前の英國記者の所言と類似せる物がある。ジョン・ロック、マンドヴイル及びハリス等が是れである。他の六つの場合は本文と引用せられたる章句との間に何等の類似も存せざるものである。(Edwin Cannan, Introdution to Lectures of Adam Smith, 1896, p. xxxiv.)。

二

更らにスミスとアンシクロペデイスト(一千七百五十一年を以て着手せられ、同七十一年に完成せる大百科全書 Grande Encyclopedie の編纂に從事せる諸家)及びフイジオクラートとの關係に就いてルヨ・ブレンタノ教授は下の如くに說いてゐる。スミスの大著「國富論」の公にせられたのは一千七百七十六年の初めであつて、彼れが母を扶けて鄕里カーコオデイに退隱しつゝあつた十年間の產物である。彼れが此の大著に着手したのは Buccleugh 公の師傅として之れに隨行せる長き佛國の旅行を終へて歸國したる後であつて、彼れは巴里に於ける十二ケ月の滯在中アンシクロペデイスト中のアツチカス (Atticus) と稱せられたエルヴェシウス (Claude Adrien Helvetius) の邸宅に於て當時佛國に於ける幾多の知名の士と會見した。卽ち文名を馳するに汲々たる此の歲入取立請負人は是れ等の知名の士を其の食卓に集へて、其の思想の精髓を捕捉し、以て個人主義の法典たる其の著「精神論」(De l'Esprit, 1758) 中に之れを披表せんとしつゝあつたのである。而して這般の交遊に際しスミスの受けたる感化が頗る偉大であつたことは其の前後に於ける彼れの根本的意見の大變化が之れを證して餘りあるのである。彼れが一千七百五十九年、卽ち佛國旅行前に公にせる「道德的情操論」中に述ぶる所に據れば、彼れは明かに德行を以て單に善く事情に通じたる公平無私なる傍觀者の賞讚を得るの行爲に過ぎずと做してゐる。卽ち彼れ所爲らく、あらゆる人間の行爲は此の賞讚に由つて計量せらるゝものであると、而して更らに曰く、「人間の本性は自愛からして一切の感情及び性向を生ずるものであると做すの學說は世上に

紛々たる論議の花を咲かせたが、而も吾人の意見に據れば斯くの如きは同情の法則を誤解せるより發したるものと言はなければならぬ」と（Theory of Moral Sentiment, Bk. VII. chap. iii, sec. 1.）。然るに「國富論」に於ては全く之れと反對に人間の本性に關する彼のエルヴェシウスの書に現れたる諸意見に贊成し、自利心を以て人間行爲の唯一の動機なりと做してゐる。利己心を前提として下したる推斷は殆んど全編を一貫せる所であつて、彼のペンミルヴェニアの「クエーカー」宗徒が其の奴隷の全部を解放せるは、全く宗教上の意見より來れること、明白なる事實なるに拘らず、彼れは之れに對しても尙ほ「吾人は奴隷の數の甚だ多からざりしことを信じなければならぬ。若し、奴隷にして奴隷所有者の財產の大部分を形成して居つたならば、恐らく斯くの如き決意を爲すことが出來なかつたであらう」（Wealth of Nations, Bk. III, chap. ii.）と云ふが如き議論を爲せしが如き、如何に彼れが自利心を以て人間行爲の唯一可能の動機なりと做すの學說を固持せるやを知る可きである。

而して彼れの哲學的根本的思想に於けると等しく「國富論」中に現れたる其の政治上經濟上の推斷に於ても亦たアンシクロペジスト流の思想に逢着するのである。アダム・スミスの敎ふる所は彼の徒と等しく、總べての人間は皆な平等なるものであつて、人々の間に存する差別は生得の不同から生じたものではなく、敎育、立法及び行政の相違より來るものであると云ふに存する。從つて今後は此の後天的の影響を撤廢し、國家の職能を自然に自由及び財產の保護公共の安寧秩序の維持に制限しなければならぬ。法律の保護干涉を以て個人の幸福を增進せんとするは蓋し大なる妄斷邪見であつて、自利心は各人に最も克く其の幸福を增進し得る所以の道を示すものである。而して人間は本來平等であつて、且つ等しき範圍にまで利己的衝動に由つて動さるゝが故に、國家にして一切の干涉を廢止し、各個人をして其の利己心の發動に伴つて自由に行動し、天賦の諸力及び才能の全部を擧げて作用せしむるに至ると共に、一切の個人の最大幸福並びに是れと伴つて全社會の最大幸福は實現せらるゝであらう。從つて先づ第一に偏へに一切の改革に反對しつゝある特權階級の利己的努力より生じたる現在の經濟的法規を撤廢し、次いで「自由放任」の新制度を樹立し、現存の積極的產業組織に代へて經濟的自然法則の支配を行はなければならぬ。

「自然の法則をして支配せしむ可し」との宣言は即ち第十八世紀に於ける佛蘭西經濟學者（économistes）が「フィジオクラート」の稱號を得たる所以である。アダム・スミスの學說はフィジオクラート學派の學說をして殆んど其の光輝を失はしめ、且つ種々なる點に於て之れと反對の所說を有するものと看做されてゐるが、然も前述せるが如く、其の根本的意見に於てはフィジオクラートのそれと全然同一である。彼れが論駁せる同派の學說は比較的重要ならざる理論に止まるものであつて、而も之れと關聯して彼れ自身も亦た新たなる誤謬に陷らなければならなかつた。是れ等の相違を除いてはスミスも亦た一個のフィジオクラートである。彼れの最大なる效績は同學派の最も光彩ある文獻を後世に傳へたるに存する。各個の推論に於ては彼れは多少自己の新說を附加してゐる。吾人は彼れが特に佛國學者の抽象的說明に代へて、實際社會に對する最も熱烈なる研究の結果を其の著の到る處に挿入して之れを確證せるが故に、讀者は往々にして其の源を佛國に發したるを忘れ、英國の經濟狀態より直接に發生したる新學說なりと思惟するに至つた。而して彼等は歡天喜地の思をなして啻だに第十八世紀の英國に於けるのみならず、あらゆる國民及びあらゆる時代に於ける經濟的生活の脈搏を聞けりと想像し、宛も永遠の眞理に對するが如く之れを禮拜せんとしたのであると。(Lujo Brentano, The Relation of Labor to the Law of To-Day, trans. by Porter Sherman, 1897. pp. 63-66.)。

三

固より一千七百六十四年より同六十六年に亙れる佛國の滯在はスミスの生涯の上に重要なる意義を有するものであつた。彼れがチュルゴオ並びにアッベ・アンドレ・モルレー（Abbé André Morellet）と初めて會話したのはエルヴェシウスの邸宅であつた。エルヴエシウスは既に退隱せる歲入取立請負人であつた。彼れは苛斂強請を行はずして、既に富を蓄積して居つた。佛國に於ける他の歲入取立請負人が、如何なる貴婦人も彼れ等と結婚することを好まず、又た彼れ等は貴婦人以外の如何なる婦人とも結婚せんが爲めには餘りに倨傲なりしが故に、多く獨身の生涯を續けたるに反し、彼れは才色兼備の夫人を娶り、彼れの大曜日の正餐は此の夫人の助力によつて、當時巴里に於ける最も愉快なる饗應の

一と爲つて居つた。當時エルヴエシウスは長い英國の滯在から歸つてまだ間がなかつた。彼れは著しく英國及び英國民に魅せられて居つた。彼れは常に知名の英國人に對して頗る懇切であつたが故に、スミスは其の巴里滯在中に於て屢々此の多方面にして聰明なる金融業者と會談するの機會を有して居つたことと想像せられる (John Lae, Life of Adam Smith, 1895, p. 200.)。

アッベ・モルレーはグールネーの流を汲める自由主義者であつて、チュルゴオの學友であつた。而して彼れが最初の經濟上の述作 Réflexions sur les avantages et les desavantages de la libre fabrication et de l'usage des toiles peintes en France. は既に一千七百五十八年を以て出版せられてゐた。彼れは其の Memoires. に於てスミスに言及してゐる。「彼れの佛語は拙劣を極めて居た。而し彼れの著「道德的情操論」は余に其の深遠と聰明とを尊敬するの念を與へて居つた。而して洵に余は今も猶ほ彼れを以て其の取扱へる總べての問題に對し、最も綿密なる觀察と解明とを行へる一人であると考へてゐる。余と等しく形而上學を愛好せるチュルゴオ氏は彼れの天才を稱揚して居つた。私共は屢々彼に會つた。彼れはエルヴエシウスの邸宅に居合せた。私共は商業、銀行、公債の理論及び彼れが當時構想しつゝあつた大著中の數多の點を論議した」と (ibid, 1. p. 237.)。後年彼れはスミスの「國富論」を佛譯したが、終に出版を見ることなくして終つた。(ibid, 1, p. 244.)。

レオン・セー (Leon Say) はチュルゴオが其哲學の多くをスミスに負ひ、スミスは其經濟學の多くをチュルゴオに負ふものと思惟してゐる (Schelle, op. cit, p. 159.)。然しながらスミスはチュルゴオと相識る久しき以前に於てチュルゴオと等しき形態に於て自由交易論を唱道して居つた。彼等が會見の際に其の經濟問題の論議の題目と爲つたものはチュルゴオの Réflections に非ずして、寧ろスミスの Wealth of Nations. であつたと見ることが出來やう。コンドルセー (Marquis de Condorcet) は其の「チュルゴオ傳」(La Vie de Turgot, 1786.) に於てスミスの歸國後に至つても、彼れ等は書信を以て經濟上の議論を繼續せりと傳へてゐる。然しながら其の後の研究に據れば彼れ等兩者の間に斯くの如き通信の行はれたる形跡は終に看出すことを得なかつた。(Dugald Stewart, Collected Works, ed. by Sir W. Hamilton,

vol v, 1877, p. 47.)。加之ならず、最近に至つて公にせられたロッシフコー公 (De la Rochefoucauld) 宛のスミスの書簡は全く此の點に關する疑問を解決した。即ちスミスは彼れがチェルゴオよりの書簡を所有するや否やを問へる此の若き公爵に答へて、彼れは幸にしてチュルゴオと相識あり、而して彼の友情と推重とをすら受けたりと自信するも、而も曾つて其の書信に接するの光榮を有せず、彼れは Procès Verbal の一部を彼れに送附せるも、而もその何等の書狀をも伴ふことなかりし旨を言明してゐる。(此の書簡は Francis W. Hirst, Adam Smith.—English Men of Letters, ed. by John Morley, 1904. p. 133. に掲げられてゐる)。

スミスはチュルゴーを欽仰すること大なると共に、彼れを以て實際政治家として餘りに眞摯に過ぎ、實際社會に横行して、公正合理なる改革を阻止する我欲、愚蒙及び偏見を輕視するの傾向餘りに大なるものと認めてゐる。二十三年の後サミユール・ロージャース (Samuel Rogers) は其の日記に下の如く誌してゐる。「アダム・スミスは云ふ、チュルゴーは正直にして誠實なる人ではあるが、世間と人性とを熟知してゐない、而して彼れが自らデウィッド・ヒュームに談れるが如く、總べて正しきことは遂行せらるゝなる可しとの言を以て其の金言となして居つたと」。(Clayden, Early Life of Samuel Rogers, p. 95.)。

然らばスミスとフイジオクラート學派の創始者フランスワ・ケネー (François Quesnay) との交渉は如何なるものであつたか。スミスは其の佛國滯在中に於て屢々ケネーの部屋を訪れた。ケネーは一千五百五十一年を以て國王の第一醫官の職を購ひ、ヴェルサイユ宮殿のアントルソールなる其の居室に毎週火曜日を以て幾多の經濟學者並びに哲學者を招じて議論を交換しつゝあつたのである。例のデュポン・ド・ヌムールは後年ジヤン・バプチスト・セー (Jean BaptisteSay) に向つて彼れが屢々彼れ等の小集會に於てスミスに會したることを語り、スミスは其の當時に於ては彼れを形成せる素質を示すことゝかりしが故に、彼れ等は彼れを單て聰明にして眞率なる人物と考へたに過ぎなかつたと稱してゐる。(Say, Cours Complet d'économie politique pratique, Oeuvres diverses, 1848, p. 870.)。而して彼れは其の偉大なる知己、チュルゴオの沒後、一千八百〇九年より同十一年に亙り、其の著書を九卷に收輯して出版し、之れに興味ある註

記を挿入して居るが、其の一に於てスミスを以てケネーの學徒と看做してゐる（Turgot: Œuvres. v. p. 136.）。

吾人は固よりスミスに與へたるケネー及びフイジオクラート學派の影響を以て絕無なりとなすことは出來ぬ。殊に彼れがグランゴオ大學に於て行へる講義と「國富論」とを比較對照する時は、兩者の間に存する學說の相違にしてフイジオクラートの感化に出るものあることを發見しなければならぬ。スミスはケネーを呼ぶに其の學徒の如く「歐洲の孔子」「現代のソクラチーズ」「近世のモーゼ」を以てすることなく、ミラボー（Marquis de Mirabeau）の如く、其の Tableau Oeconomique を以て印刷及び貨幣と並んで「特に政治的社會に安定を與へたる天地開闢以來の三大發明の一」と做すこともなかつたが、彼れを以て明かに全世界に於ける經濟學硏究者の頭首と思惟し、此の佛國經濟學者にして「國富論」出版の當時まで生存して居つたならば、彼れは其の大著を彼れに獻本す可き筈であつたと傳へられてゐる。（ケネーの長逝せるは一千七百七十四年十二月十六日であつて、「國富論」の第一版が初めて世に現れたのは全七十六年三月九日である）。スミスが「國富論」第一編第八節に於て勞働の賃銀を論じ、第九章に於て資本の利潤を論じ、殊に第十章に於て勞働及び資本の相違れる用途に於ける利潤を論じたる大本の思想及び其の中に掲げたる例證の多數は貨物の價格を論じたる「講義」第二部第二分第七項中に包含せられて居るが、「國富論」に至つて明かに認むることの出來るやうに爲つた分配論の結構は未だ之れを「講義」に於て認むることを得ない。「國富論」第二編、「資本の本質、蓄積及び使途」の主要部分も亦た全然說明せられてゐない。「講義」に於ては資源に關しては何事も云はれて居らず、資本も亦た重要なる地位を與へられてゐない。而して「國富論」に於て重要なるものと爲つて居り、其の第二編の多くを割いて論じてゐる生產的及び不生產的勞働の區別の如きも未だ提示せられてゐない。

ケネーの「經濟表」（Tableau Oeconomique.）が初めて世に現れたのは著者が六十四歲なりし一千七百五十八年十二月であつた。此の四つ折半一面に印刷せられ、雁木線の連結を有する有名なる經濟表も、現代の眼には、洵にエドキン・カンナンの言の如く、小供の玩具に類するの觀がある。然しながら「經濟表」は一ケ年間に於ける產業の全收益を包括的に示さんとせるの點に於て、經濟學說上に顯著なる發達を齎らしたものである。而して吾人はアダム・スミスの銳

利なる眼が直ちに其の主要觀念を把捉して、之れを其の「講義」に現れてゐる舊來の所說に適用せることを想像することが出來る。彼れは固より「經濟表」を其まゝに承認しやうとはしなかつたが、而も其著者の著眼點を採用した。斯くて勞働が投資の特殊の種類によりて發動せしめられ、數個の大項目に分配せらるゝ總年收益を生ずるものなりと做す確然たる思想を胎すに至つたのである。此の生產的勞働を發動せしむる特種の投資は資源的資本の使費と同一視せられる。此の資源の使費によつて發動せしめらるゝ總べての勞働は賣捌かるゝ物體を產出することが確說せられる、而して斯くの如き勞働の一切のみが惟り本然に生產的であると主張せられる。此の新學說は實に「國富論」第二編の主要部分を形成するのである。（Cannan, op. cit., p. xxix.）。

スミスが佛國から發した書信にして今日に傳存する數通の中で最も長文のものは一千七百六十六年八月二十六日の午後五時にコンピエーヌ（Compiègne）から バックルー公爵の義兄弟タウンセンド（Charles Townshend）に寄せたものである。此書翰はスミスが經濟學者たるケネーに負へると等しく亦た醫師としての彼れに依賴しなければならなかつたことを物語つてゐる。公爵は野營及び機動演習を見物し、國王及び朝臣と共に出獵するが爲めにスミスを伴つて此の地に在つたのであるが、木曜日の夜七時頃、甚しく飢えて狩獵より歸り、多量のサラダと共に冷たき晩餐を貪り食ひ、其後に冷たきパンチを飮用せるが爲めに發病したのである。日曜日に至つて忠實なる師傅は心痛に堪えずしてケネーを迎へんとしたのであるが、彼れも亦不快であると云ふ返事を受けた。スミスは更らにジャン・セナック（Jean Senac）を招せんとしたが、彼れも同じく不快であつた。スミスは自らケネーを訪れて來診を請ふた。ケネーは老衰病弱の故を以て、皇后の第一醫官ド・ラ・ソーン（De la Saone）を推薦した。スミスは又たソーンを訪れたが、彼れは生憎不在であつた。彼れは再びケネーの許に立ち歸つて、其の來診を求めた。ケネーは直ちに公爵を見舞つたのであるが、その時は最早午後七時であつた。ケネーは公爵の發汗が止まるまでは何事をも爲ない方がいゝと云ふ意見であつた。彼れは幾分の清涼飮料を勸めたのみであつた。ケネーは自己の病氣の爲めに翌日歸宅することが出來なかつた。其の後はソーンが續けて公爵に侍することとなつた。（Fraser, Scotts of Buccleuch, ii. p. 405; Rae, op. cit. pp. 222-224; Hirst, op. cit.

p. 135.)。

四

閑話は是れを以て終る。斯くの如くしてスミスがフイジオクラート學派の學祖フランスワ・ケネーに負ふ所あるの事實は之れを認めるが、然も彼れは彼れ等と相識を得る十有六年の昔に於て早く既に（一）一國の富は其の金銀より成るに非ずして、其の消費せらる可き貨物の在高より成ること、及び（二）之れを增加す可き眞の方法は特權を授與し、制限を課するに存せずして其の生產者に好個の機會を確保して何等の恩惠をも賦與せざるに在ることを說いて居つた。ケネーが初めて經濟問題に其の筆を染めたのは彼れが一千七百五十六年を以てディドロー（Denis Diderot）のアンシクロペヂイに寄せた Les Fermiers の一項であるが、スミスは既に一千七百五十年の交に於て是等の二大主張を唱道して居つた。

スミスは一千七百四十八年の後期に至つて、エヂンバアロオに其の居をトし、ケームズ卿（Lord Kames）、即ち當年のヘンリー・ホーム（Mr. Henry Home）の勸奬に由つて同學年及び次ぎの二學年を通じて、修辭學及び美文學の公開講義を行つた。加之ならず、彼れは同地に於て少くとも一千七百五十年から同五十一年に亘れる冬期に於て經濟學に關する講義を行ひたるの事實が明かである。此の講義案は一千七百四十九年に其の書記をして筆錄せしめたるものであつて、彼れは其の中に於て交易自由の學說を主張してゐる。彼れは此の事實を一千七百五十五年グラスゴオの某學會に於て朗讀せる講演の草稿中に記してゐる。此の草稿は後年ダッガード・スチュアートの所藏に歸せるものである（Stew-rt, op. cit, vol. x. p. 68.）。スミスは其の死に先立つて其の友人ブラック（Dr Joseph Black）及びハツトン（Dr James Hutton）をして出版に値する少數のものを除き、其一切の草案を燒棄せしめたのであるが、此の草稿のみは如何にしてかダッガード・スチュアートの所有に歸してゐたが爲めに破毀を免れたのである。而も是れ亦たスチュアートの子によつて、恐らくは其の父の命令によつて破毀せられたものと信ぜられてゐる。何となればスチュアートは草案の全

部を公にするは、永く葬り去るに如かざる個人的の不和を復活せしむることある可きが故に不穩當なりと思惟せるが故である。從つて其の內容に關する吾人の知識はスチュアートが初期に於けるスミスの政治思想の發達を示す貴重なる資料として引用するを正當と思惟したる數行の文字に限られてゐる。而もスチュアートは「國富論」中に於ける最も重要なる意見の多くは此の文書中に詳說せられてゐると說いてゐる。

當時スミスの思想に有力なる影響を及ぼしつゝありしものにジエームズ・オスワルド(James Oswald)がある。彼れはスミスに比して八才の長者であつて、後年商務及び拓殖事務官、大藏參事官、並びに愛蘭大藏次官と爲り、一千七百六十八年、五十二才の壯齡を以て逝ける人である。スミスがオスワルドに傾倒せることはヒユームに讓らなかつた。(Memorials of the Public Life and Character of the Right Hon. James Oswald of Dunikier, 1825, Preface 中にオスワルドの孫が誇らかに物語る所を參照せられたい)。ヒユーム(David Hume)の經濟學上の諸論文が其の Political Discourses. 中に一括せられて世に出でたのは一千七百五十二年二月のことであるが、是れ等のものは彼れが一千七百四十九年以後、二ケ年に亘つてナインウェルズ(Ninewells)の舊宅に其の兄弟と共に生活せる間に述作せられたるものである。(The Life of David Hume. Esq. written by himself, preffixed to An Enquiry Concerning Human Understanding, 1904, p.x.)。一千七百五十年、彼れは海外からオスワルドに其の有名なる「貿易平衡論」の手錄を送つて批評を求めた。オスワルドは同年十月十日 Caldwell Papers. に揭げたる此の長文の書簡を以て之れ答へ、彼れも亦た經濟上の問題に關して頗る進歩せる意見を有せることを示してゐる(1. 93.)。

スミスは一千七百五十一年一月九日を以て、ルードン(Loudon)教授の死後空虛と爲つたグラスゴオ大學に於ける論理學の講座に選任せらるゝことと爲り、同十六日に就任式を了したのであるが、エヂンバアロオに於ける其の講義を完了するの必要上、十月十日に於ける新學年の開始に至るまでは授業を行ふことが出來なかつた。然るに同大學に於て論理哲學の講座を擔任せるフランシス・ハツチエソン(Francis Hutcheson)の直接後繼者トーマス・クレーギー(thomas Craigie)の病氣休講の爲め、其の代講を行はなければならなかつた。而して此の二重の負擔は彼れが既にエヂンボ

オロオに於て行へる講義の資料を利用することを得たるが爲めに尠なからず輕減せらるゝを得たものと想像せられる。當時蘇國諸大學に於ける敎科の傳說的分配によれば、論理學の講義は修辭學及び美文學を抱擁し、精神哲學は法律學及び政治學を包含するが故に、スミスは先に講述せる所を以てグラスゴオに於ける第一期講演の題材たらしめたのである。然るにクレーギーは終に同年十一月二十七日を以て長逝し、翌五十二年四月二十九日、スミスは何等の反對をも受くることなくして其の後繼者に任命せられた。彼れの謂ゆる實體學の「蛛網科學（The Cobweb science）」の全部を組成せる機巧と詭辯を嫌惡すること大なりしが故に、人間の幸福と完成とを念とする倫理哲學に移らんことを欲したものであることは勿論であるが、然も物質上の報酬も亦た後者は前者に比して大なりしが如くである。

スミスがグラスゴオ大學の敎授として行へる講義は彼れが自ら「道德的情操論」及び「國富論」中に公表せる部分を除いては、全く世に傳存する所なきものと想像せられ、唯だ僅かにスチュアートの「スミス傳」に掲げられたるスミス最愛の門下ジョン・ミラー（John Millar）の談に據つて其の片影を偲び得るのみであつた。（Stewart, op. cit. pp. 11-13.）然るにエドウイン・カンナン氏が一千八百九十五年四月二十一日 Oxford Magagine の學藝記者と對語し、談偶々アダム・スミスに及んだ時、恰も居合せたる初對面の辯護士チャールス・シー・マコノチー（Charles C. Maconochie）より彼れがスミスの法律學講義の筆錄を所藏せることを聞知し、翌九十六年、之れに長文の緖言と嚴密なる脚註とを加へて出版してより普く世界に弘布することと爲つた。吾人が曩きに引用せる「講義」は卽ち彼れである。此の手錄は一千八百四十五年娶らずして逝ける其の大叔父ジェームズ・アラン・マコノチー（James Allan Maconochie）よりチャールスに傳はれるものである。（カンナン宛九十二年六月十二日附マコノチー氏の書翰）。スミスが倫理哲學の敎授としてグラスゴオに於て講義を行つたのは一千七百五十二年から同六十四年一月初めまでであつた。爰に發見せられたるものは其の內容から推して六十二年から三年に亙つた最後に近い學年のそれであることが推定せられる。

アダム・スミスの述作を研究する者は彼れの上に及ぼしたフランシス・ハッチエソンの力强き感化を認めなければならぬ。一千七百五十五年、著者の死後に至つて出版せられたハッチエソンの主著 A System of Moral Philosophy. の稿は早く一千七百四十二年の交に成つたものである。此の書は貿易の平衡、國家的制規及び人口等に關しては猶ほ幾分マーカンチリスト流の思想を有せざるに非ざるも、而も後年スミスによつて其の「國富論」中に表明せられたる諸般の理論も預示する幾多の章句を包有するものである。ハッチエソンは一千七百二十九年から同四十六年に亘つてグラスゴオ大學に於て倫理哲學を講じて居つた。アダム・スミスがグラスゴオ在學時代に於て彼れの講莚に列したのは僅かに十七歲の時であつた。此の少年の上に殘したハッチエソンの影響は頗る深く且つ長いものであつた。

ハッチエソンは一千七百四十五年に羅典語を以て Philosophiae moralis institutio compendiaria libris III. ethices et iurisprudentiae naturalis elementa continens. と題する小篇を公にしてゐる。而して此の著の飜譯は彼れの承認を經て同四十七年 A Short Introduction to Moral Philosophy in three books, containing the Elements of Ethicks and the Law of Nature. の題下に出版せられてゐる。此の著の序文を成せる「大學生に與ふ」るの書は凡そ下の如き言葉を以て始まるのである。「古代人の間に於ける有名なる哲學の分類は合理若しくは論理哲學、自然哲學及び倫理哲學と做すに存する。彼れ等の倫理哲學は分たれて德の本質を敎へ、且つ心裡の傾向を制規する更らに嚴密なる意義に於ける倫理學及び自然法の知識を包有する。此の後のものは(一)私權の敎理即ち自然的自由を收得する法規(二)經濟學即ち家族各員の法規及び權利、並びに(三)內治の諸計畫及び國家相互の權利を明にする政治學を包含する」と。斯くて其著は第一編「倫理學要論」、第二編「自然法要論」(羅典文は Iurisprudentia privata.) 及び第三編「經濟學及び政治學原理」と題せられてゐる。スミスの講義中に在つて、最後に「道德的情操論」に發達するに至つたものは明かに此の第一編に相當するものである。スミスの「講義」中、其の第一部「正義」の第三分「私權」は第二編に相當し、而して其の第一及び第二部たる「公法學」及び「家內法」は第三編に相當するものである。加之ならず、ハッチエソンは其の第二編第十二章に於て「財貨の價値及び價格に就て」と題して些かながら高低價格の原因及び良貨の特性を論じてゐる。恐らく「國

富論」の萠芽は本章中に於て看出し得可きものであらう。(Cannan, op. cit., p. xxvi.)。

更らに前述せるハッチソンの「倫理哲學體系」を取つて觀るに、其の價値に關する意見の如きは宛然人をしてスミスが使用價値及び交換價値に關する有名なる章句の草稿を讀むの感あらしむるものがある (System, vol. II, p. 53ff. 參照)。彼れはスミスと等しく勞働が富の大泉源にして又た價値の眞尺度たることを主張し、而して總べての人は公共の利益が別個の行爲を要求す可き場合を除き、他人の身體又たは財産に對して毫も危害を加ふることなき以上、如何なる仕事又たは娯樂に於ても、自己の目的の爲めに自己の欲する所に從つて其の能力を使用するの自然權を有することを宣言せるが如きは人をして漫りにスミスの「各々が自己の勞働に對して有する所有權は自餘一切の所有權の本源的基礎たると等しく、又た最も神聖にして犯す可らざるものである。貧民の相續財産は其の双手の力と技能とに存する。而して彼れを妨げて其の隣人に危害を及ぼすことなくして、其の適當と思惟せる方法を以て這個の力と技能とを使用せしめざるは明かに此の最も神聖なる所有權を侵犯するものである」と論じたる所言を想起せしむるものがある(Wealth of Nations, Bk I. chap. x. pt. 2.) ハッチエソンの學説は本質的にアダム・スミスの名と同視せられてゐる經濟的自由の學説であつた。スミスはフイジオクラート中の何人と雖も、未だ一行の經濟論をすら起草せざりし當時に於て、既にグラスゴオに於けるハッチエソンの講堂に於て自由主義の經濟學説を授けられたことを記憶しなければならぬ。(Rae, op. cit. pp. 14-15.)。

六

最後に自利心を以て經濟行爲の出發と爲すスミスの學説を以て其の佛國旅行に得たりと做すの意見も必ずしも是認せらる可きものでない。勿論、此の點に於てはスミスに對するハッチエソンの感化を認むることは出來ない。スミスは其の「道徳的情操論」に於てハッチエソンが仁愛 (benevolence) を以て徳たるの性質を總べての行爲に賦與し得る唯一の動機なりと認め、自愛 (self-love) は如何なる度位に於ても、亦た如何なる方向に於ても曾つて有徳なる行爲の動機たること能はざるものなりと做し、彼れに從へば自是 (self-approbation) の快樂を顧慮することすら仁愛的行爲の功徳を減少するものと思推せることを述べてゐる。(Hutcheson, Inquiry into the Original of our Ideas of Beauty and

Virtue, 1720, sect. 2. art. 4; Smith, Works, vol. 1, 1812, p. 536.)。今日ではマツカロウク (John Ramsay McCulloch) からエドキン・カンナンを經てスミスの上に及ぼせるマンドヴイル (Bernard de Mandeville) の影響が一般に認められてゐる。

マンドヴイルの The Fable of the Bees: or, Private Vices, Publick Benefits. の基礎を成せる拙惡なる英語 The Grumbling Hive: or, Knaves turn'd Honest. は一千七百〇五年、六片（ペンス）の小冊子として刊行せられたるものである。此れの寓話中に描き出されたる蜜蜂は彼れ等が奢侈と不德とを有する間は彼れ等の小國家は繁榮なるものであるが、此兩者が德と質素とに道を讓るや、彼れ等は直ちに其の一切の幸運を失つて「滿足と敦厚とに加護せられつゝ空木中に飛入るのである」。(Fable, vol I. 4th. ed. 1725. p. 22)。アダム・スミスは「道德的情操論」に於てマンドヴイルを論じて、此の著者の意見は殆んど總べての點に於て不當であるに拘らず、人間の本性中に幾分の示現を見るものであると做してゐる (Smith, Works, op. cit., p. 545.)。

スミスが其の學說を分勞より出發せしめ、而して其の起源を人間本性の傾向に求め、人間が常に其の同胞の助力を必要とすることを說き、而して彼れは惟り彼れ等の仁愛のみに依つて之を期待すること能はさるが故に、彼れ等が自已の利益を顧慮するの念に訴へて之れを得んとすることを論じ、「吾人は彼れ等の仁愛に依賴せずして、其自愛に訴へる、而して彼れ等に說くに吾人自身の必要を以てすることなくして、彼れ等の利益を以てする」と說けるは正にマンドヴイルに得たるものである。(Wealth of Nations, Bk. I. chap. ii. と Fable of Bees, pt. ii., 1728. ホレショーとクレオメニーズとの對話第四 p. 421. 參照。而して茲に掲げたる「國富論」中の章句の全部は殆んど一語も違はず、佛國旅行前に成れるグラスゴオ大學に於ける「講義」中に發見せらるゝ所である。(Lectures on Justice, Police, Revenue and Arms, 1896 p. 169.)。

一千七百七十六年を以て第一版を刊行した「國富論」は實に其の以前に於て少くとも一千七百四十九年の草案に遡ることの出來る二十七個年に亘る長い述作の歷史を有するものであつた。重ねて言ふ、それはチユルゴオの處女論文 Lettre sur le papiermonnaie, adressée à M. L'Abbé de Cicé. の起稿せられたる年であつて、フイジオクラート學派の成立よりも數年の以前であつた。スミスは佛國の諸學者よりも遙かに多くを自國の先輩に負ふものである。

カントの政治哲學に就て

桑木嚴翼

一

人力には限りがある。一藝に秀づる者必ずしも萬能に長じては居ない。政治上に卓越した識見を有するものが、文藝上に幼稚な思想を抱くことのあり得る如く、科學藝術の天才が、實際上の問題に對して淺薄な解釋を施すことも無いとは言へぬ。我々は、カントの哲學上に於ける偉業を認めることに於て、敢て人後に落ちぬものであるが、然し之が爲めに、其の教説の一々を信奉しなければならぬとは思つて居ない。然らば則ち今其の政治哲學を問題とするに當つて、先づ此點を顧慮する必要がないとは言へぬであらうか。

カントが純粹理性の問題にのみ沒頭せずして、種々の經驗に興味を有つて居た、といふことは、其の全集の目錄を一見すれば容易に察知せられる所である。殊に批評哲學を建立するに先だち英佛の經驗論人性論の影響を受けた時代に於ては、其の形跡が最も著しく、其後も亦常に時代の問題に心を傾けて間々其の論評を公けにした。其の日常生活は政治上の紛擾と最も疎遠なる如く見えるが、然し之に對して決して無關心ではなかつたと信ずべき證據はある。佛國革命の頃から特に新聞を耽讀して歐洲國情の變遷に注意し、米國の獨立を感嘆すると共に英國の措置に嫌厭を感じ、殊にピツトの執れる政策が反て世界に自由と文化とを進める所以に非ざることを覺り、食卓に於ける友人との談話も屢々此種の問題に觸れて居たと云ふ。啻に實際政治に對する興味を有するのみならず、理論上に於ても亦政治に重きを置いたといふことは、其の歷史哲學論に於て、世界史の中心を政治史に置いた所にも顯はれて居る。此の如く見ればカントと政治哲學との間には案外に深い關係が存して居るやうに思はれるのである。

然も其の政治論が、單に其學說中獨立の部分を作るものに過ぎないとすれば、其は哲學者としてのカントとは直接に交渉がないことになるのではあるまいか。曰く否。其實を見れば其の政治論卽ち國家論は元來法律論の一部として說かれたもので、而して其の法律論は道德哲學の一篇をなして居る(Metaphysik der Sitten I. Metaph. Aufangsgründe-der Rechtslehre.) 所謂道德哲學は行爲の問題に關する應用の理說であつて、其の根本原理は實に實踐理性批判に存する。此の如く關係の深い事は、其の法律哲學中の諸所に現はれて居るが、實に又自ら之を以て其の特色として居るのである。卽ち其の法律論中に「法律學を全く經驗のみから構成しようとするのは、フエドルスの物語にある木製の頭のやうなもので、如何にも美しくはあるが惜しい事には腦が無い」と痛罵して居るのは、當時の法律學者に對して一見地を拔くことを示すものと言はなければならぬ。此の如くして其の法律哲學が批評哲學の體系中に屬する以上其の法律論の一部たる政治論は當然批評哲學研究者の度外視すべからざるものとならねばならない。

且又斯く國家論を法律論中の一部とすることは、其が單に法律的方面から國家を論じたといふことに止まらず、國家の本質を法律に置いたことになるのである。而して此の點に於て其が、道德論に於て道德律から論出することと密接に聯結して來て居る。其故に政治論に入る爲には、先づ法律哲學の大體の組織を知り、其の所謂法律が國家と如何なる關係を有するかを明にしなければならぬ。

二

さて法(Recht)の概念を理論的に決定すれば、第一に人格相互の外的實行的關係に存し、第二に一人格の意欲と他人格の願望等ならずして其の意欲との關係に存し、第三に意欲の實質ならずして單に其の形式に關するものである。斯くして之より、法の定義を下せば、「一の意欲が他の意欲と一般的自由法則の下に合一せらるべき條件の總括をいふ」とすることが出來る。而して行爲の法的なる場合とは其の格率(マキシム)に、從へば各人の意欲の自由が各人の自由と一般的法則に從つて共在し得る場合をいふ。是が法の一般原理であるが、此原理其ものを我が格率とすることは出來ない、何者、各人の

自由は必しも我が自由を須たないから。故に法的行爲を我格率とすることは倫理の要求である。斯くして法は萬人に對する、効力を有し來り、而して又其に背反して人の自由を妨害するものを禁壓する權能が之に附帶せられるのである。

此の如き法に於て遵守すべきものを要約すれば、結局羅馬の法學者ウルピアヌスの格言に歸する。所謂ウルピアヌスの格言とは「正直に生活し、何人をも害せず、各人に、其の所有するものを與へよ」(honeste vive, neminem laede, suum cuique tribue)といふことであるが、カントは之を解して(一)正しき人となれ(二)何人にも不正(不法)をなす勿れ(三)他と社會生活をなし、各人をして其中に於て自己の事物を保持するを得るやうにせしめよ、と言つて居る。而して是は又自から法的義務の三種となるもので、即ち内的、外的、及び内的義務の原理より外的義務を演繹する場合である。是等の義務を組織する法に二種ある、即ち一は自然法で、一は制定法である。前者は先天原理に基つくもので後者は立法家の意志より生ずる所のものである、即ち前者が當然法律哲學の問題となるべきもので、後者は之より演繹應用せられるものである。此他に生得法と獲得法との別を立てるものがあるが、法は本來皆意志により、隨て各人の外的關係によつて生ずるもので何れも獲得せられたものである、生得なるものは法的關係に存在し得ること即ち自由の狀態に他ならない。故に暫く之を除けば法律哲學に於て論ずる所のものは獲得せられたる自然的法に他ならないことになる。

此自然法は法に關係する人の如何によつて、私法と公法とに分れる。前者は個々の人々の間に於ける法的關係を規定し、後者は共同團體に於ける人々の關係を規定する。前者は自然的狀態に於て人々の獲得するものに關し、後者は單に社會のみならず、國家生活をなす所の公民(Staatsbürger)に關するものである。而して公法が單に社會的法律に止まらずして公民的法律となるのは、自然的社會に於ては未だ眞の法的關係が生じないからである。斯くて公法は常に國家を豫想するものであるが、然し私法も亦其の完成の爲には國家生活に入らなければならない。要するに自然的生活に於ては法は皆準備（プロキゾーリッシュ）的動力を有するが、國家に至つて始めて之を確定（ペレムトーリッシュ）的なものとするのである。之を以て見れば法律は國家を俟つて其意義を保つものであるが、然し之を逆にして又國家は又法律によつて始めて其意義を確定するとも說か

れるのである。

私法は二人の關係即ち外的の我と汝との獲得關係から生ずるものであるが、其を質料即ち對象から區別すれば物體若しくは他人の業績若しくば他人其者の三となり形式よりすれば、物權人權物的人權（dingliche, persönliche, dinglich persönliche）の三法に分れ、更に又其の理由から見れば一面的二面的及全面的となる。今此中形式上の區別を標準として其特質を擧げれば、物權法とは字義的には物件を所有することに關する法であるが、實際には我が他と共通に所有する物件を私有することであり、人權法とは他人の意欲を所有することに關するもので、即ち契約に關するもの、終りに物的人權法とは外部の對象を一つの物件として所有し、其を一の人格として使用することで、夫婦、親子、主從の家族的關係に屬するものである。

以上の私法に對して公法が存する。公法は凡て法的狀態を生ずる爲に一般的布告を要する法律を總括するものである。其かくて其は多數人即ち國民に對する法律若しくは諸國民の間の法律である。國民間の各個人の狀態を公民的と稱し、是の全體は國家に關するものであるが、此場合には之を國法（Staatsrecht）といふ。然し國家國民は種々あるから、是等の間の法的關係も存し、之に對して國際法（Völkerrecht）の名稱が生ずる。更に其國際關係が一の法的團體を組織するものと見れば、世界民の法（Weltbürgerrecht）が生ずる。此の如くして公法論は法律的方面より國家其自身及び諸國家の關係について說くものである。而して我々の問題たる政治哲學は即ち其中に含まれて居るのである。

三

「國家は法的法則（Rechtsgesetz 即ち道德法に對する法律）の下に於ける一群の人間の合一である。此合一が先天的法則として必然的である限り、即ち外的一般の概念から其自身に生ずる限り、其形式は國家一般の形式である、即ち共同體を現實的に合一することに對するの標準となるべき、理念に於ける國家である」――是がカントの國家の概念である。即ち經驗的事實によらず、先づ其理念により、其のあるべき狀態によつて國家の本質を法的關係に求めたのである

既に斯く法的である、從て「各國家は此法的關係を實現する爲に三樣の權力（Gewalt）を有する。即ち三樣の人格に現れる所の一般的合一的意志であつて、立法者に於ける統治權力、執政者に於ける行政權力、裁判官に於ける司法權力の三者に分れる。之を實踐理性の推論式に於ける三命題に比すれば、意志の法則たる大前提、法則的手續の命令たる小前提、裁判の判決たる斷案に相當するものである。云々。」即ちモンテスキユー等の所謂三權分立說を執つて國家の本質を說明するのみならず、更に之を其道德說の形式に比較したのである。此に多少の牽强附會を認め得ると共に、其が體系構成の上に注意したことを觀取せられる。而して此三權を考察すれば自から國家の本質を分析することになるのであるが、其中今政治論として最も主要なるものは國家を構成する法律を規定する意志と之を行使する組織との問題である。即ち立法行政の二權に關するもので、法を維持する爲に刑罰等を行ふ場合の司法權の事は、今我々の論究中からは省畧することを得るであらう。

「立法權はたゞ人民の合一的意志に附するを得るものである、何者、此權力から一切の法は生ずるものであるから、それは其法則によつて絕對的に何人にも不正をなし得ないものでなければならぬ。」而して此の如き關係は一切の意志の合一する場合に於て初めて可能であるからである。斯くして斯く立法の爲めに合一せる社會即ち國家の部員は公民といはれる。此の如き公民は自由、平等、獨立の三性を具へなければならぬ、即ち自巳の法則にのみ服從するもので、法律の前には同等の待遇を受け、其の存在の爲には何人の意欲にも從屬するを要せざるものでなければならぬ。是等の性質を發表する方法としては、國家の立法に關して投票發言の權を有することを擧げられるが、此の如き權能を有するものが眞の公民で、即ち能動的なものである。之に反して是等の權利を有せざるものは所動的と稱せられ、公民即ち國家市民に非ざるもの即ち國家屬員（Staatsgenosse）である。此點に關してカントが佛國革命の際の標語を意識して居たと想像せられるが、同時に國民中に差別を設ける點は希臘羅馬に於ける思想を踏襲して居るやうに考へられる。殊に女人の公民權を拒む點は又古代思想にも關聯する所があつて、今日より見ればやゝ隔世の感がないとは言へない。

是等三權が國家に存して國家は自己の品位を保ち、こゝに其主腦となるものと之に從屬するものとの絕對的關係が生

する。此關係は本來契約に由つて生じたもので、一切の人々は其自由を提供して國家の一員となり、こゝに放縱なる自由を棄てゝ眞正の自由を得るやうになつたのである。旣に此の如くして成立した國家三權を比較すれば第一は道德的人格の共在に關し、第二は相互の從屬を定め、第三は各員に法を分配することになる。斯くして其の有する所の品位から見れば、立法者の意志は不可誹議的で、最高行政者のは不可抵抗的、最高裁判官のは不可變更的でなければならぬ。是に於てか是等の三權の合同分離の論が國家構成上重要なることゝなるのである。

三權の分立は國家構成の必要條件である。其の最完全に行はれた所は、十八世紀の政治理想を實現せんとした北米合衆國に於て見ることが出來る。カントは熱誠を以て此新興國を讃美し、歐洲の舊國が多く、皆其理想に遠く、殊に英國が表に自由を唱へて實は專制的なることを非難して居る。蓋し三權が相分離せずして一人格に結合する時には專制政治を生じ而して其の專制は必しも君主のみには存しないからである。

國家の君主（Regent）は執行權を有する（物理的或は道德的の）人格である、而して其の代理者卽ち官吏によつて各人をして法則に從て行動せしめる。此君主を道德的人格卽ち謂はゞ法人として見れば政府であつて、其が國民及び官吏に對する命令を訓令（Dekrete）と稱して法則とはいはない、といふのは、其は特殊の場合に於ける裁決に關するもので變化し得るものであるからである。此の如き行政權を代表する政府がもし立法權を有すれば專制的となる。此場合は政府と國民とが父子の如き關係を有するが、之に對する祖國的（patriotisch, vaterländisch）國家に於ては、國民は自立的公民となつて政府に對し得るものである。

然し斯く行政權が立法權を兼ぬるべからざる如く、立法權が行政權を兼ぬる場合も亦專制的となるのである。蓋し君主は法則の下に存するもので、立法的主權に義務を負ふものである。立法的主權は最高行政權を改廢することが、出來るが、之を罰することは出來ない、何者此責罰は法に從つて强制する能力であつて、是は最高執行權に屬するものであるから、執行權其ものを强制することは矛盾であるからである。是れ英國に於て「國王は不法をなすを得ず」といふ語のある所以である。

同樣に又立法的主權も行政的權力も司法權を兼ぬることは出來ない、其爲めには別に裁判官を定めなければならない若し人民が參與すれば陪審官によつて代表せしめるのみである。而して最高行政者が若し裁判官を兼ねれば不正不法を行ひ得ゝ機會に陷るに過ぎない。

斯くして三權分立すると共に、各相合同して作用すればこゝに國家の幸福を生ずるが、然し之によつて必しも各公民が幸福を得るとは言へない。何者、ルソーの言つた通り、自然の狀態の方が、或は時としては又（フリードリッヒ大王の治下の如く）專制政府の下に於けるが、反て愉快なる生活を與へることがあるかも知れないからである。「然し憲制が法的原理に最大の一致を得る場合は、理性が斷言的命令によつて之を追求すべき義務ありとする所のものである」。

此の如くして三權分立はカントの國家構成論に於ける第一要件となるものである。然し是を以て現實の公民に利益を與ふるを必せざるものとなす所に、一方に於ては其の國家が理想的性質を帶ぶる規範たることを示し、而して一方には其が道德上の斷言的命令論と密接なる關係を有することを想はせるのである。

四

此の如き國家觀は其の統治權の起源を論し、之より君民關係を說く所に於て更によく現はれて居る。カントの考によれば、統治權の起源は硏究することの出來ないものである、卽ち臣民は其起源を穿め、其の服從の義務に對して、之を疑はしき法なりとして詭辯的に論議してはならない。卽ち臣民は絕對服從の義務を有するものである。其は何によるか。蓋し人民が最高國家權力に就て判斷するだけの力を有する爲には、旣に一般の立法的意志の下に合一せられるものと見られねばならず、而して其が爲には結局現在の國家主腦の意志に從て判斷せねばならぬからである。斯くして人民が自ら判斷したと思つて居ても、實は其の判斷せられるものの意に從ふことになるに至るであらう。其故に國家權力が契約から生じたか、權力が豫め存在して居たか、等の問題を穿鑿して見ても、結局國家の法律に從つて其埒外に出る意見を生ずることは出來ない、卽ち此穿鑿は全く目的なきものなのである。是れ「凡ての義務は神より來る」といふ語のある

所以である。即ち此格言は歷史的事實を言ひ現したものではない、たゞ理念として國家の規範を示したものに他ならないのである。

國民に統治權を論ずる資格がないと共に、統治者は被治者に對してたゞ權利のみを有して義務を有たない、と言へる。而して統治機關即ち君主が會々法に背いた行爲をなすことがあつても、臣民は之に對して訴訟（Beschwerden）をすることは出來るが、抵抗することは出來ない。憲法中にも、統治者が之を破つた場合に之に抵抗し之を制肘する規定を設けることは出來ない。何者、其は國權を制限する力を有するものでなければならず、從て此の如き同等の權力者を有するものは最早最高權力者といふことが出來ないからである。是に於て立法的主權者が屢政府中に入つて大臣となり、結局立法行政二權の合一によれる專制政治を生ずるから、此の如き方法は一種の詐僞に他ならないのである。——斯くカントは、英國の憲法政治に對して論理上の非難を揭げて居る。

憲法の改正、三權の合同等によつて英國の政治に慊らなくなつたカントは、殊にチャールス一世時代の革命を非難して居るが、然し一方には佛國革命の精神を嘆賞し、殊に米國の獨立戰爭には非常に同情して居る。然も一面には普魯士の現政府に忠實であつて、殊にフリードリッヒ大王に對しては其の專制主義が反て理想の政治に近かつたことを追慕して居る。其故に單に論理から見れば一貫する所を缺いて、多少曖昧矛盾を免れないやうに思はれる。クーノー・フイツシヤーの注意した通り、其論はカントの心中に於ける共和的（後に述べる如く立憲的の意）思想家と忠誠なる公民との衝突を示したもので、更に詳しく言へば、普魯士的愛國心を有しつゝ自由主義を唱へ、米國を賞讚して英國を憎惡し、佛國の正義に同情して然も無政府の狀態を嫌厭する。此の如くして諸思想混雜する上に、筆端羈束せられて實說明晰を缺くの已むなきに至つた。其故に一面に於ては可なり極端に人民の權利を主張するかと思へば、他面に於ては殆人民の盲從を強いるかの如き觀がある、然し更に考へれば、カントの所論は本來國家の現狀を說くのではなくして、其の本質即ち先天的基礎を說くものである。隨て其の說は其の理會する所の人生に基づいて實踐理性の斷言的命令が如何にして社會的外部的に現れ得るか、といふことを示すものである。其故に斷言的命令を代表する法の絕對性を認める結果とし

て一面には其法を維持するものとしての人民及國家權力を尊重すると共に、他面には其法を導率するものとしての人民及び國家權力を制限せんとしたのである。故にフイツシャーの所謂矛盾は、カントの特色たる批評的方法を考慮すれば、或は容易に解除し得るものであらうと思はれるのである。たゞ主權が果して全く立法權と一致するか否かに就ては、其所説が多少誤解を導かないとも言へない。此事は次に説く所に於ても直ちに認知せられる所であらう。

五

法は絶對である。故に國家に於て此法を與へる最高機關に對しては、人民から合法的の抵抗をすることは出來ない。何者、合法的といふことは一般立法の意志に服從する場合に生ずることであるからである。斯くして一揆反亂(Aufstand, Aufruhr)の權は人民に存しない、況して君主の身體に危害を加へることは恕すべからざることである。苟くも是等を行ふものは皆謀叛を以て祖國を亡ぼさんとするもので、悉く死刑に處すべきものである。要するに人民は如何なる場合にも國家の最高權力に對して不滿を懷き、之に抵抗し、之を破壞することを圖つてはならない。何となれば、其は自ら法に從はざることになるからである。若し法を代表する最高權力を否定すれば、何物によつて人民と主權との間の合法性を判斷することが出來ようか、斯くしてカントは現實的歴史的の問題として、チャールス一世やルイ十六世を斷頭臺に上らしめたことを極力非難して居るのである。

此の如く人民の絶對服從を要求することはホッブスの論を想起せしめるものであるが、然しもし此說の如く、如何にしても國家の法律を改めることが出來ないとしたらば、其は又全く進歩も改良も説くを得ないであらう。然らば如何にして憲制を改正することが出來るか。カントは、之を主權其自身からの改革(Reform)によつてなすべきもので、人民より革命を起してはならぬとして、而して其はたゞ行政者の方に存するもので、立法者には存すべからざるものとして居る。然もなほ此機運を導くものがなければならぬ。其は人民より選出せられた代議士の會合に於て不法に對して法律的に抵抗する方法であるが、此場合も狹義の抵抗卽ち能動的抵抗は必ず避くべきものであつて、たゞ所動的抵抗卽ち拒絶

(Weigerung)といふ形を取るべきである。所謂拒絶するとは何ぞ。納税を拒絶することである。即ち豫算を協賛せぬことに當るであらう。たゞ此道によつてのみ人民は國家權力の濫用若しくは不正を矯正することが出來る。人民が若し革命を起し、憲制の改變を企て、或は又君主の廢立を謀る等の如き擧に出れば、公民は反て許多の不法に苦しむであらう。即ち廢主は再擧を謀り、僭王は諸所に起り、爲に又困難なる國際關係をも惹起するに至るのである。

六

國家權力は此の如く絶對である。然し其の絶對なのは其が法の代表者であるからである。故に其の作用は一切の法を確立するを得ると共に、其の權能は法を表すに足るべきものに限られて居る。既に述べた通り私法が眞に決定的に法となるのは公法に據るのであるから、國權は先づ此私法に所謂所有權を確立しなければならぬ。此に起る問題は國家の主權が國家の土地を所有するものであるか、或は所有關係に就て最高命令を與へるに過ぎぬものであるか、といふことである。蓋し土地は一切外的物件を所有する場合の基礎となるものであるから、土地の君主としての主權者は最高所有權を有するものとして、一切の權利を之より導いて來なければならぬ。但し人民は此君主の所有物ではなく、たゞ其の命令を受くるものなのである。即ちこゝに主權は土地を所有し、人民に命令するものであると言へる。然し此に所謂最高所有權はまた一の理念である。故に單に私有權を集合して成すものではない。隨て事實上に於ては最高所有者は何等の土地をも私有することは出來ない、即ち私有は各人に屬するもので、主權は最高所有權を有する限り、此の私有を保護するものなのである。此の如く主權にも私有がないとすれば、國家内の特殊の組合、例へば僧團、士族等が恣に土地を私有することは出來ない。

× × × × ×

君主は其命令を實行する爲に官吏を任命し、人々の功績を表彰する爲に爵位勳章等を受け、法を破る者に對して刑罰を課する。然も此場合に於ても其根柢に存する權力の源泉は法其ものである。故に君主は其官吏を任命した上は、之が合

法的行爲となるのでない限り、恣に之を迴孕することは出來ない。位動等に就ても同様である。卽ち是等は皆其能力功績に對してのみ合法的に存在するもので隨て功のある所には必ず存せねばならず、而して力のなき所には決して存することが出來ない。世襲の官吏とか貴族の特權とかいふものは凡て不法である。刑罰に就ても之と同様の事が言はれるが、其細論は法律上の問題であるから此には論及しない。

此の如く國家權力は法の代表者として國民の外的行爲に關しては絶對の權威を有するものであるが、然し各人の內的狀態にまで干涉することは出來ない。故に宗敎上の團體が、土地私有其他の點に於て國法に背く場合には之を禁止し得るが、其の內部に於ける信仰個條等に就ては、其が政治上の意義を有たぬ限り何等の抑壓を國家から受くべき理由はない。其他言論思想の自由の如きも、國家は合法的に之を尊重する所がなければならぬ。蓋し外的意義を有する法がかゝる內面の問題に入ることは矛盾に他ならないからである。斯くしてカントは論理上政治權力の範圍を制限したが、其中には彼の宗敎論の爲に蒙つた筆禍を追想して憤慨する所があつた點もあらうと思はれる。然し論據は飽くまでも國權の先天的基礎たる法の觀念に存するのである。

×　×　×　×　×

此の如くして國家の本質を論じ、其の作用を說いて終に其の範圍に論及した。國家自體の論は此で盡きて居る。然らば此國家が他の國家と對立する場合に如何なる關係を生ずるか。之を規定するものは國際法の論である。

「恒久平和論」中に平和の決定的條件として擧げたものゝ第一は「各國の憲制は共和的なるべし」といふのである。以上の國法論の旨意を要約すれば卽ち之に歸する。而して第二條件は實に之より述べんとする國際關係を規定するものである。

七

國際法は諸國家間の關係を規定するものである。蓋し一國民を構成する人々は一國內に生存するものとして、共通一系

の父祖を有する家族と考へることが出來るが、是等諸家族は自然狀態に於ては恰かも自然的個人相互の如き關係を有するものである。其中に法的關係が生じ、各家族は公民として存在するを得るやうになれば、こゝに其諸公民間に法的關係が生ずる。是が卽ち國際法の起る所以である。（國際法を普通 Völkerrecht といふが、前述の理由により寧ろRecht der Staaten といふ方が適切だとカントは言つて居る）而して諸國家の間に於て法的關係の行はるゝと否とが重要な意味を有することは實に戰爭であるから、國際法の主要なる問題は戰の前、中、後に於て如何にすれば法的關係が成立し得るかを定めることに歸する。

是故に國際法の原案を列擧すれば次の四點となる、卽ち（一）諸國家相互の外的關係を見れば自然的には非法的狀態にあること。（二）此狀態は戰爭の狀態である、尤も必しも實際の戰鬪といふことに限らないこと。（三）本源的社會的契約の理念に從へる諸國民間の同盟が必要であること。（四）其結合には主權はなく、たゞ聯盟として存すべきものであること。――此の如くしてカントは國際關係に就ても亦先天的基礎を說き、斯くして國家の對自他的性質を示し政治の對外的作用を規定したのである。

國際關係は固より戰爭と平和との問題のみではない。然し公法的關係より見れば其の最大なるものが結局之に歸することは疑はれない、而して當時の國際關係が權謀術數のマキアヱリ主義若しくは侵略奪掠の英雄征服主義によつて居たことが、會カントをして人類の自然狀態に想到せしめ、之に對する法的廓淸を思はしめたものである。然し其論據は既に述べた通り飽くまでも先天的基礎を離れない。從て其が事實に如何なる歷史的根據を有するか、といふことは問題ではない、此事は特に其の平和論に於て顯著である。然し之と共にカントが國際の自然關係を戰爭と見た點に於てホッブスの「萬人相戰」の原理を豫想したことを發見するが、彼の道德觀が峻嚴たる義務尊重主義によつて人々の性情好惡を抑壓する思想に傾くことゝ相呼應する所あることを覺らしめるのである。カントの先天的道德主義は其の性惡論に經略的根據を有するものである、而して法律論も凡て皆此根據によるものなのである。

さて國際關係を主として戰爭の方面から考察すれば、之には先づ戰前卽ち戰爭の原因に關する論策が考へられる。何

の理由によつて國家は其國民を他國家に對する戰爭に加はらしめることが出來るか。蓋し人々は其所有物に對しては之を自己の意志のまゝに使用することが出來る。故に若し國家が國民を其戰爭に使用するならば暗に之を假定するやうに思はれるであらう。然し國家の國土内に發生する植物動物等に就ては此の如きことを言ひ得るであらうが、公民に對しては其意志を恣に抑壓することは出來ない。其故に國家が戰爭に參加する爲には先づ國民の意志が之に贊同するといふことを豫想しなければならぬ。然し是は國家對國民の關係である。次に國家が國家に對して戰を宣し得る理由を尋ねなければならない。其點に於ては又法的關係の侵害を基礎とする他に途がない。所謂法的關係の侵害とは一國家が自己の法的存在を他國に侵害せられ其の絶滅の脅威を受ける場合を云ふ。要するに戰爭前の條件としては人民の合意と防禦戰との二點を擧げることが出來るのである。

次に戰爭中に如何なる態度を取るべきか。之に就ては戰爭は常に刑罰戰即征伐(Strafkrieg)であつてはならないと云へる。他の國家を征伐するとは卽ち之を罰することの意味であるが。罰は上より下に對する法的制裁であるから、本來同等なるべき國家の間に存する理由は無い。隨て責罰の意味に於て他國を絶滅し若しくは征服することはならない。之と共に戰時中敵國を奪掠すると如きも禁じなければならぬ。——是等は又平和論の中にも其準備條項として述べてある。

終りに戰後の法としては、卽ち適當なる時機に於て戰勝者が戰敗者に對して講和の談判を開始する時に生ずるものであるが、此場合に勝者は自己の優勝者たる地位を固守してはならない、例へば戰費を賠償せしめるやうな事は不法である。何者其の場合には敗者に對して刑罰戰を行つた形になるからである。同樣に敗者も之に降伏する形を取つてはならない、何となれば其場合にはやはり征伐せられたやうになるからである。

八

戰爭が終結すれば平和が生ずる。此平和の法にも三樣の條件がある。第一は隣國が戰をなす時に平和を保つと卽ち局外中立となると、第二には締結せられたる平和條約の繼續をなさしめる保證、第三には諸國家が聯合して共通の敵に對

して保護すること、である。而して此終りの點から不正なる敵といふ語の解釋を導いて來る。謂ゆる不正の敵なるものがあらば何等假借することを要しないものである。然し自然的狀態には正不正の別はない、而して戰爭の狀態は卽ち自然狀態であるから、此狀態から不正といふ語を用ゐることは自家撞着といはねばならないのである。故に國家の戰爭關係に於ては常に自國をのみ正しとする觀念を棄てなければならぬ。恒久平和を得る根本の要件は此處に存するのである。

カントの恒久平和論は實に之を基礎としてなつて居るものであるが、其中特に決定條件の第二として揭げてあるものは此國際法の基礎となるべきものを規定したるもので、卽ち各國家の聯盟を說いて居る。曰く、國際法は自由なる國家の聯合に基づくものたるべし。

カントの政治論國家觀は此平和論に至つて其高頂に達した。然しカント自身は彼のサン・ピエールやルソー等の平和理想が終に空想となつた事實に鑑みて、平和が直に實現せられ得べきものとは思はなかつた。其故に恒久平和は國際法の終極理想ではあるが然し到達し難き理念であると言つて居る。然し政治の理想は其處にあらねばならぬ。各國家は努めて之に近接するの義務を有するのである。之が爲には各國家は相合同して平和を圖るべき爲に永續的國家會議を開かなければならぬ。カントは十八世紀の初に海牙に開かれた此種の會議に於て歐洲各國の使臣が參集し一時は歐洲全國が一聯盟國家を形成する觀のあつたことを指摘し、其後其が空文に畢つたことを慨歎し、なほ之が今後不撓の精神を以て企圖せられねばならぬと說いて居る。カントの祖國が誘致した最近の大戰爭は終に其の祖國が征伐戰に敗れた如き運命を招徠すると共に、一方には其の百餘年前に說述したものと殆ど符節を合するやうな意味に於ける國際聯盟が唱道せられて、續て平和の最も重要なる準備條件たる軍備縮小が世界の問題として會議に上ることを想へば、哲學者の理念の意外に早く現實界に移ることを想はざるを得ないのである。

九

國際法は交際友誼を有する國家相互の關係を規定するものであるが、未だ此の如き國交を生じないが然も相互に平和

な關係を維持する地球上諸民族間にも亦法的關係が生じ得る、之を世界民間の法と稱するものである。國際間にすら戰爭の如き自然狀態が存在するのであるから、此の如き世界民の間に嚴密な法が生ずることは一の理念と思はれるが、然し理念としては存在し得る。恒久平和論の決定條件第三に之を說いて各人民を好遇すべきことを擧げて居る。曰く世界民法は一般的好遇の條件に制せらるべし。

所謂國際法と世界民法との區別は理論上不明なるを免れない所もあるが、要するに直接親密なる關係にあるものの間に於けると否との法律規定をいふものである。而して主として歐洲各國をのみ國際法の下に置くと見たカントの時代に適應せる解釋は、世界民法を以て海洋を隔つる國との法的關係を示すものとして居た。海洋を以て隔離せる國々には言ふ迄もなく米國があるが、是は一部分は既に國際法の支配を受けて居ることは言ふまでもない。たゞ其他に於ては單なる交通關係の存するのみである。此點からは濠洲其他の諸群島や亞細亞諸國、隨て恐らくは日本支那等皆世界民法を以て支配せらるべきものである。恒久平和論に於ては特に日本の例を擧げて、侵略的意志を以て交際を求むるものに對して鎖國政策を取ることの寧ろ賢明なることを說いて居るのは、鎖國其のものを賞贊するのではなくして、當時の歐洲各國殊に英國が侵略主義を實行して居たことを非難することが主なる目的となつて居たのである。卽ち此場合に於ても國際の平和關係が世界民法に於ても先天的基礎たることを示すものである。

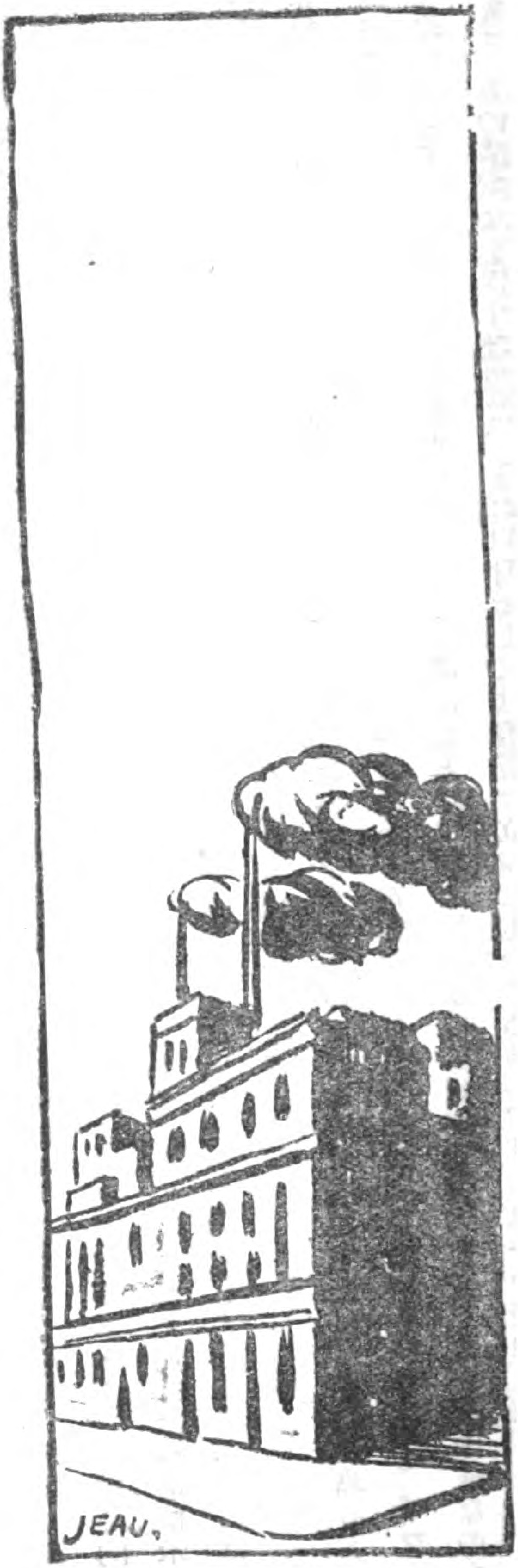
カントは一方に海洋の隔離を以て世界民法の特質を說いたが、同時に海洋が航海によつて反て諸國土を接近せしむるものたることを述べて居る。是は固より然るべきことで、古代諸國が地中海沿岸に於て早く交通自在であつたことを考へれば、たとひ今日の如き汽船飛行機等の存在しない世の中にあつても、既に廣土地發見の行はれた上は海洋を以て交通阻害の條件とする理由はない。其故に事實上海洋を以て遠隔せる土地の間に、交通の利便と共に反て惡風の感染し易きことを述べ、更に未開人の土地を占領することの可否を論じて、苟くも土人の生存する所は、文化を名として濫りに之を奪掠すべからざることを痛論し、全然法の立場から歐洲の世界政策を非難して居る。

此の如くしてカントは、國家が其內政に於ても外交に於ても、常に戰爭を起らざらしめるやうにすべきことを切言し

て、平和は即ち單に國法の一目的たるに止まらず實に全目的であると結論して居る。而して此平和は即ち全法的關係を各人の間に於て完全に履行する場合に生ずるもので、或は之を以て迂遠若しくは空想なりとするものがあるとしても、實は反て日常人々の說く所と多く異なつて居ないのである、彼の「最良の憲制は、人に非ずして法が威力を有する所に存す」といふことは即ち此意に他ならない。即ち國家政治の理想は法に從つて平和を圖ることに他ならない、而して恒久平和を政治的至善として之に接近することを圖らねばならぬのである。

十

以上はカントの政治哲學の大要を主として其の道德哲學によつて叙述したものである。「恒久平和論」は種々の點に於て其所說を補ふもので其點は既に屢觸れて置いた。なほ二三の小論文があるが其等は格別肝要とも思はれない。たゞ觀過すべからざることは其の歷史哲學が政治史を以て歷史の中心として居る所の思想である。歷史は人類の墮落によつて始まる。即ち人性中に存する非社交性よりして鬭爭の生ずる所に歷史が其卷を開くのである。然し歷史の中心たる政治現象は常に自由なる法的國家の平和を理想とする。此平和、從て各國の法的自由は歷史の先天的要素或は範疇となるもので、人類の非社交性、相互の爭鬪の事實は歷史の經驗的資料を構成する事である。此の如くしてカントの政治哲學は其の歷史觀と不離の關係を有するものである。此歷史哲學に就ては嘗て少しく評論したことがあるから、今は之を省略し、たゞ再び、カントの政治哲學が其歷史觀と同じく人性の背法的事實を認めつゝ其の先天的要素として合法的平和を說いたものであることを附記したい。而して之と共にカントの政治論に於ける外見的矛盾は、其の先天的要素を說く特殊の方法を會得すれば必しも矛盾とすることが出來ないものである、といふことを力說して置きたいと思ふのである。



華盛頓會議と極東の將來

バートランド・ラッセル

極東問題は極めて複雜であつて、華府會議が結局どんな結果を齎らすかを推測することは甚だ困難であり、いかなる結果を吾々が望むべきかを推定することは、一層困難である。私は種々の問題を順々に片つけて行きたいと思ふ、がそれは此複雜な問題を單純化するためではなく、支那の問題を取扱ふ場合に望ましく思はれる所の或猶豫を生ぜしめることを目的として居るのである。私は亞米利加、日本、露西亞、及び支那の利害と希望とを順々に考量し、どの場合にも、是等の種々なる要求や希望のいかなる部分が、全體としての人類の福祉と一致するかといふ點を計つて見ようと思ふ。

私は華府會議の首腦者たり、世界に於ける支配的勢力たる亞米利加から先づ始めようと思ふ。米國の輿論は平和を愛好し、同時に、米國は賢明で高德であるのに、他の列強はすべて愚鈍で不德であると深く信じ切つて居る。此意見の樂觀的な前半については私は敢て異議を唱へようとしないが、悲觀的な後半の方は疑問である。平和問題を別として、米國の輿論は英米文化の主たる要素とも看らるべき商業、工業、新教の道德、體育、衞生、並びに僞善を信仰して居る。僅かに一人の例外の外、私が極東で出會つた總ての米國人は、名目上基督教の宣傳と關係の有る無しに拘はらず、米國文化の宣傳をやつて居た。私が僞善といふ時、それは意識的な僞善を意味せず、アングロ、サキソンの主なる力を形成する、かのより深い、無意識な要素を意味するものであることを斷つておかねばならぬ。ヂイスレリーがグラッドストーンを稱讃して彼も亦他の政治家同樣に取つて置きの秘策をもつてはゐたが、その策は神の授け給ふたものであると信じてゐた點に於て、他の政治家とは異つて居つたと云つたことのあるのは、誰しも知つてゐる。英吉利の特徵であつた此態度は、バーナード・ショーのような人物の諷刺に依て、吾々英國人の間では大分下火にさせられた、けれども米國に於ては、今日も猶此態度は五十年前の英國の通りに榮えても居り、本氣に信ぜられて居るのである。斯樣な態度には無理ならぬ所も多い。グラッドストーン時代の英國は今日の英國よりも、一層精神的勢力をもつて居り、現下の亞米利加に、(露西亞以外の)他の總ての列強よりも多く、精神的勢力をもつてゐる。けれどもグラッドストーンの精神的熱情より、彼の後繼者の皮肉な帝國主義への發達は、吾々には避け難いことゝ思はれる。そしてこれと同樣な發達は米國にも起るに違ひない。故に吾々が合衆國の勢力伸張が望ましいことか望ましくないことかを考量しようと思ふ時には、將來に於ける此殆ど確實な理想主義の喪失を念頭におかなければならぬのである。

理想主義も亦、その犧牲となる相手の者には常に純粹な幸福を齎すものではない。理想主義は、さほど恐るゝに足らず、さほど強大でない人民を世界に安住せしめ得る唯一の力たる寛容や共存主義と兩立し難いものである。ザワ〳〵した實際的慈善事業の中には、藝術や思索の存在し得ぬことは、春の清潔法の眞只中で書物を書くことが困難なのと同斷である。春の清潔法を促す理想は、それ自身としては有益な立派なものであるが、其れ以外の理想に依て[illegible]にせられ

ぬ限り、荒んだ、不愉快な世界を生じがちのものである。

一寸考へるとこんなことは華府會議とは緣の遠いことのように思はれる、けれども日米の葛藤を正解するためには、是は最も重要な點である。私は在來米國が支那にとつての最上の友であり、日本が最も惡い敵であつたことは、一も二もなく認めてよいと思ふ。また日本が、勝利の見込さへ立てば決して戰爭を避けぬ樣子があるに引換へ、米國が世界の平和を促進するために、列强中最も力を盡して居ることは事實である。斯樣な見地から、私は我英國政府が米國と親交を結んで、日英同盟の軍國主義的排他主義を擲つたことを喜ぶ者である。けれども私はこれが、日本に對する敵意を以て行はれ、又は米國の未來の善意に對する盲目的信頼を以て爲されることを希望する者ではない。そこで私は、現在に於ては、米國の立場より日本の立場の方に弱味があるもの丶、日本の立場も辯じておきたいと思ふのである。

第一に、現下の米國の政策は、支那に關しても軍備問題に關しても、明白に世界のためではあるもの丶、同時に米國の利益のためであることは、同じく明白である。先づ海軍問題のことを云つて見ようならば、米國は、我英國と同等の海軍をもつてゐるので、我海軍の首腦に對して、英米戰爭が問題となり得ぬことを了解させるに足る力がある。隨つて米國は、必要な限りの制海權はもつことが出來るのである。米國人は日本の海軍については强硬であるが、英國を脅かすに過ぎぬ佛蘭西の海軍については極めて手柔かである。既に制海權を得て居る以上、海軍の軍備の制限は單に費用を減ずるばかりで、米國には何の損害をも與へずに、各國と一樣に利することゝなる。次に支那の問題に就いて云ふならば、支那に於ける米國の野心は經濟的なもので、全國が合衆國の商工業に對して開放されることを希望するにすぎない。米國のように富裕な、經濟的强國にとつては、勢力圏の政策は、一般的門戸開放の政策ほどに有利でない。そこで吾々は支那及び軍備問題に對する米國の自由主義的な態度によつて、米國の利益に反する場合にも亦、米國がさうした自由主義的な態度を持するものと期待することは出來ないのである。

實際、米國の利益又は偏見の交つた問題になると、自由主義的な、人道的な原則は全く其方除けにされるといふ證據があるのである。私はパナマ通行稅、聯合國の軍事公債、及び對露通商の三つの例を擧げよう。パナマ運河の事につい

ては、米國は條約に依て、英國船の通過に對して特に差別を設けることは出來ぬようになつてゐる筈であるのに、議會の三分二の多數を以て、米國船の航海には特に便宜を圖る差別案を通過させた。聯合國の軍事公債については、キーネス氏の著書に寛容を以てせよといふことが述べられて、其書物の出版以來、此說は日每に勢力を得て來た。英國も遂に獨逸に對して經濟的寛容を示す必要を覺り始めた。けれども米國は、巨富を擁して居りながら、また彼女の所謂神聖戰爭なるものに對して、最初の數年間中立を保ち、米國が早く應援に來なかつたばかりに聯合國の負ふた負債額の全部を誅求して已まない、(註)對露通商の問題に就ては、英國の方が道を開いて、米國の方はボリセキキに對する敵意を頑として曲げなかつたのである。故に米國が常に高尚であるとも、人道的であるとも、自由主義的であると云ふことは出來ぬのである。その證據は、米國は是等の美德が自國の國家的又は寧ろ財政上の利益と一致する時には之を採用するが、其他の場合にもこれを應用し得るものとは氣づかぬらしいのである。

(註)此問題については、エッチ・ヂー・ウエルス氏の華盛頓會議論(マンチェスター・ガーヂアン紙)を參照のこと。此論文は一九二一年十二月十四日『米國に對する我負債償却問題』と題して現はれた。

勿論私は此外にも多くの例を擧げることは出來るが、今一つ擧げるだけに留めて置かう、それはこれが特に支那に關係のある問題だからである。私は米國の週刊雜誌『フリーマン』(一九二一年十一月二十三日發行、二四四頁)から引用する。

『十一月一日。支那政府はシカゴの大銀行から借出して其處へ支拂ふべき五百萬弗を返濟することが出來なかつた。國務省は最初此借款が成立する時に斡旋の勞を執つた。そして今、萬一の際は政府が援助を與へると云つた約束に隨つて北京に無線電信を掛け、常に支拂不能に終る結果は、支那共和國の財政上及び政治上の地位に最も重大な影響を及ぼすに至るであらうといふ警告を與へた。其間に新國際資本團に屬する米國銀行家は、返濟不能の借款と、其以前に既に期限の切れてゐる借款と、十二月一日が期限となつてゐる他の借款とを返濟し得べき金額を貸與しようと支那政府に申出た。此提言に對して國務省は、熱心な、十分な援助を與へた。即ち米國の財閥と政事家とは、同時に平和の勇士と惡漢とを兼ねてゐた譯である。彼等は共謀して危險な形勢を作つておき、さて愈々審判の際には、えらさうな顏をして

現はれ、支那政府が資本團と交渉をもつことを肯じさへすれば——そして結局米國の經濟的保護國となる下拵へをしさへすれば——支那を謂はゞ米國自身の手に陷らぬように救つてやるといふ申込をするのである。

北京政府が數次交際を繰返した末、資本團の申込通りの條件で借款を承諾せぬことに決したとは、玆に附言しなければならぬ。私の意見では、『フリーマン』誌上の同じ論文が次のように云つて居る通り、此決定には多くの尤も至極な理由があつたのである。『若し此計畫が實施せられたなら、それは資本團に屬する銀行家をして事實上の支那所有者たらしめたであらう。そして是等の銀行家の中で、此形勢から十分の利益を見るのは合衆國の銀行家許りである。』

米國の批評は此位にして置かう。次には日本の辯護に移る。

日本と列強との關係は、日本自ら求める所ではない。日本は世界に對して、只だ打捨て置かれることを望んだばかりである。がこれは白色諸民族、就中米國の望む所でなかつた。日本に始めて西洋の侵略主義を感知させたのは、ペルリ提督の率ゐる合衆國の艦隊であつた。間もなく、白人に對するには、これに服從するか、又は自分の武器で是と戰ふかの外に道のないことが明らかとなつた。日本は第二の道を採つた。そして獨逸人に仕込まれた近代的陸軍、英國に倣つた近代的海軍、米國から齎らした近代機械組織、及び西洋全體に倣つた近代的道徳を發達させた。英國人の外は何人も是に戰慄して、日本人を『黄色い猿』と呼んだ。けれども彼等は露西亞を敗かした後には尊敬し始められ、青島と半奴隷狀態の支那とを獲得した後、彼等はヴェルサイユに於て他の列強と平等の仲間入りをすることを許された。西洋が日本を認め出したのは、たゞその軍備のためばかりである。日本人の他のいかなる美質も、彼等を『黒人』と同視せられることから救ふことは出來なかつたであらう。

歐羅巴以外に出たことのない人々は、白人が皮膚の色の變つた人種に出會つた時發達させる、色に對する偏見の強さを到底想像するとは出來まい。私は最高の教育を受けた人々、例へば、デイン・インゲの如く教養ある人々が、脂じみた白人によつてまるで疥癬かのように扱かはれるのを見た。即ち彼等は本國では大公が辻掃除人に對しても取り得ないような態度で扱はれるのである。が日本人は強大な陸海軍をもつてゐるために、かうした取扱ひは受けない。個人として

の白人が個人としての日本人をもはや虐待し得ないといふ事實は、有色人種一般に對する關係の改善せらるゝ手始めとして重要である。若し日本人が敗戰の結果として强國の地位をかち得なかつたとしたならば、有色人種一般がそのために苦しみ、白人のやゝ衰微し始めた驕慢は再び勢を盛り返したであらう。世界も亦、工業的な西洋文明とは異る型の文明を保存する最後の機會を失つたであらう。

日本の文明は、其物質的方面に於ては、工業主義はまだ十分に發達してゐないものゝ、西洋文明と大同小異である。けれども其精神的方面に於ては、それは全然西洋と異り、特にアングロ、サキソンの國々と異つて居る。現人神としてのミカドに對する信仰は、總ての農村の小學校で巧妙に敎へ込まれ、國家主義に對する民衆的支持の大本となつてゐる。日本の國家的目的は、單に經濟的でなく、中世流に皇室的であり、領土的である。日本人の道德は功利主義でなくて、强烈な理想主義である。その基礎は親孝行で、ミカドは人民の父なるが故に——愛國主義も其中に含まれてゐる。日本人の思想には、十三世紀の皇帝と法皇の關係に見出されたやうな、×××な現實主義の缺乏が存してゐる。けれども歐洲に於ては皇帝と法皇とは別々の人間で、彼等の喧嘩は思想の自由を促進した、所が日本ではこの二つが一人の神聖な人物の中に結合され、何等かの疑問を起さすべき內部的矛盾衝突がない。

日本は支那と異つて宗敎的な國である。支那には或敎條が眞理であることの立證せられるまでそれを疑つてゐる、日本人はそれが虛僞だと證明されるまで信じてゐる。私はミカドは神であるといふ意見に對する反證のあることを知らぬ。日本の宗敎は本質的に民族主義的で、舊約時代の猶太人の信仰と似て居る。國敎となつてゐる神道は、主として一八六八年に發明せられたもので、(註)學校敎育に依て宣傳されて居る。(勿論古くから神道はあつたのであるが、現代の神道を構成する要素の大部分は新しいものである)。これは佛敎、基督敎及びイスラム敎のやうに、世界的ならんことを目がけてゐる宗敎でなく、日本人にだけあてはまるやうに出來てゐる種族的宗敎である。佛敎もこれと並んで行はれ、同じ人民によつて信仰されてゐる。結婚には神道の儀式を用ゐ、葬儀には佛式を以てするが常である、これは佛敎の方が不吉な場合に適してゐるためである。佛敎は世界的な宗敎であるにしても、日本の佛敎は英國敎會と同

しく、甚しく國民主義的なものである。佛敎の僧侶には結婚する者が多く、僧職が世襲となつて居る寺もある。その高僧は英國大僧正を偲ばせる。

(註) Rationalist Press Association の發行に係る、東京のビー・エッチ・チェムバレン敎授著『新宗敎の發明』といふ小册子を見よ。

日本人は工業的方法を採る場合でも、其美の感覺を失はぬ。日本人の商品は見掛け倒しだといふ非難もある。けれども彼等は工業主義に美術的趣味を適用する顯著な能力をもつてゐる。もし日本が富有であつたなら、彼等は經育のような近代的の方法で、ヴェニスのような美しい都市を作つたことであらう。工業主義は在來他のいかなる所にあつても、恐ろしい醜惡化を伴つた、どうしたら此醜惡化の潮を退けることが出來るかといふことを吾々に示して吳れる國民は、すべて吾々の感謝に價する。

日本人は眞面目な、熱烈な、意思の强い、驚くほどよく働く、そして理想のためには無限の犧牲を忍び得る人々である。彼等の中大抵のものは共通の缺點をもつてゐる、それはユーモアの缺乏、殘酷、狹量、及び自由思想に對する無能力である。けれども是等の缺點は決して普遍的なものではなく、彼等の間には異常に優秀な男女も多少はある。そして彼等の文明全體を通じて、最高の尊敬に對する剛健と堅忍とがある。

日本に於ける工業主義の成長は、社會主義と勞働運動との成長を作つた。(是等に關する優れた記述は、一米國社會學者の著に係る『日本の社會主義及び勞働運動』の中に出てゐる。ジャパン・クロニクル社發行)。支那に於ては智識分子の中に理論的社會主義者が屢々あるが、勞働團體がないために、今の處では理論以上に活動の餘地がない。然るに日本に於ては、勞働組合運動がかなりに進歩し、あらゆる種類の社會主義及び無政府主義の意見が、熱心に主張されてゐる。やがて日本が今よりも遙かに工業化されたならば、社會主義は政治的勢力となり得よう、目下の處では、私はまだ左樣になつてゐるとは思はぬ。日本の社會主義者も國民的迷信を信ぜぬ點に於て他國の社會主義者と同斷である。彼等は政府の非常な迫害を受けてゐるが、米國の社會主義者ほど甚しくはない、とは少くとも比較して判斷を下し得る地位にある一米國人の私に告げた所である。

今りなほ實權は數個の閥族の手に握られてゐる。憲法に依て、陸海軍大臣は議會又は首相に對してゞなく、ミカドに對して直接責任を負ふてゐる。そこで彼等は外務省の好まぬ政策を固執することも出來、現に固執してもゐるのである。例へば若し外務省が浦鹽の撤兵を約束するとしても、陸軍省がそれにお構ひなく駐兵を決定することが出來、是に對して、何等の立憲的な改革も出來ないのである。少くとも日本の不誠意の幾部分は、此點に基いてゐる。勿論眞の議會政治を確立しようと望む政黨もあることはあるが、現行制度がかなり手酷い外交的屈辱を受けた後でなければ、さういふ政黨は權力を得さうにも思はれぬ。若し華府會議が外交的壓迫によつて山東及び浦鹽の撤兵を強制したならば、日本の内治に對するその效果は、蓋し優れたものがあるであらう。

日本人は自分には味方が一人もないこと、米國人は彼等の不倶戴天の仇敵であることを固く信じてゐる。××が久しい間には米國との戰爭を避け得られぬことゝ考へてゐるとは看取される。合衆國の經濟的帝國主義は太平洋上の恐るべき敵手の工業的發達を寛假せず、早速日本人は餓死か戰死か、二者共一を選ばしめ得らるであらう、そこで武士道が發揮されて、餓死よりも戰場を選ぶといふことになる、といふのが其云分であらう。日本のベルンハルディ（と呼ばれてゐる）佐藤海軍中將は、米國人には武士道が無いから敗北することゝなり、彼等は金儲け主義的精神のために、長期の戰爭の艱難辛苦に堪えることが出來まいと云つてゐる。勿論これはロマンチックな出たらめである。近代の戰爭に於ては、武士道は何の役にも立たず、米國人とても頑強で勇敢な點に於て日本人に劣る者ではない。戰爭は十年位續くかも知れぬが、日本の失敗を以て局を結ぶことは疑を容れぬ。

吾々は一九一四年以前の英獨間の形勢を絶えず想起させられる。獨逸人は、吾々英國人が使つたと同じ手段を用ゐて植民帝國を獲得しようとした、日本人も左樣である。吾々は外國人がさういふ手段を使ふ時には、それを凶惡視した、米國人も亦さうである。獨逸人はその工業を發達させ、商業上の競爭によつて我英國人の敵意を挑發した、日本人も極東の市場に於て、同じように米國人と競爭して居る。獨逸人は、吾々英國人の同盟者に依て包圍せられてゐると感じたが——尤も吾々の方ではそれを純然たる防衛的のものと考へてゐたのであるが——米國人の優れた外交的熟練が、英國を

米國の味方に引込れた今日、日本人も亦、華盛頓會議で孤立の狀態に在ると感じてゐる。獨逸人は遂に、主として彼等自身の造つた恐怖に强ひられて、全世界に挑戰した擧句、敗北した。獨逸の場合に於ける是非善惡は、日本の場合にそのまゝあてはまつてゐる以上、今更玆に委曲を盡すにも及ぶまい。けれども獨逸は全世界の覇權を欲したに反し、日本は東部亞細亞の覇だけを望むに過ぎぬといふ相異はあるのである。

日米間の衝突は表面上經濟的のものであるが、經濟的敵對は、より深い激情を蔽ふ外套であるにすぎぬ。日本はなほ國王の神權を信じてゐる。米國は商業の神權を信じてゐる。私は米國人に向つて、米國の對外貿易の擴張によつて利益を蒙らぬ民族もあるかも知れぬと說いて見たこともあるが、此企てはいつも何の効をも奏せなかつた。米國人は亦、彼等の宗教や道德や文化は、極東のそれに優つてゐると信じてゐる。これは殆ど總ての歐羅巴人の抱く考へではあるが。私はこれを以て妄想と看做してゐる。日本人は眞底から、そして彼等の全力を以て、彼等自身の文化を持續し、歐米人のようになることを避けようと努めてゐる、そして此點に於て、私は彼等に同情せねばならぬと考へるのである。歐洲人よりも米國人の間に、有色人種に對する偏見が强烈である。日本人は、黃色人も亦、白人と平等のものたり得ることを證明しようと決心してゐる。此點に於ても亦、日本人の方が正しく、且つ人道的である。斯樣に、經濟上及び外交上の確執の下に潜在する、より深い原因については、私は米國人よりも日本人に同情する者である。

所が不幸にも日本人は短氣と輕蔑とに依て、いつでも間違つた遣方ばかりして居る。彼等は自分らのために要求したと同じ考慮を、支那のためにも要求すべきであつた。さうしたならば、彼等は常にその口にする通り、歐洲に對する亞細亞の選手となり得たのである。支那人はよく恩を感ずる人民である。若し日本が支那の眞の味方であつたなら、忠實に日本を助けたに相異ない。けれども日本人は歐洲人より酷く支那人を輕蔑する。日本人は東洋の劣弱といふ信念を破壞しようとはせずに、自分らが西洋のものであるかの如くに取扱はれようとばかりする。そこで彼等は當然至極な支那人の憎惡を買ふような振舞をしたのである。そして此振舞が、最良の米人をも最惡の米人と同じく、彼等に敵對せしむるに至つたのである。若し米國の日本に對する敵意には下等な理由の外何もないのだとしたならば、日本は合衆國に多

くの選手をもつてゐた筈である。所が現在の狀態では、一人としてさういふ味方がない。今ならまだ遲くない。今ならまだ日本人が支那の同情を得、最良の米國人の尊敬をかち得ることも出來るのである。これを仕遂げるには、日本は共對支政策を變更し、もつと民主的な××を作らねばならぬ。がもしこれを仕遂げなかつたとすれば、日本は獨逸のように倒れるであらう。そして日本の破滅は、人類にとつての非常な災とならう。

日米戰爭はそれ自身としても恐ろしく、其結果に於ては更に恐ろしいものである。それは日本の文明を破壞し、支那の西洋文化に對する屈服を更に確實にし、米國を世界的軍國的帝國主義の事業に追ふであらう。故に日米戰爭は、極力之を避くべきである。これを避けんがためには、日本は一層自由主義的にならねばならぬ。そして日本が一層自由主義的になるためには、××××××歸して信用を失ふの外ない。故に獨り支那の利益のためのみならず、日本の利益のために、日本が英米の外交的壓迫によつて旅順港と其附帶地方の滿洲一帶及び山東を放棄せしめられることは結構である。(私が此例外を認めるのは、日本人は實際の戰爭による外、決して旅順港を手放す望みがないからである。)日露戰爭終結以來の日英の同盟は、日本が誤つて行うた所をすべて獎勵して居つたようなものである。何も日本が吾々よりも惡かつたといふ譯ではないが、或種の犯罪は非常な强國となりて始めて犯すことを許されるのに、日本はやつと强國の仲間入りをするかどうかといふ時分に、輕卒にもさうした犯罪を犯したのである。日英同盟は日本の誤謬を助ける原因となつたので、その同盟の終結は、日本の改善に必要な條件なのである。

次に吾々は對支問題に關する露西亞の立場を論ずる順となる。歐洲では露西亞を癈疾者と看做す傾向がある。けれどもこれは妄想である。何百萬の人々が飢え、工業が中止の狀態に陷つて居ることは事實である。けれどそれは一層よく組織された國での飢や工業の中止とは意味が違つてゐる。露西亞はなほ波斯及びアフガニスタンの方面で英領に侵入することも出來れば、外蒙古では日本の勢力を侵すことも出來る。露西亞はなほ亞細亞の總ての國々に於て、ボリセヰキの宣傳を行ふことも出來る。そして此宣傳の效力の大部分は、亞細亞を歐洲から解放するといふ約束にあるのである。今までの處、支那本土に於ては、私有資本主義の時代を通過せずに工業を發達させる方法としてボリセヰキズムを歡迎す

る年少學生の外、此主義に感染してゐる者は一人としてない。ボリセキキが資本主義に復歸することを强ゐられることが多いだけ、學生間に於ける此信念ゝ減少するであらう。のみならず露西亞に發達したボリセキズムは次のような理由によつて、特に支那には應用でき兼ねるものである。即ち（一）ボリセキズムは强固な、中央集權的國家を必要とするに反し、支那は極めて弱い國家である、そして中央集權よりも聯邦制度に傾く傾向を益々多く示してゐる。（二）ボリセキズムは政府に俟つこと極めて多く、未だ曾て見られたことの無いほどに個人の生活に對する統制が行はれて居る、然るに支那は驚くべき程度に個人的自由を發達させ、世界中で最も無政府主義の教理の實際的應用が成功しさうに見える國である。（三）ボリセキズムは個人的取引を憎むが、これは文人以外の總ての支那の生命である。是等の理由によつて、信仰としてボリセキズムが支那で非常な發展をしようとは思はれぬ。けれども政治的勢力としてのボリセキズムは、信仰としてのボリセキズムとは別ものである。アフガニスタンの元首や蒙古の遊牧民に對して用ゐられた論法は、ランズベリー氏との議論に用ゐられたものとは恐らく異つてゐたらう。亞細亞に於けるボリセキキの發展はボリセキキ特有の現象といふ譯ではなく、帝政時代の官吏よりも精勵で賢明で且つそれほど腐敗して居らぬ人々が傳統的露西亞政策を繼承したにすぎず、その人々は米國人と同じように、單なる帝國主義的膨脹でなく、人類解放の事業に從つてゐるのだと自ら信じてゐる。此信念は勿論、ボリセキキ的帝國主義の力と成功とを大に助け、且つ亞細亞に於ける發展の衝動を與へるものである、此衝動は、外國の武器に頼つて其玉座と生命とを保たうとする新しいコルチヤツクの下に帝制が事實上回復されるのでない限り、一寸消滅しさうにも思はれぬ。

故に若し國際的關係が或種の發展を遂げれば、露西亞が滿洲を再び獲、滿洲の支配に依て何國と雖もかち得る所の北京に對する勢力を回復しようと試みることも、決して無いとは限らぬ。日本が榮えて居る間はかういふ企ては恐らく成功すまいが、日本が米國若くは英國と戰爭を始めたならば、これは忽ち進捗するであらう。故に露西亞が次の十年若くは二十年間に、日露戰爭前のような對支關係をもつ立場を回復するかも知れぬといふ想像には、何の不自然なこともない。また露西亞は植民化の本能をもつて居り、數世紀來東方へ移つて來て居たのである。此傾向は過去七年間の災禍に

よつて中絶されたが、久しからずして再發するに相違ない。

亞細亞に於ける露西亞の覇權は、決して恐ろしくないものだと私には思はれる。露西亞は恐らく英國人、米國人、又は日本人と同樣の××を行ふだけには強くなり得まい。のみならず露西亞人は亞細亞人と平等の關係を保ち、相互の諒解を得ることが出來る位、その考へ方に於ても性格に於ても亞細亞的である。そして、もしそれが成立し得たならば、此亞細亞の防衛は、攻撃には弱いが防禦には強く、結局平和を保障することになるたであらう。故に大體としてかような結果がもし來るとすれば、それは人類全體の利益のために望ましいことであらう。

然し華府會議に關する支那の利害と、會議が終つた時に生ずべき形勢とは、どんなものであらうか。支那にとつて理想的に最善なことは、香港、滿洲、山東を回復し、其後放置して置かれることであらう、支那の混亂が鎭定するにはまだ〳〵時が掛らうが、結局支那に適當な制度が確立せらるゝには違ひない。外國干渉によつて支那の混亂を人爲的に終結させることは、外國貿易と工業とに取つて好都合な然し恐らくは支那人自身の要求には不適當な制度の確立を意味する。第十七世紀に於ける英國人、第十八世紀に於ける佛蘭西人、第十九世紀の米國人、及び今日の露西亞人は、各々其政府と内亂の時代を經て來たもので、其れは彼等の發達のために缺くべからざるものであり、外國干渉によつて切上げられたならば、最後の解決に重大な損害を受けたに相異ないものである。支那とても同じことである。西洋の政治思想が古い帝政を掃蕩したが、その代りに何等の鞏固なものをも確立するまでに、未だ力が備はらずに居る。支那を近代的な國にする問題は中々困難で、支那人がその解決を企てるまで、外國人は我慢して控えて居るべきである。支那人は自國を理解するが、吾々には理解できぬ。若し打捨て置かれたなら、彼等は結局自己の性格に適する解決を見出すであらう。が吾々外國人は決してそれをせぬ。彼等自身が徐々に達した解決は鞏固であるが、列強によつて課せらるゝ早熟の解決は人爲的であり、隨つて鞏固でない。

けれども華府會議が支那に利益を與へる望みは極めて少く、大抵の場合、却て損害を與へることが多からう。どういふ決定が與へられるかは、もはや大分明白になつて來た。滿洲に於ては現狀が維持され、山東に於ては日本が多かれ少

かれ不十分な讓歩をするであらう。四國——米、佛、英、日——は、互に競爭せず、一致して支那を搾取することに同意しよう。借款に關しては資本團が出來て、それが財政上の權力を得、隨つて支那の事實上の政府となるであらう。餘分の資本を澤山もつてゐるのは米國人だけであるから米國人が資本團を支配することにならう。米國人は米國の文明を以て世界に冠たるものと考へて居るのであるから、彼等は支那人を强壯な基督信者にしてしまふであらう。米國文明の第一の花形は財閥者流であるが故に、支那は彼等を富ませるからに統治せられなければならぬ、さうすれば財閥者流は、その代りに大學、病院、基督教青年會を國內至る所に建て、彼等の邸宅の中に葬り去るために支那の藝術的珍寶を買はせようとして、代理人を雇入れる。支那の學者や先覺者は米國のそれと同じく、トラスト王から金を貰つてゐるので、急進的な改革論を主張することは出來ないであらう。此制度の確立は、西洋の社會主義者によつてさへも、平和と自由との大勝利として歡迎されるであらう。

然しながら牝豚の耳で絹の財布を作り出すことは出來ぬと同じく、資本主義から平和と自由を求めることも不可能である。英、佛、米、日の四國協定は、恐らく平和の保障でもあらう。けれどもこれは平和を近づかせるだけ、それだけ自由を遠ざけることゝなるのである。これは競爭し合つてゐた會社が合同したことに依つて得られた平和であつて、以前の競爭によつて利益を得てゐた者にとつては、決して有利ではないのである。（私が此問題について感じたことは、ブレールスフオード氏が一九二一年十一月三十日發行の『ニウシ・パブリック』誌に、『平和の新技術』と題する論文の中に餘薀なく書いて在る）。門戶開放の原則を侵さずに支那を支配することは、決して不可能ではない。此原則は財政上に於ても貿易上に於ても、米國が最も强大な國である以上、至る所米國の支配に歸すべきであるといふことを保障してゐるにすぎない。支那の利益と一致する或事、及び一致せざる或事に關する保障を得おくことは、米國にとつて有利である。米國人は貿易とよき投資とのために、支那に鞏固な政府が確立せられ、人民の購買力が增大し、他國による領土侵略の恐れがないことを望むであらう。けれども彼等は支那人が自分らの鐵道や鑛山を自分らの手で運轉し得るほどに强くなることは望むまい。そして彼等はあらゆる經濟的獨逸の企てを憎み、特に（當然期待せられるように、）それがレニ

ンの所謂國家資本主義、即ち國家社會主義の形を執つた時には一しほ惜むに違ひない。彼等は米國の管理の下にある大學で敎育される總ての學生について一々記錄表をとつて置き、社會主義又は急進的な思想を抱く者は就職の出來ぬようにするに相異ない。彼等はゴルキーが米國を訪問した時、彼を追ひ立てさせる原因となつた、僞善の標準を强ゐるに相異ない。彼等は美を亡してその代りに整頓を齎らす。要するに彼等は、支那が、其工業に依て生み出した富を自ら保有することを許されぬことの外、すべて能ふ限り『神自身の國』の通りになることを求めるであらう。支那は世界に對して過去に於て與へたと同じように貴重な、文明への貢獻を、新たに與へることが出來る。がこれは米國人が米國の文明を完全なものだと思つてゐたのに、妨げられるであらう。

資本主義の理想は――もし出來得ることなら――トラストによつて資本家仲間の競爭を無くなし、たゞ勞働者同士の競爭だけを保存しておきたといふ點にある。勞働組合運動は或程度まで、進步した工業國に於ける賃銀勞働者同士の競爭を減少することに成功した。けれどもそれは異る種族、特に白色黃色勞働者間の葛藤を激しくしたのである。現行の經濟組織の下に於ては、亞米利加、カナダ及び濠洲に於ける低廉な亞細亞勞働者の競爭は、其等の國々に於ける白色勞働者にとつてかなりに有害である。けれども社會主義の下に於ては、精勵な熟練勞働者が人口の稀薄な國々に流入することは、何人にとつても明白に利益である。社會主義の下に於ては、何人を問はず、自分が消費する額以上に生產し得る男女の移住は、それだけ一人當りの富を增加することゝなるから、社會の他のすべての人々にとつての利益となる。けれども資本主義の下に於ては、仕事に對する競爭のために、多く生產したり、少く消費したりする勞働者は他の人々の自然の敵である。かようにして組織そのものが能率の低い勞働を助成し、且つ一般的利益と勞働者の個人々々の利益とを背反させるのである。米國人及び英領に於ける黃色勞働者の場合は、資本家制度によつて生ぜられた人爲的な利害の衝突の、最も不幸な例の一つである。來るべき數世紀に亘つて紛擾を惹起するであらう亞細亞移民問題の全體は、××××によつての外解決される道がない。それは此問題に含まれてゐる勞働者の個人的利益と、其民族及び世界の利益とを調和させる方法が、××××を措いて他には無いからである。

少數國民の手に富が集中し、その結果その少數國民が他の諸國民の總ての富を吸收し得るような制度は、貧しい諸國民を完全に屈服するよりほか、永久的平和を來しよう筈のないものである。久しい間には支那も工業の利益を外國人の手にのみ委ねておく理由のないことを見出すであらう。若し現在、露西亞を乾干しにすることに成功して、露西亞が外國資本に屈服したとしても、露西亞は時機が熟したならば、再び經濟的世界帝國に對する反逆を企てるに相異ない。故に私には、現に華府に於て形成されつゝある合同の結果として、何等の鞏固な世界的組織の確立が出來ようとも考へられぬ。その反對に吾々は、亞細亞が西洋の經濟組織に全然同化した後には、米國を資本主義の立役とし、露西亞を亞細亞及び社會主義の選手として、東西兩洋の間に、マルクス流の階級鬪爭が戰爭の形で勃發するであらうといふことを期待し得る。かような戰爭に於て亞細亞は自由のために戰ふのではあるが、其時には、今日亞細亞をば人類にとつて貴重ならしめてゐる特異な文明は、もはや保存されてゐないであらう。のみならず、此戰爭はいかなる種類の文明をも跡に留めぬほど、慘狀を極めるであらう。

要するに、公衆の熱心に興味をそゝる問題についての外、世界の事實上の政治は戰鬪が行ふのである。亞細亞人を米國及び英領から排斥することは、民衆の壓迫の結果で、大資本家の利益とは背反する所である。けれどもこれほど民衆の感情を動かす問題は他に多くなく、資本家の利益になるように誤傳されずに濟むほど簡單な問題は僅かしかない。亞細亞の移民のような場合でも、賃銀勞働者の反社會的な利益の原因となり、彼等をして偏狹ならしめるものは、資本家制度である。現行制度は、各々の個人の利益を、何等かの重大な點に於て、社會全體の利益と背反させる。個人の場合にあてはまることは、國民の場合にもあてはまる。現行經濟組織の下に於ては、一國民の利益が全世界の利益と一致することは滅多になく、稀に一致するのにホンの偶然の結果にすぎぬ。現行制度の下に於ても、國際的平和はかなりの程度まで確保し得られるが、それは強者が弱者を搾取するために結合することによつてのみ得られるのである。今や華府會議でさういふ結合が出來かゝつて居る。けれどもそれは結局、弱小國民が現在樂しんでゐる僅かの自由をも減少するに違ひないのである。

社會主義者が何百遍もくり返したように、現行制度の本質的害惡は、使用でなく利潤を目的とする生産にある。個人なり會社なり國民なりは、消費のためでなく、賣るために貨物を生産する。そこで競爭と搾取とが起り、國内の勞働問題及び國際關係に於ける一切の害惡が起つて來るのである。資本主義的方法により支那貿易の發達は、支那人にとつては、彼等の輸出品の價格騰貴と、外國品に對する新しい需要の人爲的刺戟とを促し、その結果は支那を其等の貨物を供給する人々の自由にし、現在の滿足を亡し、純然たる物質的目的の熱狂的な追求を來すのみである。社會主義の世界に於ては、生産は、消費者を代表すると同じ權力によつて調整せられ、競爭的賣買制度は、一切消滅するであらう。その時まで、搾取に對する屈服に依て平和を得、又は絶えざる戰爭に依て或程度の自由を得ることも不可能であるまい。けれども平和と自由とを共に得ることは不可能である。現在の米國の政策の成功は、暫時の間平和を齎らすことが出來ようが、弱小國、殊に支那のために自由を齎らすことは決して出來ない。此兩者と共に齎らし得るものは、獨り國際的××××あるのみである。そして資本家の壓制に對する叛逆の刺戟があるために、國際的×××が全世界に確立せられぬ限りは平和だけでも決して鞏固なものではあり得ぬのである。

ビスマークの見たるヰルヘルム二世

カール・カウツキー

廢帝ヰルヘルムが茶々を入れしが如き幾多の障碍があつたに不拘ビスマークの回顧錄第三卷は漸く最近に至つて獨逸語で世に公にせられたのである。而して單に一箇の歷史的地位即ち年少氣鋭の皇帝と老宰相との暗鬪――それは後者の免職を以つて終を告ぐるに至つたのである――を取扱ひし以外に本著は何等顯著なる新事實を摘發することなく、總て兩者の軋轢に關した重要な事件は既に世の知る處で、其間尚ほ未知の事實あるも、そは從屬的地位にあつた人物に關するもので廣く一般の興味を惹起さないのであるが、それにも不拘ビスマークのヰルヘルム觀には一種人を魅するものがある。既に宰相は皇帝親政の第一步に於て、其處には獨逸國民にとつて不幸なる要素たるべき短所弱點の存せしことを認めたことを吾人に示して居るのである。

兩者の間に繰り返された軋轢に就ては世人はビスマークよりもヰルヘルムに同情を寄す可く誘はるゝが如きであつた。即ちヰルヘルム二世が獨逸皇帝の位に即きし際には社會主義者に對する條例なるものは最早、融通の付かぬ狀態に存して居たのでビスマークは更に此條例を勵行し勞働者をして自暴自棄の狀態に陷らしめ即ち血に依つて彼等の息の根を止むることを以て彼は窮地に生を求めんとしたのである。此點に關して彼は其著回顧錄の中に次の如く云つて居るのである「現時に於ける社會民主黨は君主政治及國家に對して戰爭的危機を包藏する點に於て外國方面よりもより多く憂ふ可きものがある。之れを國家的方面より見れば法律上の問題でなくて內亂的な權力的な問題たらざるを得ないのであ

る」(回顧錄四二頁) 尙ほ同著の他の場所に於て彼がヰルヘルムに答へた中に「內亂となるか流血の慘事を來たすかに就ては、それは陛下や我等の立法的計畫の關する處でなくて寧ろ革命者の責任である、吾人にして危險なく許さるゝものとして一時屈して何處にか自己を支持す可き道を見出すにあらずんば血を見ずして事件の經過を求むることは困難であるといふことをお答したい。政府の反抗的態度が其時機を逸すれば逸するだけ其反抗は益々高壓的たらざるを得ないのである」(回顧錄五七頁) 而して此鐵血政策が獨逸帝國を其根柢より動搖せしむることゝ皇帝が其政府をして人民の虐殺を始めしめし場合に於て彼自身の被むる可き不測の殃とは正しくヰルヘルムの恐るゝ處であつたのである。かるが故に彼は社會主義者に關する條例の撤廢を試むると共に勞働者保護法に對して二三の改善を企てたのであるが、但しそれは極めて微々たるものであつたのである。

我等の同情と我等の理智的考量とは我等をして此兩者の暗鬪に於てヰルヘルム側の肩を持たしめざるを得ざるに不拘、然かも實際に於てかくならざる理由は必ずしもビスマルクの巧妙な叙述が我等をしてヰルヘルムに背かしむるのでなくて寧ろ事實の命ずる處である。ヰルヘルムが廣く世界一般に殊に彼自からの國民に對して齎らした怖る可き不幸によつて吾人が今日認め得る處をビスマークは既に皇帝政治の初期に於て觀破したのである。

ビスマークの苛酷なる政策と勞働者に對する憎惡とは我等に不快なる印象を與ふるに不拘、尙ほ彼の政策には周到なる注意と徹底的な考察とが存して居たのであるが、之れに反してヰルヘルムは其始めより單に虛榮的な皮相的な場當り的な喜劇役者に過ぎなかつたのである。

皇帝をしてビスマークに對抗せしめたものは帝が貧者を憫む人道主義や衷心の欲求でもなければ無產者階級の經濟的歷史的任務に對する理解の然らしめしものでもない。寧ろ之れが主なる動機は宰相の偉大なる人格に對する嫉妬心である。即ち宰相あるが爲に皇帝自身が日蔭者の取扱ひを受くるを心中快しとしなかつたことである。かくして皇帝自からの熱烈な要求は多數の中に人望を博することである。殊に此要求は次に述ぶるが如きことに依つて更に甚しきを加ふるに至つたのである。即ち彼の人格と彼の言辭に潛む魔力は誰人も歯向ふ能はずとの確信である。かくて彼は一般の民衆

が軍國的君主政體殊に君主自身に熱烈な愛を捧ぐることは最も容易なりと信じたのである。然かも以上の考が誤であることが明かになつた際に彼にはビスマークの如く勞働者に對する流血的抑壓の一事が迫つたのである。而して此點に於て彼の態度はビスマーク以上で。即ち彼は新兵に命ずるに彼等の父又は母を銃殺することを準備す可きことを以てしたのである。

ビスマークがヰルヘルムを描寫せし場合に帝に對して甚しき憎惡心の存せしことは明白である。然し此憎惡心は普魯西王國の救濟者たり獨逸帝國の創剏者たる宰相の目には此國歷代の王又たは皇帝の有せし缺點によつて更に甚しきを加えたのでらる。ホーヘンツオレルン家の歷史に通曉したビスマークが其著の第十章に於てヰルヘルムの性格觀を試みた場合に次の如き事實即ち獨帝は之れが祖先の幾多の缺點を具備化したものであることを認めたのは吾人の注意を促すものである。ビスマークの言に「帝は普魯西初代の王からして華美を好む風即ち祝賀の際などに美くしき服裝をして宮廷の儀式に列すること、最もお世辭を悅ぶ風とを受けて居るのである」「之れと類似の遺傳的相似性は帝がフリードリツヒ・ヰルヘルム一世の如き長大なる體軀の嘆美者であつたことである。世人は皇帝の侍從武官が一般民衆の中に立つた際に約六呎又たはそれ以上の稀有な身長を有する眞の士官のあるのに氣が付くのである」(同顧錄一二〇頁)

フリードリツヒ・ヰルヘルム一世とヰルヘルム二世と異なる點は前者が智的方面は重んぜなかつたが士官でなくて長大な體軀の所有者である兵士のみを愛したことである。

ビスマークは言を續けて「尙ほ明白なことは君主獨裁及思ひ、命令を正當視する信仰に關したフリードリツヒ・ヰルヘルム一世及フリードリツヒ二世の性癖を遺傳せることである」(同顧錄一二二頁)

更にビスマークが述べし處によれば、彼自からが簡單に虛榮心と稱した好意を表したき欲求を皇帝はフリードリツヒ二世に受けたとのことである。

「フリードリツヒ大王が彼の閣臣及諸官省の任務や彼の臣民の生活狀態に干涉した慣習は皇帝にとつては君主の美風として一時帝自身の模範としたのである。又公用文書の欄外に注意書をする性癖や批評的性質は自分が在職の際殊に頻繁

で、其結果執務上少からず不便を惹起したのである。何んとなれば其注意書の内容や表現の余りに仰山であるのは、自から其文書を秘密にするの已むを得ざるに至つたのである。自分は此件に關して皇帝に訴へしも顧る處とならなかつたのである」（同顧錄一二三頁）

而して廢位の際に至る迄斯くの如き行爲を繼續した皇帝自身程ビスマークの此忠告に耳を借さなかつたことを心より後悔して居るものはないと思ふ。

即ちそれに對する證據は後ちに公にせられた開戰に關する文書で、それは革命後に自分の手に到達したのであるが、爾來獨逸共和國は皇帝の秘密史を恰も以前忠實な王黨の徒輩がなしたが如く注意深く秘密にして居るのである。

ビスマークはヰルヘルムが欄外に注意書きをすることはフリードリツヒ二世と相似たる性癖たることを認めて居るが、然し後者は瑣々たる事件と雖之れを詳細に取調たに對して皇帝はどんな複雜なる事件と雖、單に一瞥を加ふるに過ぎないのである。

ビスマークは更に言を續けて「ヰルヘルム二世は二つの方面に於てフリードリツヒ・ヰルヘルム二世と相似て居るのである。即ち其一は性慾的發達の强大なことで、他は神秘的影響に對して或種の感受性を有せることである」（同顧錄一二五頁）

「皇帝とフリードリツヒ・ヰルヘルム四世との間に共通した點は天性能辯であること、又、屢々其必要なきに辯を弄し過ぎることである。更に皇帝は其言葉を操ることが極めて流暢であるが、然し其言葉を選擇する點に於て彼の祖伯父は非常に用意周到に精錬し且つ學問的であつた……

フリードリツヒ・ヰルヘルム四世とヰルヘルム二世との間に更に相似た點は王者單に王者のみが他人よりも最も能く神の意志を理解せるもので、之れによつて支配するを以て隨つて臣下に對しては其目的の如何を論じ告知することなしに之れが忠節を要求するのである」（同顧錄一二六、一二七頁）

更にビスマークの注意を喚起した點は、ヰルヘルム二世が何等子孫を殘さない即各自の特性を遺傳せしめないフリー

ドリッヒ二世及フリードリッヒ四世の如き祖先と幾多の共通點を有せるに對して彼の直系的な祖先と何等の類似點を示して居ないことである。即ち彼の曾祖父であるフリードリッヒ・井ルヘルム三世は非常に遠慮勝で何事も獨斷專行を忌んだのであつて、彼の井ルヘルム二世に見るが如き強き自負心や務めて公衆の面前に自己を衒ふが如き態度は少しも見るを得なかつたのである。

斯くの如きは明かに遺傳の法則によつて說明せらる可きものでなくて寧ろ以上舉げた人物の政治的思想を構成した歷史的條件によつて說明せらるゝのである。

井ルヘルム二世の以前三代の君主は少からず天祐說に於て彼と相似たものがある。然し彼等の政治思想は此天祐說が革命の波に揉まれた時代に構成されたものである。即ちフリードリッヒ・井ルヘルム三世は、佛蘭西大革命が勃發した際には十九歲で、革命の勝利は千八百六年エーナ戰役以後に於ける普魯西をして全く滅亡の淵に臨ましたのである。井ルヘルム一世は千八百四十八年普魯西國王の繼嗣者として國民的激昂の餘沫を受けて其身を避けざるを得なかつたのである。千八百七十五年彼は其兄の精神病の爲めに代つて攝政となり次で千八百六十一年フリードリッヒ・井ルヘルム四世の崩御と共に普魯西國王となるや當時國民は革命失敗の余波を受け。全歐洲には新自由の波漲り之が或者は革命となり現に伊太利方面には革命的の行動を開始するに至つたのである。而して王國の主權者は如何に考ふ可きか如何に指導す可きかを理解せざる徒と行動せし結果甚しく不安を感じたのである。ビスマーク出でずんばギルヘルム一世は千八百六十二年の政爭に於て讓位の已むを得ざるに至つたのである。

更に不安な外交的狀態として、其初めフリードリッヒ・井ルヘルム三世はナポレオン一世に對抗したのであるが、此帝國の崩壞後、王は孤立の狀態となりメッテルニヒの巧妙な政策に籠絡せらるゝに至つたのである。井ルヘルム一世はホーヘンツオレルン家が一般國民よりして非常な不信と憎惡とを受けて居た時代に普魯西國王の地位を占めたのである、當時墺太利や佛蘭西の失敗に乘じて白國の名聲を獲得し且新帝國を創設することは彼にとつては非常に困難であつたのである。普魯西が軍事上打破せられしに於ては多分其際佛蘭西の代りに普魯西否な全獨逸が共和化せられたと思ふ。斯くの

如き事情の下にホーヘンツオレルンの君主は内氣に保守的に且つ傑出せる人物に指導せしむる傾向を有したのである。

ヰルヘルム二世の場合は以上と全く異なつて普魯西は墺太利と佛蘭西とを征服し墺太利以外の獨逸全部は彼の覇權の下に統一せらたので、而してヰルヘルムは何者も抵抗すること能はざる力として百倍も試驗せられた世界最强の兵力の相續者たる意識を以て生立つたのである。外部に對する勝利は內部に對するものに相當し君主萬能時代が經過せし際に於て吾人は尙ほホーヘンツオレルン家の護衛兵たらざるを得なかつたのである。斯くの如きは明かに近世的狀態の下には反對者と之れが事業を完成するものなることを示して居るのである。

此自負的意識を以て王子ヰルヘルムは生立ち、其間彼を遮る何者もなく彼自身の意識は無限に發達し、而して彼が彼の祖先に得たるものにして且つ明かに君主專制時代の遺物たりし總ての特性を彼は自由に發露せしむる機會を見出したのである。彼は亦た俊秀の來たつて自己を助くることを信じて居たが、然し彼は單に己れの爲めに媚を賣るものを默許したのである。

古代の希臘人は放縱、驕慢の女神であるヒブリドに於て個人と全國民の破壞書を見出したのであるが此女神に屈從した同じ女神のアテは人間の目を眩まし且つ彼等に肉慾的な行爲を唆つたのである。此神々の魔力はヰルヘルムの精神界に於ける最も强大な本能力で彼は此力の爲めに破壞を追及し矛盾を事とし斯くしてホーヘンツオレルン家は終りを告ぐるに至つたのである。

獨逸は世界に於ける第一流の陸軍國で同時に歐洲に於ける最大の工業國である。斯くの如き同國の發達は一面皇帝をして十八世紀の專制主義の無意義な復活を求めんとする驕慢な態度に出でせしめたのである。然し同一の發達を又た勢成熾んなる勞働者階級や世界の强大な社會民主黨がなして居るのである。而して後者は其根本に於ては共和黨で軍國主義的國家と全く融和することの出來ない反對者である。此相 違性は單に一個の斷末魔を以て終りを告げたのである。

然し此の相違性は國內の政爭ではなくて對外的な紛擾によつて不時に解決せらるゝに至つたのであるが、只だ此紛擾に於てヰルヘルムは彼の國家を極めて不利益な條件の下に輕卒にも益々紛糾せしむる狀態に導たもので、それはホーヘ

ンツオレルン風ではなかつたのである。弗ルヘルムと君主專制時代に於ける彼の祖先との相似たる點を示せし丈では其處に彼と彼等との間に一個の相違せし點がある。即ちそれは外交政策に關したものである。

普魯西は最も強大なりと自負した諸國家の中で大國的な政策を實行するには余りに狹小であり余りに貧弱である。殊に此國にとつて不利益な點は其國境である。かるが故に此國の外交政策なるものは常に細心の注意を以つて進むことが必要である。即ち一方には鞏固な同盟を求むると共に他の一方には出來る丈け敵國を孤立せしむることを考量の中に入れなくてはならぬのである。曾てフリードリツヒ二世は七年間繼續した戰爭を開始した際に此方面の注意を逸した爲めに彼は非常に悔んだとがある。然し當時の彼は尙ほ絕へず一個の强國を同盟者として有して居たのである。即ちそれは偉大な海權と潤澤な資金とを兼有して居た英國である。弗ルヘルム二世の心に蟠つたヒブリスとアラは彼をして外交政策を遂行せしむるに極めて輕卒な態度を取らしめたのである。それはホーヘンツオレルンの歷史には類例のないことで同時にビスマークの外交とは全然相違したものである。內政上に於てビスマークの見地が支持するに困難であつたにも不拘外交上に於ける彼は彼を免職した弗ルヘルムの上にさながら高塔の如く聳えて居たのである。或國と戰爭を開始するに當つてビスマークが絕えず注意を拂し點は一面鞏固な同盟を準備すると共に他の一面に於ては敵國を孤立せしむることである。斯くして彼は千八百六十四年に丁抹と次で千八百六十六年に墺太利を孤立せしめ伊太利と手を握つたのである。又、彼は千八百七十年に佛蘭西を孤立せしめ露西亞によつて後顧の憂を除いたのである。而して彼は彼の同盟國の間に區別をなすことを知つて居たのである。彼は千八百七十九年墺太利と結んだのであるが、然し彼は同國が何等他に選擇の余地なきことと何等他に同盟者を見出す能はざることを能く知りぬいて居たのである。かるが故に彼は其政策を墺太利の要求によつて決定するが如き就中獨逸をして墺太利の近東政策の犧牲者たらしむる危險から避けしめたのである。弗ルヘルムの外交政策は全く之れと異つて居るが、それは我等の恐ろしく體驗せる處なるを以て玆に叙述しないのであるが、然し注意す可き點は彼の弱點が既に彼の政治の初期に於て一種の衝動として出現し、それをビスマークのみは既に觀破して居たのである。

既にヰルヘルムは未だ王子であつた際から好戰的の思想に浮かされて居たのである。ヰルヘルム二世の戰場に於ける赫々たる偉勳は皇帝の虛榮心的にとつては一種憧憬の中心であつたのである。千八百八十七年獨逸の參謀本部殊にヰルヘルムに對して非常な勢力を有して居たワルデルゼー伯が露西亞と一緒に戰爭に從事したことがある。(一三五頁)其年の十二月に王子がビスマークに與へた手紙は新年を祝ふと共に其處に平和なることを欲すると共に又戰爭のあらんことを欲する意志を仄かして居るのである。「戰爭が發生せざるを得ざる場合に貴方の記憶に存して頂きたい處は玆に手と劍とを準備した一個の人の存することである。而して彼等が彼等に歯向ふ者を有する時に彼は三度も單獨に戰つたフリードリツヒ大王が彼の祖先であることを充分に自覺せるものである。倘ほ其人は(これはヰルヘルムであつて恐らくフリードリツヒではない)彼の十年間の軍事的修業を無駄な骨折に化せしめないのである」(回顧錄一二頁)斯くてヰルヘルムは敵が既に目前に粉碎せらるゝが如く觀じたのである。既に十年の長きに亘つて士官の肩章を有して居る丈けでも既に勝利の充分な保證でないかと思つたのである。

千八百九十年三月當時露西亞に駐在した獨逸の一領事は勿體ぶつて一二の急信を本國政府に飛ばしたことがある。それは露西亞が一二の軍隊を——ビスマークは嘲弄的にコサツクの一二中隊と云つた——墺太利の國境に移したことである。

ビスマークは取るに足らぬ小事件を取扱ふ場合の如く此事件を冷靜の態度を以てしたのである。然るに之れに反してヰルヘルムはすは十年の修業腕を見するは今と云はんばかりに非常に興奮し事實衝突を齎らし能ふ如き態度を強要したのである。彼がビスマークに送つた手紙には次の如き文句がある。「此報告が最も明白に認めしむる點は露西亞人が完全なる軍事的編制の中に存することである。自分は此報告よりして得る處の甚だ少きを悲しまざるを得ないのである。此事實は既に長き以前より恐る可き危險として自分の注意に上つて居たのである。今は墺太利人に警告を發して之れが對抗策を講ず可き最も必要な時機である」(回顧錄八八頁)

ヰルヘルムが不祥な八月一日に於て露西亞方面の動員に宣戰の布告を以て答へた彼の無意義な突飛な行動に對する序

由は既に以上の書簡中に存するのである。勿論今回の開戰の際には、彼に不撓不屈の勇氣と冷靜なる考察とを注入したビスマークは彼れと共に存せずして只だあるものは無能な廷臣と好戰的な武人に過ぎなかつたのである。

ビスマークは其著の百四十三頁に彼の平息と皇帝との談話を記して居るが其中には少ビスマークの言として次ぎの如きものがある。「我邦の外交政策は陛下の耳に吹き込むことを能事とする好事家や武人の概觀するを許さざる熟考と細心の注意とを以て取扱はれた全體のものである」政治的好事家や武人の陰謀によつて孕まれた轉々變化する言葉や思ひ付に全く歸依した場合に於て戰爭非者を輕々に玩ぶことは丼ルヘルムの外交政策の一面で。更に他の一面は次に述ぶるが如き點より發生したものである。即ち彼は諸外國も亦た自國民の如く彼の人格と辯舌とに到底敵せざるものと速斷したことである。常に彼の實際的政策と其駄辯的な戰爭的威赫が列强をして獨逸に對して含む處あらしむるも、彼は此間に於て堅く次の事を信じたのである。即ち單に彼の一二のお世辭によつて列强の有力な政治家連は直ちに彼に歸依するものと考へたのである。然し彼の無駄話が屢々其期待を裏切つた如く彼は之れによつて何者も豫知することが出來なかつたのである。又それに向つてビスマークの著は既に一箇の例證を提供したのである。

千八百八十九年の夏、丼ルヘルムはペーテルホーフに時の露帝アレキサンダー三世を訪問したことがある。勿論それは將來の親交を厚ふする爲であつたのであるが。其後ビスマークが露西亜方面から得た情報によると露帝は丼ルヘルムによつて最も不快な印象を受けしと共に帝が彼を手嚴しく批評したことはビスマークをして其言を獨帝に報告することを躊躇せしめし程猛烈であつたのである。ビスマークは何事も大膽にさらけ出して居る彼の著書に於て一度も此間の消息を當時の言葉に於て繰り返すことを敢てしなかつたのである。

千八百八十九年十月露帝は獨帝に對する返禮として伯林を訪ふことをよぎなくせられたのであるが、丼ルヘルムは却つて總て世界は彼によつて魅られしことを信ずるに至つたのである。斯くて帝は此遠來の客をスパラの獵場に招待したのである。

ビスマークは當時尙ほアレキサンダーの批評に對する上揭の報告を手にしなかつたにも不拘、此兩君の會合に對して

殆んど何等の期待を有しなかつたのである。而して彼は彼自身の信ずる處を獨帝に報告するの義務たることを信じたのである。

「それは（長時間の訪問）アレキサンダーに對して心からの欵待たり得たかは自分が疑はざるを得ない處である。・・・兩君主の性格や思想上の相違を自分程知ぬいて居るものは恐らく今の時代にないと思ふ。而して此場合に於て自分の恐るゝ處は何等事務上の拘束なくして兩君主が長く席を同ふすることは衝突と機嫌を損ずることに赴くのである。兩國政府の了解を求むる上に於て露帝の信をおき難き防禦計畫と我君主の攻擊的興味とを何等必要なくして接觸せしむることは自分にとつては憂ふ可き要素である。」（回顧錄一四四、一四五頁）

ビスマークの忠告があつたに不拘ヰルヘルムは其次年再度露帝を訪問した際にビスマークの杞憂とした處は實現せらるゝに至つたのである。而して此訪問は露帝の不機嫌を更に甚しくするに過ぎなかつたのである。以上はヰルヘルムが其威厳なき子供らしき攻擊的な興味によつて其目的を誤つた初期の場合であつて。然し最後の場合ではないのである。而して斯くの如き獨帝の性向は戰爭に對する神經過敏的行動の如き帝自からの一般的な驕慢と僞瞞の如く其結果に於て歐洲及獨逸をして高き代價を拂はしめたのである。

既に五十年前ビスマークは斯くの如き性格中に存する危險性を觀破したのである。但ビスマークの政策も亦た何等好結果を齎らさゞることは吾人の斷言し得る處で、內部に對する如く外部に對してもホーヘンツオレルンの地位は國民の欲求を抑壓せんとする點に存したのである。無產者階級に對する勢力的な壓迫や千八百六十四年から千八百七十一年に至る侵畧主義の政策殊にアルサスの併合は早かれ遲かれ復讐せらる可きものであつたのである。

ビスマークの政策はヰルヘルムの政策と同じく坐礁せし難破船の如きもので後者と同じく斷末魔の中に終りを告ぐる可きものであつたのである。然しホーヘンツオレルン家の崩壞はビスマーク的精神によつて其政策を遂行する場合に於て或偉大なるものを求め得るとも決して侮辱と不名譽とを被むることはなかつたのである。而して其崩壞たるや狂妄的政策即ち獨逸全國民が國家の根本的な破壞によつて遭遇せし如き狂妄的な政策の結果ではなかつたのである。

nicht kannte. Und er hielt sich für verpflichtet, seine Bedenken Wilhelm mitzuteilen.

"Ich erlaubte mir Zweifel, ob es (der längere Besuch) dem Kaiser Alexander willkommen sein werde—Die Verschiedenheit Charaktere und Denkweisen der beiden Monarchen war vielleicht keinen Zeitgenossens bekannt wie mir, und diese Bekanntschaft liess mich befurchten, dass ein langeres Beisammensein ohne jede geschaftsmässige Kontrolle zu Friktionen und Verstimmungen fuhren konne .....Im Interesse des Einvernehmens beider Kabinette hielt ich es für bedenklich, die misstrauische Defensive des Zaren mit der aggressiven Liebenswurdigkeit unseres Herrn ohne Not in enge unde lange Beruhrung zu bringen." (S. 144, 145)

Bismarck Befurchtungen erfullten sich, als Wilhelm trotz seiner Warnungen den Zaren im nächsten Jahre nochmals besuchte. Das Ergebnis war eine Verstarkung der personlichen Verstimmung beim Zaren.

Es war das erste, aber nicht das letzte Mal, dass Wilhelm ebenso wurdelose wie kindische aggressive Liebenwurdigkeit ihren Zweck verfehlte. Sie ist in ihren Konsequenzen Europa und namentlich Deutschland ebenso teuer zu stehen, wie das nervose Spielen mit dem Krige und die allgemeine Ueberhebung und Verblendung des Kaisers.

Schon vor einem Menschenalter erkannte Bismarck die Gefahren, die jene Characterzuge in sich bargen. Nun darf man wohl sagen, dass Bismarcks Politik ebenfalls zu keinem guten Ende geführt hatte. Wie in Innern, war auch nach aussen die Stellung der Hohenzollern auf Vergewaltigung der Bedurfnisse der Volker aufgebaut. Wie die gewaltsame Niederhaltung der proletarischen Bewegung, musste sich auch die Eroberungspolitik von 1864-1871, namentlich die Annexion des Elsass, früher oder später bitter rächen.

Die Bismarcksche Politik war ebenso zum Scheitern verurteilt, wie die Wilhelmsche, musste ebenso wie diese in einer Katatsrophe enden.

Aber der Sturz der Hohenzollern hatte sich bei Befolgung einer Politik im Bismarckschen Geiste in Grosse vollzogen, nicht in Schimpf und Schande. Und er ware nicht die Folge einer so wahnwitzigen Politik gewesen, so wahnwitzig, dass die ganze deutsche Nation durch den Zusammenbruch in ihrem Lebensnerv getroffen wurde.

tatsachlich einen Konflikt hatten herbeiführen konnen. Er schrieb an Bismarck in Handbillet, in dem es hiess:

"Die Berichte lassen auf klarste erkennen, dass die Russen im vollsten strategischen Aufmarsch sind (!!) Und ich muss es sehr bedauern, dass ich so wenig von den Berichten erhalten habe. Sie hatten mich schon langst auf die furchtbar drohende Gefahr aufmerksam machen konnen! Es ist die hochste Zeit, die Oesterreicher zu warnen und Gegenmassregeln zu treffen." (S. 88.)

Sieht man darin nicht bereits ein Praludium zu jener sinnlosen Voreiligkeit, mit der Wilhelm an dem verhangnisvollen I August die russische Mobilisierung mit der Kriegserklärung beantwortete? Freilich, damals hatte er keinen Bismarck neben sich, der ihm Festigkeit und Kaltblütigkeit eingeflosst hatte, sondern nur kopflose Höflings und kriegssachtige Soldaten.

Auf Seite 113 seines Buches teilt Bismarck ein Gesprach seines Sohnes mit dem Kaiser mit, in dem der jungere Bismarck sagte:

"Unsere auswartige Politik sei ein durchdachtes und sorgsam behandeltes Ganzes, welches die Amateurpolitiker und Militars, die Seiner Majestat in die Ohren bliesen, nicht übersähen."

Leichtfertiges Spielen mit dem Krige bei widerstandlosser Hirgabe an wechselnde Stimmung und Einfalle, die genahrt wurden durch die Intrigen von Amateurpolitikern und Militars-das war die eine Seite der auswartigen Politik Wilhelms. Eine andere ihrer Seiten erwuchs daraus, dass er dem Ausland ebenso wie dem eigenen Volks gegenüber an die Unwiderstehlichkeit seiner Personlichkeit und namentlich ihres Redeschwalls glaubte. Wie immer seine sachliche Politik und auch seine prahlerischen Kriegsdrohungen fremde Matchte gegen Deutschland aufbringen mochten, er war fest überzeugt, dass er den leitenden Staatsmännern jener Matchte bloss einige Liebenswurdigkeiten zu Ahnung davon, wie oft sein Geschwätz das gerade Gegenteil bewirkte. Auch dafur berichtet das Bismarckische Buch bereits ein Beispiel.

In Sommer 18889 besuchte Wilhelm den Zaren Alexander III. in Peterhof, naturlich um seine Feundschaft zu gewinnen. Bismarck aber bekam spater Berichte aus Russland, die zeigten, dass der Zar einen zehr ungunstigen Eindruck von Wilhelm gewonnen und sich so schaif über ihn geaussert habe, dass Bismarck bedenken trug, diese Aeusserungen dem jungen Kaiser mitzuteilen. Nicht einmal in seinem Buch, das sonst kein Blatt vor den Mund nimmt, wagt er, sie in ihrem Wortlaut wiederzugeben.

Indes aus Höflickeit fuhlte sich der Zar gezwingen, den Besuch in Berlin zu erwidern, Oktober 1889. Wilhelm war so überzeugt, dass alle Welt von ihm bezaubert sei, dass er sich bei dieser Gelegenheit ohne weiteres beim Zaren zu einem neuen langeren Besuch in seinem Jagdschloss Spala einlud.

Bismarck war davon wenig erbaut, obwohl er damals noch die oben erwahnten Berichte über die Aeusserungen Alexanders

sieben Jahre dauern sollte. Er hat das schwer gebüsst. Und doch hatte er sich damals immerhin einen starken Verbündsten gesichert, das seegewaltige und geldreiche England. Wilhelm II. Hybris und Ate liessen ihn die auswartige Politik mit einer Leichtfertigkeit betreiben, die beispiellos ist in der Geschichte der Hohenzollern, und die im schroffsten Gegensatz steht zu der Bismarcks. So unhaltbar des letzteren Standpunkt in der inneren Politik geworden war, in der auswartigen stand er turmhoch über den Manne, der ihn den Laufpass gab. Stets hatte Bismarck, ehe er sich zu einem Kriege entschloss, für starke Verbundete gesorgt und für die isolierung des Gegners. Er isolierte Dänemark 1864, er isolierte dann 1866 Oesterreich und griff esim Bunde mit Italien an. Er isolierte Frankreich und sicherte sich die Rückendeckung durch Russland 1870. Und er wusste einen Unterschied zwischen seinen Allüerten zu machen. Er verbundete sich 1879 mit Cesterreich, aber er wusste ganz genau, dass dieses keine andere Wahl hatte, keinen anderen Verbundsten finden konnte. Er lehnte es daher ab, seine Politik durch Oesterreichs Wunsche bestimmon zu lassen und vor allem Deutschland durch Förderung der osterreichischen Orientpolitik zu gefahren. Wie ganz anders Wilhelm auswartige Politik! Wir haben sie schaudernd miterlebt und brauchen sie nicht nochmals hierzu Darstellung zu bringen. Bemerkenswert aber ist, dass ihre nur Bismarck beobachten konnte.

Schon als Prinz spielte Wilhelm mit dem Gedanken des Krieges. Seiner Eitelkeit schwebte Friedrich II. Kriegsruhm vor. In Jahre 1887 war der deutsche Generalstab, vor allem Graf Waldersee, der starken Einfluss auf Wilhelm hatte, für den Krieg mit Russland. (S. 135) Im Dezember richtete der Prinz einen Brief an Bismarck, in dem er ihm Gluck zum neuen Jahr wunschte, "sei es zum frieden, sei es zum Krige."

"Falls das letztere sich ereignen sollte, mögen sie nicht vergessen, dass hier eine Hand und eine Schwert bereit sind von einem Manne, der sich wohl bewusst ist, dass Friedrich der Grosse sein Ahnherr ist und dreimal soviel allein bekämpft hat, als wir jetzt gegen uns haben, und der (das ist Wilhelm und nicht etwa Friedrich) seine zehn Jahre militarischer Ausbildung nicht umsonst hart gearbeitet hat." (S. 12.)

So sah Wilhelm die Gegner schon zerschmettert vor sich. Trug er doch schon zehn Jahre lang Offiziersepauletten-war das nicht Siegesburgschaft genug?

Im Marz 1890 machte sich ein deutscher Konsul in Russland wichtig, indem er in einigen Depeschen mitteilte, dass Russland einige Trupen-Bismarck sagt verachtlich "einige Sotrien Kosaken"—an die osterreichische Grenze versetzt habe. Bismarck behandelt die Sache mit grösster Kaltblütigkeit als das, was sie wert war, namlich als eine unerhebliche Kleinigkeit.

Wilhelm dagegen, dank seiner zehnjahrigen "harten Arbeit" an militarischer Ausbildung, geriet sofort in grösste Aufregung und forderte Schritte, die

einem überragenden Kopfe leiten zu lassen.

In einer ganz anderen Situation wuchs Wilhelm II. auf Preussen hatte Oesterreich und Frankreich niedergeworfen und das ganze ausserösterreichische Deutschland unter seiner Führung geeinigt. Wilhelm wuchs auf mit den Bewusstsein, der Erbe der straksten Militarmacht der Welt zu sein, deren unwiderstehliche Kraft hundertfaltig erprobt worden war. Und dem Siege nach aussen entsprach einer nach innen. Wohl waren die Tage des offenen Absolutismuss vorbei, man musste auf das Parlement Rucksicht nehmens Aber die erbittere te Opposition von ehedem hatte sich in eine begeisterte Leibgarde der Hohenzollern vewandelt. Diese hatten anscheinend gezeigt, dass sie imstande seien, auch unter modernen Verhaltnissen mit jedem Gegner fertig zu werden.

Mit diesem stolzen Bewusstsein wuchs Prinz Wilhelm auf. Er sah keine Hemmungen vor sich und konnte sein Selbstbewusstsein masslos entwickeln und frei alle die Eigenschaften entfalten, die er von seinen Vorfahren ererbt hatte und die unbedenklich gewesen waren in der Zeit des Absolutismus. Da glaubte er auch, jedes überlegenen Ratgebers entraten zu können. Er duldete nur noch Schmeichler um sich.

Die alten Griechen sahen in der Hybird, der Götten des Uebermut und der Ueberhebung die Verderberin Einzelner und ganzer Völker, der die Ate folgt, eine Gottin, die die Menschen verblendet und zu unsinnigen taten aufreizt. Diese Machte waren die starksten Triebkrefte in Wilhelm Seele. Sie jagten ihn ins Verderben und schufen jene Widerspruche, an denen die Dynastie der Hohenzollern zu Grunde ging.

Deutschland war zum ersten Militarstaat der Welt und zum grossten Industriestaat Europas geworden. Diese Entwickelung erzeugte auf der einen Seite in seinem Kaiser jene Ueberhebung, die ihn zu sinnloser Neubelebung der absolutistischen Allüren des 18. Jahrhunderts trieb. Aber die gleiche Entwickelung schuf auch die starkste Arbeiterklasse, die starkste Sozialdemokratie der Welt, eine Grundsätzlich republikanische Partei und unversöhnliche Gegnerin der Militarmonarchie. Dieser Gegensatz konnte nur mit einer Katastrophe enden.

Aber vorzeitig wurde sie entfesselt nicht durch inneren Kampf, sondern durch einen auswärtigen Konflikt, in den Wilhelm seinen Staat unter den ungunstigsten Bedingungen Leichtfertig verwickelte. Das war nicht Hohenzollernsche Art. Soviel Aehnlichkeiten Wilhelm mit seinen Vorfahren aus der absolutistischen Zeit aufweisen machte; in einem unterschied er sich von ihnen, in seiner ausseren Politik.

Preussen war der kleienste und aermste unter den Staaten, die sich stark genug fühlten, Grossmachtspolitik zu treiben, und seine Grenzen waren die ungunstigsten. Es musste daher in seiner ausseren Politik stets mit höchster Vorsicht vorgehen, namentlich auf starke Verbundete und möglichste Isolierung des Gegners bedacht sein. Einmal hat Friedrich II. diese Versicht ausser Acht gelassen, als er den Krieg entzundete, der

rauensvollen Gehorsam verlange ohne sein Ziel mit den Untertannen zu diskutieren oder denselben kundzugeben. (S. 126, 127)

Bismarck findet es merkwürdig, dass Wilhelm bei so vielen Uebereinstimmungen mit entfernteren Vorfahren, die keine Nachkommen hinterliessen, also ihre Eigenart nicht vererbten, wie Friedrich II. und Friedrich IV., keine Analogie mit seinen nächsten direkten Vorfahren aufweist, seinem Urgrossvater Friedrich Wilhelm III. seinem Grossvater Wilhelm I und seinem Unte Midrich III, Ihnen allen war" grosse Zurückhaltung und ein gewisse schüchternes Mistrauen in die eigene Leisting fähigkeit " eigen, das in grellem Kontrast steht zu dem Uebermass "zuversichtlichen Selbstvertrauens" und zu dem Drang, sich offentlich zur Schau zu stellen, bei Wilhelm II.

Nach den Gesetzen der Vererbung ist das freilich nicht zu erklären. Wohl aber geben die historischen Bedingungen, unter denen das politische Denken jedes der Genannten sich bildete, eine Erklärung ihrer Eigenart.

Die drei direkten Vorfahren Wilhelms II. hangen nicht minder an ihrem Gottesgnadentum, wie dieser. Aber ihr politisches Denken bildete sich zu einer Zeit, in der dieses Gottesgnadentum schwar mit der Revolution zu kampfen hatte. Friedrich Wilhelm III. war 19 Jahre alt, als die französische Revolution ausbrach, deren Siegeszug Preussen 1806 nach der Schlacht von Jena an den Rand völliger Vernichtung brachte. Wilhelm I. hatte 1848 als Kronprinz vor der Volkswut fluchten mussen. Als er 1875 nach der geistigen Erkrankung seines Bruders zunächst Prinzregent und nach Friedrich Wilhelm IV. Tod 1816 König wurde, hatten sich die Volker allenthalben von den Nachwirkungen der Niederlage der Revolution erholt und Europe wurde von einer neuen starken liberalen Welle überflutet, die mitunter geradezu revolutionäre war, In Italien auch tatsachlich revolutionare Wirkungen auslöste. Die Herren Monarchen bekamen es da mit Elementen zu tun, die sie weder begriffen noch zu leiten verstanden, denen gegenüber sie sich sehr unsicher fühlten. Ohne Bismarcks Energie hatte Wilhelm I. im preussischen Verfassungskonflikt 1862 abgedankt.

Dazu kam ihre unbehagliche auswärtige Lage. Friedrich Wilhelm III. sah sich zuerst Napoleon I. gegenuber. Nach dessen Sturz wurde er isoliert und eingekreist durch die überlegene Staatskunst Metternichs. Wilhelm I. wieder wurde Monarch in einer Zeit, in der die Dynastie der Hohenzollern auf weit Missachtung und Abneigung im eigenen Volke stiess, sodass es ihm schwar gefallen wäre, sich zu behaupten, wenn es ihm nicht gelang, neues Prestige zu gewinnen durch Oesterreichs und Frankreiche Niederwerfung und die Aufrichtung des neuen Kaiserreichs. Wäre Preussen damals militarische unterlegen, so hätten jene Jahre vielleicht anstatt Frankreich Preussen, ja ganz Deutschland die Republic gebracht. Unter diesen Umständen wurden die fuhrenden Hohenzollern schüchtern, zurückhaltend und geneigt, sich von

Der Unterschied zwischen Friedrich Wilhelm I. und Wilhelm II. ist da nur der, dass selbst Friedrich Wilhelm bloss bei den gemeinen Soldaten auf Körperlänge sah, nicht bei den Offizieren, obgleich er wahrlich für intellektuelle Qualitäten nicht allzuviel übrig hatte.

Bismarck fährt fort:

"Ausgeprägter noch ist die Vererbung der Neigung Friedrich Wilhelm I. und Friedrich II. zu selbstherrlicher Leitung der Regierungsgeschäfte und der Glaube an die Berechtigung des sic volo, sic jubeo." (S. 122)

Von Friedrich II. übernahm Wilhelm, wie Bismarck weiter ausführt, dessen "Beifallsbedürfnis," das er dann kurzweg "Eitelkeit" nennt.

"Auch die Gewohnheit Friedrichs des Grossen, in die Ressorts seiner Minister und Behörden und in die Lebensverhältnisse seiner Untertanen einzugreifen, schwebt Sr. Majestät zeitweise als Muster vor. Die Neigung zu Randbemerkungen in dessen Stil, verfügenden oder kritisierender Natur, war während meiner Amtszeit so lebhaft, dass dienstliche Unbequemlichkeit daraus entstand, weil der drastische Inhalt und Ausdruck dazu nötigte, die betreffenden Aktenstücke zu sekretieren Vorstellungen, welche ich darüber an Sr. Majestät richtete, fanden keine gnädige Aufnahme." (S. 123)

Niemand wird diese ungnädige Ablehnung heute mehr bedauern, also der Exkaiser selbst, der von der Unsitte seiner mitunter geradezu unflätigen Randbemerkungen auf historischen Dokumenten bis in seine letzten Regierungstage nicht lassen konnte.

Eine Probe davon bieten die Akten über den Kriegsausbruch, die an die Oeffentlichkeit zu bringen, mir nach der Revolution gelang. Seitdem "sekretiert" leider die Republik die Geheimgeschichte des letzten Kaisers ebenso sorgfältig wie es ehedem die getreusten Monarchisten taten.

Bismarck bemerkt, dass Wilhelm die Randbemerkungen mit Friedrich II. gemein hatte, dass sie bei letzterem aber das Ergebnis gewissenhaften Studiums der Verhältnisse, damals noch ziemlich einfacher Verhältnisse, waren, während die Noten Wilhelms nichts darstellten als flüchtige Augenblickseinfälle über äussert komplizierte Dinge.

Bismarck fährt fort:

"An dem Erbe Friedrich Wilhelm II. ist Kaiser Wilhelm II. nach zwei Richtungen hin nicht unbeteiligt. Die eine ist die starke sexuelle Entwicklung, die andere eine gewisse Empfänglichkeit für mystlische Einflüsse." (S. 125)

"Mit Friedrich Wilhelm IV. hat der regierende Kaiser die Gabe der Beredtsamkeit und das Bedürfnis gemein, sich ihrer öftere als geboten, zu bedienen. Auch ihm fliessen die Worte leicht zu, in der Wahl derselben war aber sein Grossoheim vorsichtiger, vielleicht auch arbeitsamer und wissenschaftlicher.—Mit Friedrich Wilhelm IV. hat Wilhelm II. darin eine Aehnlichkeit, dass der König, und er allein, den Willen Gottes näher kenne als andere, nach demselben regiere und deshalb vert-

wurde. Er war daher für Aufhebung des Sozialistengesetzes und einige, allerdings recht geringfugige Verbesserungen der Arbeiterschutzgebung

Unsere Sympathien und verstandesmässigen Erwägungen mussten uns veranlassen, in diesem Konflckte für Wilhelm Partei zu ergreifen. Und doch ist dazu nicht imstande. Es ist nicht etwa die Kunst der Darstellung in Bismarcks Buche, die uns gegen Wilhelm einnimmt, sondern die Sprache der Tatsachen. So wie wir Wilhelm heute sehen, nach dem furchtbaren Unheil, das er über die Welt und vor allem uber sein eigenes Laufbahn.

So abstossend Bismarck Harte und Arbeiterhass auf uns wirkt, so imponiert uns doch der wohldurchdachte, konsequente Aufbau seiner Politik. Wilhelm dagegen ist von seinen Anfangen an nichts also ein eitler und oberflächlicher, nach Effekten haschender Komödiant.

Es war nicht Humanitat, nicht Bedürfnis, den Armen zu helfen, auch nicht das Verstandnis für die ökonomische und historische Rolle des Proletariats, was ihn veranlasste, sich Bismarck entgegenzustellen. Sondern es war in erster Linien Eifersucht gegen die riesenhafte Personlichkeit des Kanzlers, durch die er sein eigenes Personchen in den Schatten gestellt sah. Dazu gesellte sich das heisse Verlangen, popular zu werden bei den Massen, das verstarkt wurde durch die Ueberzeugung, dass dem Zauber seiner Personlichkeit und seiner Worte niemand widerstehen könne, sodass es ihm ein Leichtes sein worde, die Massen für die Militärmonarchie und vor allen dem Monarchen selbst zu begeistern.

Als sich zeigte, dass er falsch spekuliert hatte, lag ihm die blutiee Niederwerfung der Arbeiter ebenso nahe wie Bismarck. Ja er ging wohl über diesen hinaus, wenn er seine Rekruten darauf hinwies, sie müssten bereit sein, auf Geheiss auf Vater und Mutter zu schiessen.

Es ist kein Zweifel, dass grimmiger Hass die Feder Bismarck bei der Darstellung Wilhelm führt und diese färbt. Aber eben dieser Hass hat auch die Augen des Retters des preussischen Königtums und Begründers des deutschen Kaisertums für die Mangel seines Konigs und Kaisers geschärft. Eigenartig ist es, dass der Kenner der Hohenzollernschen Gechichte bei seiner Charakterisierun Wilhelms im zehten Kapital seines Buches zu dem Ergebnis kommt, der Kaiser stelle die Summe der Mängel und Laster seiner Vorfahren dar, sei ihnen erblich belastet. Bismarck sagt:

"Von unserem ersten König hat er (Kaiser Wilhelm) die Practlebe, die Neigung zu einem durch das Costume gehobene Hofzeremoniell bei feierlichen Gelegenheiten, verbunden mit einer lebhaften Empfanglichkeit für geschikte Anerkennung——"

"Gleiche erbliche Ankiange zeigt der Kaiser an Friedrich Wilhelm 1. zuerst in der Vorliebe für "lange Kerls." Wenn man die Flügeladjutanten des Kaisers unter das Mass stellt, so findet man fast unter Offiziere von ungewöhnlicher Körper länge, um 6 Fuss herum und draüber." (S. 120)

Wilhem II, gezeichnet von Bismarck.

Karl Kautsky.

Kurzlich ist es endlich gelungen, den dritten Band der "Gedanken und Erinnerungen" Bismarck in deutscher Sprache zu veröffentlichen, trotz der vielen Hindernisse, die der Exkaiser Wilhem der Herausgabe in dem Weg legte, was gerade nicht auf ein gutes Gewissen schliessen liess.

Der ganze Band behandelt nur eine einzige historische Situation, das Ringen zwischen dem jungen Kaiser und dem alten Kanzler, das mit der Entlassung des letzteren endete. Der Band bringt auch keine grossen neuen Enthullungen. Alle die Vorgänge von Bedeutung während jenes Duells waren bereits bekennt geworden. Die noch nicht bekannten Details betreffen untergeordnete Persönlichkeiten und haben alles allgemeine Interesse verloren. Und dennoch fesselt die Lekture durch das Charakterbild Wilhelms das Bismarck gibt. Es zeigt, dass der Kanzler schon bei den ersten Schritten des neuen Kaisers alle die Schwächen und Fehler erkannte, die der deutschen Nation so verhangnisvoll geworden sind.

Die Situation, in der der Kampf der beide Gegner ausgefochten wurde, war derart, dass man versucht sein konnte, Wilhelm sympatischer zu finden als Bismarck.

Als Wilhelm II. zur Regierung kam, war das Sozialistengesetz in der Form, in der es bestand, nicht mehr aufrecht zu halten. Bismarck suchte sich zu helfen dadurch, dass es es verschärfte und die Arbicter zu Verzweiflungsausbrüchen trieb, die blutig zu ersticken waren. Er sagt darüber selbst im vorliegenden Band:

"Die Sozialdemokratie involviert gegenwartig im höheren Grade als das Ausland eine Kriegsgefahr für Monarchie und Staat und muss innere Kriegs-und Macht-, nicht als Rechtsfrage von staatlicher Seite aus angesehen werden." (S. 42)

Und an anderer Stelle erwidert er Wilhelm:

"Ich entgegnete, ob es zu Aufruhr und Blutvergiessen käme, hinge nicht von Sr. Majestät und unseren Gesetzesplanen ab, sondern von den Revolutionaren, und ohne Blut wird es schwelich abgehen, wenn wir nicht mehr, als ohne Gefahr zulassig, nachgeben, und irgendwo standhalten wollten. Je später der Widerstand der Regierung einträte, desto gewaltsamer werde er werden mussen." (S. 57)

Mit Recht furchtete Wilhelm, dass diese Blut-und Eisenpolitik das Reich in seinen Grundfesten erschuttern und ihn selbst in eine unmogliche Lage versetzen musste, wenn er seine Regierung mit einem Blutbade an seinem Volks beginnen

hington; but it can only diminish, in the long run, the little freedom now enjoyed by the weaker nations.

The essential evil of the present system, as Socialists have pointed out over and over again, is production for profit instead of for use. A man or a company or a nations produces goods, not in order to consume them, but in order to sell them. Hence arise competition and exploitation and all the evils both in internal labour problems and in international relations. The development of Chinese commerce by capitalistic methods means an increase, for the Chinese, in the prices of the things they export, and the artificial stimulation of new needs for foreign goods, which places China at the mercy of those who supply these goods, destroys the existing contentment, and generates a feverish pursuit of purely material ends. In a socialistic world, production will be regulated by the same authority which represents the needs of the consumers, and the whole business of competitive buying and selling will cease. Until then, it is possible to have both peace and freedom. The success of the present American policy may, for a time, secure peace, but will certainly not secure freedom for the weaker nations, such as the Chinese. Only international Socialism can secure both; and owing to the stimulation of revolt by capitalist oppression, even peace alone can never be secure until ························ is established throughout the world.

---

wealth per head. But under capitalism, owing to competition for jobs, a worker who either produces much or consumes little is the natural enemy of the others; thus the system makes for inefficient work, and creates an opposition between the general interest and the individual interest of the wage-earner. The case of yellow labour in America and the British dominions is one of the most unfortunate instances of the artificial conflicts of interest produced by the capitalist system. This whole question of Asiatic immigration; which is liable to cause trouble for centuries to come, can only be radically solved by ········, since ········ alone can bring the private interests of workers in this matter into harmony with the interests of their nation and of the world.

The concentration of the world's capital in a few nations, which, by means of it, are able to drain all other nations of their wealth, is obviously not a system by which permanent peace can be secured except through the complete subjugation of the poorer nations. In the long run, China will see no reason to leave the profits of industry in the hands of foreigners. If, for the present, Russia is successfully starved into submission to foreign capital, Russia also will, when the time is ripe, attempt a new rebellion against the world-empire of finance, I cannot see, therefore, any establishment of a stable world-system as a result of the syndicate now being formed at Washington. On the contrary, we may expect that, when Asia has thoroughly assimilated our economic system, the Marxian class-war will break out in the form of a war between Asia and the west, with America as the protagonist of capitalism, and Russia as the champion of Asia and Socialism. In such a war, Asia would be fighting for freedom, but probably too late to preserve the distinctive civilizations which now make Asia valuable to the human family. Indeed, the war would probably be so devastating that no civilization of any sort would survive it.

To sum up: the real government of the world is in the hands of the big financiers, except on questions which rouse passionate public interest. No doubt the exclusion of Asiatics from America and the Dominions is due to popular pressure, and is against the interests of big finance. But not many questions rouse so much popular feeling, and among them only a few are sufficiently simple to be incapable of misrepresentation in the interests of the capitalists. Even in such a case as Asiatic immigration, it is the capitalist system which causes the anti-social interests of wage-earners and makes them illiberal. The existing system makes each man's individual interest opposed, in some vital point, to the interest of the whole. And what applies to individuals applies also to nations: under the existing economic system, a nation's interest is seldom the same as that of the world at large, and then only by accident. International peace might conceivably be secured under the present system, but only by a combination of the strong to exploit the weak. Such a combination is being attempted at Was-

purse out of a sow's ear, or peace and freedom out of capitalism. The fourfold agreement between England, France, America and Japan is, perhaps, a safeguard of peace, but in so far as it brings peace nearer it puts freedom further off. It is the peace obtained when competing firms join in a combine, which is by no means always advantageous to those who have profited by the previous competition. (What I feel on this subject has been admirably expressed by Mr. Railsford in an article "A new technique of peace," New Republic, November 30, 1921.) It is quite possible to dominate China without infringing the principle of the Open Door. This principle merely ensures that the domination everywhere shall be American, because America is the strongest Power financially and commercially. It is to America's interest to secure, in China, certain things consistent with Chinese interests, and certain others inconsistent with them. The Americans, for the sake of commerce and good investments, would wish to see a stable government in China, an increase in the purchasing power of the people, and an absence of territorial aggression by other Powers. But they will not wish to see the Chinese strong enough to own and work their own railways and mines, and they will resent all attempts at economic independence, particularly when (as is to be expected) they take the form of State Socialism or what Lenin calls State Capitalism. They will keep a *dossier* of every student educated in colleges under American control, and will see to it that those who profess Socialist or Radical opinions shall get no posts. They will insist upon the standard of hypocrisy which led them to hound out Gorky when he visited the United States. They will destroy beauty and substitute tidiness. In short, they will insist upon China becoming as like as possible to "God's own country," except that it will not be allowed to keep the wealth generated by its industries. The Chinese have it in them to give to the world a new contribution to civilization as valuable as that which they gave in the past. This would be prevented by the domination of the Americans, because they believe their own civilization to be perfect.

The ideal of capitalism, it could be achieved, would be to destroy competition among capitalists by means of Trusts, but to keep alive competition among workers. To some extent trade unionism has succeeded in diminishing competition among wage-earners within the advanced industrial countries; but it has only intensified the conflict between workers of different races, particularly between the white and yellow races. Under the existing economic system, the competition of cheap Asiatic labour in America, Canada or Australia might well be harmful to White labour in those countries. But under Socialism an influx of industrious skilled workers in sparsely populated countries would be an obvious gain to everybody. Under Socialism, the immigration of any person who produces more than he or she consumes will be a gain to every other individual in the community, since it increases the

as a whole.

What, meanwhile, is China's interest as regards the Washington Conference and the situation which will exist when the Conference ends? What would be ideally best for China would be to recover Hongkong, Manchuria and Shantung, and then be let alone. The anarchy in China might take a long time to subside, but in the end some system suited to China would be established. The artificial ending of Chinese anarchy by outside interference means the establishment of some system convenient for foreign trade and industry, but probably quite unfittsd to the needs of the Chinese themselves. The English in the 17th century, the French in the 18th, the Americans in the 19th, and the Russians in our own day, have passed through years of anarchy and civil war, which were essential to their development, and could not have been curtailed by outside interference without grave detriment to the final solution. So it is with China. Western political ideas have swept away the old imperial system, but have not yet proved strong enough to put anything stable in its place. The problem of transforming China into a modern country is a difficult one, and foreigners ought to be willing to have some patience while the Chinese attempt its solution. They understand their own country, and we do not. If they are let alone, they will in the end find a solution suitable to their character, which we shall certainly not do. A s lution slowly reached by themselves may be stable, whereas one prematurely imposed by outside Powers will be artificial and therefore unstable.

There is, however, very little hope that the Conference will appreciably benefit China, and a considerable chance that it may do quite the reverse. It begins to be fairly clear what decissions will be reached. In Manchuria the *status quo* will be maintained, while in Shantung the Japanese will make some more or less inadequate concessions. The Four Powers—America, Great Britain, France and Japan—will agree to exploit China in combination, not competitively. There will be a Consortium as regards loans, which will have the power of the purse and will therefore be the real government of China. As the Americans are the only people who have much spare capital, they will control the Consortium. As they consider their civilization the finest in the world, they will set to work to turn the Chinese into muscular Christians. As the financiers are the most splendid feature of the American civilization, China must be so governed as to enrich the financiers, who will in return establish Colleges and Hospitals and Y.M.C.A.'s throughout the length and breadth of the land, and employ agents to buy up the artistic treasures of China for sepulture in their mansions. Chinese intellect, like that of America, will be in the pay of the Trust magnates, and therefore no effective voice will be raised in favour of radical reform. The inauguration of this system will be welcomed even by Socialists in the West as a great victory for peace and freedom.

But it is impossible to make a silk

shevism requires a very great deal of government, and more control of individual lives by the authorities than has ever been known before, whereas China has developed personal liberty to an extraordinary degree, and is the country of all others where the doctrines of anarchism seem to find successful practical application; (3) Bolshevism dislike private trading, which is the breath of life to all Chinese except the *literati*. For those reasons, it is not likely that Bolshevism as a creed will make much progress in China proper. But Bolshevism as a political force is not the same thing as Bolshevism as a creed. The arguments which proved successful with the Ameer of Afghanistan or the nomads of Mongolia were probably different from those employed in discussion with Mr. Lansbury. The Asiatic expansion of Bolshevik influence is not a distinctively Bolshevik phenomenon, but a continuation of traditional Russian policy, carried on by men who are more energetic, more intelligent, and less corrupt than the officials of the Tsar's regime, and who moreover, like the Americans, believe themselves to be engaged in the liberation of mankind, not in mere imperialistic expansion. This belief, of course, adds enormously to the vigour and success of Bolshevik imperialism, and gives an impulse to Asiatic expansion which is not likely to be soon spent, unless there is an actual restoration if the Tsarist regime under some new Kolchak dependent upon alien arms for his throne and his life.

It is therefore not at all unlikely, if the international situation develops in certain ways, that Russia may set to work to regain Manchuria, and to recover that influence over Peking which the control of Manchuria is bound to give to any foreign Power. It would probably be useless to attempt such an enterprise while Japan remains unembarrassed, but it would at once become feasible if Japan were at war with America or with Great Britain. There is therefore nothing improbable in the supposition that Russia may, within the next ten or twenty years, recover the position which she held in relation to China before the Russo-Japanese war. It must be remembered also that the Russians have an instinct for colonization, and have been trekking eastward for centuries. This tendency has been interrupted by the disasters of the last seven years, but is likely to assert itself again before long.

The hegemony of Russia in Asia would not, to my mind, be in any way regrettable. Russia would probably not be strong enough to ·········· as much as the English, the Americans, or the Japanese would do. Moreover the Russians are sufficiently Asiatic in outlook and character to be able to enter into relations of equality and mutual understanding with Asiatics, in a way which seems quite impossible for the English-speaking nations. And an Asiatic block, if it could be formed, would be strong for defense and weak for attack, which would make for peace. Therefore, on the whole such a result, if it came about, would probably be desirable in the interests of mankind

hatred of them in China. And this same behaviour has made the best Americans as hostile to them as the worst. If America had had none but base reasons for hostility to them, they would have found many champions in the United States; as it is, they practically none. It is not yet too late; it is still possible for them to win the affection of China and the respect of the best Americans. To achieve this, they would have to change their Chinese policy and adopt a more democratic ············ but if they do not achieve it, they will fall as Germany fell. And their fall will be a great misfortune for makind.

A war between America and Japan would be a very terrible thing in its consequences. It would destory Japanese civilization, ensure the subjugation of China to Western culture, and launch America upon a career of world-wide militaristic imperialism. It is therefore at all cost to be avoided. If it is to be avoided, Japan must become more liberal if the ··············· is discredited by failure. Therefore, in the interests of Japan no less than in the interests of China, it would be well of Japan were forced, by the joint diplomatic pressure of England and America, to disgorge Shantung and all of Manchuria except Port Arthur and its immediate neighborhood. (I make this exception because I think nothing short of actual war would lead the Japanese to abandon Port Arthur.) Our alliance with Japan, since the end of the Russo-Japanese war, has been an encouragement to Japan in all that she has done amiss. Not that Japan has been worse than we have, but that certain kinds of crime are only permitted to very great Powers, and have been committed by the Japanese at an earlier stage of their career than prudence would warrant. Our alliance has been a contributory cause of Japan's mistakes, and the ending of the alliance is a necessary condition of Japanese reform.

We come now to Russia's part in the Chinese problem. There is a tendency in Europe to regard Russia as decrepit, but this is a delusion. True, millions are starving and industry is at a standstill. But that does not mean what it would in a more highly organized country. Russia is still able to steal a march on us in Persia and Afghanistan, and on the Japanese in Outer Mongolia. Russia is still able to organize Bolshevik propaganda in every country in Asia. And a great part of the effectiveness of this propaganda lies in its promise of liberation from Europe. So far, in China proper, it has affected hardly anyone except the younger students, to whom Bolshevism appeals as a method of developing industry without passing through the stage of private capitalism. This appeal will doubtless diminish as the Bolsheviks are more and more forced to revert to capitalism. Moreover, Bolshevism, as it has developed in Russia, is quite peculiarly inapplicable to China, for the following reasons; (1) It requires a strong centralized State, whereas China has a very weak State, and is tending more and more to federalism instead of centralization; (2) Bol-

situation between England and Germany in the years before 1914. The Germans wanted to acquire a colonial empire by means similar to those which we had employed; so do the Japanese. We considered such methods wicked when employed by foreigners; so do the Americans. The Germans developed their industries and roused our hostility by trade competition; the Japanese are similarly competing with America in Far Eastern markets. The Germans felt themselves encircled by our alliances, which we regarded as purely defensive; the Japanese, similarly, find themselves isolated at Washington, since the superior diplomatic skill of the Americans has brought us over to their side. The Germans at last, impelled by terrors largely of their own creation, challenged the whole world, and fell; it is very much to be feared that Japan may do likewise. The pros and cons are so familiar in the case of Germany that I need not elaborate them further, since the whole argument can be transferred bodily to the case of Japan. There is, however, this difference, that, while Germany aimed at hegemony of the whole world, the Japanese only aim at hegemony in Eastern Asia.

The conflict between America and Japan is superficially economic, but, as often happens, the economic rivalry is really a cloak for deeper passions. Japan still believes in the divine right of kings; America believes in the divine right of commerce. I have sometimes tried to persuade Americans that there may be nations which will not gain by an extension of their foreign commerce, but I have always found the attempt futile. The Americans believe also that their religion and morality and culture are far superior to those of the Far East. I regard this as a delusion, though one shared by almost all Europeans. The Japanese, profoundly and with all the strength of their being, long to preserve their own culture and to avoid becoming like Europeans or Americans; and in this I think we ought to sympathize with them. The colour prejudice is even more intense among Americans than among Europeans; the Japanese are determined to prove that the yellow man may be the equal of the white man. In this also justice and humanity are on the side of Japan. Thus on the deeper issues, which underlie the economic and diplomatic conflict, my feelings go with the Japanese rather than with the Americans.

Unfortunately, the Japanese are always putting themselves in the wrong through impatience and contempt. They ought to have claimed for China the same consideration that they have extorted towards themselves; then they could have become, what they constantly profess to be, the champions of Asia against Europe. The Chinese are prone to gratitude, and would have helped Japan loyally if Japan had been a true friend to them. But the Japanese despise the Chinese more than the Europeans do; they do not want to destroy the belief in Eastern inferiority, but only to be regarded as themselves belonging to the West. They have therefore behaved so as to cause a well-deserved

o vigour and determination which commands the highest respect.

The growth of industrialism in Japan has brought with it the growth of Socialism and the Labour Movement. (An excellent account of these is given in "The Socialist and Labour Movement in Japan," by an American Sociologist, published by the Japan Chronicle.) In China, the intellectuals are often theoretical socialists, but in the absence of labour organizations there is as yet little room for more than theory. In Japan, trade unionism has made considerable advances, and every variety of socialist and anarchist opinion is vigorously represented. In time, if Japan becomes increasingly industrial, socialism may become a political force; as yet, I do not think it is. Japanese socialists resemble those of other countries, in that they do not share the national superstitions. They are much persecuted by the government, but not so much as socialists in America—so at least I am informed by an American who is in a position to judge.

The real power is still in the hands of certain aristocratic families. By the constitution, the Ministers of War and Marine are directly responsible to the Mikado, not to the Diet or the Prime Minister. They therefore can and do persist in policies which are disliked by the Foreign Office. For example, if the Foreign were to promise the evacuation of Vladivostock, the War Office might nevertheless decide to keep the soldiers there, and there would be no constitutional remedy. Some part, at least, of what appears as Japanese bad faith is explicable in this way. There is of course a party which wishes to establish real Parliamentary government, but it is not likely to come into power unless the existing regime suffers some severe diplomatic humiliation. If the Washington Conference were to compel the evacuation of Shantung and Vladivostock by diplomatic pressure, the effect on the internal government of Japan would probably be excellent.

The Japanese are firmly persuaded that they have no friends, and that the Americans are their implacable foes. One gathers that the .... regards war with America as unavoidable in the long run. The argument would be that the economic imperialism of the United States will not tolerate the industrial development of a formidable rival in the Pacific, and that sooner or later the Japanese will be presented with the alternative of dying by starvation or on the battlefield. Then Bushido will come into play, and will lead to choice of the battle-field in preference to starvation. Admiral Sato, the Japanese Bernhardi (as he is called), maintains that absence of Bushido in the Americans will lead to their defeat, and that their money-grubbing souls will be incapable of enduring the hardships and privations of a long war. This, of course, is romantic nonsense. Bushido is no use in modern war, and the Americans are quite as courageous and obstinate as the Japanese. A war might last ten years, but it would certainly end in the defeat of Japan.

One is constantly reminded of the

nationalistic aims of Japan are not merely economic; they are also dynastic and territorial in a mediaeval way. The morality of the Japanese is not utilitarian, but intensely idealistic. Filial piety is the basis, and includes patriotism, because the Mikado is the father of his people. The Japanese outlook has the same kind of .... absence of realism that one finds in thirteenth-century theories as to the relations of the Emperor and the Pope. But in Europe the Emperor and the Pope were different people, and their quarrels promoted freedom of thought; in Japan they are combined in one sacred person, and there are no internal conflicts to produce doubt.

Japan, unlike China, is a religious country. The Chinese doubt a proposition until it is proved to be true; the Japanese believe it until it is proved to be false. I do not know of any evidence against the view that the Mikado is divine. Japanese religion is essentially nationalistic, like that of the Jews in the Old Testament. Shinto, the State religion, has been in the main invented since 1868,* and propagated by education in schools. (There was of course an old Shinto religion, but most of what constitutes modern Shintoism is new). It is not a religion which aims at being universal, like Buddhism, Christianity, and Islam; it is a tribal religion, only intended to appeal to the Japanese. Buddhism subsists side by side with it, and is believed by the same people. It is customery to adopt Shinto rites for marriages and Budhist rites for funerals, because Buddhism is considered more suitable for mournful occasions. Although Buddhism is a universal religion, its Japanese form is intensely national, like the Church of England. Many of its priests marry, and in some temples the priesthood is hereditary. Its dignitaries remind one vividly of English Archdeacons.

The Japanese, even when they adopt industrial methods, do not lose their sense of beauty. One hears complaints that their goods are shoddy, but they have a remarkable power of adapting artistic taste to industrialism. If Japan were rich, it might produce cities as beautiful as Venice, by methods as modern as those of New York. Industrialism has hitherto brought with it elsewhere a rising tide of ugliness, and any nation which can show us how to make this tide recede deserves our gratitude.

The Japanese are earnest, passionate, strong-willed, amazingly hard working, and capable of boundless sacrifice to an ideal. Most of them have the correlative defects: lack of humour, cruelty, intolerance, and incapacity for free thought. But these defects are by no means universal; one meets among them a certain number of men and women of quite extraordinary excellence. And there is in their civilization as a whole a degree

* See an interesting pamphlet by Prof. B. H. Chamberlain of Tokyo, called "The invention of a new religion," published by the Rationalist Press Association.

It should be added that the Peking Government, after repeated negotiations, had decided not to accept loans from the consortium on the terms on which they were offered. I my opinion, there were very adequate grounds for this decision. As the same article in the "Freeman" concludes: "If this plan is put through, it will make the bankers of the consortium the virtual owners of China; and among these bankers, those of the United States are the only ones who are prepared to take full advantage of the situation."

So much by way of criticism of America; we come now to the defence of Japan.

Japan's relations with the Powers are not of her own seeking; all that Japan asked of the world was to be let alone. This, however, did not suit the white nations, especially America. It was a United States squadron under Commodore Perry that first made Japan aware of Western aggressiveness. Very soon it became evident that there were only two ways of dealing with the white man, either to submit to him, or to fight him with his own weapons. Japan adopted the latter course, and developed a modern army trained by the Germans, a modern navy modelled on the British, modern machinery derived from America, and modern morals copied from the whole lot. Everybody except the British was horrified, and called the Japanese "yellow monkeys." However, they began to be respected when they defeated Russia, and they had captured Tsing-tao and half-enslaved China they were admitted to equality with the other great Powers at Versailles. The consideration shown to them by the West is due to their armaments alone; none of their other good qualities would have saved them from being regarded as "niggers."

People who have never been outside Europe can hardly imagine the intensity of the colour prejudice that white men develop when brought into contact with any different pigmentation. I have seen Chinese of the highest education, men as cultured as (say) Dean Inge, treated by greasy white men as it they were dirt, in a way in which, at home, no Duke would venture to treat a crossing sweeper. The Japanese are not treated in this way, because they have a powerful army and navy. The fact that white men, as individuals, no longer dare to bully individual Japanese, is important as a beginning of better relations towards the coloured races in general. If the Japanese, by defeat in war, are preventing from retaining the status of a Great Power, the coloured races in general will suffer, and the tottering insolence of the white man will be re-established. Also the world will have lost the last chance of the survival of civilizations of a different type from that of the industrial West.

The civilization of Japan, in its material aspect, is similar to that of the West, though industrialism, as yet, it not very developed. But in its mental aspect it is utterly unlike the West, particularly the Anglo-Saxon West. Worship of the Mikado, as an actually divine being, is successfully taught in every village school, and provides the popular support for nationalism. The

involved liberal and humanitarian principles have no weight whatever. I will cite three instances: Panama tolls, Allied war-debts, and Russian trade. In the matter of the Panama canal, America is bound by treaty not to discriminate against our shipping; nevertheless a Bill has been passed by a two-third majority of the House of Representatives, making a discrimination in favour of American shipping. In the matter of Allied war-debts, the case for generosity was stated in Mr. Keynes' book and has grown stronger with every day that has passed since its publication. England is at last beginning to realize the case for financial generosity towards Germany; but America, in spite of her immense wealth, in spite of the fact that she remained neutral throughout the early years of what she declared to be a holy war, insist upon claiming the whole amount which the Allies owe because America did not come to their side sooner.* And as for trade with Russia, England led the way, while American hostility to the Polsheviks remained implacable. It cannot therefore be said that America is *always* honourable or humanitarian or liberal. The evidence is that America adopts these virtues when they suit national or rather financial interests, but fails to perceive their applicability in other cases.

I could of course have given many other instances, but I content myself with one, because it specially concerns China. I quote from an American weekly, "The Freeman (23 Nov. 1921, p. 244):

"On I November, the Chinese Government failed to meet an obligation of $ 5,500,000, due and payable to a large banking-house in Chicago. The State Department had facilitated the negotiation of this loan in the first instance; and now, in fulfilment of the promise of governmental support in an emergency, an official cablegram was launched upon Peking, with intimidations that continued defalcation might have a most serious effect upon the financial and political rating of the Chinese Republic. In the meantime, the American bankers of the new international consortium had offered to advance to the Chinese Government an amount which would cover the loan in default, together with other obligations already in arrears; and still others which will fall due on I December; and this proposal had also received the full and energetic support of the Department of State. That is to say, American financiers and politicians were at one and the same time the heroes and villains of the piece; having co-operated in the creation of a dangerous situation, they came forward handsomely in the hour of trial; with an offer to save China from themselves as it were, if the Chinese Government would only enter into relations with the Consortium, and thus prepare the way for the eventual establishment of an American financial protectorate."

---

* On this subject, see Mr. H. G. Wells' Washington cablegram which appeared on Dec. 14, 1921, "On paying for the War-debt" (e. g. in the Manchester guardian).

estimate the desirablity of extending the influence of the United States, we have to take account of this almost certain future loss of idealism.

Nor is idealism in itself always an unmixed blessing to its victims. It is apt to be incompatible with tolerance, with the practice of live-and-let-live, which alone can make the world endurable for its less pugnacious and energetic inhabitants. It is difficult for art or the contemplative outlook to exist in an atmosphere of bustling practical philanthropy, as difficuit as it would be to write a book in the middle of a spring cleaning. The ideals which inspire a spring-cleaning are useful and valuable in their place, but when they are not enriched by any others they are apt to produce a rather bleak and uncomfortable sort of world.

All this may seem, at first sight, somewhat remote from the Washington Conference, but it is essential if we are to take a just view of the friction between America and Japan. I wish to admit at once that, hitherto, America has been the best friend of China, and Japan the worst enemy. It is also true that America is doing more than any other Power to promote peace in the world, while Japan would probably favour war if there were a good prospect of victory. On these grounds, I am glad to see our Government making friends with America and abandoning the militaristic exclusiveness of the Anglo-Japanese Alliance. But I do not wish this to be done in a spirit of hostility to Japan, or in a blind reliance upon the future good intention of America. I shall therefore try to state Japan' case, although, *for the present*, I think it weaker than American's.

It should be observed, in the first place, that the present American policy, both in regard to China and in regard to naval armaments, while clearly good for the world, is quite as clearly in line with American interests. To take the naval question first: America, with a navy equal to our own, will be quite strong enough to make our admiralty understand that it is out of the question to go to war with America, so that America will have as much control of the seas as there is any point in having. The Americans are adamant about the Japanese navy, but very pliant about that of France, which only threatens us. Control of the seas being secured, limitation of naval armaments merely decreases the cost, and is an equal gain to all parties, involving no sacrifice of American interests. To take next the question of China: American ambitions in China are economic, and require only that the whole; country should be open to the commerce and industry of the United States. The policy of spheres of influence is obviously less advantageous, to so rich and economically strong a country as America, than the policy of the universal Open Door. We cannot therefore regard America's liberal policy as regards China and naval armaments as any reason for expecting liberal policy when it goes against self-interest.

In fact there is evidence that when American interests or prejudices are

The Washington Conference and The Future.

By Bertrand Russell.

The Far Eastern situation is so complex that it is very difficult to guess what will be the ultimate outcome of the Washington Conference, and still more difficult to know what outcome we ought to desire. I will endeavour to set forth the various factors each in turn, not simplifying the issues, but rather aiming at producing a certain hesitancy which I regard as desirable in dealing with China. I shall consider successively the interests and desires of America, Japan, Russia and China, with an attempt, in each case, to gauge what parts of these various interests and desires are compatible with the welfare of mankind as a whole.

I begin with America, as the leading spirit in the Conference and the dominant Power in the world. American public opinion is in favour of peace, and at the same time profoundly persuaded that America is wise and virtuous while all other Powers are foolish and wicked. The pessimistic half of this opinion I do not desire to dispute, but the optimistic half is more open to question. Apart from peace, American public opinion believes in commerce and industry, Protestant morality, athletics, hygiene, and hypocrisy, which may be taken as the main ingredients of American and English Kultur. Every American I met in the Far East, with one exception, was a missionary for American Culture, whether nominally connected with Christian Missions or not. I ought to explain that when I speak of hypocrisy I do not mean conscious hypocrisy, but that deeper unconscious kind which form the chief strength of the Anglo-Saxons. Everybody knows Disraeli's comment on Dr. Gladstone, that like other politicians he always had a card up his sleeve, but unlike the others, he thought the Lord had put it there. This attitude, which has been characteristic of England, has been somewhat chastened among ourselves by the satire of men like Bernard shaw; but in America it is still just as prevalent and self-confident as it was with us 50 years ago. There is much justification for such an attitude. Gladstonian England was more of a moral force than the England of the present day; and America is more of a moral force at this moment than any other Power (except Russia). But the development from Glandstone's moral favour to the cynical imperialism of his successors is one which we can now see to be inevitable; and a similar development is bound to take place in the United States. Therefore when we wish to

ガンヂ

文學博士　鹿子木員信

一

一九一四年八月三日の英國の對獨宣戰は、全世界を驅りて、戰禍の淵に投ずる合圖であつた。これが爲めに、全歐は、瞬く暇に戰亂の巷となつた。これがために、東亞の風雲は動いて、日本の對獨宣戰の嵐を誘ふた。また實に、その爲めにアメリカは、その未曾有の經濟的軍事的躍進にまで、刺激せしめられたのである。併かも、英獨血鬪の開始に依りて、深酷に内的にその思想その感情その情緒その希望を動かされたるものに、印度三億二千萬の民衆のその精神を以て任ずる印度の識者、その志士、その革命主義者の如きは、蓋し稀れであつたらう。

二

彼等は、實に、一朝、期せずして、彼等より、彼等の去就を促す陰險險惡なるスフィンクスの謎の前に立つたのである。於是、彼等の多くの或る者は、現實的權力の前に、その威壓の下に、心ならずも、その鋒を翻へし、右して大英帝國に忠誠を誓ふの苦衷に出でた。當時、恰かも、その革命的煽動的文章の故に依り、長き牢獄の苦楚より出で來れる、數ある印度國民主義者のうち、最も大膽勇猛な老チラックの如き、それであつた。また彼等のより若き者は、彼等が、日露戰役の日以來、日本精神の靈感より鍛へ來れる好戰的革命主義の傳統に忠實に、明確に、左して、その心と而してその行に、大英帝國の破壞粉碎を誓ふた。常に、その懷に爆彈を抱き、險を踏み、危を冒し、大膽剛毅、屈する所を知らぬ若きラスベハリ・ボオスの如き、それであつた。併かも彼等の間には、少數ながらも、深く全體としての大英帝國の正義と自由とに信賴し、心より大英帝國の主張その勝利の爲めに粉骨碎身すべく心に決して、スフィンクスの前を立ち上り、旗幟鮮やかに、右するものがあつた。此の第三者のうち、その最も純粹なりし者は、誰あらう、今日、反英主義の急先鋒、大英帝國の最も恐ろしき一敵國、最も厳密なる意味に於ける純粹な印度革命、否、印度的革命の指導者、その核心

その精鋭たるガンヂその人であつたのだ。

三

余の目的とする所は此のガンヂの、一切の現代ヨオロッパの外的物質主義的革命主義を蟬脱せる純粋に印度的なる理想主義的革命主義彼の純印度革命主義を說くにある。併かも、之れを爲すがためには、余は先づ簡潔にその一般的背景である印度國民主義の潮流と、その諸々の傾向と色彩とを述べねばならぬ。

現代印度に於ける印度國民主義の曙光——極めて微弱なるものなりしに拘らず、尚ほ指して以て曙光と言ひ得べき曙光は、實に、今日を去る約四十年前、始めてカルカッタに生れた『印度國民議會（インヂアン・ナショナル・コングレス）』に見ることが出來る。併かも此の『印度國民議會』は、ラジパット・ライがその好著『青年印度』のうちに指摘してゐるやうに、その起源を、獨立と自由と正義を熱求する印度國民そのものの熱情に發するよりも、寧ろ時の總督ダッフリン卿の政治家的打算の冷頭と、自由を愛せる英人ヒュウムの、義俠的精神の握手に發するものである。そは、ライの端的なる言葉を藉りて言へば、an English product であつた實に此の故に、此の『印度國民議會』は、最近、卽ち大正八年、所謂極端主義者が、之れに占據するに至るまで、三十餘年の長きに亘り、そのうちにババダイ、ナオロジ、ゴケエルの如き秀拔なる印度人士を網羅せるに拘らず。要するに、一箇の討論會の範を出でず、何等、經綸實行の勢力を贏ち得るに至らなかつたのである。それにも拘らず、我等が此の『印度國民議會』を重要視せざるを得ざる所以は、實に、そが、一般國民の輿論の源、その中心として、一般民衆の注目の標的なりしが故である。併『印度國民議會』は、いかにも印度國民運動の大鏡であつた。かもそは、寧ろ鈍き朧ろなる鏡であつた。此の鏡に、それ自らの姿を照らす光焰は、他にあつた。そは卽ち地下闇暗のうちに鐵血を以てその熱情を鍛えた革命主義であつた。

四

崇高、純淨、常住絕對の理想の國ならずとも、此の世に於ても、その最高の價値は、之れを追ひ求むる者より、その捧げ得る最高の犧牲をもとむる。その個性と同胞と、而してその類ひ稀れなる崇高なる魂の文化の自由と獨立と而してその結晶とも見るべき正義の恢復實現は、之れを求むる者より、最高の苦難を求めずにはおかぬ。凡て革命の歷史は、匕首と爆彈と牢獄と斷頭臺の歷史である。同時に、そは血と淚と而して純潔崇高なる精神の犧牲の物語である。多少とも彼等に就いて語る前余をして戰ひ逝ける彼等の靈の前に、默してうなだるゝ所あらしめよ。

印度青年は、之れをその發端の地、その中心に從つて、三つに分つて物語ることが出來る、その一つは、西、ボムベイ、プウナを中心とせるチトパワン・ブラフマンの革命運動である。その第二は、カルカツタ、ダツカ等を中心とせるベンガル青年の革命主義である。而してその第三はパンジヤブの革命運動である。

此のうち印度革命の急先鋒、その烽火たる〆擧を擔ふものは、チラツクに、その精神的思想的代表者を見出したプウナのチトパワン・ブラフマンの革命運動であつた。彼等は、既に早く我が明治二十七八年戰役の頃、彼等マアラツタ民族の國民的英雄シヷジの追憶に、呼び醒まされて、倒英興印の直接行動に向つて從進した。かくして、明治三十年六月ヴイクトリア女皇戴冠六十年祭の夜始めてチヤペカル兄弟に依る英人ランドの暗殺に依りて、革命の血祭は行はれた。

當時此等のチトパワン・ブラフマンの革命主義者を支配せる精神は、我が神風連的な愛國的宗教的精神であり、その思想は寧ろ狹隘な復古主義であつた。而して彼等に踏險の靈感を鼓吹せるものは、その當時チラツクの爲せる演說に顯著なるが如く、人類の續かん限り、永久に、獨り印度國民と言はず、實に凡て爲すあるの國民の英雄的靈感の泉たるを失はぬ、彼の崇高

歷代諸賢なる印度の古典『ブハカバド・ギタ』の哲學であつた、チラツクは、彼の『ケサリ』紙に據つて、一度の下獄にも拘らず、彼の宣傳を續けた。併かも一九〇八年、ムザフアルプウア爆彈事件の事に關して、罪を文章に得、重禁錮六年の獄に下るや、印度革命の中心は、いつしか、西より東に動いて、ベンガルの都會と村落の爲に、比較的多く近代西歐の思想に汲める怜悧敏捷なるベンガル青年の間に移りつゝあつた。余は轉じてベンガリ革命主義に進まねばならぬ。

五

ベンガリ青年の革命主義を語るは、やがては、今はた絶えなんとする鐵弦の響きある強き日本の戰鬪的猛志を物語ることに外ならぬ。ベンガリ革命主義は、實に强烈なる日本精神の靈感感激の下に、その成せるが如き血潮の悲劇の錦を織り成せるものなるが故である。ロオラツトの『印度革命運動調査報告書』は、ベンガリ革命運動の起源を敍し、之れを構成する要素として聖者スワミ・ヰヱカナンダの精神的感化と、既に、さきに說ける『ブハガバド・ギタ』の哲學の影響とを擧げ、進んで次の如き興味深き言を爲してゐる——

"But neither the religious teaching of *Vivekananda* nor the exhortations of Sri Krishna in the Bhagavad Gita w

ould have afforded so moving a text to preach from had not the whole world, and especially the Asiatic world been electrified and amazed by the victories of Japan over Russia at a time when within this country circumstances occasioned by certain Government measures specially favoured the development of Barindra's plans." と。

日露戰役に現はれたる强烈勇敢なる日本の精神は、實に、ベンガリ青年の精神に、熱火を注いで、その波瀾と悲劇に富める革命主義を生める火の柱であつたのだ。

　併かも、併かも、いかに枯れ草ありしとて、枯草のみでは火は燃えぬ。それは精神の電光を必要とする。革命は終に人である。ベンガリ革命主義にありて、その精神的電光たりしものは、實にアラビンダ、及びバリンドラゴオシユの二兄弟であつた。彼等は新聞『ジユガンタル』を創建して之れに據つた。兄アラビンダ・ゴオシユは嘗てクルクシエトラの戰の日に、健鬪の義務を、非戰主義的感情に沈める戰士アルジユナに說けるクリシユナの如きその深遠なる哲學的精神と、壯麗雄渾なる文章を以て、ありし日の印度の高貴と光榮を彼の國人の爲に呼び醒ました。弟バリンドラ・ゴオシユは、疲るゝ所を知らぬ革命の宣傳者、組織者實行者として、日露戰役の感激の波まだ去りやらぬ一九〇六年の頃、遂にベンガルに堅き革命的秘密結社アヌシラン・サミチを組織するに至つた。

　彼等の傘下に集まつたベンガリの青年は、多少とも西歐の思想、その自由獨立の精神に飲み、その近代民族國家主義に汲める者であつた。而して彼等を激成せるもの、實に日本の國家的健鬪であつた。實に、此の故にベンガリ革命主義は、假令、その根柢は、之れを、キエカナンダの印度獨特の宗教的思想と、『ギタ』の昔ながらの印度古哲の哲學を以て養ひ培へるものとは言へ、その實現さるゝに當つては、著しく西歐的色彩を帶びたる爲であつた。彼等は、彼等の聖哲の敎への外に、好んでイタリアのマツジニを愛誦した。而してその實行方法に於て、深く詳しくロシヤ革命主義者の手段を學んだ。彼等は、いつしかベンガリ特有の優柔軟弱の衣を脫いで、掠奪、暗殺、爆擊を事とする戰鬪的集團と化し行つた。ベンガリ革命主義の父であつたバリンドラ・ゴオシユは、此の大英帝國に對する陰慘なる革命戰の途上、一九〇八年所謂アリポオル陰謀事件に連坐して捕へられ、終に、絞首臺上の露と消えた。

　併かも同志、幾多の犧牲ありしにも拘らず、彼の創建したアヌシラン・サミチは、彼の刑死後、益々その組織の網を擴げ、益々その暴威を揮ふて、近く一九一八年の頃にまで至つてゐる。

六

最後にパンジヤツプの革命運動は、之れを思想の點より見れば、寧ろベンガリ革命主義の擴播せるものと云ふことが出來やう。その素地は、經濟的卽ち農作者の不滿であり、その思想的精神的指導者はラジパツト・ライであり、而してその實行者には、ラスビハリの如く、比較的にベンガリの青年が多かつた。從つてその活動の多くは、ベンガリ革命運動の延長と見ることが出來やう。一九一二年デエリイに於ける總督ハアデインジ爆擊の背後には、恐らくベンガリ革命主義者の影が、潛んでゐたのであつたらう。

七

此の時、一九一四年八月、英國の對獨宣戰は、恰かも霹靂の如く、豫期せる者、せざる者凡てをおしなべて一樣に彼等の鼓膜を撲つた。此の時、ベンガリ革命主義の精神的指導者であつたアラビンダ・ゴオシユは、既に久しくその弟バリンドラの罪に連坐して、故國を逐はれ、遠く佛領印度ポンヂシエリイに蟄居してまたその雄腕を揮ふよすがもない。パンヂヤブのライは、故國を逐はれて、空しく日本よりアメリカへの流竄の旅路にある。チラツクは、牢獄六年の生活を終へて獄を出で來つたけれど心ならずも、忠誠を大英帝國に誓はざるを得ない破目にあつた。思ひ切つたる印度の革命主義者等は、指導者を缺いだ。彼等は青年血氣の勇に、逸つて、あせつた、戰つた、もだへた。併かも彼等の懸命の努力も、大英帝國の權力の前には、花火の輝きにも若かなかつた。一九一四年の『印度國防令』は、一網打盡的に、而して殆んど永久的に彼等の活動を封じた。彼等の西歐革命主義は、より大いなる西歐權力主義に壓倒さるゝに至つた。

此の時、獨り、印度の爲めに氣を吐けるものは、後遂に、三十餘年の久しき微溫的妥協主義の中心であつた『印度國民議會』より、サレンドラナート・バネルジイ等一派の妥協主義者所謂穩和主義者を掃蕩して、之れに據り、之れを所謂極端主義者の堅砦たらしめた、急進的言論の雄所謂立憲的煽動者チラツク、チツタランジヤン・ダス、バピン・パル、ベザント夫人等あるのみであつた。

余の右の從來の印度革命主義の槪說を去る前に、余として今一度その傾向、その特色の存する所に反省せしめよ。プウナの革命主義者は、徹頭徹尾國粹主義復古主義であつた。ベンガリはその思想その方法に於て著しく近代的西歐的である。併かも、彼等の目的とせる所は、等しく遂に印度獨立である。彼等の革命主義の根本的動機は、實に、國民主義にあつたのだ。

八

正に此の時、ガンヂは、その殆んど三十年住み慣れし南アフリカより、三十年の長きに亙りて、具さにその心に思ひ、その身に施して、鍛えに鍛え來つた彼の所謂『サチアグラハ』、眞理の把持』『心の力』『正義の劍』を執り併かも、その胸には、大英帝國に對する忠誠信賴の情を包んで、惱める彼の祖國印度に歸り來つた。彼は最も遲く革命的波瀾狂濤の印度の舞臺に現はれたるものである。

此の印度革命晩生の子、ガンヂ五十三年の昔、印度の西部カチアワル半島の、アラビア洋の波に洗はるゝプロバンダルの商賈の家に、嚴格なる正統的印度主義者をその父母として生れたガンヂが、その氏よりするも、はたまたその育ちよりするも、半ば以上西歐的精神に鼓舞されたベンガリの暴力的革命主義の信者でなかつたことは、言ふまでもない、彼は、また決して、チラツクの如く、唯だ脣にのみ、大英帝國への忠順を口にすべく、餘儀なくされたるものでもなかつた。いかにも、彼は、彼の南阿にありし日この方、三十年一日の如く、英國の一々の惡政に對しては、最も頑強なる反對抵抗を持續し來つてゐる。併かも彼は、全體として大英帝國の是認者であつた。彼は遙かに遲く一九二〇年の頃までも、その印度總督に與へし公開狀のうちに、自ら a devoted well-wisher of the British Empire と言つてゐる。かくして、彼は、英獨決鬪てふ、大英帝國危急存亡の秋に際して、堅くその眞理と愛の高調把持、彼の所謂『サチアグラハ』の上に立つて、大英帝國の忠實なる味方、その眞摯なる協力者として立ち上つた。印度の富と血、その軍事公債と義勇兵募集の事業に於て、大英帝國の彼に負ふ所は、決して少々ではなかつた。

此の大英帝國の忠實なる親友であつたガンヂ、『印度に於ける英人に與ふるの書』の中に彼の用ひし彼自身の言葉を用ふれば『余の見る所を以てすれば、余の如く二十九年の余の絶えざる公的生涯の間、他の人ならば叛逆者とも成る可き境遇の間に立ちて英國政府と協力せる印度人は、他に一人もないのである。願はくは余の言を信ぜよ、余の協力は、決して諸君の法律が具備する刑罰の恐怖や、その他の利己的動機に出でしものにあらざることを。そは實に、英國政府の活動の總和は、印度の幸福の爲めであると云ふ信仰に基ける自由な自發的協力であつたのである。余は實に四度び帝國の爲めに、余の生命を賭した』さほどまで大英帝國に忠實なりしガンヂは、今は、最も深酷な最も徹底せる印度獨立主義者、英印絶縁主義者となつてゐるのである。局面は轉回した。裏切れる者は、誰れぞ。ガンヂか大英帝

國か。そは、言ふまでもなく詐欺暴虐の大英帝國であつた。

九

かの世界戰に於て、終には勝てる英國も、その進行の最中に於ては、屢々累卵の危地にあつた。當時印度の嚮背は、大英帝國の問題以上に、實に英國そのものゝ存亡問題であつた。併かも從來の如き暴虐を以てしては、その上永く、印度を繫ぎ留め得ぬことは、明かである。かくして英國は日に日に險惡ならんとする印度民心の緩和策をすべく餘儀なくせられた。而してその最も顯著なる最初の表現は、大正六年八月廿日、英國印度省大臣モンテグュが、ロイド・ジヨルジ內閣を代表して、英國議會に於てなせる、印度に於ける英國統治方針の宣言であつた。モンテグュは、此の宣言の劈頭、印度に於ける英國統治の方針は英帝國の一要素としての印度に、責任政府を實現するに在る、と言つてゐる。その後、幾何もなくモンテグュは、自ら印度に渡り、當時の印度總督チエルムスフオド卿と共に、印度の政情を察すること約半歲、歸來、彼は此の視察研究の上に、彼の宣言の具體案として大正七年七月、彼の印度政治組織改革案を發表した。之れ即ち世に所謂モンテグュー・チエルムスフオド改革案である。

モンテグュー・チエルムスフオド改革案の最後の意圖は、從來以上に、印度の大英帝國に對する從屬的關係を堅持し、併かも內政に、漸次、自治を與へんとするにあつた。かくの如き骨と云ふ凡ての骨を投げる改革法案が、印度の完全なる獨立を願ふ印度革命主義者に取りて全然無意味なるは言ふまでもない。そは、大多數の印度の識者、合法立憲を標榜する所謂極端派に依りて代表さるゝ一般印度の輿論をすら滿足せしむることは出來なかつた。併かも英國はその慣用手段たる、懷柔と而して威壓を忘れなかつた。英國は、モンテグュ・チエルムスフオドの懷柔策の奏効せざる所を、彼の有名なるロオラツトの威壓法案を以て完成せんとした。

十

大正六年十二月、モンテグュが自由と正義の光を印度に齎らさんと稱しつゝ尙ほ足を印度に駐めてありし時、彼の監督の下にあり、彼の同僚たるチエルムスフオドに依りて支配さるゝデエリイの印度政府は、『印度革命運動調査委員會』を組織しその首長に、ロオラツトを置き、(一)印度革命運動の性質と範圍を調査し、(二)之れが剿滅防止法案を講ずべく命じた。之れ即ちロオラツト革命運動調査委員會であり、その結果は即ち世に有名なる『ロオラツト』報告書である。

大英帝國は、懷柔を策して、失敗した。併かも、時は、既にそ

の勁敵獨乙を破りて、空前の戰勝に、氣飽くまで驕れる樣であつた。彼はロオラット委員會の建議に基く威壓法案を、ひつさげ、威壓を以て印度三億二千萬の民に臨んだ。時に大正九年三月の頃である。大英帝國は、かくして、先づ印度の恩に報ふるに仇を以てした。

克く忍び克く耐ふる從順羊の如き一般印度の民衆も、此の大英帝國の卑劣なる振舞に、醒め且つ激した。極端派も穩和派も、排英主義者も親英主義者も、印度の民衆は、一人の如く、立ちてロオラットの威壓法案に抗した。併かも、戰勝の餘威と醉とに乘ぜる英國の權力は、全印度國民の抗議反對批難の面前に於て、無理强いに、此の天下無類の惡法、印度國民の一切の自由と自尊を蹂躙して泥土に委する此の暴虐なる法案を、永久の法律と化した。

併かも神の攝理は讃むべきかな、泥土は白蓮の純潔を生み、ロオラットの惡法は、終に印度革命晩生の子ガンヂとそのサチアグラハを生むのよすがとなつてゐる。『印度國民議會』の『パンジヤブ虐殺調査報告書』は、その第四章に『サチアグラハ』と題し、劈頭誌るして、"It was in order to combat the Rowlatt Act,……, that Mr. Gandhi launched out his Satyagraha movement." と言つてゐる。ロオラットの惡法も、ガンヂのサチアグラハの精神的高貴に依りてその名を永遠なるものと確保せらるゝであらう。

十一

ガンヂを、獨りの他の印度の國民運動指導者のみならず、現代の凡ての新舊の政治家及び革命的指導者より截然として分つ一つの著しき特色がある。それは、今日アングロサクソン民族の爲に、名のみありて、その實なき Sincerity である。彼は實に徹頭徹尾、徹上徹下、その骨の髓に至るまで此の上評しやうなき程までに、純潔、透明、無垢である。彼は、よく戰ふ、否なよくと曰はんより、寧ろ常に正義と眞理の爲めに戰ふ。彼の戰ふや常に一本調子であり、一本鎗である。彼は、唯だ眞理と正義の爲めに戰ひ、而して唯だ一つ正義の鎗を以てのみ戰ふ。彼はその權力を、打算と策略の上に築かない、唯だ彼の透徹せる深き認識、その儔を遠く溯りて、始めて、ソクラテス―プラトンの透徹せる哲學的生涯に見出し得る眞の深き智慧に汲む。彼の揮ふ唯一の劍は、彼の所謂『サチアグラハ』即ち『眞理の把持』正義の劍である。それは、甞てソクラテス―プラトンの揮へるところその刀身は簡淨である。そこには、『惡の最大なるものは、正義を犯すことである』と云ふソクラテス――プラトンの銘がある。而してその鋩は、實に他に不正義を加ふるも、また他よ

不正義を棄むるも、それ、何れも、好ましきことではない。併し、若し、兩者のうちその何れか一つを擇まねばならぬと云ふのであるならば、我は、他に不正義を加へんよりも寧ろ、他より不正義を加へらるゝことを擇む』と云ふソクラテス——プラトンの堅き正義の把持である。此の故に、彼は、その『サチアグラハ』を說明するに當つて、『サチアグラハを用ふるに當りて、余は既に夙く、眞理の追求は、その敵に暴力を加ふるを許さず、寧ろ忍耐と同情に依りて、その誤謬より引き離すべきであるを發見した。…然るに忍耐とは、自ら惱むことである。かくして、此の思想は、敵に苦惱を與ふることに依つてにあらず、寧ろ我自らに與ふることに依りて、眞理を確立することを意味するに至つた』と言ひ、また『ソクラテスは、その眞理と認むる所を、アテンの青年に說くを止めず、遂に勇敢に、死の刑罰を受けた。此の場合、彼はサチアグラヒであつたのだ』と言ひ得たのである。

ガンヂの採ふ唯一の劍は、『サチアグラハ』『眞理の把持』『愛の力』である。而して彼を驅りて不斷の戰鬪に出でしむるものは純粹に唯だ眞理と正義に對する愛である。彼の戰は、最も透徹清朗なる充ち滿てる愛に出づる。此の故に、彼の戰には、不思議と思はるゝ程に、世の多くの戰に見る、憎惡の痕跡を留めない。大正九年十二月、ナグプウルに於て『印度國民議會』の第三十五回大會の開かるゝや、印度の志士識者指導者等は、カリフ問題に關する英國の背信と、パンジヤブの虐殺事件に對する英國の厚顏冷酷なる態度を憤激し、彼等の口は憎惡の毒を含み彼等の舌は、嗔恚の焰を吐き、彼等の言々句々、劍を含めるものであつた。實に此の時である、此の光景を目擊せる或る一英人新聞記者は、竦然として凡ては憎惡を以て充たされてゐる、之れに超越せるものは、唯だ一人ガンヂあるのみ、と誌るしたのは、然も此の時、此の大會の議題の中心は、實にガンヂの動議にかゝる徹底的排英主義、彼の所謂非協同主義であつたのである

ガンヂの心の錨の憩ふところは、純粹に眞理と正義の認識、その愛である。此の故に、彼は、また、本來、純粹に、また徹底して印度の子、印度的でありながら、併かも同時に殆んど不思議と思はるゝ程に、一切の國民的、民族的限界を超越して人類的であり、世界的であり、普遍的である。彼の革命主義は前に掲げる印度革命主義と稍々その趣を異にして、その源を、國民主義、本來近代西歐の產物である Nationalism に汲まぬ、寧ろ直ちに、凡て、人間最高の價値たる眞理と正義に汲む。彼の運動が、事實上、國民的運動であるのは、それが實に正義と

眞理なるが故である。決して國民主義的運動なるが故に、彼は之れを正且つ善と認むるものではない。偏狹と狹隘とは、憎悪が彼に無きが故に、また彼の思想と人格とにその痕跡を止めない。彼は單なる亞細亞の光りではない、彼は實に亞細亞に出づる世界人類の光である。

十二

此の正義と眞理の上に生くるガンチは、ロオラットの威壓法案に、此の上なき暴虐、不正義、虚僞の悪法を見た。彼は、飽くまで此の悪法に抗ずべく決心した。蓋し、彼の確信する所に依れば、それがいかなる悪であらうとも、また、それがいかなる形を取りて現はれんとも、凡て悪に從ひ、悪に屈服することはその一身の苟安の爲めに、正義を賣りて、悪と妥協することである。間接にも悪を幇助することである。悪は之れを默過すべきものではない、飽くまで戰ふべきものである。悪は之れに從ふべきものではない、飽くまで之れに抗すべきものである。

『我等は、自他の悩みを恐るゝ心より、悪の加擔者であつてはたらぬ。我等は、直接間接に、悪者を助くることを止むることに依つて、悪と戰はねばならぬ。……かゝる苦悩なくしては、自由に到ることはできぬ』之れガンチがその主宰せる新聞『青年印度（ヤング・インディア）』に載せたる一文『苦悩の法則』の一節である。

かくして彼は、彼及び印度國民自らの苦悩の上に、かの大英帝國の悪法に抗すべく立ち上つた。而してその實行の第一歩として、彼はロオラット法案の可決と前後して、一九一九年四月六日、全印度國民の同盟罷業と二十四時間の斷食とを慫慂提議した。

ガンヂの此の正義の戰ひへの角笛は、全印度國民の義憤の合圖となり、全印度國民の反抗的團結の中心となつた。國民義憤の情は、印全度に亘りて、强力なる政治的集團を生んだ。その最も活潑なりしは、ボムベイとベンガルと而して特にパンジヤブであつた。當時のパンジヤブの知事は、有名な頑冥暴虐なサア・オドワイアであつた。彼は此の形勢を見て、傲語して曰つた。ガンヂの心の力强きか、此のオド・ワイアの鐵拳の力强きか、汝等今に思ひ知る所あるであらう、と。凡ての場合脅迫は、風雲を呼ぶ。此のオドワイアの鐵拳政治は、遂に最初のアムリツツアの騷擾を誘致した。暴君オドワイアは、冷酷悪魔の如き心せる將軍ダイヤを呼んだ。

十三

あのパンジヤブ、アムリツツアの都のジヤレアンワラ・バグの悲劇、四圍繞らすに、大厦高樓の高壁を以てせる空き地に、印度の正月元日の、半ば祭り氣分にひたれる平和なる印度の老若無慮數萬の群集の眞つ唯だ中に、警告の一語をも發せず約一中

隊のグルカの兵士をしてその實彈を發せしめ、僅に十數分間の射撃に、即死一千、負傷之れに倍する空前の虐殺を敢てせる英國の將軍ダイア、獨りアムリツツアと言はず、パンジャブの到る處に殘虐無道到らざる所なかりし英國軍隊の野獸的將校……之れ實に、ガンヂのサチアグラハ、心の力に對して、大英帝國の官僚オドワイアの酬ひし所であつた。併かも、愛は忍ぶことを爲す。ガンヂと而して既に此の時ガンヂの指導の下にあつた印度の指導者等は、此の殘虐をも忍んだ。唯だ、彼等は、少くも英國の議會は、否、少くも英國々民は、此の彼等の將校の犯せる惡魔的行爲に、裏書きせざるものと信じた。古より今に至るまで、英國民は口を開けば、卽ち人道と自由と正義とを說きつゝあるではないか。彼等の最も良き本質に叛かざる限り、彼等は、オドワイアとダイヤの行爲を、無上の恥辱として批難し擯斥するであらうと。然るに、彼等の英國とその傳統に對する忠實なる信賴は、物の見事に裏切られた。英國の上院は、寧ろダイヤを、印度の現職より召喚して、之れに休職を命ぜる英國當局者の軟弱を責めた。ダイヤの恩給は、一厘一錢の減俸を見ざるのみならず、英國々民は、彼のアムリツツア虐殺の勞をねぎらはんが爲めに、醵金して、彼に二十萬圓を送つた。大英帝國に、げに不信、詭詐、殘虐、虐殺の基礎の上に立つ。將軍ダイヤ、卑劣漢ダイヤは、今日、大英帝國英雄のである。若し、今日の英國に、クロムウエルと、ミルトンと、ブレエクとグレンヰルをしてあらしめば、彼等は、何の顏を以て、彼等の此の似て非なる似姿に對するであらう。

十四

大英帝國は、殘虐と而して背信の上に立つ。アムリツツアのジャレワラ・バグに、空前の虐殺を敢てして、恬として恥ぢとせぬ大英帝國、その今日の支配者ロイド・ジョルジは、トルコ問題所謂カリフ問題に關して、思ひ殘す所なく印度七千萬の回教徒を欺瞞し翻弄した。而してかゝる背信、違約、欺瞞の上の大英帝國の建設、確立、膨張發展である。大英帝國は、單に、その一々の政策、その一々の法律、その一々の行爲に於て、惡なるばかりではない、それは根柢に於て惡である、大英帝國は、正義と自由の上に立たぬ。それは根柢に於て惡魔的帝國である。此の怖ろしき洞察此の偉大なる認識は、恰かも、始めて、その明を得たる生れながらの盲者の如く、ガンヂの心に臨んだ、『ガンヂの心、その心には、惡人の屈服、從順は、惡との妥協、惡の加擔を意味する。惡は、飽くまで、之れに抗し之れと戰ふべきものである。その結果、いかなる苦惱を我れと我が身とに招かんとも……』と此の正義の主張の鳴り響きつゝあるガンヂの心に

臨んだ。ガンヂの前に取るべく殘されたる道は、唯だ一つ、大英帝國との絕緣、印度の獨立：：かくして、ガンヂの非協同運動は、彼れのサチアグラハの自らなる論理的結論として生れ來つた。併かも、そは、純粹にサチアグラハ、正義の把持の自然的歸結である。その故に、そは、一切の暴に代ふるに暴を以てする矛盾を斥ける。此の故にそは『非暴力主義』である。かくして生れ來れるもの、今日、全印度の國民運動を動かし、支配し、象りつゝ Non-violent, non-co-operation movement『非暴力的非協同運動』に外ならぬ。

十五

かくしてガンヂの徹底的に精神的な理想主義的革命主義は、歷史の進み、物の論理、事件の推理と共に、正義そのものゝ深き內的主張より漸次その明確なる姿を取つて生るゝに至つた。彼は、前にも引ける、彼の『在印度英人に與ふる書』のうちに昂然として彼の理想主義的革命戰を宣言してゐる――『余は、若し我等にして能ふべくば、諸君と戰ひ、諸君の手より王權を奪ふを諸君は、意に介せざるべきを知る。併かも、諸君は、我等の之れを爲し得ざるを知る。そは、諸君は、我等を公けの譽れある戰鬪に於て、戰ひ得ざるものと、成したからである。かくして戰場に於ける勇敢は、我等に取りて不可能である。併かも魂の勇敢は、尙ほ我等に開かれてゐる。余は、諸君が、之れに對しても、また答ふる所あるを知る。余は、その勇敢を喚起するに努めてゐる。非協同とは、犧牲獻身に於ける訓練に外ならない。諸君に依る此の大國の統政は、我等を日に益々奴隸の境遇に導きつゝあるを知る時にいかで我等は、諸君と協同することを得やう』と

十六

而して此の最も明確なる姿しては、先づ始めてガンヂの心のうちに生れた理想主義的革命主義は、幾干もなく、印度國民運動の精神、その魂となつた。卽ち大正九年九月カルカツタに開かれたる『印度國民議會』の臨時大會、及び延いてその十二月ナグプウルに開かれたる、その第三十五回大會は、相踵いでガンヂの非暴力非協同主義、彼の理想主義的革命の信條を、印度國民議會そのものゝ主義綱領と可決した。今日、印度の國民運動とその革命運動は、印度國民議會の支配する所である。而して印度國民議會の主義綱領は、ガンヂの非協同主義である。かくして、今日、ガンヂは、實にその理想主義的革命の信條に依りて、全印度の民衆を動かし、支配しつゝある。全印度の革命は、かくして此の印度革命晩生の子ガンヂに依りて、凡ての近代西歐の外的色彩を蟬脫して、純粹に理想主義的純印度的革

主義たるに至つた。此の純潔崇高なる聖者の心を以て、その心と爲さんとする印度の國民は、その一切の外的屈辱沈淪を以てして、尙ほ昔ながらに高貴なる魂せる國民三度び祝福されたる國民と曰はねばならぬ。

十七

ガンチ、『あのガンチ、消極的なトルストイ主義の最も積極的な實行者ガンチ、その精神的に生ぬるき味方よりは、空想家、實行不可能と批難され、併かも不思議にも、その敵よりは、最大の危險を孕む可能性、最も强力なる實行者として畏怖されつゝあるガンチ、敵も味方も、その崇高純淨なる人格、愛に生きて憎惡に生きぬ彼の淸朗透徹なる心の前に、頭自ら敬愛の念にうなだるゝガンチ、その身より、一切の物質的安樂快愉を斥けて、文字通りに一杯の乳、一椀の麥に、その身體を支へ、一枚の粗末なる國產綿布のドウチに、その瘠せたる短軀小身を包むガンチ。その心の眼の前に、唯だ正義のみ、最高の權威を持して聳立し、眼中また大英帝國の權力無きガンチ。正義の爲めとならば、鼎鑊尙ほ飴の如くに甘き彼れ。一切の暴力を排して、しかも正義のためには、血の海を涉るも敢て辭せぬ彼れ。アメリカ、ニユウヨルクの一牧師をして、公然基督敎會の壇上より現代最大の人物レニンとロマン・ロランの綜合、現在生くる世界第一の人とまで激賞せしめしガンチ。我等をして、殆んどあの純潔無垢にして併かも、强烈なりしナザレのイエスの再來を思はしむるガンチ』（拙稿『理想主義的印度』）あの純淨のガンチは、印度の革命をその一切の近代的外的西歐的色彩より淨めた。誰れか、彼が進んで世界革命を、而して世界革命を透ふして、世界そのものを、彼の深く强き魂に依りて、その近代的汚濁その近代的淺薄より淨めずと保證し得やう。

ガンチは、今日、もはや、印度のガンチではない。彼は實に亞細亞に輝く世界の光である。（大正十一年一月）

てのものを燬き盡さずば止まざるの槪がある。

特別寄稿

（社會思想）

日本及支那の國際的地位を論ず（長篇）

バートランド・ラッセル

水際立つて冴へ返る氏の論議はいよ〳〵深酷を極む。外線を描くを止めて直に肺腑を突き、宇宙の心髄を突く。支那問題は？として世界で一番研究を要する問題だ。氏が支那を論議する第一人者なることは萬人の均しく確認する所、今回東洋に關する具體的意見を本誌によりて發表することとなりしは、本社の欣快とする所だ。東洋を論議するものは本論を一讀すべきである。

四月特別號の世界的大偉觀

替東京八四〇二〇番

竹内仁氏に答ふ

阿部次郎

一

僕の人格主義に對する貴君の非難を、多少の不愉快を以て讀了しました。それは、貴君の前書によつて、假令說はどんなに違つてゐても、兎に角相互の諒解を求めむとする友人の言葉を期待してゐたのに事實は其反對だつたからです。貴君は素直に讀めばすらりと通ずる筈の僕の言葉を、なるだけあらさがし的に惡く解せるだけ惡く解釋してゐます。これはどんな意味でも吾々が友人から期待し得る態度ではありません。貴君の態度は正直に云へば、僕にからかはうとする者の態度です、併し悠然として對手を手玉にとるには自信が足りないために、精一杯からかはうと思つて汗をかいてもがいてゐる者の態度です。嘗て僕の著書を通じての友人であつたといふ貴君からかういふ態度をひき出すのは、僕にも何處か惡いところがあるからでせう。併し貴君も反省の餘地があらば反省して下さい。

「我等」に出た「リツプスの人格主義」は雜誌が手許にないから讀みません。僕が今貴君に答へたいのは、僕自身の說の誤解されてゐる三四の點だけですから、新潮に出たものだけについて云ひます。幸ひ貴君の議論が略々逐條的ですから僕も簡條書にして答へて行きます。

（一）貴君が僕の人格主義を非難しなければならない第一の理由は、「それがブールジョアジーに彼等の保守主義の好個の口實を提供するからだといふことですが、それは、これだけでは、僕の人格主義を非難する理由にはならないでせう。故にＡＢＣの三人が一緒に歩いて來て三つに岐れてゐる路に出會したとしま

す。Aは右に行かうといふ。Bは眞直に行けといふ。Cは左に行くといふ。CがAに向つて、Bもそちらへ行つちやいけないといふぢやないかと云ふことはあるかも知れません。併しそれはBがCに味方してゐるといふ證據にはなりません、CがBの言葉を利用しようとしたといふ事實の證明になるに過ぎません。Bの本意はAもCも間違つてゐるといふのです。從つてCがBの言葉を利用したからと言つて、AがBをもCの仲間と見るのはひがみです。AはCに向つて、たゞ「Bはお前の方に來いと云ふのではない」と云へば——換言すればCに對してBとCとの主張の相違を指摘すればそれで充分な筈です。特にAがBの友人の場合には、さう云つてBの立場を明かに承認した上で、Bと自分との異同を問題にしなければならない筈です。吾々の場合には、道が實際三本なのか二本しかないのか、A(貴君)とB(僕)との相違は、其處の石ころどけるとか、此處の草を刈るとかいふ點にあるのではないのか、それさへ既に問題ですが、兎に角AがBに向つて、お前の說はCが利用するからいけないといふのは、Bの意見の獨立を認めないといふものです。Bに對するAの非難は、(1)お前の說そのものが間違つてゐる、といふことか、(2)お前の說は結局Cと同說だといふことか、(3)お前はそんなことを云ふが、腹の底ではCの味方をしてゐるのだらうといふことか、孰れかでなければならないでせう。貴君はあとで第一と第二の說を主張しようとしてゐられるが、それに加へてもう一つ、「ブールジョアジイの口實となるから」といふ理由を擧げる必要は何處にあるのですか。貴君は第一節の終りで、ブールジョアの或ひは乘ずるところとなるべき「三字脫落の不注意と全體部分に關する論理的誤謬」と稱せられるものを擧げて、「それは不注意によるのではなくして却つて用意深い故意に出づるものである」といふ人があつても、「殆んど氏のために辯明する言葉を知らない」といつてゐられるが、貴君が僕の友人であつたならば、何は兎もあれこの點では、「氏のために辯明する言葉」を知つてゐなければならない筈です。それとも、私の方でも、貴君が最初に理由とならぬ理由をあげて來た理由について氣を廻して、「それは不注意によるのではなくして却つて用意深い故意に出づるものである」と——換言すれば、竹内

は阿部が腹の底でブールジョアに好個の口實を與へるつもりであんなことを云つてゐると疑つてゐるのだと——いふ人があつても僕は「殆んど辯明する言葉を知らない」とでも云ひませうか。かう云ふ具合に氣を廻はし合ふ關係は、人間と人間との間でも最も淺間しい關係の一つです。この二人の關係は友人といふ美名には最も價せぬ關係といはなければなりません。貴君の論文の全體の中で、最も僕を不愉快にするものは、この猜忌深い——といふことを許して下さい——態度でした。

勞働階級と資本階級との對立に關する僕の態度は割合に簡單です。自分は精神的勞働者として勞働階級の一人である。自分は勞働の道德によつて資本主義者を征服せむことを欲する。同時に奴隷的勞働を强ひられてゐる一部の勞働者が彼等自身の力によつてこの境遇を脱却せむとする運動を是認し、自分自身の分擔する精神的勞働の方面からこれを支持せむことを冀ふ。併しこれを支持することの中には、當然に自分の所信に從つて彼等に苦言を呈する義務をも亦包含する。——かう考へた上で、自分の素質と教養とに最もふさはしき精神的價値創造の方面の分擔を通じてこの運動に參加せむとするのは、ブールジョアの廻し者でせうか。さう考へる人があれば、差當りさう云はして置くより仕方がないが、兎に角さう云ふ人が僕の友人でないことだけは動かすことが出來ません。

(二)貴君の所謂「三字脱落の不注意」とはどんなことでせう。それは僕が人格主義の是認する勞働運動の條件として「それは眞正に勞働者の本質的幸福を增加する方向に向つてゐるか、又所謂働勞者のみの幸福を目的として、その結果人類全體の幸福を侵害するやうなことがないか」といつたうちで「人類全體の幸福」といつたのは不注意で「人類全體の本質的幸福」と書くべきだつたといふのですね。併し素直にコンテツキストを讀む人で貴君の杞憂するやうな誤解をする人があり得るでせうか。「本質的」といふ言葉を繰返さなかつた理由は不注意ではなくて却て言葉の重複を嫌ふ語感上の注意から來てゐるのです。僕は讀者に對してそれ位の常識を要求する權利はあると信じます。まさかそんなみえすいた口實を用ゐる馬鹿はないでせうが、假に僕のこの言葉を楯にとつて勞働運動を非難する資本家があるに

してもそんな非常識な讀みやうがある物かと云つてやればそれですむぢやありませんか。然るに貴君はかう云ふことを「極めてあり得べき事柄である」と考へるのださうですね。その上に、その三字の脱落を故意だと解する者――(といふのは、資本家がこれを利用することが出來るやうに僕がわざと拵へて置いたと解する者、といふ意味でせうね)――があつても「殆んど氏のために辯明する言葉を知らない」のださうですね。そんなことなら貴君は本當に賴み甲斐のない友人といふものです。

(三)その次に來る「全體部分に關する論理的誤謬」といふのも亦前に引用した一文に含まれてゐるが、この點に關する貴君の議論は恐ろしくスコラスティックです。勞働運動が所謂勞働者のみの幸福を目的としたところで、人類全體マイナス「所謂勞働者」は人類全體ではなくて既にその一部分だから、人類「全體」の幸福を侵害することはあり得ない――といふのは稍巧な論理的遊戯を云ふべきですね。僕は今このスコラテイシズムに於いて貴君の對手になつてゐる暇がありませんから、たゞ僕の意味だけを再說します 僕が此處に「所謂勞働者」といふ言葉を使つたのは、精神的勞働者や農業者などを除いた工場勞働者ぐらゐの意味です。だから人類全體マイナス所謂勞働者でも人類の少くとも六割以上は殘るでせう。僕から云へば、所謂勞働者の幸福を目的とする運動がこの六割の本質的(御注意によつてこの句を加へます)幸福を侵害してもいけないのです。而も他人の本質的幸福を侵害するのは、僕の立場から云へば自分自身をも不幸にすることですから、この運動は折角その目的とした「所謂勞働者」の幸福をも侵害することになります。從つてそれは、貴君のやうなスコラスティックな意味でも人類全體の幸福を侵害するのです。

併し貴君のスコラテイシズムは猶繼續します。結果が人類全體の幸福を侵害するかどうかは、それが終結を告げた上でなくては斷言出來ない。だから人格主義が勞働運動に參加し得るのは、それが終結を告げた後のことである。(此處に貴君は得意のエキスクラメーションをつけてゐますがそれは省きます)――この論理も中々精緻ですが、このこせ〳〵とひねくれた歸結を

あの文章からひき出して來る手腕は、貴君のやうにアカデミツクな修練を經たうちでも飛切の秀才でなければ出來ないでせうから願くは僕の「論理的誤謬」から來る弊を割合に小範圍に限らせたいものです。實際を云へば、僕があの文章を書くときには結果の良否に關する判斷は、その人の良心と熟慮とから來る豫想に任せて、その先は過つたら改めるといふ態度に出るより外に仕方がないといふ常識を假定してゐたのでした。だから僕の立場から云へば、人類全體の幸福を侵害しないといふ信念が、人格主義者を「終結しない」勞働運動に參加させるに充分なのです。僕は、僕の文章を素直に讀んでくれた人には、この意味が明瞭に通らなければならぬと信ずるのですが、貴君にはさうはとれませんか。失禮ですが、貴君の考へ方にはまだ大局を無視した講堂的論理癖が隨分ついて廻つてゐるやうです。僕もさうでしたが、今は大分それを洗ひおとしてゐるつもりです。何卒貴君も出來るだけ早くそれを洗ひおとして、素直に他人の精神を理解し得るやうになつて下さい。

これで貴君の第一節に對する――表面から見れば甚だ形式論理的で、實質から見れば頗る感情的ヒステリカルな第一節に對する――答はすみました。

二

(四)貴君は「何と言つても字句の末に關することであつた」第一節を離れて、「もつと深く、氏の思想の内面に根を降ろしてゐる」非難をするために、僕の「人格主義と勞働運動」中の一節を引用してゐられる。故に僕も亦貴君に答へるために、貴君が引用した自分の文章を引用して來なければなりません――

生存と保健と教養とこの三つのものに對する權利は凡そ人類に共通の權利であつて、その間に貧富上下の差別があるべきではない。固より其處には、凡ての人に此等の權利を保證するだけの設備が完成してゐないときには、已むを得ずその權利を拋棄しなければならないものと、他人に先んじてこの權利を保證されるものとの差別なきを得ないであらう。……併しこれらの餘儀なくせられたる選擇に際しても、これを外部的階級的特權によつてするのは不公正である。それはただその個人の實際の能力とその能力を基礎とする社會的使命の重きことを標準とするものでなければならない」

貴君は先づこの標準の實踐的無價値を難ぜられるのです。

併し貴君が難ぜられるのは、實際はこの「標準」の實踐的無實です。さうしてこの事實は、僕が、分配の原理を公平にする價値ではないやうです。何故と云へば、貴君は「現在この三權といふ一つの善を實行に移すために必要な充分の情熱を缺いてを享受してゐる特權者の中に、自ら無能者又は低能者と自覺しゐるといふことを證明します。この點に於いて僕は確かに責めて進んで有能者に三權を讓る樣な謙遜な心の持主を見出すことらるべきです。僕はこの點で自ら辯解しようとは思ひません。は恐くは至難である。然らば有能者は暴力を以てこれを特權者たゞ、僕がこの一つの善に充分に情熱を集中し得ないのは、僕から強奪すべきであるか」と質問してゐられるが、若し僕がこが自分自身の使命だと信ずる――從つて少くとも僕自身にとつの質問に答へて「やるべし、やるべし」と云つたら、貴君は我意ては一層重大な――他の善に、自分の情熱を集中しようとしてを得たやうに嫣々笑ひさうですから。さうしてその時この標準ゐるからだといふことは理解してほしく思ひます。は充分實踐的價値を持つてゐることになるのですから。貴君が一體に僕が責めらるべきのは、單に分配の公平を實現しよう難ずるのは僕といふ人間が「思想を實行に移さうとする情熱をとする情熱が缺けてゐるからのみではないのです。僕には、せ缺いてゐる」ところに――もつと具體的に云へば、暴力を以てねばならぬと信じながらなし得ずにゐることが他に數限りもな強奪することを嫌ふ「阿部氏の人格主義の潔癖」に――あるのくあるのです。何が正しいか正しくないかについて次第に明かでせう。な觀念を持つにつけ、又現在の世界が如何に動いてゐるかにつ

貴君のこの非難はある程度まで當つてゐます。僕はこの標準いて段々智識が多くなるにつけ、正しく生きるためにせねばなが正しいことを信じてゐる。この標準が今日の社會に行はれてらぬと思はれることは無限に殖えて來るのに、憐むべき人間にゐないことを熟知してゐる。それだのにそれを實行に移すためは一體どれだけのことが出來るのでせう。千分の一でせうか、に身を挺して社會運動に携はつてゐるのでもない――これは事萬分の一でせうか、恐らくそれ以下です。茲に於いて我々は

分の生活を風に散らされる粃殼のやうにしないために、集中して一點に生きること——惡との戰ひに於いてさへ自分の分擔を定めることを餘儀なくされます。固より世界には自分の分擔以外に屬する惡も數限りなくあるのだから、さうして吾々が心眼を開いて世界を見てゐる限り此等の惡も否應なしに吾々の意識に映じて來るのだから、吾々には自分の腑甲斐なさに對する歎きと現在その惡に惱されてゐる人に對するすまなさとの感情が斷間なく浮んで來ます。併しこの世界をよくするためには、如何に氣が揉めても結局自分の分擔した仕事に骨折るより外に仕方がない——智慧の眼を開いて熟慮すれば吾々はかういふ決心に落ちて行くより仕方がないやうです。貴君にはかういふ意味で「諦める」者の心持がわかりませんか。自分自身の足元を危ますに、かういふ人が或點に於いて「その思想を實行に移す情熱」を缺いてゐることを責めることが出來ますか。それが出來るならば、貴君は實に羨むべき千手觀音です。

僕はさういふ意味で「諦め」を持つて生きてゐる者の部類に屬します。さうして自分自身の分擔が何處にあるかについての反省が、段々一點におちつきつゝあります。それは、自分の使命は「原理に深入する」人間になることだといふことです。さういふ意味で哲學者になることだと言ふことも出來ませう。これは凡ての人が僕のやうに哲學者にならうとしなければならないといふ意味では無論ありません。併し僕はあらゆる社會に於ける哲學の存在理由を信じてゐますから、僕自身がこの方面に志すことを疚しいとも思ひません。僕はこの使命を中心にして、飲み、食ひ、考へ、讀み、書き、動いて行かうと思ひます。この立場から惡に對する戰ひに參加して行かうと思ひます。固よりかくて到達した原理が吾々の生活を支配する力とならなければ——最も深い意味に於いて實行とならなければ、あらゆる思想は悉く無意味ですが、「原理に深入りする」者の最大の實行は「聖」の理想に參加することにあります。この方面に於ける僕の情熱も、今は固より云ふに足りませんが、僕は睿智を以て益々この方面に自分の情熱を集中して行かうと心掛けてゐます。ですから、若し貴君が、分配の公平を求める社會運動家の情熱さへ充分に持ち得ぬ者が「聖」の理想に情熱を集中しよう

とするなどは無意味だといふならば、もう吾々の立場は永久にわかれてしまつたのです。それは悲むべきことですがやむを得ません。

（五）問題を僕といふ個人のことから離して、また僕の思想の方に歸します。暴力を以て特權者から強奪することを是認しなければ、僕の前に擧げた標準は「空虚」になるでせうか。貴君はさう云ひます。僕はさうは思ひません。國家の權力によつて特權者の特權を奪ふことがその一つです。（「國家主義の解剖参照」）勞働運動の威壓――暴力ではありません――によつて特權者の讓歩を餘儀なくすることがその一つです。特權階級自身の自覺も一部分の力としては矢張この形勢の推移を助けることが出來ると思ひます。さうして人格主義の精神が人間の――單に特權者だけではなくて社會一般の――間に深く浸潤することがこれ等の運動の地盤になります。併し「その日が來るまでは」實際多くの時日が流れるでせう。その間吾々はこの害惡を最高可能の程度に於いて緩和するやうに、具體的の場合について努力するより外に仕方がありません。さうしてそれにも人格主義が必要なのです。もしそれより先に「凡ての[illegible]に此等の權利を保證するだけの設備が完成して」しまへば實際結構此上もないぢやありませんか。問題の標準はそれが出來ない間の繋ぎに設けた補助手段に過ぎないのですから、その用がなくなれば何時でも引きさがつてちつとも差支がないと思ひます。それとも貴君にはこれ以上の名案がおありですか。あつたら何卒きかして下さい。それが「人類の本質的幸福」と矛盾せぬものであるならば、僕は何時でも變説するに躊躇しません。

（六）尤も貴君はまだ此上に、この標準がブールジョアに利用されることを恐れてゐます。併し「加之、己れを有能者と自負するブールジョアがこの高尚なる標準の名に於いて、現在の特權維持を主張することになれば、人格主義はこれに對して道徳的責任を負ふ必要はないのであるか」といふ貴君の質問に對しては、かう反問すれば充分だと思ひます――「人格主義以外の何等かの主義」は何等か主義者と自稱する暴漢が何等か主義の美名に於いて殺人と掠奪とを恣にすることになれば、何等か主義はこれに對して道徳的責任を負ふ必要がないのであるかと。人

格主義も何等か主義もこの場合に道徳的責任を負ふ必要がないことは天一坊の出現に對して徳川幕府が責任を負ふ必要がないと同一でせう。吾々は唯此の場合には、贋者の化けの皮を剝いでやればそれで澤山なのです。

序ながら、貴君はリツプスの分配原理に關する思想を誤解してゐるやうです。リツプスが各人が「これに價する程度に從つて」分配すべしといつたのは、功勞がある者に對して國家が賞與を與へるやうな意味で云つたのではないでせう。それに價するとは、その所有によつて「世界に善を造り出す」能力が有るといふことだと思ひます。能力が分配の原理になるのは、それが生産の原理であるから――より多くの物を其人に托するのはその人がこれを用ゐてより多くの善を世界に生産する能力を持つてゐるからです。從つて假に僕のやうな者が一般に云つて人格價値を人並以上に持つてゐるとしても、リツプスは人並以下の物を私に托することしか首肯しないでせう。それは、其財を用ゐて善を生産する能力を持つ點に於いて――少くとも其點に於いては僕の人格價値が他人に劣つてゐるからです。さうして僕もそれで滿足します。僕のやうな者は、身分不相應の物質を渡されて、これを最もよく活用せよと云はれたら苦勞でたまりません。人格主義は、欲望に從つて分配することには、無條件に賛成することが出來ませんが――何となれば、さうすると子供などは無闇に菓子を欲望して胃病になることがないとも限りませんから――能力に應じて生産させることには何の異議もない筈です。少くとも僕自身はさう考へてゐます。リツプスも恐らくはさうでせう。

三

（七）第三節になつて、貴君の明晰な論理は、益々部分に於ける細密と全體に於ける盲目とを發揮して、對手を面喰はせることに成効してゐます。玆で問題になるものは、「此の如き進歩が、良心の苦痛なしに現在の私達のやうな生活を――（此處に如何にも人並の暮しをしてゐる者の末席らしく「私達以上の生活を」といふ句を入れてありますが、それは無用ですから削ります）――支持して與れる日が來るまで、今日の經濟生活を人格主義の要求に協ふものにするためには、私達は贅澤心を抑制して生

活を單純化する方向に注意を受けなければならない。……贅澤心の抑制と生活の單純化――これこそ今日の生活を無底の泥池から救ひあげて、私達の良心に安靜を與へる不動の方針でなければならないであらう」といふ言葉であります。さうして貴君に從へば「これが不知不識人心を腐らす力を揮ふ」ことになるのださうですね。前後を通讀すればわかるやうに、奴隷勞働を豫想してゐる今日の經濟生活は消費者としての吾々をどうしても良心の苦痛なきを得ないものにする。吾々はこの經濟生活が改められるまで良心の苦痛から徹底的に脱却することが出來ない。併し吾々がこの通り――（この點に於いては竹内君も僕と同樣である）――今日の經濟生活の中に生きてゐる以上、吾々はせめて良心の苦痛を少くでもするやうに、換言すれば惡いとを最少限度に制限するやうに、心掛けなければならない。これが私達の良心に安靜を與へる不動の方針である。換言すれば「現在の經濟組織の中に生きてゐる限り」吾々は常にこの方針をとつて行かなければならぬ。――かういふことによつて、吾々の良心は何處で胡麻化されてゐるでせう。贅澤心の抑制と生活の單純化さへ充分に實現されることは決して容易でありません、吾々はこの不動の方針によつて、既に甚だしく身を責めなければなりません。而もこの不動の方針はたゞ不完全な現在に處するの途であつて、吾々の良心はまだ無罪放免にされる譯に行かないのです。吾々は更に奴隷勞働を根絶する途を考へなければならないのです。貴君は、憐むべき吾々の良心に、この上（この方面に於いて）どういふ重荷を負はせようといふのですか。無産者は幸ひにして（この點に於いては幸ひにして）「私達」のやうに深い罪を負つてゐません、從つてこの點の反省に於いてはせめて彼等を「私達」の中に入れたくない、實際を云へば、彼等にも贅澤心の抑制と生活の單純化の問題に於いて、少くとも生活を整理する餘地はあるでせう、居酒屋の入費を節して本を買ふやうな意味で生活改善の餘地はあるでせう。併し私はあの場合これを問題としたくなかつたのです。比較的餘裕のある生活をしてゐる「私達」だけを責めたかつたのです。所得の性質に構はず所得の量が人並な者をブールジョアと名けるなら、貴君も僕もその末席を汚してゐるブールジョアをのみ責めたかつたの

です。それともこの場合、貴君は無産者をブールジョアの中に入れて一緒に責めるのが、彼等に敬意を表する所以だとでもいふのですか。此處に人があつて、「惡人はかくかくの途によつて罪を償ふべし」と云ふとき、「お前は惡人のことだけを云ふが、善人はどうしてくれるのだ、善人を仲間外れとして平然たるが如きはどうしたのだ」と反問する者があつたら、吾々は反問者の頭をどう思へばいゝのでせう。吾々は彼の顏を眺めてこの人は氣が觸れてゐるとは思はないでせうか。尤もひがみの多いヒステリーの女なら、あの人はあの方だけを叱つてちつとも私を叱つてくれないと云つて怨むかも知れません。併し日本の無産者はそんなヒステリー患者ではないでせう。僕は、そんな氣の廻しやうをするのは、貴君のやうに無産者の同情者を以て任ずる――さうして自分は無産者でないインテリゲンチャの、而も一部分に過ぎないことを確信します。このひがみは頭だけで考へる人でなければ出て來る筈がありませんから。

（八）次に貴君の問題とするのは、「人格主義の倫理的要求は必ずしも制度としての共産主義を必要とせず制度としての私有財産主義を非としない。唯彼にとつて絕對的に必要なのは、財產を公共的のものと思惟する觀念である。この觀念が各人の實行を支配することである。人格主義はこの觀念が現在の經濟生活を内部から支配することを求める。云々」といふ僕の文章です。これは既に一度問題となつたもので、僕が既に一度答へたものです（改造に出た北郊雜記の（一）と（三）が、不幸にしてあの雜誌は發賣禁止になりましたから、此處に必要なだけを再錄しませう――

『此の間畏友H君に逢つたとき、H君は僕の顏を見て微笑しながら云つた――「君の中央公論の論文を讀んだ。君は人格主義にとつて必要なのは制度ではなくて、財產を公共的のものと思惟する觀念だと云つたが、果して觀念だけで澤山なものでせうか」。僕は答へた――「共產でチヨン切つてくれちや困るよ。直そのあとに、この觀念が各人の實行を支配することであると書いてゐるぢやないか。」H君はいふ――「そんなことが書いてあつたかなあ。併し僕の云ふのは、その觀念が個人の實行を支配するだけでは駄目だといふのだ」。かう云つて二人は顏を見合せて笑ひ出した。

僕から云へば、制度の問題は各人をしてこの觀念を實行させるための手段として中間的の意味を持つてゐるのだ。この觀念が直接に人心

を支配すること完全になれば最早制度の必要がない。この一致した立場の上に立つ相談の必要が殘るだけだ、併し此の如き理想的狀態に到達するまでの段階としては、勿論制度の問題が多大な意義を持つてゐる。僕は一度もこの意味に於て制度の必要を否定したことがなかつた。……』

『友人S君はいふ――お前は制度だけでは足りないと云つてゐる人である。然るにお前は又法律が人間の利己主義を抑へる力があることを認めてゐる。（「國家主義の解剖」參照）これは矛盾ではないのかと。

僕はS君に反問して云はう――人はパンのみにて生きる者にあらずといふ人が、パンを食ふのは矛盾なのか。人は足にて握ること能はずといふ者が足で歩くのは矛盾なのか。

提出された問題を本當に掴む力がある人は、こんな空な矛盾呼はりを滅多にするものではない。事實の論理がかう云ふ誤謬に陷ることを許さないからである。現實を重視する人はもつと問題の現實をはつきり掴まなければならない。現實重視の空論は、空論の中でも最も危險な部類に屬する。』

併し貴君の問題とされた一節では、理想的狀態に於ける制度の無意義を暗示しただけで、中間狀態に於ける制度の有意義については何も云はなかつたから、貴君のやうな疑問が出るのは無理とは思ひません。何卒前揭の二小話で僕の眞意を補つて、若し貴君の知つてゐるブールジョアで、僕の言葉を楯にとつてその良心を胡魔化さうとする者があつたら、阿部の意味はさうぢやないさうだと傳へて下さい。僕が彼處であゝ云ふ限定した立場をとつて、故らに制度の問題に觸れることを避けたのは、制度の問題に關する自分の無智を自覺してゐたからです。實際、制度として共産主義が理想的なのか私有財産主義が理想的なのか、その點に關する自分自身の明快な判斷を形造ることが出來なかつたからです。それで僕は「人格主義の倫理的要求」についてのみ立言したのです。プロレタリアの味方と稱する者の中にも、色々な者が混入してゐるやうですから、貴君の云はれるやうに、無産者は僕の說に對しても「十分の注意を以て警戒する」がいゝでせう。さうして他意のないことがわかつたら安心するがいゝでせう。

四

（九）貴君は最後に僕の「惡評高い」（この言葉は貴君の文章を引用したのではありません。僕がさう自稱するのです、同じやうな引用符を用ゐてありますから讀者のために一寸注意して措き

ます）赤十字的態度について特に力を籠めて論じてゐられますが、これは、僕の方でも殆んど言ふべきことを言ひ盡してゐますから、今は詳しく答へることを差扣へます。前に引用した北郊雜記の續きにも書いてありますが、此處に再錄するのは長過ぎますから、御序があつたら一讀して下さい。茲ではたゞ細かな點で貴君に誤解されてゐると思ふところを列記します。

(a)僕は勞働者に水素と酸素とを與へることを主張するものではありません、勞働者に「水」を與へることを――彼等に必要な物質を與へることを主張する者です。これを要求する勞働運動に贊成するものです。併し人格主義を信ずる勞働運動者は、たゞこの物質を與へるのみならず、勞働運動をその動機に於て淨めるといふ努力の義務を更にその上に負はなければならないのです。細部については一々具體的な場合を調べて見なければ何とも云へませんが、人格主義の勞働運動は、恐らく賀川豐彦君のやうな形をとつてあらはれて來べきではないかと考へます。

(b)人格主義は歷史の進行が憎惡の氾濫や復讐心を通じて始めて新局面を打開することを信じてゐません。これを假定の形で云つたのは論敵に對する讓步によつて、問題をその先に進めたものに過ぎません。愛と公正との精神が歷史に新局面を打開し得ることと、この精神が彼自身の仕方に於いて惡と――この場合に於いては資本主義と戰ひ得ることを信じないならば、人格主義者は世界に對して絕望する外はないのです。彼は彼自身の仕方に於ける戰ひの正しさを信ずるが故に、これと矛盾する武器を用ゐむとする戰ひに參加することを得ないです。それ故にこそ彼は、その戰ひに於いて――あらゆる方面に色々の精神で戰はれ得る戰ひのうち、その一つの戰ひに於いて――赤十字的態度をとることを餘儀なくされるのです。從つて彼はその戰ひが戰はれつつある間、絕えず別樣の意味に於いて戰ひ續けなければなりません。誤謬に對する戰ひを戰ひつゞけなければなりません。僕も亦微力ながらこの戰ひの一方面を分擔しつゝあります。さうして貴君方の攻擊を受けつつあります。この立場を樂な「都合のいゝ」立場だと感ずるのは貴君の勝手ですが、僕自身はこの戰ひの苦みを――孤獨と忍辱との苦みを自ら經驗してゐますから、自分ばかり樂な地位に立つてすまないといふや

うなことゝは御世辭にも云ふことが出來ないのです。

(c)貴君が十字軍的態度を難ずる人に對する僕の一つの答辯の中、「少くとも二つの論理的誤謬」が隱されてゐると云はれる中で、怯者であるといふのが、僕を非難する論點の一切でないから怯者でないと答へることによつて「一般に」非難者に答へ盡したつもりでゐるのは誤謬であるといふのは、貴君が「獨創的に案出せられた」幽靈に過ぎません。僕は他の場合にも難者に答へてゐるからあの文章を唯一の答へだと主張する必要はないのです。そうしてあの文章の中でも、これで答が盡きてゐるなどとは何處にも云つてゐはしないでせう。それを勝手に唯一の答辯だと「獨創」してこれが論理的誤謬の一つだもないものです。貴君のヒステリー的論理癖は此處にも亦頭を擡げてゐます。僕はたゞ苦笑する外はありません。

(d)もう一つの論理的誤謬と云ふのは、僕が「利害の戰ひ恩怨の爭ひに於いて兩者の孰れにも與せぬ者は必ずしも怯者ではない。寧ろ彼が明瞭に善の味方であるが故に、兩者の孰れにも與し得ぬやうな場合も決して少しとはしないのである」と云つただけで、僕自身が明瞭に善の味方であることを「直接に示」さないところにあるといふのですね。併し善の味方であるかどうかは、言葉では「示さ」るべき性質のものではありません。如何に「ディアレクティクの達人」を以て許されても、こればかりはどうにも致し方がありません。それは何卒僕の生活態度の全體について見て下さい。さうして孰れとも判斷して下さい。僕は甚だ力の足らぬ、過の多い人間ですが、僕の意志は明瞭に善の味方であることを自信してゐます。それだからこそあゝ云ふことも敢て云ひ得るのです。

併し貴君自身がこの點に於いて示された「論理的誤謬」はただ以上の諸點だけではありません。貴君は、僕が恩怨の爭ひに於いて中立の態度をとる者が必ずしも怯者でないといふ例にルーテルやソクラテスを擧げたのは、「傑れた人格者の名の陰に隱れて自分の立場を辯護しよう」とする者だと考へられるが、それは貴君が僕の比較の要點をとりちがへてゐるからです。僕の論理はかうなのです——凡そ恩怨の爭ひに於いて中立的態度をとる者は必ずしも怯者ではない。例へばソクラテスやルーテ

ルのやうに。従つて「階級闘爭に於ける赤十字的態度」をとる者も亦必ずしも怯者ではない。——かうなのです。言葉の表から云へば凡てが僕自身のことではなくて「階級闘爭に於ける赤十字的態度」の是非そのものにかゝるのです。固より「それだから僕自身が中立的態度をとるのも必ずしも怯者であるといふ證據にならない」といふ意味は言下に生じて來ます。さうして「そんならお前は必ず怯者ではないか」と問はれるとき、「貴君の判斷に任せます」といふ言外の意味は當然に籠められてゐます。僕はかう云ふやうな、自分の個人的な問題について、ギリ〲のところまで宣言することを嫌ふ舊弊な人間の一人であります。併しどれだけ言外の意味を籠めてゐるにせよ、比較の要點は「赤十字的」な態度そのものであつて、人格の傑出した點ではありません。さうしてそんなことは固より問題にも何にもならないことですから、その方面に於ける疑察に對して丸で用心する氣にもならなかつたのです。然るに貴君はかういふ具合にソクラテスやルーテルの名を引用したことが「云ひ解くすべもなき怯者のこと」になると言はれるのですね。その點に於ける貴君の論理的誤謬は、その歸結が僕の人間に關するところが深いだけに特に再考を煩して置きます。

五

貴君が第五節に餘論としてあげた諸問題は、貴君の說明が簡單ですから、僕も答へることを畧します。

僕は友達らしい心持で貴君に答へることが出來なかつたことを恥かしく思ひます。僕といふ人間は、貴君のやうな觸れやうをされると、自然にかう云ふ音を出すやうな甚だ到らない樂器であります（二月十四日）

文藝管見（二）

里見弴

第一章　自分自身の紹介

地

地球が運命づけられてゐる未來を、今日の科學がどう説くか、と云へば、絶望的に慘憺たるものだ。簡單なことしか知らないが、次第々々に地熱が冷め、同時に太陽の燃燒も衰へて行くことが動かせないとすれば、やがての末には、闇黑と寒冷との手に、吾々の地球は、いや應なしに引渡されなければならないのだ。假に、それまでに、うんと科學が進歩して、或は地球の表面に、海と云はず山と云はず、鐵よりも丈夫で、而も熱の不良導體である何かで、グルりと外箱(そとばこ)を拵へて了つたり、或はそのなかで、スティムなどよりも遙に完備した保溫裝置を施して煖をとつたり、或は電力以上の何かで照明し、或はまた酸素供給の設備にも間然するところがない、と云ふやうな地球を、——繭のやうに緊束ない話ではあるが、假に空想も得たとしても、そんなことは少しの慰めにもなりはしない。少くも私には、そんな人力だけで保つてゐるやうな地球は、ちつとも有難くも、また住みよいとも思へない。その代りには、闇黑と寒冷とに鎖されて了つた地球を想像してみたところで、別段に悲慘や憂鬱を感じもしないのだ。だん／＼人間が死に絶えて行くあとに、闇黑にも寒冷にも影響されることの少ない動物が、我が世がほにのさばり出て、何億年と云ふやうな歴史をもつた

文化、——次第によくなり得るものだと云ふ可能性を信じて、人間があらん限りの努力を積み重ねて、やつと築きあげたところの文化を、弊履の如くに踏み躙るのだ、と云ふ風に思ひ描いてみれば、勿論、悲しくも、淺間しくも、また馬鹿々々しくも感じられない筈はない。けれども、それは、どこまでもあたまの感じ方で、——餘人は知らず、私としては、まるで胸へは來ない、つまりさう云ふ實感が起らないのだ。これは、多分私ばかりではないと信じる。若しもそれが、人々の胸に實感として感じられるならば、藝術も政治も、何もかも擲つて、ノアの一族が箱船の用意にかゝつたやうに、そろ〳〵例の大外箱や、保溫裝置や、照明燈などの發見に、全力を擧げなければ、生き甲斐なく感じるだらうのに、一向そんな容子も見えはしない。かう云へば、或は云ふだらう。誰がそんな馬鹿げた、非科學的な工夫にあたまを使つてゐるものか、科學は、もつと科學的にその時の用意をしてゐるのだ、潜航艇でも、飛行機でも、そのまゝでその時の役に立つとは云はないけれど、あらゆる科學的の研究が、積り積つて、つまりはその時の用意になるのだ、と。これに對して私は答へる、成程君は現代の人だ、科學は萬能主義者だ、だから、さう云ふ君たちに呑み込み易いやうにと、私は最初に、科學が說くところの地球の未來から話を起したのだ、地球の未來などゝ云ふ問題を、科學を離れて說いたところで、誰が耳を傾けてくれるものか、私はたゞ科學で話を始めたから、科學で終りを結んだに過ぎない、大外箱や保溫裝置はさて措いて、これから何億年かのうちに、どれほどの進歩を遂げやう——とも、假に、(と云ふのは、全然信を置くわけにはいかないが、と云ふ意味が勿論ふくんでゐるのだが、)假に科學の云ふ通り、地球が闇黑と寒冷とに鎖される時が來たとしても、それに對して、科學の力でどれほどの防ぎがつけられるものでもないとは、分りきつてゐる。なか〳〵壽命を延ばし得たところで、一世紀二世紀と云つたくらゐのものだらう、それを、その作に就いちアこつちが受持だ、と云ふやうな顏をするのは大間違ひだ、とかう答へて置いて、さて私は考へる。

一體この地球と、人類との壽命では、あとさきで、すばらしい年限の違ひがある。地球の、謂はゞ壯年の、ほんの僅な一時期を許されて、人類が、萬物の靈長と稱し、我がもの顏に、その背中にはびこつてゐるのだ。これは、地球の幼年時代、――熱すぎて人が生きてゐられなかつた時分に、傲然と構えてゐたであらうところの、脊髓動物の遺骨などから推して、少くも過去に於ては、事實と認めてもよからうし、從つてまた、その老年期に、他動物に席を讓らなければならない、と云ふ想像も、さして無理ではあるまい。

ところで、私としては、その幼年期を考へてみても、また前にも云つたやうに、老年期を空想してみても、共に、殆ど何等の實感も起らないのだから、こんな地球に對しての考察などは、全然無意味だとも思へるのだが、身勝手の云ひ分か知らないが、誰がなんと云つても、壯年期の背中を假りた人類が、あとさきでさうする動物中のどれよりも、必ず優れたものだと云ふ實感がある。もつと遠慮なく云へば、地球あつての人類ではなくて、人類あつての地球だ、と云ふ實感さへあるのだ。而もその實感の、あたかも頭を抑えつけるやうな風に、地球の壽命と比較しての、人類の壽命が暗示されてゐるのだ。丁度、玉座を與へられながら、朧げに任期のあることを云ひ含められた王樣のやうな立場だ。そのことで、一體彼の氣持は、どう影響されるだらう。或は全力を擧げて、勤め勵まなければならないと決心する者もあらう。さう云ふ人ならば、一生玉座が自分のものときめられてゐるよりも、その朧げな任期のために、一層精勵する氣になるのだ。また、なんだ任期なんぞあるものか、とつまらなく思つて、すつかり怠け放題になり、したい三昧に日を送る者もあるだらう。

が、そこで私が翻つて人類を見るのに、決してその後者ではないと信じられるのだ。或は今だからかも知れない。然く科學の言に從つて、だん／＼世の中が暗く寒くでもなつて來て、人類のさきが見えだしたら、或は後者のやうな自棄

に陷りないものでもないが、然し私は、若しさう云ふ氣が起るとすれば、今からでもきざし位は現れさうなものだと思ふ。こんな大問題になつて來ると、とてもはつきりしたことは云へないが、地球と人類との壽命の違ひと云ふ暗示は、少しも人類の精勵を損ふことなしに、却つて前進の鞭となつてゐるやうに、私には思はれるのだ。勿論人々の心に、なんの意識するところがなくてもだ、そんな表面的な關係でなく、地球の意志が、なんとなく人類の前進を促してゐるやうな氣がするのだ。なんとなく、ほんとにそれはなんとなく、ではあるが。さうして、若しもその鞭が、もつと露骨だつたとすれば、──暗示と云ふ域を踏みだしたとすれば、結果は、丁度正反對に惡くなつてゐたやうな氣がするのだ。

人々はたゞ、自分の信じる道に精進しさへすればいゝのだ。……然しそれは、次の「人」の條に行つて述べるべきことで、玆にはたゞ、人類よりも年長で、而もあとまで生き殘るべき地球が、或る一時期の借家人に對して、甚だよい感情を與へる親切な家主さんであると、云ふやうな、私の朧げな感じを云ふに止めて、次に移らう。

人

人は常に、十の字の交叉點に生れるやうな氣がする、──と云ふのは、横には、同時代の世界人類と相結び、縱には、何千年來の歷史と、何億年とも知れない未來の年月とに相連つて、その縱横二線の交點に、各人の出生がある、と云ふ意味だ。云ひ換へれば、人の存生は、ポツンとした一點ではない、と云ふのだ。否、それは、それ自身として一點には違ひないのだが、その點は、前に云ふ如く、十字の交り結ぶところ以外には、決して飛び出さないのだ。どれほど未開野蠻な土人でも、猿でない限りは、背後には人類の歷史を背負ひ、左右の手には世界の萬民と相携へて生れ出るの

で、常人がさう意識するしないは、全く別問題だ。

この感じは、私が自分の子を得てから、だん〳〵はつきりして來た。生れたばかりの彼等を、素ツ裸でころがして置いたとしても、どこからどう見たつて推古朝の嬰兒でも、或はまた二十五世紀の嬰兒でもよい感じだ。生れながらにして、人類始まつて以來大正何年までの歴史に、悉く影響されてゐる嬰兒なのだ。さうして、どんなにもがいてみても、今日の世界人類の手を振り放つて、どこへも飛び出して行ける彼等ではないのだ。

かう云ふ意味で、人の存在は、可なり窮屈に、必ずその「時代」に縛りつけられてゐる。横線上には、無數の點が求められるけれども、縱線上では、一寸たりとも、上へも下へもづらせられないのだ。これほどの窮屈が課せられてゐる一方に、眞に驚くべきは、瞬きする間にも、世界中で何千人と生れつゝある人間が、悉く、全く新しい「創造」であることだ。よく誰でもが云ふ口だが、目鼻だちが變つてゐるやうに、同じ心の人間と云ふものは、古今東西、さうしてまた未來永劫、決して二人とはないのだ。そんなことがどうして證明される、ないとは限らない、など、横紙破りを云ひ出す人があつても、私は相手にならずに話を進めよう。實際これほどの創造は「天」と呼ばうと「神」と稱えようと、或はまた「自然」と名づけようと、それは勝手に任せるが、兎に角さう云ふものゝ不可思議自在を語つて餘りあるものだ。常に餘りに人力を信じ、自惚れのために膨れ上つてゐる人類は、たまにはこんなことでも考へて、今更らしく吃驚してみるのも藥だらうと思ふ。

そこで私は、この可なりの窮屈と、さうして絶對の自由とが、一人の人の裡に、どう云ふ關係をもつて育つて行くものかを考へてみたいと思ふのだが、その前に、二つ三つの用語をきめて置かなければならない。

前に、「天」とも「神」とも「自然」とも、勝手に呼ぶがいゝが、兎に角さう云ふもの、と云ふやうな、長たらしい云

ひ廻して現はしたものを、以下私は「天」と言ふ言葉を撰び用ゐることにしよう。これが、一番穩くから、日本人の心に馴染んでゐると思ふから。次に、天の不可思議自在な創造によつて、人の裡に與へられてゐるものを、「己」と呼ばふ。これに對して、人の前後左右に、十字を描いて連つてゐるものを、「他」と名づけたい。平たく云へば、「他」とは「他人」のこと、「自分」以外のものゝことだ。たゞそれは「人」に限つたことでないから、故に「他人」の「人」の字を除いたまでのことだ。扨て、こゝで、改めて標題的に云へば、「人の裡の己と他」と云ふ問題にはいらうと思ふ。

嬰兒が、全く新しい創造でありながら、而も同時に、人類の全歴史（云ふまでもなく有史前のあらゆる過程をも含めて）を、背中に脊負つたものである、と云ふ氣持は、古刹の常燈明のなかの油、やうな、何千年來いつ變つたでもなく變らないでもなくて今日に至つた、太古からなる血潮を臍緒から飲んでゐて、その飲んだものゝ排泄物、——胎便を、腹に殘してゐるうちから、すぐもう哺乳の本能が働き出すのを見てゐると、なんとなく、しみ〴〵と感じられて來るのだ。本能が萬人共通のものであるだけ、それだけ慥に彼自身のものであることが思はせられる。感覺がまたさうだ。ほどよく湯のなかで、彼は心地よげに、欠伸をしたり、盛に手足を動かしたりする。若し冷水で生湯をつかはせたとしたら決してさうは往くまい。ところが、假に、何千年來（それほど永い必要もないが）冷水で生湯をつかはす習慣の人種があるとすれば、そこに生れた嬰兒は、恐らくはそのなかで快げに手足を延ばすことだらう。とすれば、そこに、生れたばかりの嬰兒の裡にも、「他」がひそんでゐるとは指摘し易い。

子供が智慧づいて行く最初の道程には、屢〻〝Method of trial and err〟（試みと失策との方法）が執られる。或るはやく〳〵と立ち騰るものを掴まうと試みて、鐵瓶の口からたつ湯氣にふかれて、感覺が脅されたとする。その記憶が殘つてゐれば、今度は父親の口から立ち騰る煙草の煙までも警戒するだらうが、然し眞ッ赤な炭火を恐れはしまい。それが

湯氣と同じ感覺を與へるものだと云ふことは、また別な試みと失策との後でなくては、知るよしもないのだから。けれども、既に簡單な言葉でも解るやうになつた子供なら、例へば湯氣にふかれた感覺と「あつゝ」と云ふ言葉とが結びついてゐれば、炭火は「あつゝ」だよ、と教へられたばかりで、よす場合もあらうし、またそれでは承知しないで、新たな試みを云ひ張る場合もあらう。その取捨は彼自身の「己」にあることだが、いづれにもせよ、――即ち他人の言葉によるか、自分の失策によるか、いづれにもせよ、かようにして、次第々々に「他」をとり入れるのである。

次には眞似る時代が來る。即ち、無狀件に横の廣がりを取り込もうとする時代だ。それは、アミイバアなどの單細胞動物が、食物を攝取する方法に似てゐる。口もなければ腸胃もないフニヤ〳〵な軆に、凹所が出來て、二つの突起が、食物を體内に團み込む。丁度葛饅頭があんこを包んでゐるやうな具合に。埃やなんぞが體のなかに溶けて見えるが、そのうちだん〳〵に、謂はゞあんこの部分が葛に變つて、つまりそれだけ肥え太る。そんな風で、總て幼時に於ては、「他」が、なんのカスもあまさずに、殆ど全部「己」に吸收されて了ふのだ。

それから學ぶ時代へ來ると、幾分條件的になつて、「己」に照し〳〵、納得がいくのからさきへ取り込む。不完全ながら、もう口や胃腸が備つた食べ方になる。云ひ換えれば、彼の裡に、「己」と「他」とが、そろ〳〵對立關係をとり始めるのだ。

かようにして、いつか「己」も肉づき、「他」も澤山にはひつて來る。それでも、十四五と云ふやうな、ぐん〳〵と「己」が肉づき、三角や四角や圓や、思ひ〳〵の形をとりだす頃には、盛にひとと喧嘩をする。各自形の違つた「己」が、お互にコツ〳〵と角を突き合せるからだ。その時代も過ぎて、いよ〳〵大人になると、一應「己」の形も出來上つて了つて、それとは關りのないやうな「他」でも、ゆつくりそこらにほつて置けるだけに、心の廣がりがつく。從つてあまり喧嘩なんぞしなくなる。「己」の角へ「他」の線をあてがつて、恰かも圓いもゝのやうな顔をして、フワリとうけるからだ。

男と云ふものには、量の多少こそあれ、必ず幾分の女が加味されてゐるし、女にはまた、必ず幾分の男が含まれてゐる。さうしてその分量の具合で、いろ〳〵の性質が分れて來る。――と云ふ風に說いたオツトー・ワイニンゲルに倣つて、「己」と「他」との分量から生じる性分の、二三の型を擧げてみよう。

お坊ツちやん型。――思ひ昂つた性分。これは、「己」に訓練がないために、「他」を十分に理解し、その長所を認めることが出來ないのだ、とも知らずに、木の股からでも生れて來て、たつた一人でこの世の中に生きてゐるやうな氣取りで、首つたけ自分自身に惚れ込み、いゝ氣持に納り返つてゐる。分析すれば、粗惡な「己」澤山の「他」なし。

苦勞人型。――どうでもいゝと云つた性分。これも鉞の足りない「己」が、浮世の波風にもまれてゐるうちに、中元に貰つた角砂糖のやうに角がとれて了つて、西へでも東へでも、いゝひとに傾げられた方へ、だらしもなく轉がつて行くのを自分では、いつぱし世の中を薬にした氣取りで、人格の成熟がつてゐる。云はずとも「他」澤山の「己」少々。

へんくつ型。――氣むつかしい性分。「己」を大切にするのは結構だが、上へぬける、卒業すると云ふ氣がないで、たゞ〳〵「他」さへ見れば氣に喰はず、既に忍び込んでゐるものに對しては、自己嫌惡の眉八をきめこんで、始終不愉快げに世の中を白眼視する。「己」次第ではそれもよいが、進步發展に乏しく、惡くすると振出しの「お坊ツちやん型」へ戻る

當世型。――オツチヨコチヨコな性分。これも「己」を可愛がるには違ひないが、たゞ目前の損得に聰いと云ふだけのことで、こせついた功利主義的私利我慾に溺れ易いから、「他」に對しても、表面だけは飽まで手ざはりよく、圓轉滑脫の妙を極めるが、一向にまとまりもなく、肚に應がない。

石部金吉型。――人を見たら泥棒と思ふやうな性分。誤つた理解から、「己」を金庫へでもしまつて置きたいほどに、あらゆる「他」を蛇蝎の如くに忌み恐れる。仕舞には角も槍も出せなくなつて了ふ蝸牛のやうな、小さくみじめな「己」。

野狐禪型。——高飛車に出たがる性分。虚心、と云ふやうなところを狙つて、「己」を去つた氣だが、一向にその修業も成らず、「他」は「他」で、消化れ切れずに、悪臭プン〳〵たるものがある。奇嬌な行爲や警句でもはいつて、豪傑笑してゐれば、ひとが買ひ被つてくれるかと思つてゐる。

例はまづこのくらゐにして置いて、扨てこんな風に云つて來ると、「己」と「他」とが、「個人」と「他人」と云ふ區別とまぎらはしくなつて了つたやうに案じられる。が、前に少し妮いほどに云つた通り、これはどこまでも一個人の裡の「己」——つまり天から授かつた靈魂と「他」——それ以外、あらゆる後天的な經驗を云ふのだから、間違ひのないやうにもう一度こゝに繰り返して置く。

で、私は説明の便利のために、以上、「己」と「他」とを、判然と區別し得る二つのものゝやうに説いて來たが、實はこれは、どこからどこまでが「己」で、そのあとは「他」だと、きつぱりした境界線を引くわけにはいかないのだ。何故かと云ふに、前にも云つたやうに、嬰兒には、生れながらにして既に「他」の影響が現はれてゐるし、誕生の最初の瞬間から絶え間なく「他」に觸れ、それを攝取して行くのだ。試に三歳の幼兒の裡の、「他」の潜入を、仔細に觀察してみようとする人があるなら、その量の多さは、恐らく思ひ半ばに過ぐるものがあるだらう。

そんなわけだから、誰かゞ、人々は天から授かつた靈魂だの、それを「己」と呼ぶだのと云ふやうな、そんな特別扱ひすべきものはなんにもないのだ、總てみな後天のもの、お前の言葉で云ふなら「他」ばかりだ、と云ふならば、私としても、それに對して、なに、斯々のものは慥に「己」だ、その證據には……などゝ立派に云ひ張るやうな根據はない。だから、君がさう思ふなら、さうして置き給へ、私も、それが、「二にして一ならず、一にして二ならず」と云つた感じで考へられるだけなのだから、とさう答へるほかはない。

から云ふお斷りの言葉は、是非入れて置かなければならないけれど、然し私は、やつぱりこの「己」と「他」とを引き續き使つて行かなければ、話が先に進められないのだ。そこで、人の心がけとして、いづれを大切にしなければならないかと云へば、云ふまでもなく「己」だ。「己」の力の鈍つた人間が、どんなにみぢめであるかは、前述の例によるまでもなく讀者必ず思ひ當られることと思ふ。けれどもまた、いかに「己」澤山でも、「お坊つちやん型」に納り、「へんくつ型」に陷しては、我人ともに困るのだ。「己」は鐵の如くに鍛へられなければならない、これが、私の、平凡な修身の第一歩だ。「他」は悉く「己」を打つ槌だ。大事だと云つて、そつとしまつて置けば、「己」は錆る。少しも恐れるところなく、「他」で打ち、「他」で打たなければならない。それによつて「己」は堅くなり、而も大きくなる。「他」が、おのづと「己」の生肌へ打ち込まれる。その他、「他」は己に「己」の形を備へず、「他」プラス「己」は、物理的增加ではなくて、化學的融和として、「己」を肥え太らすのでなければならない。平凡な言葉で云へば、鵜呑みでなく、消化するのだ、攝取するのだ。これが完全に行はれる人の裡には、「他」は、爪の垢ほども殘つてゐないわけだ。さう云ふ人を、私は達人と呼ぶ。二元を脫して、一元に歸する。普通云ふ修身からでも、宗教からでも、藝術からでもいゝ、これを今の私は、最後の目標にしてゐるのだ。

さて然し、さうは容易にいくものでない。私のやうな下根のものは、常に澤山の「他」を自分の裡に感じる。從つて私の考も二元的になり、こゝにもかくは「人の裡の已と他」と云ふやうな二頭の蛇に、惱め苦しまされてゐる次第だが、さうかと云つて、かう云ふ信念上の貧乏人にも、やつぱりそれ相應の日は照るのだ。——と云ふのは、幾分實感以上の謙遜にあたるのだが、私としては、「他」にも、なんとか格値を與へないでは、實際その日が送れるわけのものではない。

攝取されない「他」の格値、それを何かと云へば、「妥協」だ。妥協と云ふ言葉は、普通そんなによい意味で使はれてゐることはない。私とても、決してよしとはしない。けれども達人でない限りには、——二元的の心が少しでも動く限りには、誰しも妥協性をなくなすわけにはいかないのだ。寧ろ、——それは今の私のやうな立場から、我田引水的に云ふ

やうに聞えるかも知れないが、――寧ろ、この妥協性も、そのまゝで大きくつゞけられないものでもない、と思ふのだ。すつかり皮をむいて云へば、不徹底と云ふもので徹底する、と云ふわけで、勿論どこかに誤魔化しがあるに違ひない、いかに徹底したところで、不徹底は不徹底で、それが徹底すれば、急に不の字がとれる筈もないのだが、然し二元は二元なりに、可なりの大さに割れるものとも思ふのだ。そんなさきのことはさゝ措いて、この世の實際には、妥協性の皆無などゝ云ふことは願はれやうもなく、よしまた絶海の一孤島に住んでゐるものにでも、それなしには、人生が淋しからうとさへ思へるのだ。妥協、――さう云ふと惡く響く。然しそれは、取も直さず「宥し」だ、「寛大」だ。

更にこれを細說すれば、世の中が「己」ばかりの、私の謂ふ「達人」ばかりで埋まつて了ふなら、それは理想境だ、そんな世が　れば云ふところはない。然しとてもさうは往かない、（と云ふのが私の二元的なところだが）さう往かないとすれば、骨高い「己」と「己」との間に、「他」の綿がはさまらない人生は、餘りにコツ／＼してゐる。若しそこに「宥し」がなく、「寛大」がないならば、――妥協がないならば、世は擧げて爭闘の巷と化するよりほかはなからう。

その上に、この妥協性は、必ずしも「己」を損ふものともきまつてはゐない。きつちりしたことの好きな西洋人の考へ方としては、大出來ともたんとも、褒めやうもないくらゐだが、船にしても、自動車にしても、その他の機械類にしても、總ての旋轉機(ホイール)には、必ずガタがつけてある。ガタとは、故に螺子(ねぢ)をしめずに、旋轉機に與へてある餘裕(ゆとり)だ。右へでも左へでも、三寸や五寸ガタつく仕掛になつてゐて、それ以上廻すと、はじめて旋轉機に利いて來るのだ。元來右なり左なりへ利かすのが目的なのだから、そんな餘計な餘裕、――ガタなどはつけてない方がよささうなものだが、實際にこれを扱つてみると、これあるがために、使用者は、どれだけ無駄な緊張を除くことが出來るか知れないと云ふ。成程みてゐると、自動車の運轉手などは、殆ど神經的に旋轉機を左右してゐるが、若しもあれが一々利くものなら、車は、醉漢のやうに、往來をうねり走らなければなるまい。さうしてその神經的な仕事によつて、彼の緊張にはけ口が與へられてゐることは、はたの見る目にも感じられる。人の裡にある「他」も、全くこれに同じで、右せんとするにも、左せん

とするにも、まづこのガタを廻してから、うんと利かせればいゝのだ。妥協も生かせば生かされるのだ。ガタつかせてゐるばかりで、利かないのでは仕様がないが、利かすためのガタ、――「己」を徳するがための妥協、――若し、寛大なれば、寧ろ私は、人生の平和のために、在ることをよしとするものだ。

　更に一歩を進めるならば、基督や佛陀は、廣大無遍な妥協をしたものだ、とも云へよう。圖ぬけて大きくなつて了へば、「他」をもつこと、多ければ多いほどがよく、その終局に至れば、大妥協は即ち大徹底、大徹底は即ち大妥協となるのだ。極大の二元が一元に歸するところ、「己」即「他」、「他」即「己」に合するところ、それはもう「達人」の境地ではなく宗教の創まるところだ。

けれども、平凡弱小われら如きが、「己」と「他」とを共棲させてゐることは、止むを得ないとは云ふじよう、然し決して、安閑として安んじてゐるべき境地ではない。時々刻々見舞つて來る「他」を、片ッぱしから燃燒し、「己」に化合させ――攝取して了はなければならない。こちらの器が小さいのだから、カスが殘るのは止むを得ない。カスはほき出すまでのことだ。

　一口に云へば、何よりもまづ「己」に忠實に、少しでもそれを肥え太らすことを心がけるがいゝのだ。世界中の人がみんなそれに成功すれば、人生には必ず平和が來る。甲が乙の裡に生き、乙は甲の裡に生きてゐると云ふ關係が、世界中に敷かれるならば、喧嘩のしようがないだらう。何故と云つて、さうなつて了へばひとを打つことは、取りも直さず「己」の頭を打つことに當るのだから。

　飽まで「己」に忠實な心、決して「己」を欺かない心、それが、「天」で云つた例のまごゝろだ。前段と讀み續けてくだされば、これに就いて、妃い說明は要らないと思ふ。



みみづく通信

在獨逸 暉峻義等

◇みみづくは秋の始めに歐洲の空に達した、十月の初旬には、みみづくは既に伯林郊外の Grune wald の近くに彼の巣を見つけた。だが、彼の翼はまだ大陸の氣流にならされてゐない。土の色も、太陽の光も、彼には尙異樣な感覺を起さしめる。而もみみづくの巣のあたりは伯林に於ける最も Bürgerlich な Kapitalistisch な生物の繁茂してゐる所である。こゝに巣くつて新興社會と新興階級の現象を觀ようとしてゐるみみづくは多少呑氣である。けれども呑氣らしさはみみづく元來の個性であるとも云へる。

◇みみづくは元來人間社會の衛生學に興味をもつてゐる。みみづくは、新興社會階級がその健全なる進歩と發展を得るためには、醫學の社會化、醫學及び醫術の社會主義的實行がよりよく Organisieren されなくてはならないことを痛切に感じてゐる。特に日本の醫學者が、診察室にのみ立て籠つて、社會的比判をないがしろにしてゐることに不滿足をもつてゐる。

◇みみづくが日本でよく見聞した社會事業と云ふべきものも決して一資本家、又は社會の Wohltätig Keit であつてはならない。社會事業は、もつと深い思想的根柢から築きあげられなくてはならない。又單なる organisation であつてはならない、常に盛なる人類的意志から起る、吾々の理想の具體化でなくてはならない。

◇みみづくの通信は、みみづくが歐洲の空を飛んでゐる間に見聞する事件の報道である。だがみみづくは隨所に彼の批判をもつけ加へようと思ふ。

◇またみみづくの眼界はそう廣くはとどかない。みみづくの眼は。ただ社會醫學と社會事業の二方面にしか徹しない。但し彼の眼は夜の空にのみならされてるのである。

◇みみづくはなぜ日本の醫學がもつと街頭に出ることを欲し

ないか、と本郷の森の夜に幾度か叫んだことがあつたが歐洲へ來ると、稍みみづくの意を得たことを見聞する。

◇みみづくの知合になつた一人の獨逸の女に Doctor Fräulein と云ふのがゐる。この女について『若し君が醫師であるとして、ある女から墮胎手術を要求された時にどうするか、而もその墮胎手術の要求たるや、道德的にも經濟的にも頗る正當と認むべき場合は如何』と尋ねたことがある。この女は速座に、『そりやすぐと手術してやりませうよ、何ぜならば、若し醫師がこれを敢てしなければこの女は醫師ならざるものを尋ねませふ、又は醫術ならざる他の方法によるに相違ありますまい。それはその女にとつて不幸を重ねることになるのです。』と答へる。法律學者はどう云ふかと尋ねると『勿論獨逸の賢明なる法律學者はそう敎へてゐます』

◇みみづくは日本に於て、久米正雄氏の『ある醫師の告白』なる一短篇を讀んでそれを批評したことがある。そして「ある醫師」のもつてゐる道德なるものを嘲笑したことがあつたことを思ひ出した。

◇社會黨の機關紙 "Freiheit" は大戰によつて經濟的に非常な困窮に陷つた民族の間に於ける母たることに對する强制的な法律は廢除されねばならないことを論じてゐる。そして更に勞農政府の姙娠中絕に對する强制的法令の撤廢を引證してゐるがそれによると、資本家的國家に於ては、姙娠中絕に對する法律が制定されてゐた、この法律は、何等その効用をなさなかつたのみならず、これがために、更に多くの墮胎者を出すの原因をなしたのである。しかしながら、勞農政府は、その社會主義的施設と、兒童及び母性に對する保護との實現とともに、女性プロレタリアートの道德の進步と相待つて、かゝる姙娠中絕を現代社會より消失せしめんことを確信するものである。だが過古の道德が、尙支配せる社會、及び資本主義經濟の殘骸が、尙、社會に存續せる間は、勞農政府は、姙娠中絕に對して、最も嚴格なる態度を以てのぞむと同時に、公立病院に於て、尤も確實なる方法のもとに、無料墮胎手術を行はしめることを布告した。そしてこの手術は、政府公認の醫師の外何人にも許されない。密かに墮胎手術を行ふものあらばたゞちに罰せられることを附加してゐる。

◇Künstliche unterbrechung der Schwangerschaft 及び Beschränkung der Kinderzahl は現代の醫學者、法學者經濟學者否あらゆる文化科學にたづさはるもの〻前に一大問題を呼び起してゐる。そして勞農政府はその偉大なる Probe を現に行つてゐるのである。

◇勞農政府はまた、一九二一年五月七日結婚に關する法律を制定した。それによると、三ケ月のprobe heirat（試驗的結婚）の後に夫婦は定まる。而して結婚後最初の二ケ年は、夫婦の一方の要求によつて、何等の面倒くさい手續なしに離婚が出來る。從つて私生兒なる名稱は全然廢止された。

◇かくなつた上からは幼兒保護並に母性保護が徹底的に行はれねばならないことは讀者の等しく感ずる所であらう子供の社會化は實現されねばならない。子供は今日までの資本主義的社會に於けるが如く、も早や一家族一夫婦のものではない、社會そのものに屬したものにならなくてはならないのは當然の結果である。みみづくは勞農政府に於て、如何なる私兒保護と母性保護が實行されてゐるかを見聞せねばならない。

◇勞農政府は母性保護に對して、年五十億五千五百萬ループルを支出してゐる。モスコウには五百の産褥を備へてゐる五個の産院を有つてゐる。尚、六個の臨時保護所があつて二百五十の病床を有し、外に更に二個の産科診察所を設けてゐる。一ケ**年約三萬六千人の出産がこゝに行はれる。而してこれ等の産院**には各々專門醫を配置して、乳兒の保護をも合せて實行してゐる。尚最近大なる成功を納めたのは、Haus für Mutter und Kind（母と子供の家）であつて、各婦人は、出産前二ケ月、出産後二ケ月は、勞働賃金全部の支拂をうけつゝこゝに安全なる出産をとげることが出來る。モスコウにはかゝる家が三個ある。而して出産後二ケ月にして勞働に服したる母親は勞農政府からその勞銀の二五—五〇%の補助をうける。そしてこの補助金は彼女の子供が滿九ケ月に達するまで（即ち退院後七ケ月）支給せられる。

◇勞農政府に於ては、これらの産院及び幼兒保育所に働く、熟達せる看護人の不足を感じ、Pflege schule（看護學校）を起して、九ケ月間の過程を以て幾多の看護婦を養成してゐる。

◇乳兒に對しては、モスコウ市に二十七個の保育所がある。この外に尚二三の工場附屬保育所を算へることが出來る。一九一九年にはモスコウ市廳は四十八個の夏季保育所を設けた、けだし、これらの子供の母親は農作に從事しなければならなかつたからである。

◇三歳までの幼兒に對しては小さな Heim が建設されてある。こゝにて、孤兒、母なし子、兩親におき去られた子供が晝**夜保育されてゐる一九一九年には四七〇〇〇の子供がこの厄介**になつた。

◇この外乳兒保護に關しては、牛乳配給所のついた母親相談所がある。一九一八年にはモスコウに十個に過ぎなかつたが一

九一九年には二〇個に增加した、而してこの母親相談所には最も完備せる小兒科診察所が附屬してゐる。而して各母親相談所に於ては、必ず牛乳配給所の附屬してゐることは前記の通りであるが、こゝには牛乳の消毒の設備が具備されてゐる。而して勞農政府はこれらの牛乳配給所に送るべき牛乳の中心を設け、これを Zentral Milchdepot (中央牛乳倉庫)と稱へてゐる、こゝから日々二千人の子供に對する牛乳が配給される。

◇最後に注意すべきは、兒童保育、兒童衞生に關する莫大なる展覽會が常に開催されてゐる。おそらく、この種の展覽會として世界一流のものであらうと云ふことである。

◇母性保護、乳兒保護、及び兒童保護は、あげて乳兒保護部の管理のもとにある。四―八歳までの子供は兒童保護部の管理に屬する。八歳以上の兒童に對しては教育委員がこの任に當ることになつてゐる。而して、母性保護部はまた、社會事業委員會の一部となつてゐる、母性保護の外に、尙、療養部及び社會衞生部が存在してゐることは注目に價する。

以上は英國の professor Goods が Manchester Guardian にのせた赤露視察記の一部である。みみづくはこれ位の施設はソビエット支配の社會以外にも、多くあることを信ずるものであるが、着々として、その理想を具體化してゆく力には驚嘆せざるを得ない。

◇伯林市では家政の窮迫せる姙婦に對し出產前三ケ月から出產まで、又出產後は乳兒に對しその滿二歳にいたるまで、日々四五―六〇ペンニツヒの給與を行つてゐる。一九二〇年三月一日から今日にいたるまで二五五萬マークを支出した。

◇伯林市の Vormundscahftsamt は Was kostet brute ci Kind? (一人の子供に今日いくらの經費がかゝるか)なる注目すべき觀察を發表した。それによると十歳の子供に對しては、一ケ年少くとも二四六六・一五マークかゝる。物價の昂騰、物資の不足のもち來らす生活費の膨脹は實に驚くべきものがある。一九一六年の大戰中に於ては六歳から十六歳までの子供には年六〇〇マークであつた。更に一九一九年の一月には一人の子供に對し平均年一一四〇、マークと計算されてゐた、然るに今前記の昨今の標準を以てすると、一人の子供に對する經費の平均價は年二六〇四マークとなる、故に一人の子供が十六歳に達するまでには四一六七八マークの養育費がかゝるとになる。然るに今かくの如き高價の養育費を以てして、尙吾々は十歳の子供に對し二枚のシャツと、三枚のハンカチーフと、各一足づゝの冬と夏との靴下を買ひ與へ得るに過ぎない。何となれば子供の冬着一着は一五〇マークに昂騰し、マント一着は二五五マー

クにも上つてゐるからである。

◇みみづくの觀てゐる獨逸の家政は實に窮迫してゐる。中流下層の經濟的困窮は實に見るに堪へないほどである。『子供は二人で澤山だ』と六十になるお婆さんが叫んでゐる。『お金がかゝるから、澤山な子供を持つことは、子供にも幸しない、家族にも幸福しない』とすぐにつけ加へる。

◇みみづくは今眼前に姙娠の人工的中絕に對する醫學者、法律學者の盛なる論爭をみてゐる。そしてみみづく自身も追々飛行機や、飛行船や天をつく建築物や、森林の征服によつて天空を奪はれて行くがために、又物資の昂騰による、天界の生活難のために、そう子供を欲してゐない。だが、自らの種族の永遠を願ひ種族の榮へを願ふことは下界の人間におとらない。こゝに偉大なる種族の將來の問題が湧起する。

◇みみづくの知る範圍に於ては、獨乙の社會黨は一九二〇年七月既に人工的姙娠中絕に對する刑法の撤廢を議會に建議して居る。たゞし、この建議に於ては、尙、『姙娠三ケ月以內に於て、姙婦の名によつて或は國家の承認したる醫師によつてその行爲が告知されたる場合は』と云ふ但書がついてゐる。更に本年に入つて獨立社會黨は、これらの但書を除去しいかなる時期に於ける墮胎に對しても刑法上の問題とならないことにしなければならないとの動議を提出した。

◇衆議は紛糾していつた。有名なる Sojial hygieniker Grotjahn は、意見書を發表した、その內容によると、墮胎罪に對する現行法令の二年乃至拾年の懲役は全然改變しなければならない、そしてその刑期は僅かに二三日でよい、但し、重犯の場合はこの限りではない、と云つてゐる。而して Grotjahn は更に民族衞生學上から墮胎無罪說に反對して曰く、墮胎の公認は大なる危險を伴ふものである。第一に獨逸の墮胎數は非常なる數に達するであらう。でなくとも獨逸には既に多數の Verlobte verkehr が存在してゐるのである。更に恐るべきは墮胎の公認は結婚に代ふるに多數の Verlobte Verkehr が現出されるであらう。而して性慾は單に性の滿足を買ふことにのみ止まつて、その本來の增殖の目的を失ふに至るであらう。

◇これに對して Rechtslehrer Radbruch は一つの反對論を發表してゐる。Radbruch は勿論姙娠三ケ月以內の墮胎說是認者であるが、彼は Grotjahn の意見に對して曰く、なるほど墮胎の是認によつて結婚の實現は非常に減ずるかもしれない。何となればこれまでに於ては、姙娠することは夫婦になる前提であつて、口碑にも、子供が夫婦の仲立ちをすると云ふことさへあるのである。だが、かくの如くして成立した夫婦に決して幸

福ではない、かくの如き事實があるからして、墮胎是認を自分は高唱せざるを得ないのである。Grotjahn は本末を顚倒してゐる、と云つてゐる。

◇翻つて考ふるに、避姙手段を用ひることゝ、避姙手段を用ひなかつたがために、生來した姙娠の人工的中絕(墮胎)との間には、何等、倫理上の根本的相違はない筈である。人々は避姙手段を用ふることを大して問題にしない、そしてたゞ墮胎の場合を論ずるのである。そしてその云ふ所をきくと、避姙手段は無害であるが、墮胎は常に手術的な方法によらねばならないから危險であると云ふのである。

◇婦人科醫 Max Hirsch は婦人科學的立場からこの動議を批評して曰く、『今日までに舉げられた內墮胎の條件はみな醫學的條件であつた。卽ち姙娠が姙婦の生命をあやうくする場合にほとんどかぎられてゐた、しかしながら、今や吾々はかゝる醫學的條件の外に、尙社會的優生學的條件を附加せねばならない。然るに、姙娠三ケ月なるか否かを、外的に立證することの困難がある。尙、他方又、余は姙娠したる凡ての婦人に墮胎せしめ得る法令の存在を悅ばない。故に上記の法令は、むしろ、今日までの治療的行爲として、是認されて來た墮胎の執行條件の外に、社會的、立法的、經濟的の墮胎執行條件を附加することを

可とすると說いてゐる。

◇みみづくは思ふ。墮胎の社會的立法的經濟的執行條件を決定することは大分困難なることである。だが可能なることに相違ない。だがみみづくはこれらの觀察に多少疲勞を感じだした。そしてそろそろと東の空が明くなり出した。獨逸の人間はおそろしく早く起きて働く國民である。みみづくはこれからねぐらに入らなければならない。(一九二一、一〇、三一、伯林にて)



雜　記（三）

エツキス・

科學者と政治

去十一月のNatureに「シティズンとしての科學者」といふサー・リチャード・グレゴリイ（天文學者）の演說の記事があつた。代の文明を過去の文明と別つ富と力とが殆ど皆科學及其應用の結果であるのに、夫を與へる科學者は、其富を利用し得るシティズンとしての相當の位置に立つてゐない、科學者はもつと直接に夫等の富と力とを支配するやうでなければならないと云ふのが、此演說の要旨である。之に次でサー・アーネスト・ラザフォード——物質原子構造の實驗的研究者、現時學界の中心人物として、アインスタイン氏を除いては第一に數へられさうな——は、然し困難は、科學者自身が氣質に於て訓練に於て政治の社會に不向きなことに在る、寧ろ科學に敎養があつて且つ公の仕事に才能のある、換言すればジャーナリズムに堪能な人に依て代表されることが必要であると云つたといふ。グレゴリイはネーチュアーの記者の一人であるやうである。

科學者が政治に携つた例は、前號に述べたブートルーの論文のあい後に、フランスの理學者に就て許多の例が擧げてある。デカルト以來、フランスの學者は、中世のスコラ學者風——ブートルーはモリエールのThomas Diafoirusみたいなと云ふ。徳川文學の孔孟先生の類——を脫して、所謂bon sensに富んだhonnête hommeが多くなつた。中世の學者は多く形式に囚はれてゐたが、デカルトは其型を破つて形式よりも直覺を重んじ、其生活も平靜な學究的のものでなく、波瀾に富んで

ゐた。フランスの理學者はラザール・カルノー、サデイ・カルノー、モンジユ、フーリエ、ポンスレー、アラゴ、ラヴオアジエ、ベルテローの如き、皆學術史上に著名な第一流の數學者物理學者化學者たちであるが、是等の人々が皆、十八世紀の末から十九世紀の初めフランスの動亂時代に士官となつたり役人となつたりして政治の渦中に入り、凡てデカルト型に屬してゐたとブートルーは記述してゐる。平和の世にはそんな必要もなく、又學術も今日の樣に複雜になつてからはさういふ余裕も與へない筈であるが、フランスではなほ、先頃戰爭の間に首相となつたパンルヴエは、元來ソルボンヌの有名な數學の教授であり、職を罷めた今日は、もとの生活に戻つてアインスタインの重力論の批評を書いたりしてゐるやうなのもある。

かういふ例は科學者ばかりでなく、現に詩人の駐日大使を有するやうに、フランス人のボン・サンの結果かも知れないが、常識に知られたイギリスに例を求めると、ニユートンはケンブリツヂを代表した議員となつたが、任期中唯一回發言したゞけで、夫は「あの窓を、しめて下さい」と小使に命じたことであつたと云ひ、其外には酸素の發見者プリーストレーが自由思想を抱いたゝめ一揆に家を燒かれ遂に米國に亡命したと云ふこと、近頃にはバートランド・ラッセルなど、科學者の政論家はあるが、華府會議の全權バルフオアが、嘗て英國學術奬勵會(B.A.A.S.)の會長演説で、物質に關する新理論を述べたりした位が稀な例で、フランスの樣に大臣となり軍人となつた數學者物理學者はイギリスになかつたやうである。アメリカにはフランクリンをドイツにはライプニッツ、ゲーテ、ボルヒヨウなどを漸くに數ふるのであらうか。然しフランス人としてもブートルーが擧げた多くの例は何れも政治と科學との兩方面に秀でた人々だけであるが、ラプラースのやうに、フランスのニユートンと呼ばれた數學者でも、自らナポレオンに請ふて内務大臣となつたが、六週間で職を免ぜられ、ナポレオンに「ラプラースは微分で政治をやらうとするから謬りだ」と云はれたといふ例もある。ナポレオンの備忘錄には夫について次のやうに記してあるといふ。

Géomètre de premier rang, Laplace ne tarda pas à se montrer administrateur plus que médiocre; dès son premier travail nous reconnûmes que nous nous étions trompé. Laplace ne saisissait aucune question sous son véritable point de vue: il cherchait des subtilités partout, n'avait que des idées problématiques, et portait enfin l'esprit des "infiniment petits" jusque dans l'administration.

フランスの數學者必しも、皆、時務に敏でないとも云へないのである。

寧ろ先きに擧げたラザフォードの說のやうに、學者自らが科學者と政治とし一國の政治程でなくとも、もつと狹い範圍で富の分配、權力の參與に加はらうとしない方が安全らしい。然しいつの頃かの Nature に、或るアメリカの大學教授が、大學教授の任務は研究並に學生の指導であるが、其外に敎室の事務の管掌、敎室の豫算の請求——爭奪——といふ責任があり、然かもこの最後の責任が重大で、關係する所が頗る大きい、敎授がかやうな政治にまで關係しなければならないならば學者としての第一の任務を果し得ないであらうといふ嘆聲を漏らしたことを記してあつた。そして夫に對するネーチユアー記者の評は極めて冷やかで、天才的な學者はどんな境遇にあつたにしろ自分の天才を發揮し得る、結局さやうな嘆聲は愚痴に過ぎないと云ふやうな意見であつたと記憶する。

このネーチユアー記者の意見にも固より理窟がある。然し新しい仕事や新しい計畫などがあり、特にその硏究や計畫の效果が、豫算の請求、富の分配の云前に緣遠さうに見えるときに、前述のアメリカの敎授の說にも同情を生じ、そこで冒頭に述べたグレゴリイの主張も已むを得ないことゝ思はれ、少くもラザフォードの云ふやうな代表者を要することゝなるのであらう。

マツハと相對性原理

アインスタインの相對性原理がマツハの認識論に一致するものであることは今日殆ど誰も疑はない。アインスタイン自身も屢々さう云つてゐる。唯だ根本の哲學的主張はアインスタインがプランクに同ずる限りは、マツハとアインスタインとに距離があるであらうことは想像できる。然し、マツハは一九一六年に死んだがその生存中、彼れが頑固に相對性原理を拒否してゐたと聞くことはたしかに sensationell であると云へる。

昨年マツハの遺著として Die P.inzipien der physikalischen Optik, historisch und erkenntnisychologisch entwickelt といふ書物が出版された。私はまだ此書を見ないのであるが、マツクス・フオン・ラウエの書いた其批評が近着の Die Naturwissenschaften にあつた。マツハが力學や熱學に試みて有名である歷史的批評的硏究法を光學の上に應用した書物であるから、たとへ夫が光學の最新の進步まで網羅してゐなくとも、其書の價値は自ら認めらるべきものであるが、ラウエは此書の序文が頗るゼンザチオネルであると云つてゐる。

其序文はマツハが一九一三年に書いたもので、其中には計畫中の此書第二篇の中に、なほ詳述すると斷つてあるさうである

が、此序文の中に相對性原理に對する彼れの態度を表明してあると云ふのである。人が次第に彼を目して「相對性原理の先導者」Wegbereiter per Relativitätslehre とするので、彼自身は夫を「今日の學派の原子論宗の信仰」die atomistische Glaubehre der heutigen Schule oder Kirche を拒否すると同じ程度で拒否しなければならないと云つてゐるといふのである。相對性理論も亦彼には原子論と同様に一のドグマと見做され、彼は此語を聞く度に非歴史的非批評的と云ふ恐怖しか感じないと云ふのである。

ラウエは之を評して、自身の最も固有な思想が一の偉大なる人によりて積極的に發達したそのときに、自ら之を拒んでゐると云ふことは、とにかくこの懐疑家をいかにも正直に表はしてゐるものでないかと云つてゐる。筆者が十年前マッハに遇つたときには、アインスタインの局限的相對性原理が出た後であつたが、マッハは此原理を唯だ一のテオリイであるとのみ云つてゐた。私もマッハが既に老境に入つてゐたのを見て夫に就て深く尋ねやうとも思はず、又マッハの考も畧ぼ想像し得たつもりでゐた。アインスタインも自分の説を heuristisch な便宜の假説と見てゐたのであり、當時の相對性原理とマッハの認識論的な相對論との間には根本的な相違があると見做されてゐ、マッハの議論も多くの物理學者に容れられず、アインスタインの理論も未だ多くの信用のなかつた時代に、ともかく兩者は區別されてゐたのである。其後アインスタインの相對論は物理學界の定説となりつゝあつた。マッハやポアンカレの名も之に伴つて呼ばれもした。然しマッハが前述の序文を書いた一九一三年はアインスタインが漸く局限的相對性原理から一般的相對性原理に移りかけた頃であり、數學者グロスマンと共著で、マッハの質量の相對性などを初めて導いた年であつた。マッハが其頃まで、私の遇つた時分の學界に對する氣分を保持してゐたことには余り不思議はないと思はれる。一九一六年のアインスタインの論文、並にアインスタインが書いたマッハの輓辭などを知つたならばあの序文は大に書換えられたであらう。

マッハの原子論反對は、彼をボルツマンと爭はしめ、プランクをして彼に挑戰せしめたのであるが、このマッハの意見が今日の學界には余り偏僻に感ぜしめられることは、恰も十九世紀の初に實證哲學の創始者コントがヤングやフレネルの當時にエーテル假説に反對したのと同様の歴史をなすものと思はしめられる。エーテルの有無がアインスタインの原理以後應用問題となつた。マッハは物理的空間論に於てコントと異なりリーマンなどに近く、全くエーテルの觀念を失はしめやうとはしてゐないアインスタインはライデンに於ける講演で、やはりマッハの云つた意味に於て自分もエーテルを理論の中に存して置くと云つてゐた。前述のマッハの遺著にもエーテルを物體的 Körperhaf でないとしておいて光波論を適當に表出してあるといふ。

マッハの此書の續篇が未定稿のまゝでも出版せられることはマッハの著るしき性格を知る誰もが切に待つところであらう。

文藝と階級意識

階級と文學

武者小路實篤

私は文學に國境がないと云ふことを認めると共に文學は階級を超越するものだと云ふことを認める。ある國の人だけに切り通じない文學は私には物足りない。ある國の特色の出てゐるのは好きだ。しかし人間の心、魂が出てゐないのは閉口だ。そして人間の心、魂が出ればそれは國境を超越する。

人生は呑氣なもの、あそびと同じもの、金さへあればそれでいゝ、その位の人生觀にとまつてゐる文學なら、階級を超越することは出來ない。しかし人間の生命にふれる文學は自づと階級を超越する。ある階級を超越出來ない讀者には、その階級にのみ屬したものが、同感しやすいであらう。しかし私は國境を超越出來ない文學にもの足りないやうに、階級を超越出來ない文學にはあき足りない。ゴリキーの「夜の宿」は我等の心を動かしてやまない。あれを見た時、これ以上の脚本はあり得ないと云ひたいやうな感動と不安をうけた。

あの材料はゴルキーでなければかけない。少くもどん底の生活をしたものでなければかけない。しかしあれを見て感動するには人間でありさへすれば事たりる。

どの階級に屬する作品でも、自分は人間の心に深かくふれる力をもつものなら感心する。それがよはいものには感心出來ない。

こんなことは凡そわかり切つてゐることである。僕は社會主義的な分子の多量にあるものも、それが本當を見てゐれば、感心するにさまたげない。實際さう云ふ作品で感心しないわけにはゆかないものが澤山ある。しかし事實に盲目になつたり、人

間に盲目になつたりしてまで階級のために働く人々の作品には自分は感心出來ない、しかしそんな作品で滿足する創作家もあり得ない。要するのに、どの階級に屬してゐると云ふことをはつ切りさせる作品は大した作品とは思へない。人間の心を深かく動かす力をもつかもたないかゞ問題である。しかし現在は、階級爭鬪にまきこまれやすい時代である。その爭鬪にまきこまれたものにとつては、即ち無産階級の人々にとつては有産階級(?)の人々のかくものが物足りなく、あきたりなく、反感をもちやすく、呑氣なことを云つてやがると云ふやうな氣のするのは無理はないと思ふ。しかしさう云ふ氣をさせるのには、作物に罪があるか、さう思ふ方に罪があるかはつ切りしない。前者なら元より作者の恥である。後者なら、よむ者の恥である。どつちかは「時」に判斷を任せるより仕方がないであらう。今の日本（西洋でもさうかも知れない）では作者の罪の場合が多いと云ふことは認められると思ふ。しかしさう云ふ作品は有産階級の人がよんだつて反感を持たないだけでさう面白いわけはない。

自分は階級的色彩を持つこと、殊にその特色を強くもつことは決してわるいこととは思はない。人間がどの位いまで一方に進み得るものかと云ふことを知ることは面白い。しかし階級をとびこえる力がなくつては心細い。他の階級の人の心を動かす力がなくつては心細い。眞理や正義や愛や、人情や、心や、魂には國境や、階級の異いは問題にはならない。それ等にとつてはそんな障壁あつてなきが如きものである。

政治的な野心のあるものには藝術はわからない。彼等には人間が趣味をもつたり、人情をもつたり、よろこびを求めたりすることは不都合なことにすぎないのだ。彼等は自分に都合のわるいものは存在の價値を認める容裕はないのだ。文藝は如何なる時も、政治家根性の強いものにはもてあまされる。彼等は自由の子であり、我がまゝものであり、昨日は東、今日は西、ゆきたい處に平氣で行くものだからである。彼等は束縛と壓制と窮屈を嫌ふ。抑えつけられる處にのびたがるものである。いく分天探女である。國家や、階級をとびこして人間の心と抱きあいたがる自由人である。彼等にとつては自然が主である、眞理が主である。愛してはいかんと云はれても愛するものは愛し、憎んではいかんと云はれても憎むものは憎む。敵だから味方だからと云つても、彼はそれにはおどろかない。

ジユリエツトがどんな階級に屬してゐやうとも、ロメオは愛さなければならない。

文藝はある主義者の要求を滿す時でも、他の主義者の心にも愛と美を思はず知らず送るものでなければならない。少くも自

分はさう云ふ文學を愛する。

ストリントベルヒは一生涯にどの位い主義が變化したかわからない。しかし我等は彼が社會主義時代の作品も、貴族主義時代の作品も、無神論時代の作品も、カソリックに入つてからの作品も同じく愛することが出來る。之を不思議に思ふものには人間は主義よりも國家よりも階級よりも遙かに大なるものに屬してゐるものだと云ふことを知らないものである。

（一二、二、八、）

プロレタリアートはそれ自身の文學を要求する

加藤一夫

文學は階級的のものであるか、それとも階級を超越して全人類のものであるか、この事は軈て、文學は環境の支配を蒙るものであるか、それとも環境の如何を超越して純粹に謂ゆる「人間性」の所產であるかと云ふ問題になる。何となれば、階級と云ふも畢竟、環境の或る種の形式に過ぎないからである。

作中の人物の思想や、感情や、感覺や、一般にその言動、性格は、その作に描寫さるべき環境と切り離しては意義をなさない、何となれば人は環境の支配を蒙らずしては存在し得ないから、（從つて藝術には、環境と獨立した純粹の概念的思想や類型的性格が取扱はれてはならない）と云ふ事は自然主義文學の勃興當時既に決定された事項である。そして社會主義思想が勃興する樣になつてから頓に高唱される樣になつた唯物史觀說は更に、我々の思想や感情は——一般に我々の意識は——生產方法の齎らす社會的狀勢の變化によつて支配されるものであると云ふ事をも敎えた。

勿論我々は環境や社會的狀勢の變化によつて影響される處の主觀その物の生動を無視してはならない。即ち全的自我の自律自發を無視してはならない。之があればこそ外的刺戟に對して

それに照應する變化が生れるのである。だが何と云つても、之等の外的刺激による内的變化を認めないわけには行かぬ。

そして若し、我々人類一般が、その環境によつて影響されるものであるならば、勿論、小説を書き詩を作るものも同じ影響を受けないでは居られない筈である。ところが我々は如何なる時代に住むで居るか。如何なる環境の中に住んで居るか。

我々は今、資本主義制度の爛熟時代に住んで居る。從つて、ブルジョアとプロレタリアートとの對立は、その生活の上の利害關係に於いても、思想や感情に於いても最も明瞭に區別されて居る。そして今や、階級意識は最も深刻に印刻され、ブルジョアとプロレタリアートとの思想や感情は益々分明に益々遠く隔離されて行きつゝある。

然らば同じく文藝によつて自己を表現しようと努めて居るものと雖も、彼の屬して居る階級の如何によつて、その思想なり感情なりに非常な相違の生ずべきは勿論であり、從つて、それ等の表現である文藝にも劃然たる區別の存するは當然である。卽ち、文藝に階級的意識の加はるは當然でありまた加はらねばならぬ筈である。

然るに、近頃、ブルジョアの閑閒的作者であつた人々の間にも、かうした時代思想や環境やの影響によつて、自己の立場の極めてあやふやなものであるのに氣付き、（何となれば少數の作者を除いては大抵の文士達は、その文藝を商品として賣捌かなければならないのであるから、資本家的大雜誌や新聞の意向を迎へねばならず、藝術にブルジョア的意識に浸潤した思想や感情を表現しなければその商品が賣物にはならず、また、自分としてもそんな事には馴れ切つてしまつて居る程ブルジョア的思想や感情に染め込まれては居るが、實は、自分達も一個の被搾取階級に屬すべきものだと云ふ事を朧げながらも悟つて來たので）今までのブルジョア的作家たる氣風から離れたいが、さりとて今更プロレタリアの集團の中に投ずるのもいやであり、よし厭でなくとも、あまり色彩を明白にすると、第一官憲の威嚇があり、第二には「もうお前のものは買つてやらないぞ」と睨んで居る新聞雜誌の經營者や編輯者の權威があるのを知つて、——從つて生活上の權威があるのを知つて、思ひ切つてプロレタリアの藝術家の仲間に投ずる事も出來ないところから、此の何れの階級にも屬しないところの中間文學の發生を唱道するものがある樣になつた。

此の中間文學唱道の根據は「人間性」である。彼等の云ふ文藝が或る特殊な階級の思想や感情を表はさうとする時は、非常

に功利的なものになり傾向的なものになる。文藝はそんなものであつてはたらない。文藝はたゞ「人間性」の自然な流露でなければならぬ。その無私な表現でなければならぬ」と。

しかし、これ程もつともらしく見えて、實は馬鹿氣きつた謬說はない。何となれば彼等は、環境や社會的狀勢やに支配されない、萬人に普遍な（今日の如く鮮な對立を示して居る階級別の存する社會に於いてすらも）「人間性」的思想や感情があると思つて居るからである。だが、そんな「人間性」なんてものは、我々がこれを概念として抽象した時の外決して在り得ない筈である。成る程我々は誰も何事かに接すると、喜んだり悲しんだりはする。けれど何によつて我々は喜んだり悲しんだりするか。たとへばブルジョアの喜びや悲しみを誘ふ内容とプロレタリアのそれ等を誘ふ内容とは違つて居る。否、個人と個人とのそれに於いてすら違つて居る。と云ふのは何が故であるか、云ふまでもなく、個性と、環境が生んだ思想や感情との色合の相違によるのである。

さう云ふと併し、或る人々は云ふだらう。「だが聖人や君子は違ふ、彼等には階級や種族等の何等の差別がない」と。しかし本當にさうか。釋迦や耶蘇にかうした階級的意識の桎梏や環境の支配はなかつたか。具體的に彼等を認識して見よ。何處にさうした抽象的な「人間性」があらう（此の事は僕等が三月に創刊する文壇破壞を目的とするシムーンと云ふ雑誌に論じておいたから茲にはこれ位にしておく）

斯くの如く考へて來れば、文藝に階級意識が加はるべきは當然であるのみならず、何れの階級にも屬しないところの中間藝術の存立をも許されない事も明である。

茲に第三の論者が在る。彼等は云ふ、

「藝術が階級的のものであると云ふ事はいゝ。また、第四階級が新興の民衆として、その自らの藝術を要求すると云ふ事も當然だ。しかし、真のプロレタリアートは果して藝術を所有し得るか何うか。我々の見るところでは、彼等には藝術はあり得ない。また藝術を鑑賞する餘裕も素養もない」と。

今日のプロレタリアートの大部分は、小說を讀んだり雑誌を讀んだりする餘裕を持つて居ないと云ふのは事實である。また自ら小說を創作する力もなく、てんでさうした欲求をすらもつて居ないと云ふ事も事實である。しかしそれだからと云つて今日のプロレタリアートに藝術が有り得ないと云ふ理由は何處にもない筈である。

何となれは、ブルジョアが藝術を持つと云ふ事はブルジョアの凡てが藝術を創作し、若しくは鑑賞すると云ふ意味ではない

そのうちの或る少數のものが藝術を創作し、鑑賞する事を意味するやうに、プロレタリアが藝術を持つと云ふ事は、何もプロレタリア全體が藝術を創作しまたは鑑賞しなければならぬと云ふ意味ではなく、そのうちの或る少數のものが藝術を創作し鑑賞すると云ふ丈けで十分だからである。

そして今日のプロレタリアートの全ては、果して藝術を創作しないだらうか、し得ないだらうか、しようとする欲望を有しないだらうか、またそれを鑑賞しないだらうか、し得ないだらうか、しようとする欲望を有しないだらうか。

否。事實はそれの反對である。今日のプロレタリアートは既に、生活なり藝術なりに表現しないでは居られない感情をもつて居る。思想をもつて居る。そして事實既にその表現が始まつて居る。實生活上に於ける思想感情の表現はその實行運動である。藝術上に於ける思想感情の表現は、その詩歌、感想、劇、小說等に表はれて居る。

若し、今日のプロレタリアートに餘裕がないから、表現すべき思想や感情がないと云ふならば、それは餘りに馬鹿氣た觀察である。また、表現したい思想や感情があつても、まだ藝術となつて表はれて來ないと云ふならば、それは恰も未だ革命が來ず、革命の後の新世界が實現しないから、プロレタリアートの實行運動がないと云ふのと同じである。

今日のプロレタリアートは大部分まだ無自覺であらう。大部分は實行運動なんかやつて居ないだらう。しかし實行運動は既に初まつて居る。少數の自覺せる鬪士によつて初まつて居る。そして此等の自覺せる鬪士の運動こそプロレタリアートの運動ではないか。同じやうに、少數の自覺せる作家や批評家は既にプロレタリアートから出て居る。そして彼等は既に創作し批評し文藝上の新運動に着手して居る。然らば何が故にプロレタリアートに藝術がないと云ふのか。

論者は又云ふ。

プロレタリアートの藝術がないと云ふのではない。しかしブルジョアの藝術とその技巧や內容を競ふべきものがまだ無いと云ふのだと。

しかし、我々はその時、この論者は果して何れの階級に屬すべき人であるかを先づ心にとめなければならぬ。ブルジョア的意識からすればプロレタリアートの藝術に表はれたる思想や感情は極めてくだらないものである。否、諒解さへ出來ないものである。また、ブルジョア藝術の樣式から云へばプロレタリアートの藝術の樣式は破格である。だがプロレタリアートにはプロレタリアートの樣式がある。

また、たとひ今日プロレタリアートの藝術は榮えず、ブルジョア藝術家との闘ひに於いて敗北して居る樣に見えても、又、事實敗北して居る樣に見えても、必ずしもそれは敗北ではない。今日の實行運動が常に敗北して居る樣に見えても必ずしもさうでないのと同じである。プロレタリアートの思想や感情は此の實行運動によつて次第に全民衆を自覺せしめつゝある樣に、プロレタリアートの藝術も矢張り次第にその感化力を擴大しつゝある。それが思ふやうに擴大しないのはたゞ、今日の制度が頑張つて居るからである。若し今日でも制度が頽れて見よ、プロレタリアートの藝術は最もよい藝術だと云はれるにきまつて居る。

もう紙面は盡きたけれど、尚今一つ何うしても考へて置かねばならぬ第四の問題がある。それは階級藝術〱と云ふが、其階級藝術を唱ふる作者は一體何者であるか、彼はプロレタリアートであるのか、それともブルジョアであるのか、一枚幾らの賃銀を貰つて働く點ではプロレタリアートと云へるが、しかし生活の程度から云へばブルジョアでないかと云ふ非難である。

成る程これには一理がある。今のプロレタリアート藝術家と稱するものは、職工よりも澤山の賃銀をとつて居る。生活も兎に角一般上に在る。それは確に、さうした勞働者に對してはすまなく思ふとこである。だがプロレタリアートとは一體何であるか。今日の文壇ではプロレタリアートとは單に最下層の貧乏人である。筋肉勞働者である。ブルヂョアとは少し樂な生活をする事の出來る人間、及びそれ以上の人々凡てゞある。福士幸次郎氏などはかうした漠然なる意識から隨分妙な議論をして居る樣である。成る程プロレタリアートは貧乏には違ひない。しかし何が故に貧乏なのか、彼は資本家にエッキスプロイトされるからである。それ故に貧乏はプロレタリアートの唯一の資格ではない。プロレタリアートの眞の意義はエックスプロイトされるものでなければならぬ。而も革命ロシアで用ひられて居る樣に、如何に貧乏な勞働者とても、眞に自覺してないものは眞のプロレタリアートではない。彼等は寧ろブルジョアの手先きである。然らばたとひ我々は、最下層の勞働者よりも樂な生活をして居ても、エックスプロイトされて居る事を感じ、資本主義制度の壓迫を痛感して、そこに謂ゆるプロレタリアート的感情や思想に目ざめたものであるならば、それこそ眞のプロレタリアートである。要はプロレタリアートの思想及び感情に目ざめて居るか何うかと云ふ事である。

論者のうちには、勞働者出身でなければプロレタリア藝術家

ではない様に云ふものもある。少くとも、勞働者出身でない人々はプロレタリアートの思想や感情を理解する事も出來ず、その利益にもなり得ない、こうした者がプロレタリア藝術に携はるのは、お、せ、つ、か、い、であり潜越である、と云ふものもある。有島武郎氏などもその一人であるらしい。成る程、有島氏自身としては氏の宣言にあらはれた苦悶も言說も相當に肯かれる。しかし少くとも我々にとつては、あの言說は當てはまらない。何となれば我々は（少くとも余は）別に勞働者の煽動者にならうとも指導者にならうとも敎化者にならうとも思つてプロレタリア藝術に從事するのでもなく、運動をするのでもない。少くも余は良心に誓つて云ひ得るが、余がかうした仕事に從事して居るのはたゞ、今日の資本主義制度が齎らす凡ゆる意味の不合理と壓迫とに對する憤怒と反抗と復讐との念に押したてられてゞある。自覺せるプロレタリアート階級の、思想なり感情なりを共有する事を感ずるからである。從つて余は、煽動や敎化や指導のために余の藝術を創作するのでなく、ただ余のプロレタリアートとしての思想と感情とを表現しようとするに外ならないのである。そしてこの感情は何も、必ずしも勞働者出身でなければ持ち得ないとは言はれない。（勿論その間に幾分の程度差のはあつても）たとひ最初は、プティーブルジョア的敎育を受け、プティ・ブルジョア的生活をして來たものと雖も、尙プロレタリアートの感情はもてる。と言ふわけは、プティー・ブルジョアは容易にプロレタリアートに零落し得るものであり、又、事實プロレタリアートに蹴落されるものだからである。

もし我々がプロレタリアート作家の仲間入りをする事が出來ないと云ふならば、小資本家や小商業家達が資本主義制度の發達を共に無産者の階級に蹴落されにも、尙、彼はプロレタリアートとはなり得ないと云ふのと同じでる。勿論中には成り得ないものもあらう。ゴーリキイの夜の宿に出て來る、あの貧民宿の零落せる貴族達が、今も尙自分を貴族だと確信しきつて居る様に。しかし凡ての人間がそんなものだとは誰が言へよう。

以上を要約すれば斯うなる。

一、藝術は階級的のものである。
一、中間藝術の存在は許されぬ。
一、既にプロレタリアートの藝術が在る。
一、プロレタリアートの藝術の創作者は必ずしも勞働者出身たるを要しない。

余は何、プロレタリアが藝術はどんなものか、其將來は何うなるかと言ふ豫想、プロレタリア藝術とブルジョア藝術との

鬪爭、プロレタリア藝術と社會運動との關係者は語り、有島氏の宣言に對する批評をも加へ度いのであるが、紙面は夙うになくなつて居るのでこれでやめる事にする。

藝術と階級

宮島新三郎

藝術對階級の問題が、近頃では、文壇に於ける論議の焦點となつて來たやうに思はれます。一寸考へると、どうして藝術と階級といつたやうなまるで違つた命題のものが、交渉し關係し合ふやうになつて、其處に問題を生ずるに至つたのか見當がつき兼ねます。しかしよく考へて見れば、必然的な理由と原因とがあつて、それは生ずべくして生じた問題であることが分ります。

私は先づ、藝術對階級の問題が、如何なる處から、さうして又如何なる理由に依つて交渉して來たか、その徑路を簡單について少しく回顧して見たいと思ひます。

この數年來、文壇は內容的に萎微沈滯してゐるといふ非難を吾々は屢々耳にしましたし、私などもさういふ叫びを發してゐた一人でした。如何にひいき眼に見ても、この數年來の文壇が深い意義をわが文化に投影したとは思はれません。表面的に見れば、それはなるほど賑かでもあり、華かでもありましたらう。けれどもそれは要するに凡てあだ花であつたに過ぎません。量的に見た上の賑かさ、華かさであつたに過ぎません。質的に恐しく淋しい、單調な、淺薄な、動きのない、皮相的なものでした。それは主として文壇生活といふ一つの生活樣式が生じて、作家が皆一樣にその樣式に化して終つた結果、さうなつたに外ならないのです。

その生活樣式が如何なる姿を採つたかといへば、それはいふまでもなく、ブルジョアの樣式です。ブルジョアでないものでも一度文壇のサークル內に這入ると、一樣にブルジョア化して

了ふのです。さうしてブルジョアの心理や趣味、延ひてはブルジョア式の物の見方、解釋といふものに感染して了ひます。

その結果として、文壇人の書くものには、ブルジョアの臭味がつきまとつて來るのです。さうしてそれらの作品が、如何なるところに歡迎されるかと言へば、勿論ブルジョア階級のもの、ブルジョアの趣味と心理とになれしたしんだものに限られるのです。

文藝の社會化といふやうな事實も、明白に社會現象の一つとして注目に價することではありますが、實は、ブルジョア趣味の文藝を讀むブルジョア階級の人が多くなつて來たといふに過ぎないのです。エレン・ケイやロマン・ローランの所謂民衆の精神を鼓舞激勵するやうな生命の糧としての文藝が一般の廣い民衆の間に擴まりつゝあるといふのでは決してありません。人間に、人間が強く深く生きる生命を與へるのでもなく、人間の心をレエヴエートして行くでもなく、たゞ人間の魂に一時の魔睡を與へ、安價な休息を與へるだけの文藝が、一言にして盡せばブルジョアの文藝が、同じくさういふものだけを要求するブルジョア階級の間に讀まれてゐたといふに過ぎません。これが最近數年來の文藝界一斑です。

文藝の事情が既にさうであるところへもつて來て、他方社會運動が非常な勢を以て勃興して來ました。さうしてその社會運動の中心勢力は、言ふまでもなく、プロレタリア階級です。總てがプロレタリアの爲め、プロレタリアの味方でなければ、無意味であるといふやうな一種の見解が生じて來ました。これは、プロレタリアの擡頭が、正義、平等、人道の立場にあるといふ限りに於て、又實際さうである點で、正しい見解です。

社會學も心理學も哲學も、宗教も、それぞれの立場から、このプロレタリアの爲めに盡すといふことになつて來ました。文藝も亦よろしくプロレタリアの爲めに旗を擧げなければならぬといふ考へ方が、茲に於てか生じたのです。これが、文藝と階級との立場に於ける第一步です。さて、ではどうしてプロレタリアの爲めに文藝は旗を擧げれば好いのか。それにはいろ〳〵な手段方法がありますが、第一に主張されたのは、今日は過渡期である、プロレタリアはあらゆる反抗を以てブルジョアの壓迫に屈してはならぬ、いなこれを撲滅せばならぬ。この階級鬪爭の具となつて文藝は働かねばならぬといふとでありました。この主張から行くと。文藝は明白に傾向的な、第二義的な、目的的なものとなります。それで好い、今は過度期だから、過度期に於けるだけの役目をすれば後は後の話であるといふ解釋が一部の人々には是認されてゐました。これは明かに文藝が當時の

文藝があまりに皮相であり、淺薄であり、イージー・ゴーイングであつた結果だと思ひます。文藝に文藝としての力があり、深味があり、生命があるならば、決してこんな解釋や主張は、如何に時代が時代だからとは言へ決してなされなかつたらうと思ひます。文藝にそれ自身生きた生命があり、意義があるならば、この文藝こそ、傾向的な作品などよりは遙かに、一般の民衆の魂を打つことが多く又強いのであるから、敢へて傾向小說の出現などを主張する筈はありません。人間の魂に深く喰入つた、理知と感情との透徹した藝術こそ、即ち直に藝術的な藝術こそ、プロレタリアの爲めには大きな力強い味方であると思ひます。傾向小說の訴へる力などといふものは決して大きなものではありません。これにはロシアなどの例に徵して見てもすぐに了解出來ることです、トルストイ、ツルゲーニエフ、ドストエフスキー時代には、彼等以外にどの位多くの政治小說家、社會小說家がゐたか分りません。けれどもその影響や効果の點に至つてはトルストイやツルゲーネエフやドストエフスキーには遙かに遠く及びませんでした。それといふのもトルストイやツルゲーニエフやドストエフスキーには藝術家としての偉大さがあつたからです。

藝術を階級鬪爭の具とするといふ考は、以上の說明でも、それが間違つてゐるといふことが分りませう。階級鬪爭の具としては、藝術よりも他にいくらも有力なものがあると思ひます。從つて私は藝術を階級鬪爭の具とする考へには飽くまでも反對です。自然の結果としてそれがプロレタリアの爲めになるといふなら兎に角、初めから、さういふ目的を以て藝術を創造するといふ考へは馬鹿らしいと思ひます。

藝術と階級との第二の交渉は、第四階級の藝術といふ概念及び事實である。これも亦文藝の微弱な事實と、最近の社會運動との結合から生じたことだと思ひます。現在の文藝は、ブルジヨア趣味にのみ訴へる、生命力のない、弱小なもの、而かも一部の文壇人のみがこれの創造に從つて、他階級の人のを受入れるやうな組織にはなか／＼なつてゐない、——が、廣く一般の民衆に訴へる、生きた文藝の創造に、プロレタリア階級が起つて從つても好いではないかといふところに、第四階級が藝術の勃興を促す主張があるやうに思はれます。

プロレタリア即ち勃興階級を滿足させ且つ之に生命を與へる藝術がないから、プロレタリア階級自身がプロレタリアの爲めに新しい藝術を創造し且つ鑑賞するといふこと——これは極めて尤もな要求であり主張です。さうしてプロレタリアが、眞に自由と平等と正義と人道とに立脚した理想のプロレタリアが、

自覺して新しい藝術の創造に從事する時、その作られた藝術は、最早や決して單にプロレタリア階級だけに、融通するといふやうな狹いものではなく、それは一般の民衆、廣い人類の爲めの藝術になるに相違ないと思ひます。けれども階級的な偏見や意識に立つて創造する限りに於ては、それは、傾向的、第二義的、目的的たるに止まつて、廣く人類の魂に訴へることは難しいと思ひます。

今日、第四階級の藝術は皆無ではありません。遠くロシヤなりの例を引かないでも、近い日本にも第四階級の藝術と、その勃興の所緣から言つても差支へないものが多少あるにはありますが、大體に於て傾向的、第二義的、目的的たるに止まつてゐます。

藝術對階級問題の徑路は、極く簡單ではありますが、以上述べた通りです。さうしてそれらの一々の事項に關する私の考へも、論旨のなかで略ぼ推察が出來ることゝ思ひます。最終に、この問題に就いて、誤解若しくば偏見と見える考へ方について一言して置きたいと思ひます。それは外ではありません。ブルジョア階級の文藝家はブルジョア階級の論者だけに訴へる藝術しか創造出來ないから、プロレタリアには一切關係がないといふやうな考へ方を指すのです。確か本誌一月號で有島武郎さんが「宣言」で述べてゐたことがさうだつたと思ひます。この考へ方は同時にその逆が眞であることをも證明するものである。卽ちプロレタリア階級の藝術は、プロレタリア階級のものにだけ訴へるのでブルジョアには用がないといふことになります。

しかし、この考へは、プロレタリア階級とブルジョア階級とを先天的に性質の違つたものと考へたところから生ずる誤解ではないかと思はれます。兩者は黑奴と白晳人種とほどに決して相違したものではありません。ブルジョア階級の人でも、その努力と修養とに依つてプロレタリアの理想を實現することは出來るのです。私は鎚を持つとか、工場に通ふとかいふことに、プロレタリアとしての左程の意義を認めません。私がプロレタリアに認める意味と價値とは、その根本の民衆精神です。それについては既に他の機會で幾度か述べてゐますから。敢へて繰返しません。さうして若しその精神に意義があるとしたら、ブルジョア階級のものもその前非を悟つて、新しい生活理想に進んで行くことは出來る譯ではありませんか。

それから、尙ほ眞の藝術は決して階級に依つてその創造と鑑賞とを遮斷されるものではないと思ひます。あらゆる階級的な衣を脫いで、まつぱだかになつた時に、好い藝術を造ることが出來、又好い藝術を味ふことが出來るのだと思ひます。ブルジョア階級の人が書いたからとて。それが眞に人間のエッセンス

に觸れてゐるものならば、一般の民衆意識にふれてゐるものならば、トルストイの所謂普遍藝術であるならば、それは、プロレタリア階級の讀者にも充分鑑賞され理解されると思ひます。

廣津君は、有島さんの考へ方を窮屈な考へ方だと批評しましたが、その通りだと思ひます。無理に自分で理屈を作つてそこへ生きた生活をも押し込めようとする無理が眼につきます。又片上さんは、プロレタリア階級には關係ありと言つて冷淡にすましてゐる態度を難ぜられたが、これも尤もだと思ひます。既に新しく擡頭しかけて來たプロレタリヤ階級が、正しい理想を目ざして進んでゐることが分り、且つ自己の屬するブルジョア階級が、生活の邪惡を數多く示して來たことが分つてゐるのに、尚且つ安泰に自己の惡の城を守つてゐる態度は、決して正しいとは言へないでせう。尠くともそこには事實としてデイレンマの苦しみや惱みがある筈です。それを隱してまで苦しい見えをきいてゐるといふことは考へものです。

私はブルジョア階級に屬する、いなブルジョア精神に生きてゐると言はれる今日の文藝家が決して有島さんのやうな考へを抱いて安閑としてゐるとは思ひたくありません。いろ／＼な苦しみや惱みを持つてゐると思ひます。それを率直に表現することも力強い藝術を生む一つの道ではないでせうか。

要するに、藝術と階級との交渉問題が、今日のやうにやかましくなつて來たのは、現在の文藝が微弱で、淺薄で、皮相である爲めに、他なりません。それにつけても力強い、深い、一般の民衆に訴へることの切なる藝術の出現を痛切に感じます。時機にも紙數にも制限があるため、考へを充分にまとめることが出來ませんでした。不滿なまゝに筆を擱きます。（完）

なんのかゝはりもなし

里見弴

文藝と云ふ言葉を、廣義に解釋すれば、論文も、感想文も、隨筆漫錄のやうなものまでも、含めて含められないことはない

でせう。けれども、玆に私が使ふ意味では、詩歌、戲曲、小說、即ち藝術的作品のみを呼ぶものと、まづ第一に御承知願つて戴きます。同じやうに、思想界、評論界、時には哲學の範圍にまでも、藝術の名を冠せる場合がないでもありませんが、玆では、前に述べたやうな意味の文藝、美術、音樂、建築くらゐのところで止めて戴きたいのです。一例を擧げれば、或る思想を宣傳することを第一義の目的とした文章、と云ふやうなものは、玆で云ふ文藝の部にははいらないのです。つまり筆者の心の控えやう一つで、主意だけのもゝのはやつぱり主意書、宣傳を目的としたものはどこまでも宣傳文、さう見たい、と云ふほどの意味です。

そこで、文藝と云ふものは、——現に私はこの同じ雜誌で、一年に亙つてそれを考へやうとしてゐるくらゐで、一言や二言で、短刀直入的に云ひたくはありませんが、無理に云へば「心の術」で、もうちよつと引き延して云へば、「箇人の裡の己と他人との、微妙な抱き合ひとでも、少し氣取りすぎた云ひ方ですが、云へるものです。これを說明しだすと長くなつて、つまりは「文藝管見」をふた通り書くやうな勘定になりますから、こゝでは、わけの解らない獨合點を云はして置いてください。でも、獨合點を承知の上で、もう少し話をさきへ進めなければなりません。既に「個人の裡」に「己と他人」とを分けたくらゐで、この「己」は、飽までも純な——「百まで」殘ると云はれる「嬰兒の靈魂」的な、ほんとうに素ッ裸な、靈のない「心」でなければならないのです。これに對して、「箇人の裡の他人」とは、凡そ有ゆる傳統的なものを指すのです。云はずとも、それは總て後天的なもゝのです。よく論じ返へされてゐる「內容」と「技巧」（或は「表現」）の二者相分るゝところも、全くこの「個人の裡にある己と他人」からだと私は考へます。詳しいことを云へば、それは決して二つに分けられないものなのですが、說明のために、假に二者相對立せしめて云ふのです。——獨合點と承知でどん／＼話を進めますが、そこで、假に二つのものとすれば、前者を主とし、後者を從としてみられるのです。それほど大切なもの、文藝の髓の髓みたいなものが、嬰兒の靈魂的な、生地のまゝの心なのです。

○

話かはつて、階級と云ふものは、云ふまでもなく後天の產物です。「嬰兒の靈魂的な、生地の心」が、なんでそんなものにかゝり合ひませう。もの心のつかない子供は、己の階級に就いて、一言の不平も、得意げな顏つきも、決してするものではあ

りません。大人が、せいぐ生意氣になりかけた子供の問題が、私の考へる文藝の髓の髓に、爪の垢ほどの關はりも、尙更力も、もちさうな筈はありません。とんでもない話です。

○

文學者が、どんな「思想」を抱かうと、それは各自(かく)の勝手です。尤もそれは、何も階級問題に限つたことではなく、宇宙觀だらうと、人生問題だらうと、死後に就いてだらうと、どんな問題に對してだつて、どんな思想でも、勝手次第に抱くがいゝのです。どんな突拍子もない思想だらうと、なんにも抱かないよりは、まだしもましだと云へないこともないのですから。そして更に、さう云ふ思想が、おのづと作品のなかに現はれることも、一概に惡いとは思ひません。

が、どんな立派な思想を、どれほど澤山抱いてゐやうとも、文藝の根が、そこから吸ひ上げたものだけで、完全に育つたり、葉をつけたり、花を開いたりしたら、それこそお目にかゝります。一番肝心な滋味が、そんな後天の産物でないことは、獨合點ながら、前段に述べた通りです。

○

文藝の胎は、何等の狀件もなしに、たゞ「心」です、「靈魂」です。

どう云ふ階級からは生れるが、かう云ふ階級的からは、決して生れない。――そんなことがどうして云へるでせう。可笑しなことには、おまけにそれが、謂ふ所の、デモクラテックな考へ方らしく唱へられてゐることです。――この、より好みをする、藤原朝の大宮人でも抱いてゐたらうと思はれるところの、貴族趣味の、排他的思想が……。

○

この一文は、自分の立場を、獨合點の曖昧ですまして置いて、勝手に押して行つたと云ふ點で、ズルいとも、卑怯だとも、非難されないことはないでせうが、前にも云ふ通り、それは、條を追つて、この雜誌で發表して行く豫定なのですから、その點の不足は「文藝管見」の方で補つて頂きたいと思ひます。そのほかには、慌たゞしく、そしてやゝひねくれた氣持で筆を執つたことを、自分自身でも非難したく思ひますが、時間がありませんから、今度はこのまゝで發表することにいたします。

山縣の死と政黨・軍閥・官僚

浪人の眼に映じた山縣公の死

魯庵生

（一）

山縣公の臨時國葬費が議會に提出された時に二人まで反對演說をした。從來の國葬はイッデモ全員一致で卽決したものだが、今度は先例を破つて二人の反對演說の外に反對では無いが質問をしたものがあつた。時代の反應とは云ひながら以て山縣公が軍閥官僚に崇拜されるほどに國民に歸服されてゐないのを明白に說明してゐる。

此の二人の反對演說者を議場では狂人呼ばはりをし不敬漢扱ひした。が、世論は必ずしも狂人視し或は不敬漢扱ひしないで或る新聞の如きは其反對の頗る理由あるを褒書きした。新聞紙の報ずる處に由れば二人の反對演說者に對する未知の同情者から寄せる手紙は堆をなして、中には大に感謝し或は激勵し、一說には二人の慰勞會を發起するものもあるさうだ。

私は決して國葬反對が有つたのを快とするのでは無い。左に右くにも明治の新政を創めて國家の礎を据ゑた功勞者中の棟梁に對して國家が國葬を以て報ゆるは當然の禮意であると思ふ。が、僅か二人にもせよ反對を表示し、意外に反對しないまでも質問をして明らさまに澁々ながらの贊成であるのを暗示したものが一人でも二人でもあつたのは、義宜しく全員一致の兩院協贊でなければならない筈の國葬に一點汚斑を印したものである。

（二）

大隈侯の葬儀は國民葬の名を用ひて日本の葬式の歷史に一紀元を劃したが、本來國葬は卽ち國民葬であつて國民葬以外に國

葬があるべき筈が無い。唯之までの國葬は官僚の階級思想から爵位勳等で參列者を制限した爲めに國葬の實が上らなかつたのである。大隈侯の國民葬は國葬に落第した爲めの偶然の拾ひ物であつたが、山縣公のは國葬に及第しても滿點でなかつた處に軍閥官僚以外の一般民衆の追惜哀悼の情が缺乏してゐるかの如き觀がある。

（三）

原敬の死は不慮の災禍であつたゆゑ、當然の運命らしく思はれながらも政黨の中にすらも同情したものがあつた爲めであらうが、偉人の諡號を惜氣もなく浴びせ掛けて偉人墜落の感があつた。續いて大隈侯の死に出會つた世人は面喰つて大偉人だの巨人だの東洋一だの世界的だのと有らん限りの嘆稱のヴオカビユラリーを洗ひざらひブチ撒けた。處が元老中の最大元老たる山縣公に對しては偉人とも巨人とも云ふものが無い。稀れには偉人と崇めるものも丸切り無いわけでは無いが、お義理に原敬や大隈のお相伴に少々お裾分けするといふやうな氣味がある。公平に評して公は本より原敬以上であるし、大隈侯も影では大言壯語しても事毎に公の顏色を見て進退してゐたので、少くも山縣公の生前の權威は原以上、大隈以上であつた。恐らく日本の歴史を見て、公ほどに匹夫から起つて人臣を極め終生威福を擅にしたものは一人も有るまい。高慢兒秀吉、幸運兒家康と雖も亦及び難いだらう。が、世間は此の空前の大權勢者たる公に對して偉人とも巨人とも云ふものが極めて少ない。或は偉人相場が大暴落した爲めに偉人と稱するは却て公を小さくするを恐れた爲めかも解らんが、左に右く大隈侯ほどには勿論、原敬ほどにも噺し立てるものが無い。

（四）

時代はイツの間にか推移するもので、時事新報は數年前から死亡の階級稱別を廢して、貴族の死も行路病者の死も平等に死去と報じてをる。此頃朝日新聞も讀賣新聞も其他二三紙皆之に倣つて逝去の語を用ゆる。三位以上を薨と云ひ五位以上を卒と云ふ舊來の階級稱別は自然的に廢棄されたわけである。が、昔しなら殿下の稱號を許さるべき從一位大勳位頸飾章を有する貴族以上、功臣以上の元老は特別扱ひしさうなものを大隈侯でも山縣公でも矢張一列一帶に死去と報じて一判任官一藝人乃至一行路病者の死亡と少しも區別しなかつた。我々浪人から見れば何でも無い咄であるが、人爵に超然たるべき筈の學者の死亡でさへが三位以上の位階を持つてると遺族が薨去と廣告するほどマダ階級根性が拔け切れない時代だから、公侯の一族郎黨、就中山縣公の一門家の子は國家第一の棟梁たる公の永眠が普通の

平民同樣に扱はれて死去と書かれるのを餘り快く思はなかつたらう。

（五）

之に就て憶出されるは、タシカ明治三十一二年頃であつたと思ふ、時の内閣が危殆に瀕して後繼者として恰も歐羅巴から歸朝の途次にある公を待詫びてゐた時であつた。公の乘船が横濱埠頭へ着いた時の騒ぎつたら丸で凱旋將軍を迎へるやうであつた。其頃の長閥の御用紙たる日々新聞の記事の如き、御の字づくめで有らん限りの敬語を列べ、恰も皇族殿下を迎へまつる如き慇懃鄭重の禮を盡したもんだ。尤も當時でも追從阿諛が餘り露骨過ぎたので嫌惡し或は冷笑したものもあつたが、兎に角く公の權威の赫々たるは昔しの將軍家同樣に仰がれたもんだ。

然るに今は行路病者並に死去と報ぜられ、大功臣と讃へられながらも藩閥の最後の殘落の如く弔され、中には忌憚なき功罪の總勘定を清算され、剩つさへ議會では彈劾同樣の國葬反對演説をされ、其の不謹愼を咎める同情者にさへ人には誰にも缺點は免かれないものと云はれて暗に罪過の裏書きをされてゐる。比較して何等霄壤たる時代の推移であらう。世には大御所と崇稱され、事大小となく最後の決定は公に出て與へられる如く想像されてゐたが、其實公の光輝は既に入相に沈みつゝあつたのは、眼近の軍閥官僚の徒すらも公の死の影響が少かるべきを一齊に語つてゐる一事に由ても證せられる。

（六）

政友會が軍縮案を提出したのは必ずしも公の死に乘じたのではなからうが、公の死に由て俄に馬の首を立直したのは明かに看取される。國葬反對演説を不謹愼と評するが、公の葬式さへも濟まない中に公の終生の使命とした大陸軍を縮小する議案を提げて、剩つさへ傍系とは云ひながら長閥の雨露に浴した大岡氏が帷幄上奏の特權にまで切込む如きはヨリ以上の不謹愼である。

然るに公の遺骸を安んずる職相官邸と呼べば應へんとする隣町の議政壇上に公の一生の事業を切崩すに等しい不謹愼の演説をしながら咎も咎められないで、陸相が唯々として首を伸べて斧鉞の下るを待つものゝ如きは大勢如何ともし難いからである。公は曾て野黨が合同して迫つた時、馬の上で取つた天下は馬の上でなければ渡す事は出來ぬと豪語したといふ噺である。其説の眞否は知らぬが、政權授受を迫る政黨に對する公の心持は必ず此の如くであつたらうと想像する。だが、公の堅壘と賴んだ大陸軍も眼を瞑るや否や遺骸のマダ葬むられない中に大斧鉞を加へられやうとするは公の魂魄恐らくは安心して冥土黄泉

の旅に上れないであらう。

（七）

公は議會政治にさへ衷心から同感してゐなかつた。公の政黨及び代議士を視るや恐らくは昔しの町役人ぐらゐにしか思はなかつたらう。夫故に人民の爲めに御仁政を嘆願する程度の權能を認めても夫以上に立入つて御政道を是非する如きは上を恐れない潜上の沙汰であるとしか思はれなかつたらう。況してや近時の社會主義的色彩ある新思想を國家を破壞する反逆の如く憎惡するは當然である。だが、公の昵近者が公も亦新思想の理解者であつたと稱して公が決して時代に遲れてゐなかつたかの如く辯護するは、所謂問ふに落ちずして語るに落つるで、取も直さず公等の抱懷する舊思想が最早時代遲れであるを間接に告白する無言の降伏である。六十年來公は常勝將軍であつたが、其末路は鴨川の水、雙陸の骰子よりも儘ならぬ新思想を持扱つて剩つさへ瞑目するや否、遺骸の溫もりがマダ冷めない中に本城の陸亂を切崩されようとするは公としては忍び難い屈辱であつて、國葬ぐらゐでは迚も償はれない終生の大痛恨事であらう。騎兵隊以來敵を破る事朝茶の子に等しい常勝の大將軍も眼に見えない思想の大勢といふ大敵には大砲の威力も無効であつて、施とす術が無いので惱まされてゐた。軍閥官僚の大本山たる小田原の古稀庵は實は山縣公のアメロンゲンであつた。

（八）

思想の横流の前には軍閥も無い、元老も無い。京の町に〃千の密偵の眞子を放つたといふ平家の勢威に劣らざる威權赫々たる大元老も思想の大洪水の前には唯の衰殘の一老翁である。生きてゐやうと死んでゐやうと思想の大洪水は一老翁を問題としない。之が今であればこそ、曾て官僚の一郎黨であつた高橋老人を首班とする本來が官僚の私生兒たる政友會内閣の今なればこそ滿點でなくとも國葬に及第したが、十年後であつたら果して及第する乎否乎計られるほど時代は水車よりも早く急轉してゐる。啻だ獨り山縣公のみでは無い。民衆の贔負役者であるかのやうな大隈侯も首尾よく百二十五歳まで長命したなら恐らく幕末遺老を弔する程度で哀悼されるであらう。迚もお賽錢を投げるものは無からう。

（九）

國葬の前日の拂曉據ろ既くに死んで了つたとばかり思つてゐた黄海の英雄樺山伯はマダ生きてゐたが卒然永眠したさうだ。前世紀の英雄は此の如くしてポツ〳〵逝く。丁度舊思想の大黑柱が一本々々宛次第に拔け落ちるやうなものだ。殘つてる大黑柱も外觀は堅固らしく見えて内部は實は絲瓜の殼の如くなつて

をる。人壽の限りあるは岩に獅噛み附いてゐても死すべき時が來れば死んで了ふ如くに、思想も亦決して不老不死のものでは無い。天下に號令した元老も終に老衰して死する如くに天下を支配する思想も亦時代の展開に遲れて亡びて了ふ時がある。陸軍や警察が十重二十重に陣列を布いて武力を以て新思想を防禦しても、肝腎の本尊の舊思想は亡ぶべき時が來れば朽木の自づからに倒れるやうに亡びて了ふ。

（十）

山縣公が瞑目した後の影響は軍閥官僚の家の子すらも一齊に無いと云つてをる。大黒柱を毀つた空元氣の擬勢ばかりで無く全く公の瞑目が夫程の影響を與へやうとは思はれない。實をいふと、公は精神的には既に亡びて了つてゐるので、古稀庵の後光は軍閥官僚の徒に映ずる幻影に過ぎなかつたのだ。政見上公と對立すべき筈の原敬や加藤高明までが事毎に古稀庵に伺候して鼻息を伺つたのは二人とも根が官僚畑に育つたからイツまで經つても幻影から覺め切れなのいである。だが、大きな幻影が消えて了つた後は小さな幻影が殘つてゐても最早威嚇されるものは無からう。山縣公が瞑目した後の影響は餘り有るまいが、一番氣の毒なのは公の直系の家の子よりは、大きな幻影さへも消えて了へば夫程恐ろしくも無かつたのを目前に經驗しても猶ほ目が覺めないで、生殘つた小さな幻影に縋つて古い思想の孤城に立籠らうとする憐れな人々である。

之から先き何十年か經つて、漢楚軍談や演義三國志に等しい幕末軍談や日清日露軍談が出版されたなら大隈侯や山縣公や樺山伯は張良や韓信關羽や張飛のやうな英雄となつて傳へられるだらう。山縣公が八十二斤の長槍を揮つて勇戰する處や樺山伯が西京丸の甲板から支那艦隊を睨み返へす場面を想像すると痛快に堪へない。我々は恁ういふ英雄と偶々時を同ふして生れたのを幸ひとする。（國葬の前夕）

政黨の資本家的性質を明瞭にする効果

堺　利　彦

明治大正年間に於ける政治史の大綱は、藩閥政府から政黨內閣への推移である、之を經濟的に見れば、資本制度の幼稚時代から成熟時代への發達である。山縣の死は其の推移、其の發達の一大段落を劃したものである。

明治維新の根本意義が、封建制度の崩壞と、それに代る資本制度の樹立とに在つた事は、今更ら縷述するまでもあるまい。然し資本制度の發達がまだ頗る不十分であつた當時の情勢として、半封建的の藩閥政府が建設されたのは、亦た必然の徑路であつた。從つて、德川の天下が仆れて薩長の天下が出來たと、一般に考へられてゐた。そこで其の薩長の藩閥政府に反抗する政黨運動が現はれた。政黨運動は自由民權を旗印にしてゐたが其の首領から云へば、薩長の爲に藩閥政府から排斥された土肥二藩の代表者（即ち板垣と大隈）であり、其の實質から云へば主として士族と豪農との結合であつた。

士族が一時、政黨運動の率先者になつたのは、資本家政府の前驅として藩閥政府が出現したのと、正に同じ徑路であつた。資本家階級の結成がまだ本當に出來ない間、薩長の士族は藩閥政府を作り、豪農の實力がまだ十分に延びない間、他の士族は政黨運動の率先者になつたわけである。士族は封建制度の遺留分子として、其の無力な一部は勞働階級に下り、其の稍や有力な一部は新興階級（即ち資本階級）の先驅者、若しくは代表者となるより外に、行き道がなかつたのである。

所が、其の間に資本階級が漸く發達した。彼等は一面に藩閥政府の保護を受け、一面に政黨運動と結托して、次第に社會の中心勢力となつて來た。財力のない士族はいつの間にか滅亡してしまひ、豪農は同時に、工業資本家、若しくば金融資本家を兼ねてゐた。

藩閥と政黨とは久しく其の爭ひを續けてゐたが、彼等も漸くにして自分等の實質的意義を覺つて來た。隆々たる財力の勃興に壓迫されては、如何なる頑冥な輩も、如何なる愚昧な徒も、如何なるお人好しも、それを覺らせられずには居られないのであつた。政府も政黨も財閥を離れては、水を離れたカッパの如くである。そこで政府も政黨も、其の實質、其の態度、其の主張が次第に變つて來た。只、財閥にも色々な系統があり、種々な競爭があるので、政黨も二個三個の對立となり、政府內にも薩長の爭ひ、文武の爭ひなどが存してゐた。

斯くて政府と政黨とは猶ほ其の絕えきらぬ爭ひを續けてゐる中、政府はいつの間にか主として（少くとも外觀上）長州の勢力に占められてしまつた。然し伊藤博文はさすがに先づ形勢を明白に看取した。そこで彼は板垣を追ひのけて自由黨を乘り取

り、それを政友會と改めた。藩閥の一部と政黨の一部とが、財閥の一部を中心として結合した。藩閥の形體はこれで壞れはじめた。そして政黨内閣の端緒が開けた。

然し山縣は頑として動かなかつた。藩閥の色彩は薄らいでも、官僚軍閥の勢力は猶ほ依然として存してゐた。そして桂の時代が來た。然し桂も、伊藤の相續人たる西園寺を向ふに廻して政友會と戰ふ爲には、矢張り他の政黨と結ぶより外はなかつた。そこで彼は伊藤の故智を學んで、今度は大隈の拵へた改進黨の後身を乘り取らうとした。然し彼は不意に病死した。そして其の運動の結果が加藤高明の憲政會となつて現はれた。從つて一時、大隈の復活を見た。

斯樣にして、官僚中の有力分子は、政友會もしくは憲政會に分屬し。兩黨中の舊分子は次第に凋落し、政黨が明瞭に資本黨の色彩を呈して來た。殊に原内閣、高橋内閣に至つて、其の色彩が最も明瞭になつた。然し彼等は猶ほ『平民内閣』と稱したり、大いに官僚と戰ふと稱したりしてゐる。そして世の謂ゆる『識者』の中にも、此の『平民内閣』若しくば『政黨内閣』に依つて、官僚軍閥を亡ぼせば、それで政治改革が成就するやうに考へてゐる者が少なくない。

但し、それにも多少尤もな點がある。それは山縣といふ大御所が猶ほ生き殘つてゐて、藩閥の餘勢たる官僚軍閥を統率し、儼然たる一大勢力を保持してゐるかの觀を存してゐたからである。然し其の山縣も遂に死んだ。これで資本制度發達の結果たる政黨内閣の成就に、一大段落が劃された。今後は政友會と憲政會とが、本當に明瞭な資本家黨として踏みだして來るだらう。ブルジョアとプロレタリヤとの對立が、これからいよ〳〵ハツキリして來る。

政黨運動の落伍者たる國民黨などは殆んど問題でない。只、それが官僚の殘存分子と結合して、勞働階級の機嫌を取る時、一時的に多少の勢力となり得るかも知れない。後藤、犬養の提携などいふ風説は其の邊の消息を漏らすものである。

そこで軍閥の將來はどうなるか。資本家黨に降伏するか。或は從來の餘勢に依つて暫らく資本家黨と對抗するか。或はアヤフヤの間に資本家黨と提携するか。それとも小資本家階級を代表して大資本家黨に當り、武斷的急進政策を以て勞働階級の目を暗まし、これで以て一時的の形勢を支配する事になるか。

現にかく山縣の死は、これらの形勢を促進する一機會になつたには相違ない。現に政友會の一領袖が稍や露骨に陸軍に喰つてかゝる態度を示したのも、其の一現象と目する事が出來る。

こうした展開がある

室伏高信

政治上の權力はある種の個人のうへにあることもあり、また組織力のうへに中心のある場合もある。前者は原始的な政治において常に見るところ、また原始的でなくとも、今日でさへ政治上の權力がある個人を中心として廻轉してゐる場合がある。例へば英國の現狀は稍々それに近いものであつて、ロイド・ヂヨーヂなる一個のデマゴーグを中心として政局が廻轉しつゝあるやうなのがそれである。無論彼れ一人の力がどの範圍まで働いてゐるかは問題であつて、ある點まで統一黨にひきづられながら、またある點まで同黨を引廻してゐると解するのが當然であるが、個人がこうした役割を演じてゐるのは現代においては一個の變態である。こうした場合には、若しロイド・ヂョーヂが死んだとしたら政局には大變化が起るに相違ないのである。しかし政治上の最高責任の地位にある人であつても、若しその人の地位が、その人自身の個人的の力の結果でなくしてそれが主として組織の力、例へは政黨そのものの力の結果であるとすれば、その人が死んでも、また政界から退隱しても、それは政局には格別の變化を起す理由とはならない。英國でボナ・ロウが政界から退隱したことのごとき、また原敬が刺客の手に倒れたことのごとき、みなこの例である。何となればボナ・ロウや原敬が勢力のあつたのは黨外に對しては彼等自身の勢力でなくして統一黨なり、政友會なりの勢力であつたからである。だからボナ・ロウが退いてもう少しボンクラの評のあるチエムバアレンが首領になつても、若しくばバーケンヘツドでも、カーゾンでも、誰れだつて差支へはない。また原敬の代りに高橋是淸が立つても、また何かの場合に高橋が退隱しても、死んでも、政友會が依然二百八十名からの兵卒を率ゐてゐる限り、その總裁は床次竹二郎でも、野田卯太郎でも、若しくばもつと腕節の強い鳩山一郎であつても、結果は同じことなのである。

山縣公の死はそれに比べると半分だけ意味が違ふ。といふのは彼れの政治上の無類の地位は半ば彼れ自身の力であり、他の

半ばが組織の力であつたからである。もつと詳しくいふと山縣はもと藩閥の頭目として政權をもつてゐたのであるが、その藩閥は時代の變化とともに官僚組織となりまた軍國主義と代つたのである。官僚組織は最早やとうに下り坂を歩るいてはきたが尙ほそれの最後の城砦としての貴族院、樞密院及元老會議に立籠つて政黨と相拮抗してきたうへに、獨逸からの軍國主義の輸入はこの寡頭政治を科學的に組織しようと企てた。それは單に對外的軍國主義であるばかりでなしに、リープクネヒトの所謂對內的軍國主義をも、在鄕軍人會に、靑年會に、若しくはその他の各種の制度のうちに植えつけたのである。この諸勢力の柱石（國家の柱石ではなく軍國主義の柱石）として山縣が存在してゐたのである。ところがその組織は組織としては不完備な點があつて、山縣の個人的勢力のためにそれの各部が有機體の一部でありえたのである。例へば貴族院、樞密院、元老會議、軍隊、在鄕軍人會その他の不可思議なる諸組織は山縣公の統合力によつて有機體の各部として共同目的への共同行動を進めてきたのであるから、山縣の死によつてこの統合者が失はれて、元老會議の形勢が一變し、貴族院や（それも一部）樞密院や、軍隊や、在鄕軍人會やの各々の統合者はあり、またこの各々の部分は殘存してゐるのであるが、それ等のものはたゞ保守主義、寡頭主義、貴族主義、軍國主義の一點では依然共通目的をもつてゐるにしても最早や有機體の一部としては不完全なもの、ある程度まで離れ〲のものとなつてしまつたのである。こうして軍閥的保守主義の間に分解作用が行はれてくると、その各部分々々例へば軍隊なり、貴族院なり、樞密院なりにおいても、それ等の外部的威力または背後援助勢力の減滅のために、彼等の一派の勢力が內部的にも分解作用をうけなければならないことゝなるから、彼等の一團としての勢力は急速に下降するに相違ない。この弱點に乘じて立つものが資本的保守主義即ち政黨閥であつて、軍備縮少建議案の議會で政友會の一總務が例の帷幄上奏權に挑戰したのは、山縣死後における軍閥即ち軍國的保守主義に對する政黨閥即ち資本的保守主義の心理を最も露骨に表明したものと見なくてはならない。そこで今日まで均勢の狀態にあつた軍國的保守主義對資本的保守主義の勢力均衡が山縣の死によつて破れたのであるから、山縣公への吊鐘が同時に軍國的保守主義への吊鐘とならなくてはならないことゝなる。そしてそれが資本的保守主義の勃興を促進することも勿論である。日本のプルートクシーがもう勝ち誇つてゐるのである。貴族院さへも研究會を中心として資本的保守主義へとその勢力の中心が移る。しかし私の今までいふてきたことは政治なり、政界な

りといふことを狹義のそれに解してきたに過ぎない。即ち政治をもつて官僚や、軍閥や、政黨閥やの間における取引關係と解釋してのことであつて、私が變化のあるないといふてきたのはこの狹い舞臺のうへの取引關係の異動をいつてきたに過ぎないのである。之れを廣い立場、或は國民的の立場からいふと、山縣の死は、安田善次郎の死ほどの影響すらもない。何故なら安田の死は今日の國民的大爭鬪の根本義に關係のあるものであるが、山縣が死んでも死なくても、それはたゞ前述の小舞臺の取引關係の變化を起こすだけに過ぎないからである。

軍閥に對してプルートクラシーが勝ち誇る。そして階級鬪爭以外の鬪爭が小さい、無意義なものへと落されるとが、だん／＼明瞭に人々の頭に分つてくる。階級意識が促進される。クラッセンヘルシャフトだけが殆んど唯一つなる民衆運動の敵對者として民衆の眼に映ずる。だからプルートクラシーの勝ち誇つてゐるといふことは彼れの勝利の永遠性を意味してゐるのではなくて、彼れの自壞作用の一記錄であるに過ぎないのである。

山縣公國葬の日に

山川均

山縣公も愈々國葬になつた。今頃は定めし楠正成や桂公爵などの靈魂と卓を圍んで、大に國事を憂ひて居られることだらう。それにしてもこの日本を守護して下さる護り神様が、また一人殖えたのだから心強い。

忠君愛國の元寳捌、官僚軍閥の大黒柱たる山縣公が亡くなつては、日本も愈々素町人共の天下となつて、國是も國粹もめちやく／＼になるだらうと云ふ説がある。しかし此説は誤つて居る。日本は山縣公の目の黒いうちから、既に素町人階級の天下になつてゐた。然るに日本の國是と國粹とは、今日までびくともせぬ。

原内閣の成立は、色々の意味から、日本に於けるブルジョアジーの政權の確立を證據立てたものである。官僚政治の翼の下

で大きくなつた日本のブルジョアジーは、段々巣立ちをしてもよい時が來た。親鳥は段々馬鹿にされだした。黄ろい嘴が、折には親鳥をへこませることすらも出來て來た、最近數年間の政友會内閣の執政は、ブルジョアジーが飛翔の力を試驗する時期であつた。彼等には自己の實力に對する自信が出來た。親鳥は段々焦ら立つて來た。しかし彼等には新しい勢力を壓潰ぶす力はない。卵のうちなら壓潰ぶせたかも知れぬ。彼等の或者は卵をぬくめたことを後悔した。

斯うなつては何とも致し方がない。山縣公が大抵に見切りをつけて此世を辭せられたのは、誠に機宜を得た處置である。聞けば山縣公は新思想を理解せられてゐたそうだ。それでこそ、斯ように大勢に通じた進退が出來たのかも知れぬ。

しかし山縣公は亡くなつても、日本の國是國粹が搖るぎ出し官僚政治が民主政治に變はるなどゝ考へたら大間違ひである。

デモクラシーは、ブルジョアジーに特殊固有な政治形態であるには相違ない。しかしデモクラシーは資本主義の自由主義時代や平和主義時代に相當する政治形態であつて、資本主義が帝國主義軍國主義といふ末期に入ると、保守的反動的になり、最も露骨なブルジョア・デイクテートルシップを必要とするようになる。

日本のブルジョアジーが官僚軍閥の後見から獨立して益々政權の主人公となつた時には、その資本主義は丁度この末期に入つてゐた。

そこで官僚軍閥の凋落は、日本ではブルジョア自由主義（リベラリズム）の實現を意味しないで、最も露骨なブルジョアの、デイクテートルシップの確立を意味して居る。

その結果は、資本主義の社會における代表的の階級の對立が一層鮮明になり、階級の鬪爭は、一層政治的の意義を加へて來る。そして官僚軍閥は、或時はブルジョアジーと結び、或時は反對階級を味方として、あわよくば政權の恢復を企てようとする。そして兩階級の鬪爭が進行して、或る危機的形勢を造出した時に、この形勢を利用しようとして暗中飛躍を試みるのは、必ず官僚軍閥でなければならぬ。官僚軍閥は凋落した。けれども無産階級運動の戰術は、決して何時までも、官僚軍閥といふ一要素を閑却してはならぬ。

山縣公の死は、斯ような形勢を造り出すものではないが、斯ような形勢を象徴したものに、山縣公の死ほど適切なものはない。

驛傳政治家と豫言政治家

杉森孝次郎

山縣公の死を、文字通りの意味に解するならば、問題とするに足るほどの公的事實ではない。公の死は、公的問題といふことばを値ひするほどの公的問題ではないのだ。一面からいへば公自身も早くから頗る目的とした日本の成長が、公の豫期以上にも達した證據であつて、故人も省みて本懐とすべき理すぢがある。

山縣公の死は、明治の日本の退場の一象徴と見て、かなりに大きな公的意義を暗示する。大正七年の暮秋にドイツは再生の前夜の最後の鐘聲を聽いた。山縣公の背景としての明治的日本の一特質も、その鐘聲を反響する位置にあつた。けれども、大正の最初の數年は、明治の殘生と見てもいい。日清、日露の兩戰役が明治の日本の一象徴だ。山縣公は、その兩戰役の一象徴であつたのだ。

日本の生命は、明治以前にも、明治にも、明治以後にも認められるが、山縣公は、日本の生命のうちの明治部の或る幹線の一支柱であつたのだ。そも〱、新日本の創設者の別稱としての維新の元勳及び廣くその直接先行者としての志士、慷慨家を通じて、それから元勳の直接後繼者としての元老を見ても、かれらの政治的理想に淺近なる制限があつた。山縣公は、決してその例外者ではなかつた。慷慨家、元勳、元老を概觀して、哲學の深玄幽奥がない。思想の高明遠達がない。ここに於いてか明治の日本とか、其の後の日本とかいふ區劃にも必要としての意義が生ずるのだ。山縣公は、明治期の日本を、それは實に驛傳のごとくに、限つて取り扱つた一人であつた。長い日本の生命史から觀ずれば、現象の人であつて、原則の人ではなかつたのだ。

ビスマルクが、ロイド・ジョージ氏などと似て、やはり驛傳の政治家であつた。驛傳政治家の價値の低さは、かれが、單なる容器と輪轉力とを供給して、內容そのものを供給しない點に成り立つ。ビスマルクを見ずや、かれは、自作の回顧錄に於いてドイツの政治、ドイツの愛國心は、傳統的君侯主義の專制の基礎の上にのみ安全なるべきことを確信した形迹を明らかに示してをる。かれはまた、普佛戰前後に於ける新興ドイツ國民主義

の意義をさへ看取しえなかつた。さればこそ、ビスマルクの政治的理想は、すくなくとも二十世紀に入つてからは有害無用となつた。かれは、今日のドイツを豫言しえたか。

　ロイド・ジョージ氏が、畢竟するに仕事師にすぎないことも、恐らくは棺のおほはるるを待たずして殆んど決定した。われらは、驛傳政治家の功用を正當に評價すべきだが、豫言的政治家の可能と價値を無視すべきでない。薄信すべきでない。大體に於いて、わが日本の政治家は、あまりに小規模の驛傳政治家だけのやうな概觀される。われからいにしへをなして、能く百世を基礎づけんと意氣込んだほどの政治家は、さがしても見つからないやうだ。百世を基礎づけるといつては語弊があるが、本質眼を光らせて現實を經營した人が、古來、あまりに稀少ではないか。明治以前の鎖國時代は、それでも多少恕すべき理由があるが、今日及び今後の日本に於いては、單なる驛傳政治家は政治家たる資格がないといはねばならん。

　山縣公は、明治に生きて明治の必要の或る部分を知つた。眼で知つたよりも手で知つた。明治の必要を眼で知るほどの人は明治の過去としてのさきも、はても相當に見え、明治の將來としてのさきも、はても相當に見えるはずだ。明治の位置が見えるはずだ。いはゆる深憂遠慮が、正しい意味に於いてなくてはすまぬわけだ。けれども、深憂遠慮は、手だけの人にはありやうがない。あるとすれば、主觀的妥當性だけのものだ。その主觀が當人限りでも、多衆に共通してゐても、それは問題でない多數の主觀が淺粗な例はいくらもある。

　日清、日露兩戰役は、それぞれに、當時の日本の一時務であつた。山縣公の生命を、この兩時務をとほして見る時に、健在だ。盛態だ。大正年代にはいつてのちまでも、進步主義、自由主義、文化主義のために公の存在を邪魔とした人々は、その人々自身の進步主義、自由主義、文化主義が、いかに弱いものであつたかを告白したにとどまる。山縣公は、その批難せられた大部分に於ては、公の爲惡力の大を示さず、國民の爲善力の小を示した。

　民族、人類、生物のいのちの流れの推し移るかなしさの一面を、山縣公の新逝を追想するにつけてもしみじみ感じる。明治に生まれて、兩大役をも親しく目擊したわたくしは、一大師友に負ふ感情をもこの際に呼びおこされる。

　封建主義から民族的中央集權主義に推し移つた努力が、元勳、元老の功績のすべてであつた。けれども、民族的社會主義、及び人類的社會主義の智慧と信仰と實行が現代の政治家の中樞必要だ。ここは社會主義と呼んだ事實は、いはゆる社會主義とは多少別だ。各全人主義としての綜全人主義の便宜名だ。現在までのわが政治家は、人と社會とを知らない、かれらは國家主義者だが、かれらの國家は、社會すなはち人類社會を背景とせず、人格すなはち國民人格を目的としない。舊政治の幕は必要に於いて垂れた。新政治の幕が可能に於いてあかなくてはいかん。新政治家の心は各人だ。かれの舞臺は全社會だ。

帷幄上奏論の主要なる論點

法學博士　吉野作造

○かねぐ一度は論じて見たいと思つて居た帷幄上奏の事が、圖らずとも大岡育造氏ノ口から出たので、之を好い機會に平素の考の一端を既に新聞に書いて見た。改造社でも之を重大問題とする僕の見地に同意を表せられたと見へて改めて之に關する一論の起草を求められたが、僕今不幸にして緩くり其需に應ずる遑はない。只此の問題は我國に取つて非常に重大な問題な丈け、折角與へられたる機會を取り外づすことは誠に殘念だ。依て玆に最も手短に之に關する僕の所見の大綱を列擧して見る。詳細なる說明は賢明なる讀者の自ら工夫する所に委する。議論多岐に亘らず直截に論點を列叙する方が、研究者に寧ろ便宜だらうとも考へる。

○

本問に入る前提として、僕は先づ帝國憲法そのものが實は十分に所謂憲政の通義に據て居ないと云ふことを指摘して置く。憲政の通義よりすれば、主權者の主權者としての一切の統治作用は政府の輔弼といふ途を通じて發現すべく、政府の一切の行動はまた悉く議會の監督を受くべきである。而して議會が完全に所謂人民の代表機關である限り、斯くして主權者と人民との政治的關係はピツタリ合つて其間水の洩るゝ隙もない譯になる。政府の輔弼の目こぼれがあつたり、議會の權限は拔け道があつたりしては、或る仕事は人民の知らぬ間に取りまかなはれ、或る仕事は人民の耳目の外に逸するといふ譯で、昔の專制時代と變らぬ事になる。斯く云ふ理由で、僕は凡ての統治作用は必ず政府の輔弼を受くるべきもの、抑も輔弼に由らざる統治作用といふもの、あるべき道理はないと確信して居る。

こゝまではいゝ。さて其輔弼は誰がやるか。玆に一寸外國の例を二つ引き合に出す。一は英國で之は合議體の内閣である。他は革命前の獨逸帝國で宰相一人である。外に大臣と通稱するものはあるが、あれは宰相の手足の樣なもので政治上獨立の輔弼機關ではない。かくて輔弼機關は一人なるとあり多人數なるとあるも、多人數の場合は必ず合議體となりて其意思を統一する。して見れば、要するに輔弼といふとは、統一せられたる單一の意思に働く機關に委さるゝと謂ていゝ。夫も其筈だ。輔弼の任に當る者が各獨立の意思を有する多數では、一つの船が數人の舵手に操縦さるゝ樣な物で、斯んな危險なこと　ない。

◎

然るに日本の憲法の規定は如何なつて居るかといへば、第五十五條には、明白に國務各大臣は天皇を輔弼し其の責に任ずとある。卽ち國務大臣はてんぐ〵ばらぐ〵に銘々獨立して輔弼の任を盡しても妨げない樣になつて居るのだ。之が一つの成典上の欠點といへるかどうかは姑く論外として、夫の所謂帷幄上奏の弊は、實はこゝの隙をねらつて日本の政界に不思議な根を張つて來たことを注意しておきたい。

○

憲法は國務大臣の連帶責任といふとを要求してゐないとは前述の通りであるが、さりとて又之を禁じても居ない。故に憲政の通義が連帶制ならざる可らずとせば、憲法はあの儘として、尚連帶責任の内閣制を立つるに妨げはない。而して憲法附屬の主要法令たる、内閣官制は、實に原則として此連帶制を認めて居る。卽ち國務大臣は各々同時に行政各部の長官として其擔任を分ち、集りて内閣を組織し、主要なる政務は皆會議の上にて決行するといふとになつて居る。然るに玆に不思議にも之に對して一つの例外が認められた。卽ち軍事に關しては必しも閣議に附せなくてもいゝと云ふ特別である。此事は内閣官制第七條に規定されてある。閣議には附せないが、併し陸海軍大臣の何れかゞ副署する、卽ち國務大臣の副署と云ふ憲法上の要件は之で立派に充される。憲法の正條に違反するのでないから可いといふのであらう。兎に角斯くして他の國務大臣の全く與らざる國務といふものが出現した譯だ。之が僕の言ひ草に直すと憲法の所謂不備に乘じて帷幄上奏の端が玆に開かれた譯になる。

○

連帶制が憲政の通義として守られねばならぬとすれば、之に引續いて大事な點は、總理大臣は各大臣の選任について絕對に完全な自由を得なければならぬといふ事である。其の意の滿さる人を閣僚として迎へざる可らずとせば、又は其欲する人を其任に置く能はずとせば、何を以て連帶合議の制度を立て通す事

が出來やうぞ。此觀點からすれば、陸海軍大臣の武官專任制の如きは、制度として憲政の通義と相容れざるものであること云ふまでもない。

僕は何も陸海軍大臣は必ず文官たるべしとは主張しない。武官であれ文官であれ、首相が視て以て僚友として信任するに足る人を自由に舉げ得ればよい。併し今日の樣な制度では、首相に全く選任の自由なきのみならず、强て局外の人に就任を懇請する樣の實情にして、其結果却つて之に制せらるゝ嫌なきを得ないではないか。

殊に武官專任制は、前の連帶主義に對する特例と相結んで、軍事官憲を全然普通の政府の外に超然たらしむるの結果となつた所謂軍閥の治外法權は斯くして鞏固となる。之は制度の上でも由々しき變態だと思ふ。

○

夫れに十五年ばかり前から軍令といふものが出來た。帷幄上奏で軍事官憲は別天地を爲し得たけれども、併し多くの場合に於て事實上總理大臣に相談し其內諾を求め其手を煩すことの必要があつた。軍事を完全に普通政治家の手よりもぎ取るには之を廢めなくてはならぬ。そこで今まで總理大臣の眼を通した軍事命令を、爾後は陸海軍大臣單獨に、換言すれば總理大臣に全然沒交涉に發令し得るために、軍令といふものが出來たのである。之も憲法の正條には違反せないが、世界に類なき頗る驚くべき制度だと謂はなければならぬ。

○

そして此頃では、之等の變態的制度を辯護する爲に、統治作用の發現は二つの方面に行はれる、一は純然たる政務で之は內閣を通して行はれ、他は國防事務で內閣の輔弼に由るべからざる仕事だといふ樣な暴論が案出され出した。昔三權分立といふ思論が流行つたことがあるが、今日は臆面もなく國務二分論乃至政務防務對立論といふものが流行る。斯んな馬鹿な理窟は日本以外何處を尋ねたつてない。

○

そこで帷幄上奏といふ弊害を根本的にやめるには、軍令を廢し、武官專任制を改め、又內閣官制第七條を削除すべきである。憲法の規定の改正まで遡ることは必しも必要ではない。

屢々もいふが、右の三點は憲法の正條に反するものではない。世上には憲法違反でないから差支あるまいと云ふ者もあるが、そんなことを言ふ者は、憲法の運用といふことを知らざる輩である。極端なことをいへば、法の條文なればどうでもいゝ、其範圍內で如何なる手段で國家の目的を達すべきやが重大な問

題だ。憲法は訴訟法の類とは違ふ。正條以外の利害得失の校量の最も八釜しく論ぜらるゝ憲法の如きはない。

○

帷幄上奏の弊を救治する策としては以上でつきる。此改革を容易ならしむる爲、軍閥の威容を削縮せんとて、元帥府軍事參議院の廢止を唱ふる者もあるけれども、之は左まで重大な問題ではないと思ふ。此兩者を無用の長物なりとするに異論はない。が之れ丈けなら、あつたつても大した邪魔にはならない。

參謀本部と海軍々令部とは問題が少しく異る。此兩者は元帥府や軍事參議院と異り、諮詢機關ではない。國防用兵の事に當る執行機關である、決定機關である。防備と政務とを分ちて前者を大臣輔弼の範圍外なりとする說を採る可くすとすれば、參謀本部と海軍々令部との違憲の制度たること明白であるが、假りに一歩を讓って國務二分論を許すとしても、防務と政務との區別明白を欠くの結果として、國務大臣の輔弼の任務と彼等の權限とは衝突することなしと必する譯には往かぬ。玆に一つの見逃す可らざる憲法問題があると思ふ。

併し實際は參謀本部海軍々令部も陸海軍大臣もどうせ同じ穴の狸だから、權限の衝突などいふボロは出さぬに極つてゐる。故に實際の必要からいへば、此問題はどうでもいゝのだ。たゞ將來連帶制の原則が完全に成立し、武官專任制が廢され、其結果陸海軍大臣と彼等と必しも步調を一にし得なくなつた時、兩者の權限衝突の問題は起らないと限らない。此際我々の先づ念頭に置かざる可らざることは、國務大臣は輔弼の範圍内の事務については完全なる判斷の自由がなければならぬといふこと である。彼にもし或は右し或は左するの自由なくんば、何を以て輔弼の大任を盡すことが出來やう。さうすると此自由を完うせしむる爲には、參謀本部と海軍々令部とをして結局國務大臣に讓らしめなければならないと思ふ。

實際問題としては夫れ程の緊要ではないが、之も序に改むるなら、參謀本部と海軍々令部とは夫れ〳〵陸海軍大臣に隷屬する機關とすべきであると考へる。

○

制度の改革も必要だが、根本的には我々はもつと深く憲政の大義に徹底せねばならぬ 國務二分論の如き飛んでもない怪物の横行を許さぬ樣、國民と共にもつと心眼を開かねばならぬ。制度の改革は政治家によろしく賴まう。我々は別に大に憲政思想の啓蒙運動に從事したい。是れ亦一面に政治家の惰眠をさまして制度改革の急を悟らしむる所以でもある。考へて見れば日本はまだ啓蒙時代を去つて居ない。

犬養の軍備縮少論

室伏高信

一

議會や議會政治家の諸君の間にどういふ事件が起つても私たちはもうたゞ知らないでゐればそれですむようになつた。あの人たちが何ごとをしてもいゝ。またあの人たちの間に何ごとが起つてもいゝ。私たちは火事や泥棒の三面記事を讀むよりもほかの意味で新聞の議會記事を讀む氣にはどうしてもなれなくなつた。議會記事の出ない新聞が若し發行されたとしたら、私たちは第一番にその讀者となりたいような氣持ちでゐる。「犬養毅氏起つ！」と新聞の政治面に大げさな孫字線が引かれ　ところだ、そんな人が起つたつて起なくたつていゝじあないかといふ氣持しか起つてこない。またその起つた人が痟せこけた（思想的にも痟せこけた）犬養老人であつても、勇敢無双な中野寅吉氏であつても、それはたゞ踊りの上手下手の問題なのだ。またその人たちが政友會に屬してゐようが、憲政會にゐようが、若しくは衰殘の國民黨にゐようが、それはたゞ控室が違つてゐるといふだけのことなのだ。そうした人たちやその人たちの仲間を一所にして、貴族院と衆議院との八百からの頭が、時代錯誤といふものが世の中に存在してゐるのだといふことを觀客に證明して見せるために、毎日踊つたり跳ねたりしてきたのである。そしてそれがあんまり顯著になり過ぎて、無感覺な議員たちにさへぼんやりながらそれが意識させられるようになつてきた時に、議會にも煩悶が起つてくる。その煩悶は無論自分自身への内省ではない。あの人たちに自分自身を考へる餘裕などのあらう筈はないのである。しかし見物人が倦いてきて、木戸錢が上らなくなつてきた時に、興業師にも煩悶が起つてくる。その興業師の煩悶が今の議會に見えてきたのである。この意味からいつて今年の議會は興業師の煩悶の議會だといふことができるであらう。それが「獨立の生計」を飼る。それが減税案も急がせる。それが軍縮案の競技となる。私がこゝに書こうとしてゐる議會の所謂陸軍軍備縮小問題なるものは、私にはこうした意

義がありまたこうしただけの意義があるものだと思はれる。

二

議會では軍備縮小だと言ひ觸らしてゐる。政黨の幹部がそう言ひ出すと陣笠が手をたゝく。新聞がそう書き立てる。新聞を碌々讀むでないものには、どこかに軍備縮小の計劃なり、運動なりがあるように見えてゐる。しかし議會のどこに軍備縮小論があるだらう。政友會を代表した大岡氏に從へば、われ〲が軍備縮小しようとするのは國防の勢力を減小しようとするのではないのだと、「國防力」を減少しないで「軍備」を縮小するといふのだから大岡氏にとつては「古るい沿海州」以來の大發見であるだらう。犬養氏の演說速記を讀むで見てもそれと同じことなのである。この人によれば、この人の所謂陸軍軍備縮小とは決して「陸軍を呪ふ」ものではないのだといふことである。陸軍を呪はなくて陸軍を縮小するのだから、こゝにも矢張り「古るい沿海州」が發見されなくてはならないわけである。その「古るい沿海州」に新らしい名を附けて國民黨では「經濟的軍備」といつてゐるのである。政友會でも憲政會でもこういう特種な名前は附けてもゐないし、また國民黨ほどに具體的な立案も發表してはゐない(二月十五日まで)、大岡氏の演說筆記を讀むで見てもまた憲政會の代表者の演說筆記をのぞいて見ても、みな同樣に犬養式の新發見を心掛けてゐるらしいことは略想像のできることである。要するに政友會にしても、憲政會にしても、または國民黨にしても、國家の對內的及對外的防衛の必要を承認する。またその防衛力が昨日と今日と日本の國際地位が變化してもしなくても同一の程度であるべきことを承認する。そして國家の防衛の第一義が攻擊的防禦であることはこれ等の老猾な政治家たちのみな承知してゐるとは無論であるから、彼等の立場に從へば昨日も今日も、攻擊的防禦力において、日本は同一の勢力を用意してゐなければならないといふことになる。だから同一の軍備が必要だといふことになる。たゞその軍備を經濟的に維持しようとするまでのことである。犬養氏の言葉に從へば、彼れは決して陸軍を呪ふものではなくして「經濟的に精銳なる軍隊を造る」といふことである。「精銳なる軍隊」を造ておいてそして軍備縮小といふのである。私たちの言葉では「精銳なる軍隊」を造ることは軍備を充實したり、または擴張したりすることであるが、雄辯家の犬養氏に從へば、それが軍備縮小なのである。雄辯は、議會の雄辯は、英國の議會の警句のように、男を女とすることのほかに何ごともできる奇妙な魔力の持主であつたのである。

三

議會に現はれてゐる所謂軍備縮小とは、軍備の縮小ではなくては、軍備の制度換へなのである。それは無論常備軍の兵數なり、師團數なりを減少する計劃を伴つてはゐるが、同時に他の方法でもつてその不足した分だけの欠陥を補充もし、犬養氏の言葉に從へば戰時得員を減少する考は少しもないし、大岡氏に從へばそれは却つて全國民皆兵主義の理想を實現するためのものなのである。卽ち陸軍の縮小ではなくて制度換えなのである。また陸軍を縮小しようとするような考はこの人たちの頭には毛頭も存在してゐないことが分るのである。無論犬養氏の頭にはロシア帝國の陸軍力が崩壞したといふ事實は分つてゐるし、またその舊ロシア帝國の陸軍力が日本の假想敵であつて、それあるがために日本にこれまで尨大な陸軍力が必要であつたことをも承認してゐるのである。しかしそのロシア帝國の陸軍力が崩壞しても、そのために日本の陸軍の責任は犬養氏に從へば、決して輕くなつたのではない。假想敵を絕えず製造してゆくことは、資本主義の凡ての政治家にとつては、常に欠くべからざる必然なのである。少くとも世界が悉く自分のものにならない限り、またたつた一人でも階級意識に目ざめた「不心得」な勞働者が生存してゐる限り、假想敵國は後から後からと製造されなくてはならないのである。この必然の前に、犬養氏によつて新に發見された敵國、これも舊ロシアの尨大な陸軍力と同一程度に私たちの國日本を脅威してゐる假想敵は、「隣國の不安定」といふ新進の敵國なのである。隣國が不安定だから日本は平時編制二十二個師團に相當する國防力は何時でも備へてゐなくてはならないのである！　隣國の不安定なるものは、ロシア帝國の尨大であつた陸軍力と同じ程度に、日本の存在を脅威するといふのである！然り防衞である。防衞のための精銳な軍隊である。みながそういふ。カイゼルがそういふた。ザールがそういふた犬養氏がまたそういふた。朝鮮が日本の隣國であつた時は、それが不安定であるといふ理由で日本は大陸軍をもたなくてはならなかつた。朝鮮が日本に併合されると第二の隣國がまた不安定になつてきた。そしてそれからそれへと「不安定な隣國」が資本的軍國主義の隣りに現はれてくるのである。

四

國民黨の經濟的軍備論に比べると、政友會や憲政會の立場は尙ほ輪廓がぼんやりしてゐるのであるが、今日までの常備兵制度萬能論を奉ずるものは陸軍當局者のほかにはだん／＼なくなつてきたらしい。そしてそれに對して軍隊敎育の代りに新軍隊制、つまり犬養氏のいつてゐるように、市民としての青年に鐵砲を貸してやつたり、またはその他の市民に對する軍隊敎育の

方法によつて、軍隊の民間的教養をして行くつもりであるとも明らかになつてきた、それが犬養氏によると國民黨十年來の主張なのださうであるが、大岡氏によると世界大戰の新教訓ださうである。つまりナポレオン戰爭によつて徴兵制度が發見せられたやうに世界大戰によつて經濟的軍備論が發見されたといふのである。或はさうであるかも知れない。世界大戰は決して常備兵と常備兵の戰爭でもなかつたし、また豫後備と豫後備の戰爭でもなかつた。それは少くとも今後の戰爭には各國人口の二十五パーセントが戰爭に參加しうるものであることを教えたのである。だから日本の人口を假りに五千萬としても約一千二百五十萬人が戰爭に參加することのできるものであることを教えたのである。この教訓からいふと少數の訓練された兵士だけで戰爭をしようとすることの誤りであることは略想像ができるわけである。しかしそれは何れでも私たちに關係はない。それは軍備を撤廢したり、若しくは縮小したりする理想をもつてゐるものではなくて、たゞの方法論だからである。何れの方法が日本の資本主義を外にも内にも防衛するために適當かといふだけの問題だからである。だからかうした方法論なら軍事當局者に委せて置いてもいゝ筈である。(尤も大岡氏に從ふと世の中は變化して、科學が進歩してきたから、專門家の考では駄目だ、そこへ行くと民本政治は常識政治であるからそれの判斷に從ふ必要があるとのことであるが、「科學が進歩」して專門家が役に立たなくなつては軍事專門家に任せるわけには行くまい)

五

軍隊を市民化するといふこと、つまり市民軍(ミリシヤ)の理想は今日まで多くの民主主義者や社會主義者によつて考へられてきた。就中佛蘭西のヂヨウレスの「新軍隊論」は此點を最も明瞭に論じてきたものである。また端西では早くからこの制度が實行されてきてゐるのである。しかし今日の日本の議會に現はれてゐるものは軍隊の市民化ではない。軍隊の市民化はその根柢において防禦的でなければならない。それには少しでも侵略なり、若しくは侵略しうものを維持することとなりを考へてはならない。それは全然平和主義を前提とするものでなくてはならない。これが第一の條件である。第二には、それは軍隊の統制力を市民の手に移すものでなくてはならない。市民の手に統制力があつてこそそれは外交官なり、軍事的陰謀家なり、若しくは一部の所有階級に利用されないこととなるのである。從つてそれは侵略なりまたはその他の資本主義の目的に供せられない保障を得るのである。ところが國民黨案だといふと平和主義でもなければ、また軍隊の統制力を市民の手に移そうといふのでもな

い。それは軍隊の市民化または民主化ではなくて、たゞ一般の市民に軍隊教育を與へ、書物を讀んだり、遊んだりすることの代りに鐵砲をもたせるのであるから、それは立派に市民の軍隊化なのである。それは軍國主義への挑戰ではなくて文化的平和主義への挑戰である。それはまた軍隊を呪ふものではなくて、市民を呪ふものである。だから國民黨の經濟的軍備なるものは正眞正銘の軍國主義なのである。また國民黨に從へばその計劃の實行によつて年々軍費二千數百萬圓を減少することができるといふのであるが、これさへ何等の根據をもつてはゐない。何故なら、彼れは市民の軍隊教育に要する費用を一切計算してはゐないからである。

六

一切がだまかしである。議會に於ける一切の軍縮論が誤魔化しである、議會において議長の兩脇の大臣席が、…………委員會の場で、その下に控えてゐる各派の數百人がそれがための拍手の機關である以上、私たちは勿論これ以上のものを望もうとはしない。その間でもし見物人に儲けものがあつたとしたらそれは軍縮論でなくて、大岡氏の帷幄上奏非難論であつた。しかしそれさへも立消えであるとしたら、議會の所謂軍縮問題なるものからは鼠一疋だも出はしない。

社告

秋田忠義

本社の特派員として二ヶ年の豫定で獨逸に派遣することにした、尚秋田は三月十七日伊豫丸で出發する

改造社

愛國心の功過

バート

我國にて怒濤の如き歡呼を受けたる一代の巨人が直接我國民と語り、若くは本誌を通じて我國民に與へたる彼の理想、哲學

忽五版

ランド・ラッセル著

の鋭き迸りてある。本書にて論じたる所は總て我國民性、我國是を基礎として嚴密に批判されたもので他の群書とは全然類を異にす。殊に彼の「愛國心の功過」の如き我國民に空前の感激と自省とを與へ、官僚軍閥の徒をして顔色なからしめし一大論策であつたことは今尚世人の記憶に新たなる所である。我社は茲に此世界的大思想家の來朝を記念せんがために敢て此一書を江湖に薦む。

定價壹圓八拾錢◇東京芝櫻田備前町
送料六拾錢◇振替東京八四〇二

改造社

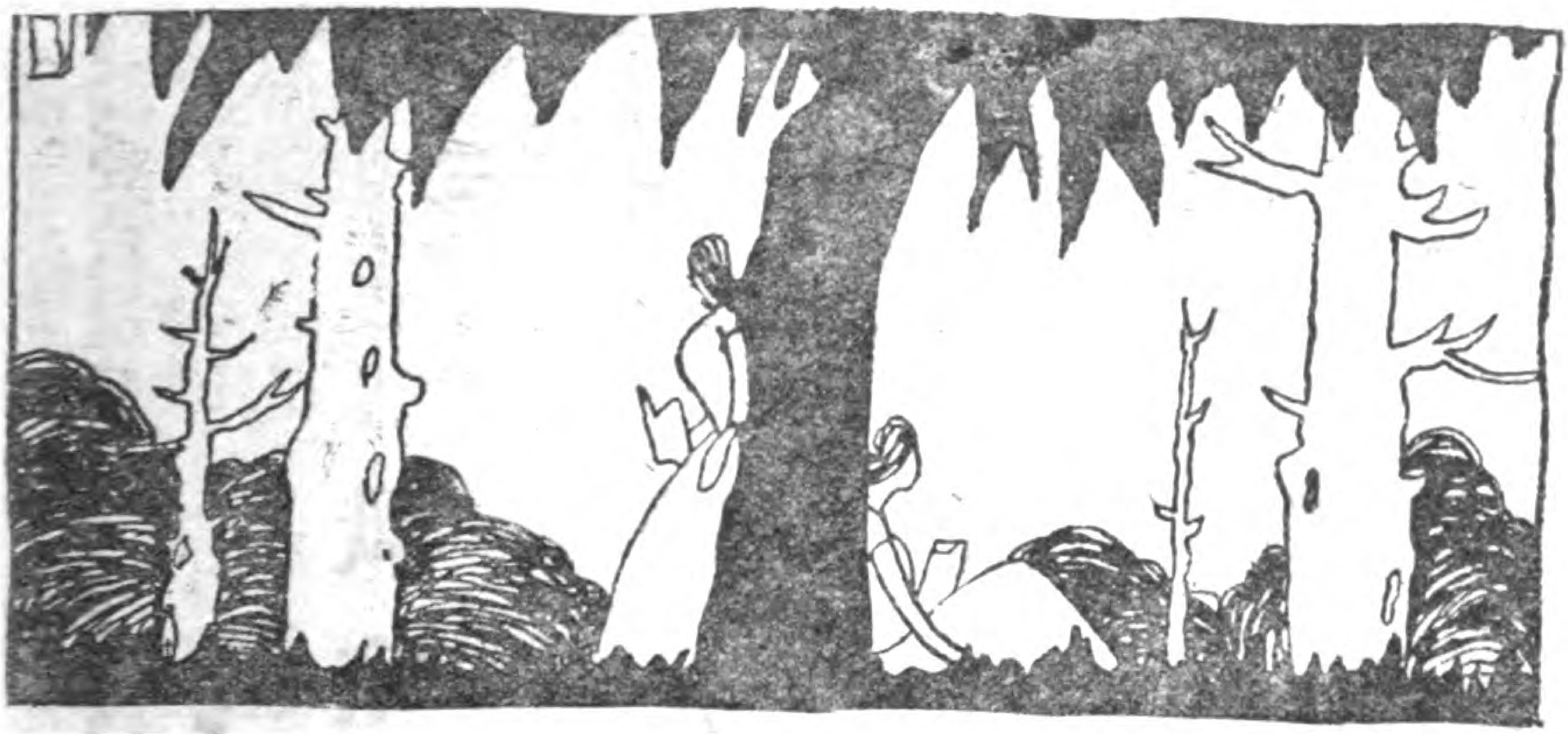
三月號創作

獄室の暗影　尾崎士郎

暗夜行路　志賀直哉

或る男　武者小路實篤

青い花　谷崎潤一郎



獄室の暗影

―ある死刑囚よりその若き友へ―

尾崎士郎

一

五月十一日（第一信）

此處へ來てから知らぬ間に一月が經つてしまつた。君のところへ手紙を出さうと思つてゐながらも、昨日までは接見通信が禁示されてゐたので出すとができなかつた。今日になつてやうやう通信の禁が解除された。――さて飛びたつやうな思ひで萬年筆を握つてはみたもの丶何からさきに書いてよいのかわけがわからぬ。かういふせつぱつまつた氣持の中に置かれてみると、はじめてわれわれの持つてゐる言葉の出鱈目が沁々と胸に應える。私はいま可成り落ちついてゐる。『落ちつく』といふ言葉は尠くともいまの私の氣持を言表はすに一番適當らしい言葉だ。私の心は絕えず動いてゐるのだ。そして引ききりなしに脅やかされてゐるのだ。それだのにどつしりとした深い『落ちつき』の上に立つてゐるといふよりほかに言ひやうがない。それは私の三十餘年の生涯からこぼれ落ちた血腥いあらゆる苦惱と恐怖と絕望とを

これまぜた礫土の上につくり上げられたもどかしい『落ちつき』である。——しかしかういふ言葉も決して私のほんとうの氣持をそのまゝに言ひ表はしてはゐないやうだ。結局より少い誇張か、それでなければより多い誇張かを持たなければならなくされてゐる私達には瞬間に移つてゆく氣持をそのまゝぴつたりと握るための言葉は用意されてゐないのだ。かういふ氣持ちで手紙を書かうとするときに一層この哀感を深くする。

現世からあまり多くの執着を失てしまつてゐる——いや失はなければならなくされてゐる今の私にとつては『カムレード』と呼びかける…………諸君とはあまり話をしたくない。そして恁うした重苦しさの中にうごめいてゐる今の私にとつて、弱々しい氣魂と肉體とを蝸牛のやうに小さい殼の中に引こませて、常に運命のおそろしい偶然から逃れ出ることにあせりぬいてでもゐるかのやうに、涙ぐんだ優さしい眼をあげてたえず私の方を見てゐるやうに思はれる君を見出すことは言ひやうのないほど、さびしいうれしさの一つであるのだ。私はこれから私の使用する言葉の許す範圍内で私のこの呪はれた生活——それは何時まで續くのかわからないが——の上を去來する氣持をありのまゝに報告しやうと思ふ、私の持てゐる醜くさ汚らはしさをそのまゝ、底の底まで知りぬいた上で私を愛し尊敬してくれてゐるやうに思はれる君にとつても、そして私の今度の事件によつてかぎりなく驚き悩まされてゐるに違ひない君にとつても、私の手紙は大きな慰安の一つとなるやうな氣がする。

私の愛する友よ——まつたく無心にかういふ氣持で呼びかけたい——私は君にあてる手紙の中では今度の事件についての報告は一字一句も書かないことにする。それは、書くことを許されてゐない、といふよりも寧ろ今の私にとつて、そして勿論君にとつて——全然興味のないことに違ひないから。

私のゐる獄室の前の板塀の上の鎧戸を通して青葉若葉に包まれた大きな榎の樹梢が見える。ときどきそのすき通るやうな葉裏が日の光に反射してきらきらと燃えてゐるのが見える。ぢつとそれを眺めてゐると私といふものゝ存在のすべてがその中にとろけこんでしまふのではないかと思はれるほどである。

私は前に『落ちついてゐる』と書いた。そうだ。たしかにその通りた。私はたしかに落ちついてゐる。けれどもこの

落ちつきは、おそらくは私と同じ位の年輩の囚徒——彼等がいかなる罪名を擔て獄に下つてゐるのであつても宜い——が共通に持つべく餘儀なくされる落ちつきである。人生の坂道の大半を登り盡してしまつた彼等そしてわれ等にとつては將來に對する憧れは決して二十代の若い人々が感ずるほど大きなものでもなければ、またそれほど直接に鋭くは迫てこないのだ。從て若い何人もが感ずるであらう底暗い物狂はしさとくらべてみれば全く同列に置くことのできないほど稀薄な哀感に襲はれるだけである。——それだけに人生に對する運命的な絶望感が極めて容易にやつてくる。宿命の波の間を風にまかせて轉がつてゆく自分自身をぢつとみつめてゐるうちに、むしろ心の底の方から和かな新らしい強い力がぐんぐんと成長してくるやうな明るい快よさの中にひたり入ることができる。けれども頭が一度びぐるりと過去の世界に向きをかへるときまつたくどう處分してよいのかわけのわからないじめじめした遣瀬なさが私の胸を力一ぱいだきしめる。それはいくら逃れや、ともがいても、いやもがけばもがくほど一層深く陷つてゆく穽である。憶ひ出の美くしさ、嚴かさを飽くほど湛へ入れた暗い穽である。

さてこれから私といふ人間に與へられた生涯の殘された部分がいかに取扱はれるのであらうか。黑い手が私の胸元をぎゆつとつかんで離さないかぎりいくらもがいても、考へても結局同じことだ。そして私といふ人間の存在がどうならうとかうならうと全體としての人類にとつては水の泡がつぶれたといふよりほかに何の意義があらう。泡は消えてもまたあとからあとから新らしい泡が生れてくる。

若しかりに私がこのまゝ永久にこの監獄の中から出ることができないにしても、誰が私と同じ苦しみに泣き私と同じ悶えに脅やかされるであらうか。——かう考へれば考へるほど、宿命論の魅惑に引ずりこまれる。遺傳の因と境遇の縁とで作りあげられる運命といふおそろしい力の前には、燃えるやうな熱情も意志もすべてが卵子の殼の如くに粉粹される。——時に私の頭の中には、かういふ生活に投げ入れられて、唸つたり、脅やかされたりしてゐる私自身を冷やかな眼で嘲笑してゐる別の私自身が頭を擡げることがある。あゝ考へてみると私も何時のまにか年をとつたものだ。死生長夜夢、榮辱大團圓——今度の事件でぶちこまれた私と同じ…………の身の上が絶えず頭の中を閃いては過ぎる。そ

の中で吉村だとか小原だとかいふ。まだ二十代をやつと越えたばかりの人々このとを考へるとを胸かきむしられるやうな思ひがある。これから若々しい人生の享樂に抱かれやうとする彼等にとつてこの思ひも設けない新らしい境涯は何といふむごたらしいことであらう。一列にならんだ鐵戸を洩れる同じ五月の空の色も彼等にとつては何といふ暗澹たる遣瀬なさであらう。吉村——あの詩人的な熱情を多量に持つてゐたそして輕卒に昂奮する美くしい青年を君は覺えてゐる筈だ——にはたしか、彼の從妹にあたる娘でずつと早くから相思の仲になつてゐた同じ位の年輩の女がゐた筈だ。この前の公判の日法廷でちらりと彼の顏を見たとき、思ひなしか知れないが憂悶の中にとろけこんだやうな彼の眼の色が怨めしそうに輝いてゐるのが淋しかつた。けれども、かういふ情景ですら私には何だか芝居でも見てゐるときに感ずるやうな魅惑的な興味がある。このごろは毎日碧巌錄を讀む。碧巌錄は私にとつてはうれしい書物の一つである。いろいろなことをかきたいと思ふ心にせめたてられて何だか結局わけのわからぬことを書いてしまつた。——しかし人間といふやつは何處まで圖にのるのかわからない動物だ。手紙の中でこんな太平樂を竝べてゐながらも心の底の方からは絶えず不安の燈明が仄白い光を見せる。

いま喰べたばかりの麥六分豆三分米一分の晝飯が腹の中でごろごろしてゐる。　早々。

六月一日（第二信）

公判や何や彼やでまたしばらくいそがしかつた。いよいよ今日から六月だ。六月と言へば去年のいまごろのことを思ひだす。村上や岸や相良等の同志といつしよに北陸地方の遊説に出かけたのはちやうどいまごろだ。その村上も岸も僕が此處へくる二月ほど前から千葉縣の別莊の方へ幽閉されてしまつた。考へてみればその方が彼等にとつては幸福であつたかも知れない。何となれば、若し彼等が世の中の明るみの中にゐたら僕と同じ運命の波にさらわれてしまつたにきまつてゐるから。しかし、どつちにしても淋しいことだ。そしてどう考へたつて…………………………………………僕等にとつては屈辱である。そういふことを知りながらも、そーて今度こそは今度こそはと思ひながらも、いざ法廷

に立つときまつてできるだけ輕くなつてくれれば宜いといふさもしい根性が針で突くやうにぴりぴりと頭を擡げては私の勇氣を鈍らすのだ。――若し判事が『君がAなりBなりの罪狀についてありのまゝのことを語れば君は無罪にする』といふやうな唆のかし言葉を投げかけるやうなことがあるとき、よし……の中の誰でもがその言葉に從はないまでも、誰がおそろしい動搖をすらも胸の中に感じないと斷言することが出來やう。…………

……………………………………………………

……………………………………………………

……………………………………………………

……………………………………………………

……………………………………………………

……………………………………………………

……………………………………………………

…………。――

今朝瞰鐵窓に射し、夏懐逝りに動く。かうやつて坐つてゐるのも、もどかしいほど暑い。

昨日吉村が便所へゆく道すがらに私の獄室の前を通るとき、鋭い眼でぢろりと私い方をきつと睨んで目禮して通り過ぎた。若々しい美くしさの張りつめるやうに漲つてゐた彼の頬には痛々しい髯が伸びてゐた。

もし二十年も三十年もこのまゝに投げこまれてゐたらどうであらうか。戀人を殘し兩親を殘してこの薄暗い牢屋の中で老ひ朽ちてゆく若い幾くつもの生命のことに思ひ及ぶと全く胸の中が煮えくりかへるやうだ。

運命よ、どうぞ彼等を踏みつけた足をいま少しゆるめてくれ。そうしてその重みをこの私の背中の上に思ふ存分のせかけてくれ。――私は人間の力の弱さを思ふとたまらなくなる。約半月君に通信を怠つてゐる間に大分私の氣持の上にも目まぐるしいほどの變化があつた。今日は妙に去年の遊戲のことが懐ひだされる。そしてあの頃のうれしい懐ひ出に耽るとき私の頭の中には相良の面影だけがぼんやりと大きく殘される。相良が死んでから最早半年以上になる。內面的

な苦しみを少しも知らずに生涯を……のために捧げてきた男だけに違つた意味でなつかしい味が深い。人を見れば眞向から罵倒するのを商賣のやうにしてゐた彼のあの狼のやうな口もとが思ひだされる。彼が死ぬ二三日前私と岸と二人で彼の病床を見舞つたことがあつた。私達が彼の前に坐るといままでぐつすり眠つてゐたらしい彼は痩せ衰へた顔に薄氣味惡い眼だけぎよろつかせながらさもおどろいたやうに顚狂な聲を張上げて『大分宜いです。最早大丈夫です』と言ひながら上半身を起こそうとした。それを岸が押えるやうにして『まあそのまゝで。そのまゝで』と言ひながら無理に寢かせやうとすると、彼は急に頬ぺたをぷつと大きくふくらませたかと思ふが早いか疊の上へ大きな血の塊を吐きだした。――その三日ばかり前相良の妻君には醫者から彼の死についての宣告があつたのだ。

そうして彼はぐつたり俯いたまゝ寢入つてしまつた。けれども彼はまだ私達とくらべてみれば遙かに幸福であつたやうに思はれる。……としての悲愴な氣持がその最後の日まで持ち續けた彼は、まだそういふ夢をぢつと抱いて死ぬことができただけでも幸福であるといふことができる。――『あの低腦兒が――』と時々彼について不快な憤りを持つことがあつた。その彼もいまとなつてみればたえられぬほどなつかしい人の一人である。

私の愛する友よ――私が此處から君に送る手紙は畢竟するに引かれ者の小唄である。私の今後はたゞ運命に任すよりほかに仕方がない。昨夜月がばかに良かつた。獄室の中に三角形の陰影をいくつもこしらえて射しこんでくる月の光に照らされながら淋しい憶ひ出にひたり入つた。田村と訣れた湯ケ原の夜のこと、二十四五の頃だますやうにして捨てゝしまつた女のこと、――そうしていま私の胸に燃えつゝある新らしい戀の火（それについては新らしい報告を君にしなければならない。それは大體君にも想像がつく筈だ。けれども、何といふ冷めたい、石のやうにかたい戀であらう。）いろいろな昔の憶ひ出が私の頭の中で明滅した。

完膚無きまでに創痍を受けて、極惡非道の罪名をさらしてゐる私の心の中にも糸のやうに淋しい戀が細々と成長しつゝあるのだ。窓の外を白雲の去來するのが見える。夏が空一ぱいに燃えてゐるので。切に君の自愛を祈る。　草々

六月十日、(第三信)

昨日公判から歸て間もなく君の手紙を受取つた。…………………………這入てゆきつゝある君の氣持はかなり私にも理解ができる。けれども君自身のいふやうにそういふ感情の上の問題はすべて君の弱々しい身體が原因するのでは無いだらうか。私にとつては素よりそんなことはどつちでも宜いことなのだが、たとえば君が極端な帝國主義者であつたつて私は少しも恐れないし驚ろきもしない。たゞ私にとつて考へられる君の重要さは、私が死ぬ日まで靜かに話しかけることのできる友人として生きてゐてくれることだけだ。

それは兎に角として、私の戀愛事件が大分君に興味を起こさせたやうだ。しばらくこの事件の進展について話しかけることにしよう。

何しろ戀とか何とかいつたつて四角四面の壁にかこまれてゐる中で芽を萠いてゐる戀がどんな內容のものかといふ位のことは君にもわかるだらうと思ふ。そうして私にとつてもそれは僅かに幻影として生きてゐるに過ぎない。——君のお察しの通り私のまぼろしの中で輝いてゐる偶像は………………たつた一人の女性であるKである。世間の奴等はおそらく私とKとの關係について許すべからざる想像をしてゐるだらうと思ふ。そんなことはもとより問題でない。それよりもKについてはもつと詳しい說明をしておく必要がある。Kは正しい意味において村上の妻である。さうして私がはじめて彼を知つたのは言ふまでもなく村上の妻としてゞある。(しかし彼等の關係をもつと率直に言へば夫婦といふよりも寧ろ深い理解の上に立つた友人といつた方が適當である)そして、私が彼女を始めて見たその日から私の心の中には靜かな戀がやわらかに伸びはじめたのだ。そうして、その戀はいまも猶同じ速度で伸びつつある。—かういふ私の氣持に對して悖倫と呼ぶ者があるならば私は喜こんでその屈辱に甘んじやう。只私の戀について知る者は私だけである。どうぞ私をしてから語ることを許さしめよ。——絶えず幻影の誘惑に引込まれながら生きてゐる私にとつてはまぼろしの中にのみ久遠の女性がある。そうして會々その久遠の女性を追ふために現實に生きてゐる何人かの形を透すことがあつたとしても、それは究極において決して現實の女それ自體ではない。私がKに戀してゐるといふことはたゞK

を透して全く別個の理想化されたる、ある久遠の女性（その言葉についても説明を加へたいが面倒だから省く）に憧れてゐるといふだけのことである。かういふ私の心理の上を掩ふ神秘的な現象について私は未だ何人にも語つたことがなかつた。この同じ氣持の中に生きることのできない人間に語つたとて何の益があらう。Kが私にとつて離るゝことのできない戀人であるといふことの説明は君の前にはこれだけで充分であらう。そのKはいま私と同じ監獄の中にゐる。そこにも人間の力でどうすることもできない運命の神秘な手が働いてゐるやうな氣がする。かう書いてゐるうちに私の頭の中には村上とKと私と三人で修善寺で過ごした二三年前の秋の一夜のことが甦てきた。おそろしい勢で甦てきた。

斷崖に臨んだ宿屋の二階の座敷に私達三人は火桶をかこみながら坐てゐた。時々岩に激して流れる溪流の潺湲たる響が黄昏の底を運ふやうに淋しい遣瀬なさを運んできた。電燈が點くと室の外が急に暗くなつて絹糸のやうに音もなく降つてゐる雨の色が夕闇に白く輝やいて見えた。對岸の岩を縫ふて點綴してゐる紅葉の濡葉が夜目にも黑く揺れてゐるのが惱ましかつた。

食卓の上には酒があつた。私は盃の縁を甜めるやうにしてちびりちびりと味はひながら飲んでゐた。若い村上は充血したやうに燃えてゐる眼をあげて頻りに××黨の軟派を罵倒した。その言葉がいまでも頭の中にはつきり殘つてゐる。

『――昔々の運動を……………の摸倣だと言つて非難する奴の横面を片端しからなぐりつけてやりたい氣がします。…
……………………………………。――…………、…………
………………………………………………』

村上は鋭い言葉で早口に饒舌りながら、いかにも胸の中に充ちてくる昂奮をもてあましてゐるとでもいつたやうに、慌たゞしく立上て、雨のしぶきで濡れてゐる欄に凭たれるやうに身を寄せた。そのときKがうつむいてゐた顔を上げて、ちらりと盗むやうに私の方を見た。そのときの眼の輝きを私はいまでも忘れることができない。それは私が今までに見た女の眼の中で最も美しい眼であつた。その冷やかな黑い瞳の中には理智と聰明と情熱とが燃えてゐた。……

……勇氣と瞻才とを存分に具備した彼女は、同時に美の精髓であつた。――そして私の眼が鋭く彼女を見返した

とき、彼女の瞳が異樣の濕ひを湛えて光つた。その一瞬間に私達の間には萬事が慌たゞしく通りすぎた。それは言ひやうのない底深い理解である。しかし暗い淋しさであつた。私達の生活を遮ぎつた Spiritual inter course はたゞこの一瞬間で終つた。若しこのまゝ私達ちが永久に別れ去つたとしても彼女は私の生くる日のかぎり私の心の中に生きてゐるにちがひない。ここまで書いてくると私の頭の中には今度の事件を說明したい氣持が一ぱいになつてくる…………
……………………………………………。

とにかく今私とKとは同じ棟の中に生きてゐる。Kは二十八で私は三十九だ。――そうしてKの愛人である村上は二十五の若々しい悶えをぎつしりとはち切れるやうな肉に包んだまゝ千葉の監獄の中で悲憤慷慨してゐる。何といふむごたらしい運命の遊戲であらうか。この前に田村が面會に來たときの話によると世間の奴等は私とKとの間にある猥らがましい關係のあつたといふことをさへも傳へてゐるといふことだ。どつちでも勝手にするが宜い。兇賊と毒婦――まつたくそのとほりだ。「極惡非道なる××はその門下生の妻を奪ひ――」などゝ低脳新聞記者の書きつけた文字が見えるやうだ。何がさて、叫んでも喚めいてもこの垣一重が黒鐵（かね）だからあきらめるよりほかに仕方がない。　早々。

追伸――醉古堂劍掃といふ本を何處かから借りるか探すかして田村のところへ送つてくれ給へ。本の差入れはすべて彼にたのむことにしてゐるから。　早々。

二

六月十八日（第四信）

君の手紙にすつかり慰められた。一體運命は俺をどうしやうといふつもりなのか。十日あまり未決の檻の中へ身動きのとれないまでにねぢこまれたまゝ何の通告も無い。たゞ接見の禁が解かれただけに二日に一人位の平均で面會人と話ができるくらいのものだ。それも會ひたくてたまらない奴が來ずに何時も來ても來なくても宜いやうな男だけがやつてくる。會つたつて格別話すこともない。何しろ事件の内容に亘つての話は一切嚴禁されてゐるのだから話すことのある

筈が無い。やつぱり毎日の一番重要な日課は空想と憶ひ出だ。今日ふと何の氣なしに親しい友人の顏をいろいろに思ひ泛べてみた。いままで何の氣もつかずにゐたのだが。この二三年の間にかなり好きだつた奴が四五人ばたばたと死んでゐる。

人間の運命の儚なさが今更のやうに身に應える。君の趣味とはいさゝか時代を異にしてゐるが近作を一つお目にかける。

卅年剔盡讀書燈、今日空餌病骨稜、石壁天高親億鶻、鐵窓風冷憫飢蠅、幽居恰似山中寺、趺坐自疑物外僧、偏喜人情隨處見、於吾獄吏亦親朋、

七月三日（第五信）

先日は繪はがきありがとう。君を抱えてゐる周圍の自然が迫つてくるやうな氣がする。此間の公判にはわざわざ山谷から出京してくれたよし、全く感謝に堪えない。傍聽禁止になつたのがさぞ殘念たつたらうとお察しする。けれども、ありていに言へば傍聽禁止になつた方が此方にはかへつて幸福（しあはせ）だつた。疲勞困憊して殆んど正氣を失つてしまつた…………の痛ましい姿をお目にかけたら、餘りにお座がさめすぎる。――いやそう言ふ私自身がそばから見たらさぞ見苦しいほど慘めであつたらうと思ふ。――けれども、若い人々の多くが全く醜いほど悄氣切てしまつたのも無理のないことだ。ぐんぐん胸の中に生ひさがりつゝあるはちきれそうな性慾の悶えをそのまゝ無理に壓えつけられて、血も肉も共に闇黒の洞穴の中に封じ込まれてしまつた彼等が『ぬけがら』のやうな力の拔けた遣瀨なさにぐつたりしてしまふのは止むを得ないことだ。彼等のうちの誰がいま、かういう境涯の事に自分の眞の幸福を見出してゐるであらうか。………………………………………。おそらく彼等の中には事件そのものゝ實體が何であるかといふことをすらも知らない人々がゐるに違ひない。そういふ人々にとつてはすべてが夢である。――かういふ運命の星の下に生れ合はせたのだと觀念して貰ふよりほかに仕方が無い。若し私一人の生命を奪ふことが…………か

すことになるならば、私はいつでも生命を投げ出す用意をしてゐる。私にとつてはいま死ぬといふことに何等の悔もない。病母のこと、妻のこと、――そのほか愛悶の種は掘れば掘るほど出てくるものゝ、若い人々の苦しさと比べてみれば物の數にもならぬ。私も最早三十九だ。三十にして……となつた私は幸にして卑怯者といふ譏りだけは免れることができる。……………………………私は大抵思ふことを思ふ通りにやつてきた。いまに及んで何の悔ゆるところがあらう。

愛する友よ――いよいよ萬象は夏を迎へた。獄室の夏の夕暮はわけてもどす黒い物悲しさにせめたてられる。少年の頃、土佐の山奥から笈を負ふてはるばると江島良山先生の門を訪れた昔が偲びだされる。その頃生きてゐた先輩は殆んどすべてをあげて死んでしまつた。蟬の聲が私の心に食ひ入るやうにひゞく。

早々頓首。

七月一日（第六信）

このごろは毎晩鐵戸を洩れて眺められる星をぢつとみつめることを樂しみにしてゐる。青く澄みきつた夏の夜の空に一種幽厳な色を湛えて輝いてゐる星を仰ぐとき、心からその前に膝間づきたいやうなすつきりした氣持になる。この無邊際の空間を運行する淨らかな星の冷やかな瞬きを眺め入てゐると、自然に何も彼もがその中に吸ひこまれてゆくやうな心持ちが生れてくる。――おゝ星よ！と呼びかけたい氣持で一ぱいになる。私と同じやうな心を抱いて星の瞬きに涙を流した……がどんなに澤山あつたことであらう。その神秘にして端正なる輝やきは生きてゐるものゝやうにさえ思はれる。おゝ星よ―お前は何も彼も知てゐる。お前のみは人事の變遷を――その變遷の底に働いてゐる理法をすつかり知り悉してゐるのだ。――暗い獄室の中からこの大空の一部に輝く星を瞶めるとき全く心から祈りたい氣持が湧いてくる。何だか妙にじめつぽいことを書いてしまつた。監獄の中にぶちこまれると時々かういふセンティメンタリズムが芽を出してくる。こんな氣持はもう十年も前に疾くに捨てゝきた筈なのだが。私の戀愛事件（ラブ・アフエイア）は心の中で一日ごとに進展

してゆく。Kのまぼろしは私の胸の中で段々大きく、はつきりと成長してゆく。二三日前豫審廷に呼び出された歸りと見えて、小さい身體を半分ほど掩ひつくすやうな編笠をかぶつたKが看守に引かれながら私の室の前を通つた。通りすぎるとき、いそいで背伸びをするやうにして獄室の中を覗きこみながら輕い微笑を洩らした。私には彼の横顔が荒い編笠の目を通してはつきり見えたが彼には私の顔は見えなかつたらしい。彼女が想像したほどやつれてゐないといふことが私を非常にうれしくした。彼女が通りすぎたあと、私は全身が輕い顫動に包まれるほど力一ぱいに彼女のまぼろしをだきしめた。

時として私はまぼろしの中の彼女と話を交すことさへある。——夜おそく彼女が私のそばに忍びこんでくる。

『——あゝあなた、何といふさびしい私達ちでせう。でも私は幸福ですわ。かうやつてあなたの胸に抱かれて死ぬことができるんですもの——』まぼろしの中の女が言ふ。

『いや、これが吾々に與へられた運命なのだ。しかし、今となつては運命のいかなる惡戯もあなたを私の手から奪ふことはできないのだ』——まぼろしの中の私がかう答へる。そうして、火の燃えあがるやうにどよめく彼女の心臟の血潮が私の心臟の中に流れこむ。涙に濕つた眼と眼、唇と唇、——このたよりない淋しい法悅の中に私の全存在がとろけただれるのだ。そうして彼女が音もなく消えてしまふと、じめじめした薄氣味のわるい淋しさがいつの間にか私をつかまえてしまふ。ぼうつとして頭の中がこね返されたやうにぐるぐる廻りはじめるとやがて闇の中から彫像のやうな村上の悲しそうな顔が現はれる。——毎晩が大抵かういふ氣持を繰返しながら過ごされる。『まぼろし』などといふことが君には全然出たらめのことのやうに思はれるであらう。

けれども、私の心の中にはたしかにKのまぼろしが生きてゐる。

今日は半日詩作に耽つた。漢詩といふやつはどう考へてもミリタリズムの附錄だね。鬪爭的精神を強く謳つたものであればあるほど詩としての餘韻が長い。あと三日の後公判續行、辯護士の辯論ある筈。

七月二十日（第七信）

一昨日郷里から母が突然上京して面會にきてくれた。わざと意地張つてはゐるものゝ何處となく老衰へた顔の中に漂つてゐる名狀し難い淋しさを見出したときには思はず胸がかきむしられるやうに顫えた。母は私の顔を見ると莞爾りと笑つて殊更元氣らしい風を裝ほつてゐるやうであつた。その苦しそうな顔を見ると私は何を言つてよいのか分らなくなつてしまつた。

『からだはどうだい？』力のこもつた聲で母が言つた。語尾がかすかに顫えてゐた。

『えゝ私よりもお母さんが――』私はあとの言葉を續けることができなかつた。

『もうこれでお目にかゝることはできないかもしれません』――それは私の腹の底から押し出されるやうに叫びだした言葉であつた。

『そう思つてきたのだよ。何しろからだによく氣をおつけ』おつかぶせるやうに言つた母の言葉には厳肅な重みがあつた。歸るとき彼女は『しつかりしてね』と同じ言葉を繰返すやうに呟やきながら出ていつた。其うしろ姿が悲しかつた。私は子供の頃彼女が自分の居間の片隅で泣き倒れてゐるのを見たことがある。何故泣いたのかわからなかつた。そのときの有樣が歷々と頭にうかんできた。彼女はどんな悲しいことがあつても、決して人の前では一滴の涙もこぼさない女であつた。それだけに悲しさを胸に詰め湛えた彼女の苦しみは想像以上であつた。――私は獄室へかへつてからでも彼女のうしろ姿が頭から消えなかつた。長い一生を人間としての享樂を一切犧牲にして私のやうな極惡非道の人間の成長に奉仕してくれたのだ。彼女が私の父の家に嫁したのは十七のときである。そして三十三のとき彼女はもう若後家としての生涯を始めなければならなかつた。それから四十年間彼女は石のやうな心を抱いていろいろな誘惑と戰つてきたのだ。そうして育てあげた子供が家名を穢したばかりか、ことによると監獄の中で一生を終へなければならないやうな運命に見舞はれてゐるといふことなぞはおそらく夢にも思はなかつたことであらう。哀れなる彼女の殘りの生涯の上に投げ與へられるものはたゞ『……』といふ屈辱ばかりだ。（君も一度か二度僕の母に會つたことがある筈だ。）そ

して私達の運動について殆ど皮相な理解しか持つてゐない私の母の胸には拙劣な新聞記事がかなり強い刺戟の材料になるであらう。社會的名譽を尊重する彼女の心を私の母であるといふことそれ自體が、いまにおいてはいかに苦しめ悩げ苛んでゐることであらうかと思ふとたまらない。私は母のために幸福多からんことを祈る。あゝしかし彼女の幸福は一體何處にあるのか、彼女が四十年間一生懸命になつて追ひ求めた幸福は私といつしよにこの薄暗い牢屋の中に幽閉せられてゐる。もう書くのが厭になつた。時節柄御自重を祈る。

三

八月十五日（第八信）

しばらく、事件に關する要件の手紙に追廻されたり、遺族についてのいろいろ面倒な問題にぶつかつたりしてゆつくり君に宛てゝ手紙を書くひまがなかつた。知らぬ間に監獄の窓の外には秋が忍びよつて來た。日ぐらしの聲が衰へてゆく夏をかなしむやうに聞えてくる。もう朝夕の風が多少冷やかな初秋の感じを運んでくるやうにさへなつた。

數日前、豫審廷で吉村が卒倒したといふことをきいた。――さもあらう。彼等はいまいかに自分の輕忽と不用意とを悔いてゐることであらうか。思へば思ふほど運命の慘虐が呪はしくなる。

かうやつて私には話しかける友人もあり、面會に來てくれる人々もあり、よし時候見舞程度のものに過ぎないにしても手紙がときどきやつてくるが、……………の人々の中にはこの半年近い長い時日の間に、たゞの一回も面會はおろか、手紙を貰つたことも無い人があるに違ひない。半宵夢を破られては子供の面影に思入つて泣く人もあるにちがひない。私の女房がいままで監獄の中の生活についていろいろな世話をしてゐたのであるが四五日前に突然萬事の世話を斷つて來た。（彼女は私の下獄と同時に實家の方へ歸つてゐたのだ）――何だか妙にくすぐられるやうな淋しさに襲はれたが、こんなこと位は……の與へられた運命としてはあまりにやさしすぎる。胸の中を複雑な感情が絡み合つて通り過ぎはするものゝ結局彼女自身の自由にするよりほかに仕方はあるまい。

別に事情などを細々ときく必要もないし、またきいたつてしやうがない。——一日毎にKの前にひれ伏したい思ひが泉のやうに湧きあがつてくる。法廷などに立つたときのあの女の毅然たる態度には全く涙のこぼれるほど強い感謝の心が起こる。あの女の持つてゐる底深いえらさはやがてほんとに後に來る若い人々の胸に生きるときがくるであらう。私の心は段々彼女の魂の中に引ずりこまれてゆく。彼女の魂の中にのみ私の追ひ求めて止まない……………偉い心情が輝いてゐる。何といふかたいそして冷めたい氷のやうな彼女の意志であらう。その彼女の偉大と複雜とにくらぶれば何といふ私の單純な小ささであらう。彼女は恐ろしいほど強い力を握つてゐる。

おそらく、いま吾々……………つなぎになつて斷頭臺上にのぼるの日があるとするも彼女ばかりは、さうだ、ただ一人彼女のみはその晴れやかな輝やかしい眼をあげて、明るい和らいだ氣持を保つたまゝ死んでゆくことができるであらう。——半年以上もかうやつてゐると自然と看守や雜役夫なぞと仲がよくなる。しかし囚人根性といふものは愚なもので彼等の顏を見ると、言ふまいと、思つてゐても、知らず知らずおべつかが口の端にのぼつてくる。——あの男もあんな身體でよく持ちこたえてゐるものだと友人たちの間では噂にのぼつてゐるさうだが死ぬどころかますますはつきり生きてゐる自分ながら悪運の强いのにはたゞ驚きあきれるばかりだ。四五日前の手紙によると田村がだいぶ身體が惡いさうだ。いよいよ放蕩無頼の生活に結末をつけるときが來たのらしい。何だかあの男の弱りぬいてゐる様子が眼に見えるやうな氣がする。あの男とはこの前、面會所で會つたのが生別をかねた死別となるやうな氣がする。あの若い頃すつきりとした美少年だつた彼が、蒼白く痩せた顏に世を怨むやうな淋しい眼をきよろつかせて一足歩むごとにきりつと眉を釣上げながらのたりのたりと歩いてゐる姿が頭に浮んでくる。同志の間には彼のことを警察の犬だとか何とか言つてゐる人々があるさうだけれどもあの臆病者にどうし そんな大それたことができるものか。もしまた彼が無理に訊問せられて思はず何事かを饒舌つてしまつたとしてもそれだけのことで彼を犬呼ばはりするのはあまりに慘酷すぎる。彼が知つてゐる程度のことなら用意周到の官憲は疾くに知り悉してゐる筈だ、あの口惜しがりやの男には少しでもさういふ噂を立てられることがどんなに悲しからうと坐ろに思ひやる。この頃は主として新らしい生物學の本を讀んでゐる

學問に對する慾望が今になつてほんとうに心の中に燃えはじめた。朝に道を聞いて夕に死すとも可なりといふ言葉がどん底からわかるやうな氣がする。——

書きたいことがだいぶたまつてゐるのだが、どうも思ふやうに書けない。　草々

九月一日（第九信）

一日ごとに蟬の聲がさびれてくる。君にお知らせすべきことが大分たまつてきた。漸く絶對の深淵がわれわれの前にせまつてきたやうな氣がする。昨日看守から吉村が病監で發狂したといふことをきかされた。あの善良な青年が最後に與へられた運命の到着點としてそれはあまりにいたましすぎる。看守の語るところによれば、彼の母が一ケ月ほど前に漸く十二になつたばかりの彼の弟を置いてきぼりにしたまゝ何とかいふ活版職工といつしよに逃げてしまつたといふことをきかされたことが、彼の頭に恐ろしい刺戟を與へたのだといふ。——彼の母については私も一面の識がある。彼女は私の知れるかぎりにおいて一番深く彼を理解してゐる女であつた。話をしてゐても何となくかたい感じのする女であつた。あの女の身の上にかういふ變化の起るといふことは私にはどうしてもほんとうのことのやうな氣がしないのだ。けれども。運命は奇蹟を爲す、明白のことが誰にわからう。彼の悲痛にも倍する悲痛が彼女の心の中にも湧いてゐるであらう。おそらく發狂するまでに悶え惱んだ彼女の生活の上に必然に掩ひかゝつた絶望的な變化としてわれわれはそれを靜かに眺めて通らねばなるまい。それは測り難い運命の秘密のたわむれだ。そして、それについて道德的な批評を下す資格のある人が一人だつてあるであらうか。フアウストの中でトウルゲエネフが言てゐる——『人生は遊戯でもなければ娛樂でもない。人生は享樂すべきものですらも無い。人生は辛い勞働である。あきらめ、永久のあきらめ——それが人生の秘密の意味であり解釋である』と。けれども、かういふ絶望的な運命を强いておいて、あきらめが人生の秘密の意味であると言つたとて、誰にほんとのあきらめなどができるものか。昨日はこの哀れな青年のために泣いた。監獄の片隅に滅び朽ちていつた若々しい魂のあつたことを記憶せよ。あゝされど吉村よ、お前の死骸の上にも嘗て光榮の花束

が飾られるであらう。から叫びかけたいきもちがする。――けれどもこの青年にとつては發狂してしまつた方がとどのつまり幸福であつたやうにも思ふ。　早々

九月十八日（第十信）

ぐつたりとしびれるやうな腕に無理に力を入れるやうにして萬年筆を握つてゐるもの丶、どうしても自由に書くことができない。君はもう疾くに新聞で知てゐるのかも知れない。私の心の上にはいよいよ安らかな落ちつきがきた。私はもう何も考へない。非常に和いたゆとりのある氣持ちだ。私の母は到頭死んでしまつたのだ。四日ばかり前、法廷からの歸りに面會に來た辯護士の磯村君から。低い聲で、から耳元に囁かれたときには、われながら全身が力一ぱいかたい岩壁のやうなところにたたきつけられたやうな氣がした。いままで一番多く私の心を支配してゐたものは母に關することであつた。そうして、私が一生懸命に離すまいと兩腕にしつかりと抱えてゐたその古い花瓶は何時の間にかすべり落ちてわれてしまつたのだ。――二十から三十までの生涯を私はいかに母の幸福について考へたであらう。私は私の出來得る一切を母の前に捧げやうとした。戀愛も功名も、すべてが私においては母の幸福を透してのみ輝いてゐた。それだのに私は何一つとして母の差出した掌の上にのせてやつたことがあるか。いやそれどころか三十過ぎてからの私はもう素直に彼女を愛してやることができない氣持にさへなつてゐた。彼女の無智と不聰明とに默つて追從することのできない私になつてゐた。四十何年といふ長い間。誘惑の波の間を漕ぎぬけながら、私といふもの丶成育に奉仕してきた彼女にとつて最近十年間に過ごした一日一日がいかに悲しく佗びしかつたことであらうか。

彼女はその悲しみを最後の日まで、ぢつとして怺えてゐたのだ。思へば思ふほど夢のやうな氣がする。私は全くぼんやりしてゐる。ぼんやりするよりほかにどうすることができやう。私はもう前のやうな勇氣に緊張した心をもつてこの手紙を續けることはできない。磯村君は『病氣で死んだのだ』と言つた。母は長い間胃を患つてゐたので、老衰が一時に病勢を強くしたのだらうと思ふけれども。私の入獄が彼女の死を一層早めたのではないかといふ氣がする。先月面會に

來てくれたときの哀れな樣子が眼の底に浮んでくる。

絶望を抑えかくしてゐるやうな眼に涙をためて『なるたけのんきにして身體を大切にしてね』と微かな聲で言つた言葉が耳について離れない。――あゝこれでいよいよ重荷が下りたといふものだ。さあ殺すと活かすと勝手にしてくれ――『ことによつたら母は自殺したのではないか』といふ感じに脅やかされる。しかし母がいかなる死に方をしたにもしろそれは私が自ら手を下して殺したのも同じ事だ。――母はかうしてその一生涯のすべてをあげて私に奉仕してくれたのだ――私は崇嚴な感激を湛えて母の靈の前に頭を垂れてゐる。　草々

四

十一月四日（第十一信）

私の愛する友よ、長い間手紙を書かなかつた。私にはどうしても筆を執ることができなかつたのだ。それに一々出願許可を要するので、いよいよから時日が切迫してくると、どうしても要件のある方から先にしてしまはなければならなくされてしまふのだ。まだはつきりときまつたわけではないがいよいよ私の死刑も豫定どほりに、といふよりも筋書どほりに決行されることになるらしい。もう括う話がきまつてみれば一日も早く宣告をしてほしいやうな氣がする。ふり返つてみると、三十餘年の生涯があまりに慌たゞしく通り過ぎたのが今更のやうに感ぜられる。――じめじめした淋しさの中に昔描いた夢がそのまゝに實現されたやうな快よさがある。母も死に女房とも訣れ、子供は無し、係累もなし、もう浮世に心殘りは少しも無い。

友よ――君と私とのめぐりあひも隨分儚ないものであつたな。私の死は君にとつても、かぎりなき悲しみの種であらう。けれども間もなく君の華かな生活の上にも老衰が音もせで忍びよつてくる。そして悲しみも喜びも、その一切の憶ひ出の泉を涸渇させてしまふときがやがてくるのだ。

今日は烟のやうな雨が降つてゐる。窓から見える樹梢にはもう何時のまにか黄色い葉裏が雨に輝いてゐる。薄暗い獄

室の中には洞穴のやうな暗い濕めつぽい暗愁が漂つてゐる。いま私が坐つてゐるこの古い臭のする板の間の上にはいかに多くの死刑囚が暗い悲しみに泣き悶えたことであらう。いや、これから幾年もの後猶その絶望的な幽暗はこの獄室を充たすことであらう。――あゝそれにしても……………人々の中にはまだ彼等の前に立塞がつた大きな黒い岩壁の前に突つ立つて精根のつゞくかぎり力一ぱいに押しのけやうとしてゐる數人があるかと思ふと涙ぐましいほど淋しい。けれどこの淋しさも惱ましさもすべてが地の底に滑りこむやうに沈んでゆくときがくるにちがひない。マテリアリストとして生きてきた私には神に祈ることもできないし、奇蹟にすがることもできない。

この前の公判廷でKと顔を見合はせて笑つた。何といふ美くしい淋しさであつたらう。青ざめた顔に抑へきれぬ不安を顯はして、ぼんやりと立つてゐる男の人々のうしろに、彼女の小さい身體は痛ましいほど物哀れに見えた。公判廷に竝んだ時一番右の端にゐた私がはつとうしろを振向くと三列と隔てた最後の列に彼女の明るい顔が晴々と輝いてゐた。視線がピッタリと一致すると二人とも自然に輕い微笑が唇の上に浮んできた。――『いよいよくるものがきました。私たちの思ひどほりに』――その黒澄んだ大きい瞳が私に囁いてゐた。

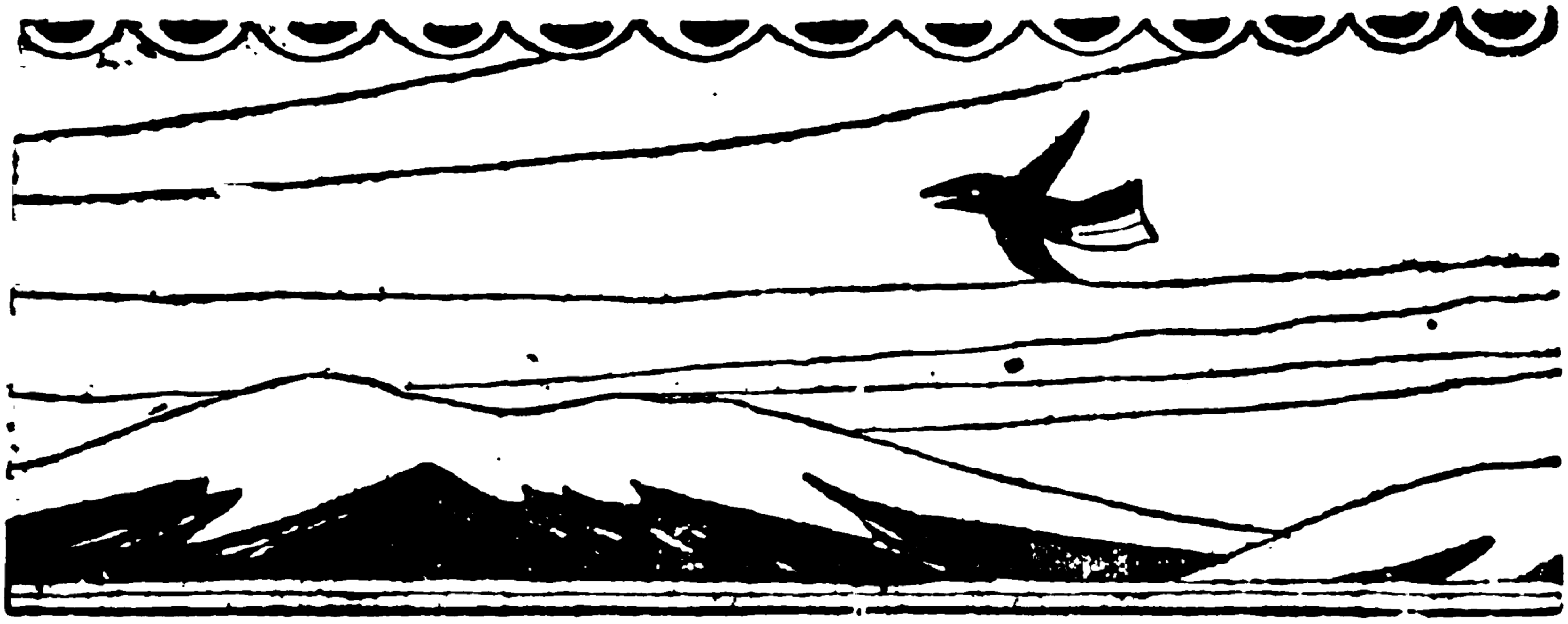
友よ――私は今こそほんとに落ちついてゐる。およそ宇宙に働く如何なる力も私のこの和かな心を奪ひ動かすことはできないであらうほどに。いよいよかういふ決定的な運命が來たのだとわかつたとき、私の頭の中には一つの小さい要求が芽を出してきた。それは獄中の思索を基礎とする小著の完成である。實は一週間ほど前からこの氣持は起りかけてゐたのだ。そして少しづつひそかに筆を執つてはゐたのだ。その要求が昨日あたりから一層强く、明瞭りしてきた。けれどもうらめしいことにはもう時日があるまい。おそくとも明後日までには神聖なる神の裁斷がある筈だ。どうせ死ぬのだし、その上死ぬことを覺悟してゐるのだから十日や二十日遲らせてくれてもよささうなものだと思ふけれどもそんなわけにもゆくまい。

この四五日は獄外同志の面會に忙殺された。もし暇があつたら最後の手紙を差上げることが出來やうと思つてはゐるものゝそれすらどうなるか分らない。私の愛する友よどうぞ何時までもそのとほりに靜かな和かな生活を續けてくれ、そ

うして、その最後の日に淋しい戀に抱かれて死んでゆく俺を祝福してくれ。 早々

十一月三十日 （第十二信）

（以下十七行欠）



暗夜行路

志賀直哉

十

謙作はいよ〳〵新しい寓居に引移る事にした。秋としてはいやに薄ら寒い風の吹く曇り日であつたが、仙が後の荷も着いたからと、それを云ひに來たので、彼は早速移る事にした。彼は自分で自分の部屋の始末をしたり、菰包みの繩を解いたり差し當り要らないやうな道具を屋根裏の物入れにかつぎ上げたりすると、頭からは埃を被ぶり、手や顏はざら〳〵に荒れ、それに寒さから來る頭痛や、埃りから來る鼻のむづ〳〵する事などで、すつかり氣分を惡くした。

婆アやの仙はよく豆々しく働いて居たが、何彼につけ彼に話し掛けるので、彼は氣分が惡いだけに少し苛々して來た。

「これ、何んどすえ?」こんな風に話しかけて來る。

「どれ?」

「お炬燵と違ひますか?」仙は兩手で重さうに鐵の足煖爐を持つて居る。

「足煖爐だ。何所かへ仕舞つといて呉れ」

「足煖爐。へえ。これお使ひしまへんのか」

「使ふかも知れないが、今要らないから仕舞つといて呉れ」

「…………………どうぞ私に貸しておくりやはんか。夜さり腰が冷えて、かなはんのどつせ」いぢけた賤しい笑ひをしながら仙は一寸頭を下げた。謙作は不快な顔をしながら、いやに圖々しい「目差し」だと考へた。然し左う云はれて、いけないとは云ひにくかつた。で、彼は仕方なく、「よろしい」と云ふのだが、一度「目差し」が寢床へ入れた物もう使へないと思ひ、勿體ない氣もするのだ。然しわざ／＼東京から重い物を持つて來て、直ぐ「目差し」に取上げられて了ふ、左う云ふ主人公を滑稽にも感じた。

前に來て居た荷で、大きい金火鉢と入れこにして來た盥の底が拔けかけて居ると云ふので。

「それは直しにやつたか？」と彼は訊いてみた。

「やりまへん」と仙は當然の事のやうに答へた。

「何故やらない」

「桶屋はんが嫺はつて來やはらへんのどつせ」

「來なければ持つて行つたらどうだ」

「阿呆らしい。あんな大きな盥〆御が持つて歩けますかいな。何所までや知らんけど…………」

「頭へ戴つけて太鼓を叩いて行くんだ」

「阿呆らしい」

謙作は苛々するのを我慢しようとすると尚苛々した。然し間もなく錢湯へ行き、さつぱりした氣持になつて歸つて來ると、苛々するのも幾らか直つて居た。

仙との關係が本統に落ちつくまでは少し時がかゝりさうに思へた。仙は書生を一人世話すると云ふ判りに氣輕な心持で來たらしく、そして謙作も書生には違ひなかつたが、そして雇ふた人、雇はれた人と云ふ以上に出來るだけ平等にしたい考へもあるのだが、或る氣持の上のがさつさに對しては矢張り我慢出來ない事があつた。仙がそれを呑込むまでは時々不快な事もありさうだと彼は考へた。

「俺が机に向かつて居る時は如何な用があつても決して口をきいちやあ、いかんよ」かう云ひ渡した。
「何んでどす？」仙は驚いたやうに細い眼を丸くして訊き返えした。
「何んでゞも、いけないと云つたらいけない」
「へえ」
そして仙はこれを割りによく守つた。呆然何か云ひながら入つて來た、その時謙作が机に向かつて居ると、
「はあ！物が云はれんな」こんなにいつて急いで口を手で被ひ、引き退がつて行つた。
謙作は仙の過去に就いて殆ど知らなかつた。只、若し生きてゐれば彼と同年の娘が一人あつたといふ事、それに死に別かれ、兄の世話になつてゐたが、最近それにも死なれ、その後甥夫婦にかゝつて見たが、何となく厄介者扱ひにされるやうな氣がされるので奉公に出る事にした、この位の事を謙作は聽いてゐた。
仙は臺所で仕事を仕ながらよく唄を唄つた。下手ではなかつたが、少し酒でも飲むと大きい聲をするので、謙作は座敷から、
「八釜しい」と怒鳴る事もあつた。
然し日が經つに從つて段々よくなつた。謙作の方も仙のする事がそれ程氣にならなくなつたし、仙の方も年寄りにしてはよく謙作の氣持に順應して行くやう、自身を努めてゐた。そして京都人だけに暮らし向きを一任して了うと、無駄なく、萬事要領よくやつて行つた。酒も煙草も飲む方で、煙草は謙作の吸餘しをほぐして煙管へつめてゐた。
謙作は初め想つたより仙を少しづゝよく想ふやうになつた。
お榮からは無事に着いたといふ簡單な便りだけで精しい事は何も云つて來なかつた。
彼は此所へ家を持つまでは、家が決つたら落ちついた氣持で一人寺廻はりをする事を大きい一つの樂みとして考へてゐたのだが、扨て實際落ちついて見ると、何故か却つてそれが出來なくなつた。妙に臆劫なつた。そして出掛けるとすれば大概新京極のやうなごた〳〵した場所を歩き廻はり、疲れ切つて歸つて來る、左ういふ方が多くなつた。會ち友

達もなく、時には自分ながら法のつかないやうな淋しい氣持になる日もあつたが、それにしろ、それは大森の日のやうな、又は尾の道の日のやうな、それ程の參り方をする事は近頃全くなくなつた。まとまつた物では無かつたが、書く方も少しづゝは出來てゐた。

或る朝、彼が未だ寢て居る時に、珍らしくS氏が會社の出掛けだといひ、上がらずに玄關で一通の開封された手紙を仙に渡して歸つて行つた。

一時間程して謙作はそれを見た。敦賀からの承諾の返事だつた。彼は繰返えして讀んだ。

「オイ。これはSさんが自分で持つて來られたのか？」

「へえ」

「一寸起こして與れるとよかつた」

「けんど、左う申したんどつせ。そやけど、會社の出がけやで、日の暮れに又お伺ひするたら云ふて、直ぐ去なれました」

謙作にとつてはS氏が左うして自身で持つて來てくれた事も嬉しかつた。彼は色々S氏には世話になり、それをありがたく思つてゐながら、妙に機會がなく、これまで一度もS氏の家を訪ねなかつた。この事は氣になつてゐた。氣になりながら、矢張り彼は訪ねて行けなかつた。そして同様S氏の方からも一度も訪ねて來ない事が、時々彼を不安にさえした。自分の禮儀なさをS氏が怒つてゐる。そして此話にも、今は冷淡になつてゐる、それで返事がかう遲れるのだ。結局かうして此話も有耶無耶になるのではないか、左ういふ不安だつた。然し今、彼はかう云ふ拘泥した濁つた氣分までも一掃されると、二重に晴々した氣持になつて居た。

「ようお決まりやしたか」

「うむ」

仙は今まで立つてゐたのを其所に坐り、柄になくしほらしい様子で

「お芽出度うムります」と祝辭を云つた。
「ありがたう」彼も一寸お辭儀をした。
「そんで、何時（いつ）…？」
「明瞭しないが、今年中か來年なら節分前だ」
「ほう。たんと間がおへんな」
「節分と云ふと何日頃だ？」
「二月初めでつしやろ」

その手紙にN老人の息子の友達で或る私立大學の文科にゐる人があつて、それから謙作の評判を聽き皆も喜んでゐると書いてあつた。謙作は其人が幸ひに自分をよく云つてくれたからよかつたがと思つた。そして、若し同じ事を其人の位置で自分が訊かれた場合、左う素直によく云ふかどうかを思ひ、冷やりとした。

彼は信行と石本とお榮とに殆ど同じ文句の手紙を書いた。その他に久し振りで巴里の龍岡にも書いた。

午後彼は自家を出て、龍岡へ送る爲めに駿河屋といふ店に羊羹を買ひに行き、其所からS氏の會社へ電話をかけ、都合を訊き、此方から訪ねる事にした。四時に來て吳れといふ事だつた。四時迄は一寸二時間近かくある。彼は時間つぶしに四條高倉の大丸の店へ行つた。華やかな女の着物を見る、かう云ふ、私かな要求が何所かにあつた。それらを見る事が起こつて來るイリユージョンが今の場合、欲しかつたのだ。然し又別に、最近、深草の練兵場で落ちた小さい飛行機を展覽してゐる。それも見たかつた。龍岡か、其飛行機――モラン・ソルニエといふ單葉の――を讃めてゐた事がある。そして彼は今日龍岡への手紙にその飛行家が、東京までの無着陸飛行をやる爲めに多量のガソリンを搭載（とうさい）し、試驗飛行をしてゐる中に墜落し、死んで了つたゝを書いた。半燒けの飛行服とか、焦げた名刺とか、手袋とか其他色々の物が列らべてあつた。彼が京都へ來た頃、よく此隼のやうな早い飛行機が高い所を小さく飛んで居るのを見た。町の子等がそれを見上げ「〇〇はんや〇〇はんや。」と亢奮してゐた事を憶ひ出す。子供ばかりでなく「〇〇はん」の京

都での人氣は大したものだつた。それが今は死に、其遺物がかうして大勢の人を集めてゐる、左う思ふと、一寸變な氣がした。

いゝ時間に彼は其所を出て、S氏の家へ向かつた。

S氏の家は潜り戸を入ると敷石の兩側が女竹の植え込みになつてゐるといふやうな京都らしい風雅な住ひだつた。

結納の事、結婚の時期、場所、そんな事が相談されたが、謙作には別に意見がなかつた。時期だけになるべく早い方がいいとも思つたが、節分前と決つてゐれば、その中でも早くといふのは變な氣もし、總て、いゝやうに石本と相談し決めて貰ひたいと頼んだ。

十一

謙作は二三泊で上京する事にした。わざ〳〵出る程の事もなかつたが、久しぶりで一寸歸つて見たいやうな氣もしたし、それにこれ〳〵で石本が二度その爲めに來て呉れた、それに對し、今度は自分の方から一度出て行かうと考へたのである。

鎌倉へ寄り、信行と一緒に上京し、其夜石本を訪ねたが、相談といふ程の事もなく、雜談に夜を更かし、二人は其所へ泊る事にして、並んで床に就いた。其時信行は

「本郷へ寄る氣はないかね」と云つた。

「左うだね。本郷は何か臆劫な氣がするが、…………咲子や妙子には久しぶりで會ひたいやうにも思ふ」

「此間お前の話をしてやつたら、大變喜んで居たよ」

「左う。何所かで會つて行くかな」

「明日は日曜ぢやないか？」

「土曜だらう」

「そんなら明日鎌倉へ呼ばうか」

「左うして呉れ給へ」

「左うか、それぢあ、左う明日電話で話して見よう。吃度喜ぶだらう」

翌日午後二人が鎌倉へ歸る前に其事を電話で話した。妹達は心からそれを喜び、翌日の汽車の時間なども打合はせた。

汽車へ乗ると、信行は不意に、

「例の寫眞は持つて來ないんだね。…………氣が利かないなあ」とこんな事を云つた。

「それも考へたには考へたんだが…………」

「考へて止める所がお前だよ」と信行は何と思つたか左う鋭く云つて笑ひ出した。謙作は一寸いやな氣がした。

「然し君は大森で見たんだし、…………そして咲子達とは今度會うとは思はなかつたもの」

「それは左うだ」と信行は自分の云ひ過ぎを取消すやうに二三度點頭いてゐた。

其夜二人は早く寢た。そして翌朝謙作は信行を殘し、此時間に一人停車場へ出掛けて行つた。

彼がプラットフオームに立つてゐる所に汽車が着いた。二人は大きな荷物を持つて降りて來た。

「お兄様は？」と妙子が訊いた。

「自家で待つてゐる」

「まあ、ひどいわ。こんなに御馳走を持つて來て上げたのに……」妙子ははち切れさうに元氣に見えた。そして暫く見ない間に大きくなつてゐた。

荷だけ俥に乗せて、先にやり、三人はぶら／＼と八幡前から學校の横を歩いて行つた。長閑ないゝ日で三人とも晴れやかないゝ氣持になつて居た。

京都の家の話など出たが、謙作は却々結婚の事を云ひ出さなかつた。云ひはぐれた形でもあつたか、余りそれが出ないので、咲子の方から

「今度の事、本統に嬉しいわ」と云ひ出した。

「お式は何時？京都でなさるんでせう？」と妙子も云つた。

「多分左うだ」

「その時、私、京都へ行きたいの」

「お兄さんに連れて來て貰らうさ」

「えゝ、そのつもり。だけど何時なの？學校がお休みでないと駄目なのよ」

「其頃かも知れないよ」

「なるべく左うしてね」

「妙ちやんの都合で、そんな事決められないわ」と咲子が云つた。妙子は怒つたやうに默つて姉を見返えして居た。咲子は學校が休みでも妙子の京都行きは父が許す筈がないと思つて居るのだ。それは謙作にも分かつた。分つてゐながら調子を合はせ、何か話してゐた事が、自分で一寸氣が差した。で、彼も默つて了つた。

近かくまで來ると、妙子は一人先に駈けて行つて了つた。荷を置いて來た俥が向ふから歸つて來た。

間もなく二人が西御門の家についた時には妙子は座敷の眞中に大きい風呂敷包みを解いてゐる所だつた。菓子折りのやうな物、鑵詰、果物、その他シヤツや襦袢の類まであつた。その他にもう一つ新聞紙で包み、うえを紐で幾重に結はへた函やうのものがあつて、妙子は想はせ振りな顔つきをしながら、それを別にし、

「これは謙様の…………」と云つた「今お開けになつちやあ、いけない事よ、京都へお歸りになつてから見て頂戴」

「どら、一寸見せろ」信行が傍から手を出して云つた。

「いけない事よ」

「俺にだけ見せろ」からいつて取らうとすると、妙子は怒つたやうに、

「いやよ」と云つた。

「お祝ひか？」

「お祝ひは又別に差上げるのよ」
「お祝ひの手つけか」
「いゝ事よ。お兄様には關係のない事よ。默つていらつしやい」妙子は起つてそれを遠い棚に載せた。
「意地惡！そんなら口で云へ。何んだ」信行は故とから亂暴に云つた。
「妙ちやんのお手製の物よ」と傍から咲子が口を出した。
「姉さん餘計な事を云つて…………」妙子は姉をにらんだ。そして京都へ歸るまでは決して開けないと云ふ堅い約束を謙作にさせ、漸く滿足した。
「そんなに勿體をつけちやつて、却つて可笑しいわ。それこそ、開けて口惜しき玉手箱になつてよ」からいつて咲子はクス〱と笑ひ出した。
「まあ、ひどい！」妙子は眼を丸くして、呢つと姉の顔を見凝めてゐた。涙が出かゝつて居た。
「おい、もう直きひるだが、お前達がやるんだよ」こんな事を信行がいつても怒つた妙子は知らん顔をしてゐた。
午後皆で圓覺寺へ行つた。その歸途建長寺の半僧坊の山へ登つた。
謙作は二人を東京まで送り、直ぐ其晩の夜行で京都へ歸る事にした。
歸り支度で妙子が便所へ入つた時、信行は串談らしい、一寸いたづらな様子をしながら、
「何んだ、見てやらうかな」といつて違ひ棚の函を持ち出して來た。
「まあ〱」謙作も串談らしくそれを取上げて了つた。咲子は笑つてゐた
信行とは鎌倉の停車場で別かれ、三人で東京へ歸つた。そして其所で又姉達に送られて謙作は京都へ歸つて來た。
妙子の贈物はリボン刺繍をした寫眞立てと、寶石入れの手箱だつた。「玉手箱」で怒つたわけだと彼は一人微笑した
手箱に小さい洋封筒の手紙が入つて居た。
謙兄様。お芽出度うムいます。先達お兄様からお話伺ひまして泣きさうになりました。私は一人直ぐ御洋室に逃げて

了ひましたが、何んだか、あんまり想ひがけないのと、嬉しいのとで變になつたのです。
此箱は未知の姉上様に。此寫眞たては姉上様の御寫眞か、御新婚の御寫眞の爲めに。
ピアノを習ひに行くBさんの奥様に教えて頂いて私が作りました。

こんな事が書いてあつた。謙作は會つた時何んにも云はず、只氣樂さうにしてゐた妙子が、自分の結婚はそれ程に喜んでゐて呉れた事を嬉しく思つた。

十二

謙作の結婚の日取りは案外早く決まつた。それが矢張り石本や信行の意向からだつた。支度は何も要らない、謙作もどれだけ京都に住むか分からないし、家もどうせ廣い所を借りる筈はなし、今、色々な物を持ち込まれても困るから、と、からS氏から向ふへ云つて貰つたのである。そして、式その他もなるべく簡單に濟ませたい、と云ふ事だつた。

十二月初めの或る日敦賀からの一行（當人、母、兄）が出て來た。翌日皆はS氏の家に呼ばれ、其所で形式的の見合ひをし、晩は矢張りS氏の案内で南座の顔見せ狂言へ行つた。

謙作は直子を再び見て、今まで頭で考へてゐた其人とは大分異う印象を受けた。それは何と云つたらいゝか、兎も角彼は現在の自分に一番いゝ、現在の自分が一番要求してゐる、左ういふ女として不知心で彼女を築き上げてゐた。一ト言に云へば鳥毛立屏風の美人のやうに古雅な、そして優美な、それでなければ氣持のいゝ喜劇に出て來る品のいゝ。そして氣のいゝ、快活な娘、そんな風に彼は頭で作り上げてゐた。總ては彼が初めて彼女を見た、その時の一寸した印象が無限に都合よく誇張されて行つた傾きである。そして現在彼は同じ鶉の桝に大柄な、豐頬な、然し眼尻に小縮の少くある、何となく氣を沈ませてゐる彼女を見た。髮は其頃でも少く流行らなくなつた、舊式な所謂庇髮で、彼は初めて彼女を見た時、どんな髮をしてゐたか、それを憶ひ出せなかつたが、恐らくもつと無雜作な、少しも眼ざわりにならないものだつたに違ひないと思つた。

横顔が母親とよく似てゐた。母親もN老人の妹として彼が想像して居たとは全く反對であつた。顔の大きい、づんぐり

と脊の低い、如何にも田舎々々した人で、染めたらしい髪の余りに黒々してゐるのも、よくなかつた。で、彼女が、それに似てゐた事は、同じ場合を書いた Unfortunate likeness といふモウパッサンの短篇小説を憶ひ起こさせたけれども、彼はその小説の主人公のやうにはその事に幻滅を感じなかつた。それにしろ、彼女は彼が思つてゐたやうに美しい人でなかつた事は事實である。尤も後で此事は彼女自身彼に話した事であるが、前日の汽車の疲れと、前夜の睡眠不足――疲勞が却つて彼女を興奮させ、殆ど明け方まで、眠むれなかつた――爲めに其日は輕い頭痛と、幾らかのはき氣もあり、彼女としては半病人の狀態にあつたのだと云ふ事だ。實際彼もその日のやうな彼女を見る事はその後餘りなかつたのである。

　そして氣を沈ませてゐたのは彼女ばかりではなかつた。謙作も變に神經を疲らせてゐた。一體彼は初めて會ふ人と長く一緒にゐると神經を疲らす方だつた。

　殊にそれが無關心でゐられない對手である場合一層疲れた。兄といふ人も感じは惡くなかつたが、共通な話題のない所から、兎角不用意に文學の話をされるには彼は時々返事に困つた。話の爲めの話で、一々責任を持つた返事をする必要はないと思つても、彼にはその程度に淡白とはそれが口に出て來なかつた。只其人が時々如何にも人懐こさうな眼差しで眞正面に此方の眼を見ながら「不束者ですが、何卒」とか「母も段々年を取るものですから……」とか、こんな事をいふ時には如何にも善良な感じがし、そして親しい感情を人に起こさせた。會つて未だ僅かな時間であるのに、謙作には既に赤の他人でない感情が其人に起こつてゐた。（つゞく）



或る男

武者小路實篤

一〇一

彼もその時分の若い人と同じやうに、夏目さんや、藤村、獨步を愛したと同時に、一方、內村さん、蘆花生、木下尙江などを尊敬した。その他綱島梁川や、宗教的な方面で眞面目に働いてゐた人々を尊敬した。

蘆花生のトルストイ訪問は彼に大なる興味を起させたのは云ふ迄もない。木下尙江の「火の柱」「良人の自白」などが彼をよろこばした。彼の兄も夢中でよんだ。そして彼は木下尙江の演說を二度程聞きに行つた。

內村さんや夏目さん程には感心しなかつたと思ふが、しかしその熱心なのには感心し、又氣持ちよく思つた。二度目の時だつた。木下尙江が演說をすませたあとで、飛び入りをすゝめた。その時、一人の男が出て演說したあとで、一人の盲目が出た。そして自分の不幸を泣いて訴へた。それはすべての人を淚ぐませる力があつた。盲目はたまらないと思つた。その人が話したあとで木下尙江が出て何かそれに就て饒舌つたが、前の感動の方が遙かに强かつた。彼は七八年後に「その妹」をかく時、その時受けた感じを再現しやうとした。その演說をきかなかつたら、「その妹」の主

人公は盲目にはしなかつたらう。そして恐らく「その妹」はこの世に生れなかつたらう。彼は今「その妹」を全部的に愛してゐるかどうか知らない。しかしあの作をかいた時程、多量の涙を作品にそゝぎこむことは二度とないであらう。そしてそれが出來たのは、その時盲目の人の演説から消すことの出來ない刺戟をうけたからであつた。恐らく、その時話した盲目の人はまだ生てゐるであらう。彼はその人のことを思ふと盲目の人全部に幸福を望みたくなる。

彼はある日ふと、蘆花生に逢ひたくなつた。それはトルストイの話がきゝたかつたからだつた。そして彼は勇氣を鼓して逢ひに出かけた。しかし家がわからなかつた。すると不意に木下尚江に逢ひたくなつた。矢張り家がわからなかつた。それで逢はない方がいゝのかも知れないと思つた。

彼は日本の何處かに偉い人が居さうに思つた。その人に逢はないのは、何かにすまない氣がした。しかし彼はその人を本當には知らなかつた。彼は筆をとる人にはその人の本をよむので大概見當がつくと思つた。しかしかゝない人で偉い人はわからなかつた。

彼は又新しく生れてくる人に注意を拂つた、何處からどんな人が出ないとも限らないと思つた。そして無名な人のかいた本や、雜誌に一通り目を通さないと我慢が出來なかつた。そしてその人があまり尊敬出來ない人だと、一方がつかりしたが、同時に安心もした。

待たれてゐる人は、もしかしたら自分ではないか。

女王蜂がこの世に生れ出て、自分と力を爭そうことの出來る、まだ目ざめない姉妹を注意深かく捜してあるいて、それを見出す時に彼女はそれを殺してあるく。

彼は殺しもしないし、卑怯な眞似もしたくないが、しかしその女王蜂の氣持がわからない人間でもなささうだ。

そして彼は私かに凱歌をあげた。

この氣持は彼が三十幾つになるまでつゞいた。それは自分の頭を押えつけられないことがわかるに從つて自づと影を失ない出しはしたが。

彼はその後、木下尚江を訪ねる氣にはなれなかつた。逢ひたいと思はないことはなかつたが、強く逢ひたくは思はなかつた。しかしトルストイに逢つて來た蘆花生には逢ひたい欲望はすてることが出來なかつた。

それで彼は二十二の年の暮に、蘆花生に手紙をかいた。彼は正直な處、蘆花生に逢ふのが目的と云ふよりも、トルストイの寫眞を見たり、話を聞いたりするのが目的だつた。勿論「思ひ出の記」その他をかいた蘆花生に尊敬はもつてゐたが、トルストイに不如歸の英譯を送つたのは、彼等の仲間では少し恥かしいことのやうに思つてゐた。そしてトルストイに逢つて東郷大將か誰かのことを賞めて、「一言その愚をあらはす」とトルストイに云はれる處なぞは彼等の笑ひ話になつてゐた。しかしそれはトルストイと比較しての話であつた。彼から見れば、ともかく蘆花生は遙かに先を歩き、大きな仕事をしてゐる人であつた。

彼はその手紙にトルストイの話の聞きたいこと、自分は先輩をもつことの嫌ひなこと、自分は自分の頭でものを考へたい男であることなぞをかいた。そして彼はその手紙の幸運を祈つて自分でそれを出しに行つた。

翌年、彼が二十三になつた正月二日に彼は雑記帳の内にかうかいてゐる。

「朝、床のなかで德富氏から手紙が今日くるか、こないかとやつて見る、來るよと答へを得る。起きたら食卓の上に一通の手紙が置いてあつた。裏を見ると德富健次郎と書てある。とる手おそしとあけて見る。三日の夜か、四日の夜に來てくれと云ふ知らせ、三日に行くことにきめた。」

翌日彼は少し風邪氣だつたが、そして正月らしい、いやに寒い風の吹く晩だつたが、彼は喜んで出かけた。彼は始めて一人で知名な人に逢ひにゆくのだ。彼はいろ／＼に想像して見た。又何を話さうなぞと考へた。

彼は氣持ちよく迎へられた。何を話したか彼は覺えてゐないが、しかし三時間許り、心おきなく話せた。そして蘆花生は彼が先輩をもちたくないと云ふ意見に贊成した。

彼は蘆花生と同等に話せたのをよろこんだ。自分の考が蘆花生よりも劣つてゐないやうに思つて自由に話せたことに

傚りを感じた。そして蘆花生の人のいゝのに厚意をもつた。

その晩彼は風邪をひいた。そして翌日無理をしたので、三十九度以上熱を出した。醫者はインフルエンザだと云つた。彼の母は非常に心配した。彼は始めの內は熱と戰つて、平氣でゐてやらうと思つた。彼は熱が三十九度五分ある時、夏目さんの新年號に出した「野分」をよんだ。それに就て一月七日に彼は志賀にかうかいてゐる。

「もうちき御全快だ。今は熱が一度あるかないかと云ふ處だ。元氣も出て來た。昨日雜誌ありがたう。野分を苦しい思ひして昨日の內に讀んでしまつた。實に痛快で痛切だね、しかし野分のやうな小說は藤村風の文の方がいゝと思ふ。少こしくどい處があるやうだ。(病氣のせいとは思はないが、九度五分程の熱のある時讀んだからかも知れない。)兩人の富める男女を善人とは甘く云つたと感心した。僕等も善人の御仲間のやうな氣がした。鐵哉(?)風になる心算だが、少なくも今は。しかし餘りに都合よくゆきすぎてゐる氣がした。終りの處で高柳が百圓の金を持つてゐなかつたらどうなるだらうと思ふと、草枕や二百十日の結末の方が遙かにいゝと思ふ。まさか鐵哉は變節もしまいが。しかし皆よく生てゐる。中〇文學士がハイカラすぎやしないかとは思ふが。しかし氣持がよかつた、本當によかつた。久しく逢はないね。昨日は人と話をすのるもいやだつた。今日はもういゝ、學校はいつから始まるだらう。全快したらお知らせする」

十日のハガキには

「矢張りインフルエンザなのだよ。餘程インフルエンザが氣にかゝると見へるね。熱の苦を十二分に知つたから安心してくれ。もう熱がないが、六日間熱にくるしみ、一昨々夜、寢汗三回、一昨夜四回、昨夜三回その毎、着物を着かへたりしたもので馬鹿に疲れてゐる。木下氏の懺悔は三日に讀んだ。懺悔する苦痛(?)に一番感じた。今サンドヰツチを一人前食つた、朝飯と、晝飯は食はなかつた。病床にて、本屋に行きたくつてしかたがない、散歩もしたい、もうちきなほるよ生」

彼は十二日に雜記帳にかうかいてゐる。

「人が病氣だとまあ養生したまい、身體を大事にしたまい、やきもきしても仕方がない、苦しいだらうが辛抱するより

仕方がないと云ふ。そのくせ心の内では意氣地のない奴だ、誰が病氣になつたのだ。病氣になるのは自業自得ぢやないか、普段注意をすればいゝのにと思ふ。しかし自分が病氣になるとさう冷淡にはなれない。時々冷淡に、苦しんだつてもがいたつて怒つたて駄目だよと云ふが、實際苦しい。頭はいたむ、寒けがする、胸がへんで吐きさうな氣がする。眠ると氣持のわるい夢を見る。頭がこんがらかつてゐるやうで云ふことをきかない。眞善美なんて云ふものは頭に浮んでも來ない。病氣がなほればと思ふが、このまゝ段々ひどくなるやうに思へて、なほるとはどうも思へない。たゞ〳〵氣持がわるく腹がたつ、五慾も何等の力がない。自分の存在さへへんなものになる、死ぬことを考へても、はつ切りしない。不意に目がさめた時なぞは、自分の身體を自分のものと思へないことすらある。實に病ひとは苦しい變なものだ。健全な時には想像すら出來ない。好な蜜柑さへ見るのもいやになる。愛情も考へるさへ不愉快だ」

彼は二週間程して、外へ出あるけるやうになほつたが、咳だけは中々なほらなかつた。

母には肺病は禁物である。彼は一體に身體がよくなかつた。彼が滅多に咳をしないのが母の唯一の安心する逃げ場だつた。それが、今や彼はよく咳をする。母は又姉のやうなことがあつては困ると思つた。母はうろたへだした。そしてたへて、いろ〳〵の醫者をよんで彼の健康を調べたがつた。

彼は母の前に出ると咳が出ては困ると思つて、なるべくしないやうにするせいか、反つて多く咳をした。母は益々うろたへて、

彼の兄や、嫂は安心してゐるやうに母に見せたが、母は顏色をかへてしまつた。

彼は自分の身體が內から元氣になつて來たので、安心してゐたが、母があまり心配するので彼もいく分か心配した。咳は益々出る。氣にすればする程喉がくすぐつたくなつて咳がついしたくなる。すると母が、それを耳さとく聞きつける。

一〇三

彼は二三の醫者に見せられた。しかし誰も肺がわるいとは云はなかつた。しかしそれでも母は安心出來なかつた。又他の醫者に見せたがつた。彼は遂に怒つた。「誰に見せたつて同じことです。」そのくせ彼は母の前にゆくといつもより多く咳をした。それが四月迄つゞいた。

彼は四月になつて一人で旅行すると云ひだした、母は反對したが彼は承知しなかつた。そして一人で大阪の方へ旅行した。彼は最初の日に舞坂で泊つた。志賀にその汽車のなかでこんなことをかいてゐる。

「八時の汽車に乘らうと思つて新橋に來たら、一等、二等切りないと切符切りに云はれたので八時半のにのる。そのかはり濱松を一つ乘りこして舞坂で今日泊る心算、風景絶佳と旅行案內に書てある。今中央公論の附錄を皆見た。紅綠に一番感心す。露伴だめ、春葉は不相應のものをかいた。風葉には何處かうまい處があると思ふ。しかし一番いやなのは紅綠のだ」

彼は旅行に出たら咳のことを一向氣にしなくなつた。そのせいかぱつたり咳をしなくなつた。一日に一つか、二つだつた。翌日彼は大阪の方へ行つた。そして今戸と云ふ友達の處に泊つて、翌日奈良に行つた。そして彼の母の處へ奈良のエハガキを出した。

その時分には彼の咳はすつかりとまつてゐた。彼の母は彼の奈良からのエハガキを見て非常によろこんだ。

彼の母は彼がたつた晩か、その翌日に彼が二月堂に御參りすると彼の病氣がなほると云ふ夢を見た。そして彼が二月堂へお參りしてくれるといゝがと祈つてゐた。彼が奈良にゆくかどうか母は知らなかつた。處が奈良からハガキが來た。奈良に行つた以上は二月堂にお參りしたにちがいない。

しかし彼は神社佛閣にはいつのまにかお辭儀をしない主義になつてゐた。彼はたしかに二月堂に行つたが、たゞ金網のはつた鐵の格子から暗い中をのぞいて見たゞけだつた。

しかしこの偶然を今でも今の母はよろこんでゐる。そして今でも彼が二月堂に行つたから病氣がなほつたのだと思つてゐる。彼はそれを信じ切つては勿論ゐないが、その後二月堂にゆくと、他の人に氣がつかれないやうに心のなかでお辭儀をする氣になつてゐる。彼はその後まもなく東京に歸つたが、病氣はすつかりなほつてゐた。母も心配しなくなつた。

一〇

彼の仲間は段々文學をやる氣になつた。そしてお互に競爭して本をよみ、又それを話しあつた。彼は志賀、木下、正

親町とは益々仲よくなつて、毎週二三度は必ず往復した。そして畫や文學や、自分達の未來について話した。思想上の話もしたが、もう議論なぞはあまりしなかつた。彼等はその少し前から段々畫が好きになつた。畫と云つても西洋の畫の雜誌や、本に出てゐる寫眞版を見ることだつた。それは彼等にいろ〳〵のことを想像させ考へさせ、又よろこばした。畫を見るのは本をよむより樂でもあり、自由でもあつた。自分の頭を作品に隷屬させずにすんだ。自分の想像や、頭や心を自由にしてくれた。そして如何におちつかない時でも、畫を見る暇はあつた。又其處に淡くエロチックな刺戟を得られるのも、不愉快なものではなかつた。

彼は樗牛の弟の齋藤野の人の紹介でベツクリンや、クリンゲルを愛した。しかしその前に志賀からシヤバンヌや、ミレーや、ラフアエル前派の人達のものも愛することを敎はつた。

それ等が彼等の話題にのぼつた。そして志賀と彼とは競爭して新しい畫家を見出して、よろこんだ。その時分はまだ畫が本當にはわかつてゐなかつたらしい。しかし彼等の生命の內にそれが喰ひ込んで、いろ〳〵の點で彼等に滋養分を與へたことは事實だつた。第一に彼はそれによつて、自分の世界を廣くした。トルストイの世界からはみ出た本能を次第に是認しやうとした。彼は靈の世界以外、肉の世界も、その美しさの故に是認しやうとした。その自然の故に、自由で、力强い點で是認しやうとした。彼等の內にある若さが解放されることをのぞんだ。彼は勿論、トルストイ・共にニイチエを愛してはゐた。しかしニイチエのものはよんではゐなかつた。たゞその勇氣と征服慾を愛した。又彼は一方ホイツトマンを愛してゐた。それ等は彼をトルストイの束縛から脫しさせやうとした。

この時、上田敏に聞いて彼が丸善を通して西洋へ注文したマーテルリンクの獨譯がとゞいた。彼はむさぼるやうに、その內の「知慧と運命」をよんだ。之が彼をトルストイから獨立させるのに役に立つた。彼は自分の實力と云ふことゝ、自分によびよせられる運命と云ふことを考へた。

自分の力にあはない善事は自分にとつて重荷であり、そして生長に害のあることを知つた。自己を本當に愛することと、他人の內にある自己を愛することを知つた。彼はトルストイから得たものを失なふわけにはゆかなかつた。しかし

自分の實力で立つと云ふこと、自分の頭で考へると云ふこと、運命が自づと開ける時を待つと云ふことを知つた。その上、彼の近所の女にたいする愛が彼もなほ深かくマーテルリンクに結びつけた。

彼は段々氣持の上からは自由になつて來た。しかしこの世にある、不合理と、不正と、自己の生活の虛僞を肯定することは出來たかつた。そしてこの世に不幸な人の多いと云ふことは彼の良心の上に依然として重荷であつた。彼は先づ文學で立つ氣になつた。

しかしその素質が自分にあるかどうか、彼は信じられなかつた。

彼は大學には每日通つてゐた。彼は辨當を持つて行つて教場で食つて水をのんですませてゐた。時には水ものまずにすませてゐた。しかし志賀と獨逸語と英語の交換教授をやることになつて、彼の叔母の知つてゐる家が大學の近くにあつたので、其處の室をかりて、隔日位いに集つて、其處で辨當を食ひながら彼は志賀から英語を教はり、志賀に獨逸語を教へることにした。しかし二人ながら好一對に語學の力がないので、不得要領の時が多かつた。そして他の話がはづんだ。彼は自分がよんで感心したものがあるも、志賀が坐るか、坐らない内によんで聞かせるのでよく志賀を閉口さした。

一〇五

四月の十四日に、志賀の室に、正親町と木下と彼とが集つた。それは皆が自作をもつて集つて讀んで聞かせて、お互に遠慮なく批評し合ふ、最初の會だつた。

十四日に集つたので、十四日會と名をつけた。之から彼には十四日は緣起のいゝ日になつた。正親町は十四日に生れてゐたので、その名をよろこんだ。あとで知つたのだが、ロダンの誕生日が十一月十四日で、彼女の誕生日が一月の十四日だつた。そして新しき村の最初の土地がきまつたのも十一月十四日ロダンの誕生日であつた。

その日皆小說をもつて來た。

木下の短いものは皆美しいのでほめた。しかしその他のものは、落第以下だつた。お互に散々にやつつけた。又やつけ

られた。彼もよんで皆に聞かせる内から、いやになつてゐたが、皆からひとしく惡口云はれて、がつかりした。

　彼はその時の氣持を、志賀にあてたハガキの内にかいてゐる。

「昨日は僕にとつて（恐しく僕等にとつて）甚だ價値ある時であつた。自分の小說が如何に拙劣をきはめ、いかに取材が憐れで、型がきまり、文が拙いかゞよくわかつた。僕にはどうしても小說か書けないと迄思つて何となく不快だつた。僕等は頭ばかり發達して（空想ばかり）修養が全くないのだ。僕等人一倍苦しまなければならない不器用を以て人一倍なまけてゐる。しかも僕等の目指す所は二流三流ではないのだ。嗚呼僕等の昨日の作は僅か木下をのぞいて殆んどなつてゐないと思つた。（自分等を小說家と見て）。昨夜歸つて舊主人を讀んで殆んど感服した。僕等より遙かに／＼前方に進んでゐる旅客がなほ一心に步いてゆくのに、して僕等の目的とする處は旅客の目的より遙かに遠くはあるまいか。僕は云ふべからざる不安に打れて昨夜はよく眠れなかつた。前途遼遠、今や第一步を踏んだ時に女々しいことはよくないが、思つたまゝに。木下のですら、歸つてよ　だら、さうよくは思へなかつた。美しい、しかし不自然だ。百姓の妻にお京のようなのがあるだらうか。なくとも詩たるにさまたげないとしても小さい。美しいことに於て僕等、少くも僕のより數倍の價値はあるが」

（いやな文章である。しかしなほさずに出す）

　そのつぎに彼達は正親町の處にあつまつた。その時彼は「彼」と云ふ短篇をもつて行つた。今度は彼のが一番皆にほめられた。彼はうれしかつた。それは彼の最初の本、翌年出した荒野にのせられたが、今の彼にとつて冷汗ものである。考へたゞけでも氣まりのわるい代物である。

一〇六

　彼を愛してゐた大き祖母さんは前年の九月の十日に死んでゐる。彼は大き祖母さんの缺點を隨分よく知つてゐた。もしあの世に地獄と云ふものがあつたら、大き祖母さんは地獄に入り兼ねない人のやうに思つてゐた。彼の母は實によく大き祖母さんに泣かされた。彼の處にくる女中や書生で大き祖母さんに泣かされない人は殆んどなかつた。

日露戰爭で死んだ書生も或る日大き祖母さんに泣かされたので彼は歌をつくつてなぐさめたことがあつた。大き祖母さんは疳癪持で誰にでも頭からがみ〴〵やつける。

他人の氣持なぞを察したことがない、そして自分のしたことを悪いと思つたことはない。世界は自分の爲に存在してゐるやうに思つて自分のことは棚にあげてたへず他人を怒つてゐる。他人がものをおいたのに自分がつまづけば「誰だこんな所にものをおいて人をけがさせやうとしたのは」。そのくせ自分のおいたものに他人がつまづくと「馬鹿、目を何のためにくつけてゐるのだ」。萬事がさう云ふ調子だ。女中達は、小さ祖母さんと一緒に大き祖母さんから、「一たいお前の顔が氣にくはない」と云ふ處からやり出されて、頭から足のさきまで怒りつけられる。よく女中達が逃げたものだ。

しかし彼にはよかつた。そして腹にわるだくみをする質ではなかつた。なんでも默つて辛抱して、そのくせ家のことをちやんととりしまつて祖母の勝手にさゝなかつた母の苦心は、殊に祖母を怒らせた。かの大叔父なぞは大き祖母さんの生てゐる間、酔ふと彼の母の悪口を云つた。それは大き祖母さんの入れ智慧であつた。大き祖母さんが死んだあと大叔父は彼の母に厚意をもつやうになつた。

大き祖母さんと小さ祖母さんとは他人の悪口を云ふ時や、他人に意地悪をする時には仲がよかつたがその他ではよく衝突してゐた。

大き祖母さんは昔の人で、書生や女中や、又人間そのものを、人間あつかいすることを知らなかつた。どつちから見ても、極樂よりは地獄に緣の近い人に見へた。しかし彼は大き祖母さんを愛した。彼には大き祖母さんは實にやさしかつた。いくら大き祖母さんでも女だつた。愛するものなしには生てゐられなかつた。そして彼を一番愛した。大き祖母さんに平氣でものが云へるのは彼だけであつた。しかし彼も大き祖母さんの疳癪にふれやうとはしなかつた。いくら母や、書生や、女中に大き祖母さんが無理を云つても、彼はそれに反對することは出來なかつた。それは大き祖母さんの疳癪に油をそゝぐのにすぎなかつた。大き祖母さんは隨分しつかりした體格をもつてゐた。骨太でがつちりしてゐた。いつまでたつても死にさうには見へなかつた。だが、八月の末にふと病氣した。それがなほると、方々へ出かけて行つ

た。いつもゆかない處へも出かけて行つた。そしてまもなく又病氣になつた。

彼は姉の死ぬ時、病室に入つたことはなかつた。今度は彼は、大き祖母さんの死ぬのを實によく見た。そして彼は、死と戰ふ、生の苦鬪を見た。それは執念深い、正視することの出來ない苦しい、戰ひである。彼は大き祖母さんの爲に祈らないわけにはゆかなかつた。彼はどんな人でも死後地獄にゆく想像して、そして其處に腹いせを感じる人間の本能に賛成することは出來ないと思つた。死ぬだけで澤山だ。あとは平和であれと思つた。死後なほ地獄を考へだす人は少し殘酷すぎると思つた。死ねばそれでその人の罪は消える。消える以上だ。大き祖母さんは七十六七で死んだ。

大き祖母さんが死んだあと、喧嘩相手の小さ祖母さんは隨分淋しがつた。そして半年後の四月の二十五日に死んだ。

「昨夜一晩くるしみ、今朝七時半、遂に祖母死去いたし申し候」

彼はさう志賀にかいてゐる。

彼は自分をよく愛してくれた大き祖母さん(父の實母)の夢を見て泣いた。しかし小さ祖母さんの夢はあまり見ない。しかし小さ祖母さんも、彼は愛することが出來た。

彼はどんなに客觀的に非難さるべき人であつたにしろ、この世に生ること、そして死んでゆくことを考へると、憐みと愛を感じないわけにはゆかないと思ふ。生ることは樂ではない。そして死ぬことはいやなものである。

一〇七

しかし小さ祖母さんの死ぬ前に彼にとつて一つかきおとすことの出來ない出來事があつた。それは、お貞さんが、彼の家に彼の從妹をたづねて來て、彼に逢つたことである。

彼は「第二の母」にかうかいてゐる。

「七年前(今から云ふと十五年前)の二月八日のことだつた。自分は晝食後正親町の處へ行かうと思つて電話をかけに行かうとして、途中でふと行くのをよさう、邪魔するといけないからと思ひなほして、何の氣もなく祖母(小さ祖母さん)の處へ行つた。すると、お貞さんから今日の午後に自家にくると從妹の處へ電話がかゝつたことを知つた。自分の

胸はおどつた。自分は正親町の處へ電話をかけるのがいやになつて祖母の處へ行つたのを何かの知らせではないかとさへ思つた。何しろ聞いてよかつたと思つた。自分の室と從妹のゐる祖母の家とは短かい廊下でつゞいてゐて下駄をはかずに歩いて行けた。さうして祖母の處での話聲は自分の室に聞えた。

自分は聞き耳を立てながら自分の室にゐた。自分はおちつかなかつた。既に四五年あはない、殊に人妻になつたお貞さんはどんなに變つたらうと思つた。二時になつても三時になつても來なかつた。三時半頃自分の室の窓から十日ぶり位いに彼女の學校から歸る後ろ姿を見た。自分は矢張り深くその女を愛してゐることを感じた。そしてこの人がゐてくれるので今日お貞さんに逢つても安心だと思つた。四時になつても、五時になつても、六時になつても、七時になつてもお貞さんは來なかつた。

自分は七時に日記に遂に來たらざるかとかいてゐる。七時半頃だつた。お貞さんの華な聲が聞えた。さうして從妹の嬉しさうな聲が聞えた。祖母の處の格子戸の開く響が聞えた。お貞さんが祖母の室に上つた氣配がした。自分は靜かに立つた。さうして少し躊躇したが思ひ切つて逢ひに出かけた。

一目見た時お貞さんは少し醜くゝなつたかと思つた。しかし話してゐる内に元のお貞さんとまるでかはつてゐないことがわかつた。自分はお貞さんや、從妹と心おきなく話をした。お貞さんは自分が大學の文科に入つてゐることを聞いて「妾もきつと文科に御入りになるだらうと思つてゐましたわ。」と云つた。自分は暫く話してゐる内にお貞さんが從妹に久しぶりに逢に來たのだから自分がゐては邪魔になりはしないかと思つた。それで自分は一先づ自分の室に歸つた。しかしおちつかなかつた。十分程たつたらもうどうしてもおちついてゐられなくなつた。自分は自分の處のランプを消してずつとお貞さんの居る間、祖母の處に居る覺悟で、自分の室を出て暗い廊下を手さぐりで行かうとした時に、祖母が「篤ちやんの室に行つて御らんなさい」と云ふ聲がした。さうしてお貞さんと從妹が自分の室に來さうな氣はいを見せた。自分はあわてゝ自分の室に手さぐりで歸つて、まだ可なりあついランプのホヤを音をさせないやうにあはてゝはづして明をつけた。そして何氣なく自分の机の前に坐つてゐた。お貞さんと從妹は來た。火鉢の上に三人手を出して話した。自

分は夢中だつた。さうして昔のことをお貞さんがよく知つてゝくれるのが嬉しかつた。自分は火鉢の上に出してゐたお貞さんの手にさわりたかつたので子供らしい無邪氣な風してお貞さんの手を押えて火の處へ持つて行つてお貞さんをおどろかさうとしたが、お貞さんは平氣だつた。さうして自分が火の方へ輕く抑へても逃げやうとはしなかつた。さうして何事もない顔をしてゐた。

一時間半許り三人は昔に歸つた。さうして心やすくいろ／＼無邪氣に話した。三人でよく笑つた。時のたつのも知らなかつた。お貞さんが氣がついて時計を見たらもう九時過ぎてゐた。「お暇しなければ」とお貞さんは云つた。從妹はしきりとお貞さんに泊つてゆけとすゝめた。お貞さんは何時まで居ても切りがありませんからと云つた。自分は別にとめなかつた。お貞さんの夫にたいする自分の道徳心は無邪氣にお貞さんをとめることを自分に許さなかつた。

自分は歸るなら倅を云ひつけやうと云つた。さうして倅を云ひつけた。倅のくるまで三人で話した。自分はお貞さんが氣やすく、したしくしてくれるのが嬉しかつた。殊に四五年前わかれた時の自分の無愛想と、その翌日お貞さんが宿の前に出てゐてくれたのに見かへりもせずに通りすぎたことゝ、年始一つ出さなかつたことゝにお貞さんが別に惡意をもつてゐないことを喜んだ。

その内倅が來た。わかれるのがつらかつた。自分は格子戸までお貞さんを送つて出た。さうして用があるふりをして自分一人下駄をはいて少し外へ出た。二人の他は誰もゐなかつた。お貞さんは不意にふりむいた。自分の右の手はいつのまにかお貞さんの右の手と握りあつた。二人は心で謝罪するやうだつた。お貞さんは「皆さんによろしく」と云つた。自分は「又いつか」と云つた。二人は別れた。自分は淋しさと云ふよりも、その手を握りあつた時の喜びの興奮の方が強かつた。さうしてその時お貞さんと手をいつのまにか握つてゐた瞬間に殺されたらどんなに仕合せだらうと思つた。

その死に打ちかつた瞬間の經驗は彼には貴いものであつた。彼は人間に死を歡迎出來る瞬間が與へられてゐることを。その經驗によつて本當に知つた。彼はその實感を「養父」と云ふ脚本の内の最後の場の養父が養女と思ひ出をかたる處に表現しやうとした。

彼はその後又三四年の間、お貞さんとは逢はなかつた。

彼に彼女が居なかつたら、この時のお貞さんとの別れは更に苦しいものであつたらう、しかし彼女が居てくれても、彼はその淋しさと戦ふには可なり骨が折れた。

一〇八

翌日彼は藤村の演説を志賀と聞きにいつて、随分感心した。種まく人の話しだつたが、變に感じが出てゐた。

その時分から彼は次第に雜誌を出したい氣がしだして來た。それには「彼」と云ふ小説をほめられたのも一つの原因だつたかも知れない。勿論「彼」の内にある缺點を志賀達は見のがしてはゐなかつた。それは幼稚なものだつたから、彼がある日散歩に出て歸る途中、彼は學習院で三人美しい人の一人にあつた。その人は二三年見ない内に見ちがへるやうに醜くゝなつてゐて、そしてあまり感じのよくない仲間と歩いてゐた。それが彼に同情を起させた。

そしてその同情とさう云ふ男を、皆よつて弄ぶことによつて病身にさせ、學問をする根氣をなくなさせるのを腹をたてた。

それで彼は歸るとまもなく小説をかき出した。當時彼は獨歩のものをよむと一番自分でも小説がかけると云ふ氣がした。その小説も獨歩のものをよんだあとにかいたのだらう。どつちにしろくだらないものである。たゞかく時の彼の態度だけは今も昔もあまりかはらない。彼はその小説の志賀の評に答へてかいたらしいハガキの内にかうかいてゐる。

「僕の小説をかく時は、實際僕の情の激した時にかくのだ。論文をかく時よりも、もつと激しもつと一本調子の時にかくのだ。で書き出す時が一番激してゐる。それを少し押へつけて書く内にぼんやりする。思ふやうに出てくれないのでいやになるからなほ早くぼんやりする。すると筆をおく、情の激するのを待つ、激すると書く、冷るとやめる。讀者のことを考へては無論ゐない、讀者のことを考へると情は冷る。冷るとかけない」

感情を押へるこつと、興奮を文章にもかきこむ術をだん／＼のみこんでは來たであらうが、彼はいつも、心が全部的

に燃えあがる時に、筆をとる。筆をとるに從つて心が全部的に充實し文章にそれが全部的にそゝぎこめる時はいゝ、さもない時には、彼は筆のとれない男である。

彼は小說の他に感想をかいたり、短いものをかいたりしてゐた。それで彼はなほ雜誌を出す氣になつた。正親町もの り氣になつた。しかし志賀は單行本を出す方が、雜誌を出すよりいゝと云ふ說をもつてゐ。た其處で、彼は手紙で志賀と諍論した。志賀の手紙は、彼の母が土間の中に埋めさした中に入つて葬られてしまつた。彼が志賀にかいたハガキにはこんなことがかいてある。當時の彼の氣持がわかるからかいて見る。

「唯今、御手紙拜見、不服の點、二つ三つかく。雜誌は一時的だと云はれるが、僕にはそう思はれない。雜誌が一時的ならば、單行本も一時的である。永久的價値があるものが雜誌にのれば、雜誌も永久的のものである。君は雜誌だとつまらぬものを出すと思つてゐるらしいが、僕はさうは思はぬ。「吾人は人間なり、して讀者諸兄も人間なり、吾人の眞心より出づるものはいかで諸兄の眞心に通ぜざらんや、これ吾人の敢てこの雜誌を發刊せし故なり、他に故なし」これは僕の雜誌を發刊する理由を試にかいたものだ。論語でもバイブルでも短句の集合だ。短句は長篇と同一の力のあるものだ。僕は又小說を今朝からかき始めた。今度は今迄に例のない小說だと思つてゐる一人より他に出てこない、だから會話はない。舒景もない。

本はあまりよめない。社會主義に似てゐると云はれたが、それは事實だ。僕は自分が世に認められなくとも、自分の作が一時的でもいゝ、不幸な人を救ひさへすれば、いゝ、と信じ又そうすべきであると思つてゐる。しかし僕の自信は恐らく君に負けまいと思つてゐる。僕の目的は現世的であると共に永久的だと思つてゐる。サマリヤの女に眞理を丁寧にといたキリストはたゞサマリヤの女を救ひたいと云ふだけで、說教されたのだと思ふ。永久の生命にあるものは現在にも最も必要なものであり、一日も早きを要するものと思ふ。

子規の書簡の內に「夏目に東京に出るやうにすゝめ候へども。今の學校への義理ありて東京のよき口まで斷り候由、義理堅き男に候」(七〇六頁) 面白くよんだ。この頃は頭も身體もいゝ。しかし獨逸語の出來ないのには閉口した。」

このハガキの議論には隨分矛盾がある。しかし彼にとつては兩方が本當である。彼は益々藝術家になりたがる性質と、益々宗教家になりたがる性質とがある。それがこゝには混合されたまゝになつてゐる。

彼は大學をやめる決心をした。そして大學をやめて雜誌をやりたがつた。しかし彼は兄にぢかに逢つて云ふのが何となくいゝにくかつた。それで夏に金田に行つた時、彼は自分の考へを出來るだけくわしくはつ切りかいて兄にあてゝ出した。彼はそれを兄が見てどう思ふか、氣にしてゐた。するとその翌日彼に電報が來た。彼は電報なのでおどろいて見た。すると、

ヨロシフンレエセヨアニキ

とかいてあつた。彼はおどり上つてよろこんだ。そして兄に心から感謝した。いゝ兄をもつたことを自慢したかつた。それで友達の處へ、自由の人と云つて、兄の電報の文句をかいて送つた。その翌日、彼は母から手紙をうけとつた。それには彼の手紙を見て、兄と嫁とが彼の望みに同感して、たつた一人の弟だから好きなことをさしてやる方がいゝ。學校を出て先生になつても始まらないからといつて、彼の手紙のかき方をほめてよろこんでゐたことがかいてあつた。そして學校をやめたかはりそれだけしつかりやつてくれとかいてあつた。

彼はその手紙を見て涙ぐんだ。そして叔父や、叔母によんで聞かせて自慢した。

自分はしつかりしなければすまないと思つた。

その日彼は志賀からのかのハガキの返事を見てからかいてゐる。（實は前にかいた志賀あてのハガキは八月の十日に矢張り金田でかいたもので、その翌々日に彼は兄に手紙を出した。そして十三日に電報をうけとり、十四日に母からの手紙をうけとつたのだ）

「實云ふと雜誌熱は餘程さがつてゐる。金錢上のことも心配のなくなつた今（今日母の手紙で）熱がさがつた。僕は今修養すべき時と思ふ。しかしまだ餘熱はある。一生自分は修養する。修養のいらなくなる時はないが、しかし修養が出來上るまで筆をとらない必要もないと思ふから、出來たら雜誌をやつて見たいと思ふ。眞心と云ふのは聖人にして始めて

出來ると云ふやうな難かしい意味ではない。眞に思つたことを云ふ。「苦しければ苦しみを」「悶へば悶へを」「愉快なら愉快を」云ふことだ。自分は一歩づゝ進むつもりだ。二三年たつて昔を返り見る、いかに樂しいだらうと思ふ。しかし雜誌をつくることをお勸めはしない。たゞ變に解されてゐると不快だから、この頃は堅い本許りよんでゐる、軟いものが一つもない。大いに閉口」

彼はやつと十六年の學校生活をやめた。彼はその後もよく學校の夢を見る。そして學校の夢を見ることは不愉快な夢を見ることとである。そして目がさめてもう學校にゆかずにすむことがわかると彼は本當に安心する。

學校へゆけなかつたら彼は學校へ行けたらと思つたかも知れない。しかし規則づくめと、つめこみ主義の教育は彼の頭に傷をつけたことは疑へない事實である。

一〇九

彼は今や自由である。同時に彼は責任が重くなつた。

彼等が十四日ごとに集るのはいつのまにかお流れになつた。第三回まではつゞいたと思ふが、それからお互によんだものを講義する會を四人で始めた。それも二回位いでお流れになつた。講義をする人は熱心だが、聞く方はよく居眠りをした。

秋になつて志賀と木下は毎週二三度彼の處へ獨逸語をならひに來た。しかし雜談の方が多かつた。先生が一向語學が出來ない。或日三人で土蜂退治を彼の母にたのまれてした。彼の母は蜂が巣をつくるのを、緣起がわるいと云つていやがつた。そして土蜂が大きい巣をつくつてゐるのを見出して氣にした。其處で三人の勇士が蜂退治を始めた。皆逃げる時の用意許りしてゐる。「來たぞ」と云ふと三人で夢中に逃げ出す。中で一番の勇士の志賀は蜂に着物のなかに入られて、座敷の眞中ででんぐり返しをやつたこともあつた。その時志賀は二十五だつたらう。彼は二十三で、木下は二十一だつた。正親町は二十七だつた。

その時分志賀にある出來事があつて、家からとび出す計畫をした。そして八王子の方へ四人で家をさがしに出かけ

て一日かゝつて氣をめいらして歸つて來たこともあつた。

雜誌熱が再び盛になつた。志賀も今度は賛成した。彼と一緒に鵠沼へ行つて雜誌の挿畫を撰んだり、海岸へ出て、文學や畫や雜誌の話をして空元氣をしぼり出したこともあつた。

一日志賀の處に皆あつまつて雜誌の名前を考へた。どうしてもいゝ名がなかつた。しまいに策がつきて色の名を組合せて見たりした。その内に白樺と云ふ名が出來上つた。皆始めて乘氣になつた。白樺は皆の好きな樹だつた。赤城山をすぐ連想した。それも氣持がよかつた。それで白樺と云ふ名前をつけることにした。

しかしその熱もながもちはしなかつた。皆自信がもてなかつた。そして彼は志賀にすゝめられて、單行本を出す氣になつた。しかしそれは翌年で、彼が二十四の春であつた。

一一〇

彼の最初の本の名は「荒野」と云つた。二十四の時に出したのだが、その幼稚なことは恥づべき本である。實際彼は「荒野」を出したことを恥ぢてゐる。彼は本屋に再版を出すことをすゝめられ、金もほしくないことはなかつたが、彼は一頁よんだだけで閉口した。とても再版を出す氣にはなれなかつた。しかし當時の彼は中々自信もあつた。しかし一方ひけ目も感じてゐた。

彼には舒景と云ふものがまるで出來なかつた。彼は自然の美を感じないことはないが、そして舒景のうまいのを見ると隨分感心もするが、痛切には感じられなかつた。少くも明格には感じられなかつた。彼には人事のことのやうに風景や、氣候や、天候は感じられなかつた。從つて、彼には其處が氣がひけた。

それから彼は、平面描寫と云ふことが出來なかつた。そしてそれが出來ないことは當時の文壇においては致命傷のやうに思はれてゐた。それも彼には一方氣がひけた。

彼に自信のあるのはたゞ眞劍にものがかけると云ふ迄だけだつた。本當に心を動かさないと筆がとれないと云ふ點だつた。しかしそれだつて自己が小さければ他人にとつてそれがなにゝなるだらう。しかし彼には他の術はすべて許され

てないのだ。唯一の道を歩き切るより仕方がない。

幸ひ彼にはよき友があつた。その友が信じてくれ、鼓舞してくれたので彼は本を出す氣になつた。そして兄に話して二百圓あまり出してもらつて、自費出版をした。

本屋は志賀が周施してくれた。校正は木下が見てくれた、木下は彼の仲間で唯一の假名遣ひを正格に知つてゐる男だつたから、正親町には字の組方その他で相談にのつてもらつた。三人は自分の本が出るやうによろこんでくれた　彼は深かく感謝した。

再版が出る時の用意に紙型をとつた。本が出來た時は嬉しかつた。併し本屋の前でそれを見た時は耻しい氣がした。

しかし彼の本は賣れなかつた。たゞ小數の友がよろこんでくれた。

翌月彼は文章世界に批評が出てゐないかと見に行つた。批評が出てゐたがそれは彼にとつては可なりの打撃だつた。

彼は（一九〇八年）四月十六日の日記にかうかいてゐる。

「夕食後、神田に文章世界を買ひにゆく、荒野の評が出てゐるかも知れないと思つて、有斐閣には文章世界はなかつた。東京堂にゆき文章世界を買ふ。新刊紹介の處をこは〴〵見たら出てゐる。自分は讀んで淋しい氣がした。最も自分の弱點とする處を突込まれてゐるから。「小說と論文と詩と蒐めてある。論文には稍見るに足るものがある。けれど概して靑年の空想と斷定とが多い。小說はまだ其形式さへ備へてをらぬ。詩も拙い。要するに靑年眞摯の氣に富んだ一靑年の作と云ふに過ぎぬ」と出たての芽は既に冷たい風を受けた。しかし評者はこれで餘程好意を持つて評した心算であらう」

翌日の日記に彼はかうかいてゐる。

「自分にして筆をとる仕方が出來なかつたらと云ふ不安が常にあるので、文章世界の評は中々自分にとつては打撃だつた。しかしもういゝ。他の新聞雜誌の評が氣にかゝる。實際自分でも小說や新體詩の形はなつてゐないのを知つてゐる。しかし形以上のものに於て今の三流四流の小說家のもつてゐない力を持つてゐる心算である。さうしてその形のなつてゐないのを自分は臆しながら得意にしてゐるのだ。（七時十分）

ペツクリンの顔を見てから急に元氣になつた。エマーソンや、カーライルのことを思ふと微笑まれる。自分はたゞ自分の路さへ歩いてゐればいゝ。(七時十五分)

彼女は僕の方を見た。目と目とあつた。彼女はさけた。この頃の彼女は淋しい顔をしてゐる。(七時半)

この頃汝は心から勉强せず。今日より心をへれかへて勉强せよ」

彼の荒野については一番報知がほめた。その他は皆輕蔑を示してあつた。

報知のに、ついては彼はたゞしかうかいてゐる。

「報知の評は適評ではない。しかしほめられたのだからいやな氣はしない」

彼は荒野を當時南湖院の病床に横つてゐる獨歩に尊敬の意を示したハガキと共に送つた。數日して鉛筆の走りがきの「本を受けとつた禮」のハガキをうけとつた。それにはその内ゆつくり拜見したいと云ふ意味のことがかいてあつた。彼はそのハガキを大事にしまつてゐたが、いつのまにか、なくしてしまつた。

又彼は荒野を蘆花生に送つて、その蘆花生の評が、氣に喰はなかつたのが、一つの元因で一年以上、時々出かけたのをばつたりゆかなくなつた。

蘆花生の荒野の評はあたつてはゐたが、彼には耳がいたかつた上に、その前から彼は蘆花生がいつのまにか先輩顔しだしたことに次第に反感をもち出してゐたので、ついに行かないことになつた。しかしそれについてはこの次ぎ書かう。

彼は武郎さんに荒野をおくつた。その返事が十八日にとゞいた。その日の日記に彼はかうかいてゐる。

「夕食後有島武郎兄から手紙が來た。その中に、

されど共眞率と熱意に於て君は藝術家の第一義を得られたりと存じ候。君の書が反響を喚起する處は小なるべし、されど必ず深かるべしなど心よりの歡喜もて思ひめぐらし申候。」

有島武郎兄の如き人からかゝる言を聞くのだから嬉しい。自分はすぐ禮の手紙を出した。

彼は弱つたり元氣になつたり、元氣になつたり弱つたりしてゐた。

(つゞく)



青い花

谷崎潤一郎

1

「君は此の頃又少し瘦せたね、どうかしたのかい？顏色が惡い、――」

さつき、尾張町の四つ角で出遇つた友人のTにさう云はれてから、彼はゆうべの阿具里(あぐり)とのことを想ひ出して、一層步くのに疲勞を覺えた。Tは勿論そんな事に氣が付いて云つた譯ぢやなからう、――彼とあぐりとの間柄は今更冷やかすほどの事でもなし二人が一緒に銀座通りを步いて居たつて別に不思議はないんだから、――が、神經質で見え坊の岡田にはその一言が少からぬ打擊であつた。自分は此の頃遇ふ人每に「瘦せた」と云はれる。――實際此の一年來自分でも恐ろしいくらゐ眼に見えて瘦せる。殊に此の半年の間と云ふものは、嘗てはあんなにつやつやと肥えて居た肉と脂肪が、一と月一と月削られるやうに殺げてゆく。どうかすると一日の間でもそれが目立つて分ることがある。每日々々、入浴の度びに全身を鏡に映しては、そつと肉附きの衰へた工合を檢査するのが癖になつてしまつたが、もう近頃は鏡を見る

のが恐ろしい氣がする。昔——と云つても今から二三年前までは、彼の體つきは女性的だと云はれて居た。友達と一緒に湯に這入つたりなんかすると、「どうだい、ちよつと斯う云ふ形をすると女のやうに見えるだらう、變な氣を起しちやいかんぜ」などゝ自慢をしたものだつたのに、——就中女に似てゐたのは腰から下の部分だつた。ムツチリした、色の白い、十八九の娘のそれのやうに圓く隆起した臀の肉を、彼は屢々鏡に映して愛撫しながらウツトリとした覺えがある。股や膨らツ脛の線などが無恰好なくらゐに太つて居て、その脂ぎつた、豚のやうな醜い脚を、あぐりと一緒に入浴しながら、彼女のそれに比べて見るのが好きであつた。その當時やつと十五の少女だつたあぐりの脚の西洋人のやうにスツキリしたのが牛屋の女中の脚みたいな彼のものと並べられる時、一層美しく見えたのをあぐりも喜んだし彼も喜んだお轉婆な彼女は屢々彼を仰向けに倒して團子を踏んづけるやうに股の上を踏んづけたり、渡つて歩いたり、腰かけたりした。——然るにそれが今は何んといふ情ない、細ツこい脚になつてしまつたんだらう。膝や踝の關節など、しんこを括つたやうに可愛らしく括れてえくぼが出來て居たのだが、いつからとはなく傷々しく骨が突き出て、皮の下でグリグリと動くのが見える。血管が蚯蚓みたいに露出して居る。脊はだんだんペツタンコになつて、堅い物に腰をかけると板と板とが打つかるやうな感じがする。でもつい此の間までは、肋骨が見える程ではなかつたのに、下の方から一枚一枚トゲ立つて來て、胃袋の上から喉の所まで、人體の構造はこんな工合に出來て居るのかと薄氣味惡く思はれるくらゐ、ありありと透き徹つて居る。大喰ひをするから此ればかりは大丈夫と思つて居た太鼓腹が次第に凹んで、此の鹽梅ぢや今に胃袋まで見え出すかも知れない。脚の次ぎに「女らしい」ので自慢をしたのは腕だつたけれど、——何かと言ふとその腕を卷くつて見せて女にも褒められ、自分でも「此の手で深みへハンマ千鳥」と惚れられた女にからかつたものだけれどそれが今では贔負目にも女らしいとは——いや男らしいとも思はれない。人間の腕と言ふよりは棒ッ切れだ。胴體の兩側に

鉛筆がぶら下つて居るのだ。苟くも骨と骨との間にある凹みと言ふ凹みからは悉く肉が落ち、脂が取れ、かうして何處まで瘦せて行くのか、——一體こんなに瘦せてしまつて、それでも生きて動いて居るのが不思議でもあり、有難くもあり、自分ながら凄じくもある。——さう考へると、もうそれだけでも彼の神經は脅やかされて急にグラグラと眩暈がする。後頭部がずしんと痺れてそのまゝ後ろへ引倒されるやうな、膝頭がガクガクと曲りさうな氣持ちになる——勿論氣持ばかりではない、神經が手傳ふには違ひないのだが、長い間に嘗め盡した歡樂と荒色の報いであるとは、——糖尿病のせゐもあるけれどもそれも報いの一つであるから、——彼にはよく分つて居る。今更嘆いても追つかないやうなものゝ、ただ恨めしいのはその報いが意外に早く、さうして而も彼の最も賴みとする肉體の上に、それも內臟の病氣でなく、外形の上に來たことである。まだ三十臺だ、こんなに衰へなくつてもいゝんだのに、……思ふと、彼は地團太ふんで泣きたくなる。

「ちよつと、ちよつと、——あの指輪はアクアマリンじやなくつて？ね、さうでせう、あたしに似合はないか知ら？」

ふいと、あぐりは立ち止まつて彼の袖を忙しく突ツついてショオ・ウインドオの中を覗いた。「あたしに似合はないか知ら」と云ひながら、彼女は手の甲を岡田の鼻先へ持つて來て五本の指を反らしたり縮めたりして見せる。——銀座通りの五月の午後の日光が、明るくかつきりとその上に照つて居るせゐか、生れてからピアノのキイに觸れるより外一度も堅いものに觸れたことのないやうな、柔かい、すんなりと伸びた指どもが、今日は一と入なまめかしい色つやを帶びて居る。嘗て支那に遊んで、南京の妓館で何とか云ふ妓生の指がテーブルの上に載つて居るのを眺めた時、あんまりしなやかで綺麗なので溫室の花のやうに思はれ、凡そ世の中に支那婦人の手ほど纖細の美を極めたものはないと感じたが此の少女の手はたゞあれよりもほんの少し大きく、ほんの少し人間らしいだけである。あれが溫室の花なら此れは野生の雜草でもあらうか、そしてその人間らしいのが却つて支那婦人のそれよりは親しみ深いとも云へるのである。若しこ

んな指が福壽草のやうに小さな鉢に植わつて居たら、どんなに可愛らしいだらう。……

「ね、どう？　似合はないか知ら？」

と云つて、彼女は掌をウインドオの前の手すりにあてゝ、踊りの手つきのやうにグッと反りを打たせる。そして問題のアクアマリンの事は忘れたやうに自分の手ばかり視つめて居る。

「……」

が、岡田はどんな返事をしたか覺えはない。彼もあぐりと同じところを視つめたまま、――頭は自然と、此の美しい手に附きまとふいろいろな空想で一杯になつて居た。……考へて見ると、もう二三年も前から自分は此の手を朝な夕な――此の愛着の深い一片の肉の枝を、――粘土のやうに掌上に弄び、懷爐のやうにふところに入れ、口の中に入れ、腋の下に入れ、頭の下に入れていぢくつたものだが、自分がだんだん年を取るのと反對に、此の手は不思議にも年一年と若々しさを增して來る。まだ十四五の折にはそれは黄色く萎びてゐて、細かい皺が寄つてゐたのに、今では皮がピンと張り切つて、白く滑かに乾燥して、その癖どんな寒い日にでも粘ツこい膩味がじつとりと、指輪の金が曇るくらゐに肌理に泌みてゐる。……あどけない手、子供のやうな手、赤ん坊のやうに弱々しくて淫婦のやうに阿娜つぽい手、……あゝ、此の手はこんなに若々しく、昔も今も歡樂を追うて已まないのに、どうして自分は斯うも衰へてしまつたのか。自分はもう、此の手を見るだけでもそれが挑發するさまざまの密室の遊びを連想して、毒々しい刺戟に頭がヅキヅキする。……ぢつと見てゐると、岡田にはそれが手だとは思へなくなつて來る。……白晝――銀座の往來で、此十八の少女の裸體の一部、――手だけが此處にむき出されてゐるのだが、……肩のところもあゝなつて居る。胴のところも……腹のところもあゝなつて居る、……臀、……足、……それらが一つ一つ恐ろしくハッキリ浮かんで來て奇妙な這ふやうな形を

する。見えるばかりでなく、それがどつしりと、十三四貫の肉塊の重味になつて感ぜられる。……一瞬間、岡田は氣が遠くなつて後頭部がグラグラして、危く後ろへ倒れさうになる。……馬鹿なツ、──岡田はハツとして妄想を打ち消す……よろめきかゝつた足を踏みしめる。……

「ぢや、横濱へ行つて買つてくれる?」

「あゝ」

さう云ひながら、二人は新橋の方へ歩き出した。──此れから横濱へ行くのである。

今日はいろいろの物を買つて貰ふのだから、あぐりは嬉しいに違ひない。山下町のアーサー・ボントや、レーン・クロフォードや、何とか云ふ印度人の寶石商や、支那人の洋服屋や、横濱へ行けばお前に似合ふ物が何でもある。お前はエキゾテイック・ビューテイーだ、在り來りの、その割につまらなく金のかゝる日本人臭い服裝は似合はないのだ。西洋人や支那人を御覧、そんなに金を掛けないで、顔の輪廓や皮膚の色を引き立たせる法を知つて居る。お前も此れからさうするがいゝ。──さう云はれてあぐりは今日を樂しみにして居た。彼女は歩きながら、自分が今着てゐるフランネルの和服の下に、初夏の温氣で生暖く汗ばみつゝ靜かに喘ぎ息づいてゐる白い肌が、──のびのびと發達した小馬のやうな手足の肉が、やがてその「似合はない」和服を脱いで、耳には耳環をつけ、項には頸飾をつけ、胸には絹だか麻だかのサラサラした半透明のブラウズをつけ、踵の高いきやしやな靴先でしなしなと……街を通る西洋人のやうになつた姿を空想する。そしてさう云ふ西洋人がやつて來ると、彼女はすかさずジロジロと見送つては、「あの頸飾はどう? あの帽子はどう?」と云ふ風にウルサク執拗く岡田に尋ねる。その心持ちは岡田も同じで、彼には若い西洋の婦人と云ふ婦人が、悉く洋服を着たあぐりに見える。……あれも買つてやりたい、此れも買つてやりたい、と、さう思ふのであるが

……それで居て一向氣持ちが浮き立たないのはなぜであらう。此れからあぐりを相手にして面白い遊びが始まるのだ。天氣は好し、風は爽やかだし、五月の空は何處へ行つても愉快である。「蛾眉青黛紅巾沓」……新しい、軽い衣裳を彼女に着けさせ、所謂紅巾の沓を穿かせて、可愛い小鳥のやうに仕立てて、樂しい隱れ家を求むべく汽車に載せて連れて行く。青々とした、見晴らしのいゝ海邊の突端のヱランダでもよし、木々の若葉がぎらぎらとガラス戸越しに眺められる温泉地の一室でもよし、又はちよいと氣の付かない外國人町の幽暗なホテルでもいゝ。そこで遊びが始まるのだ。自分が始終夢に見て居る――ただその爲めにのみ生きて居る――面白い遊びが始まるのだ。……その時彼女は豹の如くに横はる、……頸飾と耳環を附けた豹の如くに横はる、……子供の時から飼ひ馴らした、主人の物好きをよく呑み込んだ豹ではあるが、その精悍と敏捷とは屢々主人を避易さす。じやれる、引ッ掻く、打つ、跳び上る、……果てはずたずたに喰ひ裂いて骨の髓までしやぶらうとする、……あゝその遊び！　考へただけでも彼の魂はエクスタシーに惹き込まれる。彼は覺えず昂奮の餘り身ぶるひする。突然、グラグラと眩暈がして再び氣が遠くなつて、……今、三十五歳を一期にして此の往來へ打つ倒れて死ぬんぢやないかと思はれる。……

「あら、死んちやつたの？　仕樣がないわね」

と、あぐりは足もとに轉がつた屍骸を見てポカンとする。――屍骸の上には午後二時の日がかんかん照つて、痩せて飛ぶ出た頬骨の凹みに濃い蔭を作る。――どうせ死ぬならもう半日も生きて居て、横濱へ行つて買ひ物をしてくれれば好かつたのに。……あぐりは忌ま忌ましくなつて、チヨッと舌打ちする。成るべく係り合ひになりたくはないが、しかし此のまゝ放つて置く譯にも行くまい。……が、此の屍骸のポッケットには何百圓かの金がある。此れはあたしの物になる筈だつた、――せめて一と言、それを遺言して死んでくれるとよかつたけれど、――此の男は馬鹿々々しいほどあたしの愛に溺れて居たから、あたしが今ポッケットからその金を出し、好きな物を買い好きな男と浮氣をしても、あたしを恨む譯はないから。彼はあたしが多情な女であることを知り、それを許して居たばかりか時には喜んでさへ居たんだから

――いゝ、あぐりは自分に云ひ譯しながら、ポッケットから金を取り出す。たとへ化けて出て來たにしろ此の男なら恐ろしくはない、幽靈になつてもきつとあたしの云ふ事を聽くだらう。あたしの思ふ通りになるだらう。……

「ちよつと、幽靈さん、お前のお金であたしはこんな指輪を買つた、こんな綺麗なレースの附いたスカートを買つた、そら御覽、(と、そのスカートを捲くつて見せて)お前の好きな私の足、――此の素晴らしい足を御覽、此の白い絹の靴下も、膝の所に結んである桃色のリボンの靴下留めも、みんなお前のお金で買つた、何とあたしは品物の見立てが上手ぢやなくつて？　あたしはまるで天使のやうに立派ぢやなくつて？　お前は死んでもあたしはお前のお望み通りの、あたしに似合ふ衣裳を着て、面白おかしく世間を飛んだり跳ねたりして居る。あたしは嬉しい、ほんとに嬉しい、お前が斯うしてくれたんだからお前だつて嬉しからう。お前の夢があたしになつて、こんな美しいあたしになつてピンピン生きて居るんだから。……さあ幽靈さんや、あたしに惚れた、死んでも浮かばれない幽靈さんや、一つお笑ひ！」

さう云つて、冷めたい骸を力まかせに抱きしめてやる、枯木のやうな骨と皮とがミシミシ云つた「もう溜らない、勘忍してくれ」と泣き聲を出すまで抱きしめてやる。それでも降參しなければまだいくらでも誘惑してやる。皮が破れて、ありもしない血がたらたらと流れて、シャリツ骨が一本一本バラバラになるまで可愛がつてやる。そしたら幽靈も文句はなからう。……

「どうかしたの、何か考へ事をして居るの？」

「う、………うゝん」と、岡田は口の中をもぐもぐやらした。

かうして一緒に、樂しさうに歩いて居ながら、――こんな樂しみはない筈だのに、自分の心は彼女と調子を合はせられない。悲しい連想がそれからそれへと湧き上つて、遊びの「あ」の字、始まらぬうちから、體が弱り切つて居る。ナニ神經だ、大した事はない、此のお天氣に表へ出れば直つてしまふ。――さう自ら勵まして出て來たのだが、やつぱり神經ばかりではない。手足が拔けるやうにだるくて、歩く度に腰が軋む。だるいと云ふ感覺は、時に依つては甘くなつかしいものだけれども、それが斯うまで度が強くなれば何か好くない徴候だと云ふ感がする。今、自分の知らぬ間に、

重い病氣が刻々と組織を冒しつゝあるのぢやないか。自分はそれを放つたらかして、打つ倒れるまでフラフラ歩いて居るのぢやないか。一旦打つ倒れたが最後、どツと病み着いてしまふのぢやないか。——あゝ、こんなにだるいくらゐなら、いつそ早くさうなつてしまひたい。そして柔かい蒲團の上へでもぐつたり寢かして貰ひたい。事に依ると、自分の健康はもう疾つくにそれを要求して居るのぢやないか？「いけません、いけません、そんな體で出歩くなんて飛んでもない事です、眩暈がするのは當り前です、寢て居たけりやいけません。」と、醫者が見たらビツクリして止める程なのぢやないか。——そこまで考へると一層がツかりして、歩くのが尙更大儀になる。銀座通りの敷石の步道が、——健康な時にはその上を濶步することがいかに愉快だか知れないところの、堅い、コチコチの地面が、一步一步に靴の踵から頭の頂邊へヅキン、ヅキンと響いて來る。第一、足の肉を型にハメたやうに締めつけて居る赤革のボツクスの靴が、恐ろしく窮屈な氣がする。元來洋服なんてものはピンシャンした達者な人間が着るもので、衰弱した體ではとても持ち切れない。腰、肩、腋の下、頸ッたま、……關節と云ふ關節を締め金やボタンやゴムや鞣皮で二重にも三重にも絞られて居るのだから、何の事はない、十字架にかけられたまゝ步いて居るやうなものである。ちよいと考へたところでも靴の下には靴下と云ふ奴があつて、その上の方が御丁寧にもガーターで脛にぴんと引つ張られて居る。更にワイシャツを着、ヅボンを穿き、それをギユツとビジヨーで以て骨盤の上に喰ひ込ませ、肩から襷がけに吊り上げる。……頸と胴との間にはカラアがカツチリと篏め込まれ、又その上を嚴重にもネクタイで縛り、ピンを刺し込む。たつぷり太つて居る人間だと、いくらギユウギユウ締めつけてもますますハチ切れさうで景氣がいゝが、痩せた人間はたまらない。そんなエライものを着て居るのかと思ふと、うんざりして手足が餘計疲れて來て、息が詰まりさうになる。洋服だからこそ兎に角かうして歩けるのだ、——が、歩けない體を無理やりに板の如く突ッ張らされて、足枷手枷をはめられて、「さあもう少しだ、しッかりしろ、倒れちやいかんぞ！」と、後ろから責め立てられて居るんだとしたら、誰だつて泣きたくなるだらう。……

ふと、岡田は、步いてゐるうちにだんだん我慢が出來なくなつて、急に氣が違つてだらしなく泣き出すところを想像

じた。………たつた今まで、年頃のお嬢さんを連れて、此のお天氣に何處か散歩にでも出かけるらしい輕快な服裝をして、銀座通りを歩いて居た中年の紳士、――そのお嬢さんの伯父さんとも見える男が、急に顏の造作を縱橫に歪めて「わあッ」と子供のやうに泣き出す！「あぐりちやん、あぐりちやん、僕はもう歩けないんだよ……！　おんぶしておくれよう！」と、往來に立ち止まつてだだを捏ねる。「何よ！　どうしたのよ！　お止しなさいよそんな似をして！　みんなが見てるぢやないの」と、あぐりは突ッけんどんに云つて、恐い伯母さんのやうな眼つきで睨める。――彼女は彼が發狂したとは、ちよつとは氣が付かないであらう、――彼女に取つて此の男の泣きツ面は珍しくもない。往來で始めてだけれど、二人きりの部屋の中ならいつでも丁度こんな風に泣くのだから。――馬鹿ね、此の男は何もおもてで泣かないだつて、泣きたけりや後でいくらでも泣かしてやるのに、」と、彼女はさう思ふであらう。「シッ、お默りなさい止して頂戴ッたら、極まりが惡いから。」――が、さう云つても何でも岡田は容易に泣き止まないで、果ては身をもがいて、カラーやネクタイを滅茶々々にかなぐり捨てて暴れ廻る。そしてスッカリ疲れ切つて、息をせいせい彈ませてペツタリと地面へ倒れる。「もう歩けない、………己は病んだ、………早く洋服を脫がして柔かい物を着せておくれ、往來だつて構はないから、此處へ蒲團を敷いておくれ、」と、半分は譫語のやうに云ふ。あぐりは當惑して、耻かしさに火の出るやうな顏をする――もう逃げるにも逃げられない、二人の周りには忽ち黑山のやうな人だかりだ、巡査がやつて來る、――あぐりは衆人環視の中で訊問される、――「あの女は何者だらう」「令孃かね」「いやさうぢやない」「オペラの女優かね」など人々がコソコソ云ふ、――「どうですあなた、こんな所に寢て居ないで、起きて貰へませんかね」氣ちがひと見て巡査が劬はるやうに云ふ。「いやです、いやです、僕は病人なんだつてば！　起きられるもんですか。」岡田は首を振りながらまだめそめそ泣いて居る、――

　そんな光景が、彼の眼にハッキリと映る。實際自分が、現にさうなつて居るかのやうに、めそめそ泣く時の心持ちが其の通りにしみじみ湧いて來る。………

「お父さん、………お父さん、………」

と、何處やらで、あぐりとは全く違つた、いたいけな、可愛らしい聲が微かに聞える。今年五つになる、圓々とメリンス友染の着物を着た女の兒が、頑是ない手をさし伸べて彼を招いて居るのである。その後ろには髷に結つたその兒の母らしい姿も居る。……「照子や、照子や、お父さんは此處に居るよ、……お丶お咲！　お前もそこに居てくれたのか、」二三年前に亡くなつた彼の母親の顏も見える、……母は頻りに何かを云はうとして居るのだ、それがあんまり遠すぎるせゐかもやもやとした霞に隔てられて居る。……ただもどかしさうな身振りをして、心細い哀れつぽいことを云ひながら、さめざめと涙で頰を濡らして居るのが朦んやり分る。……

もう悲しい事なんか考へまい、母の事や、お咲の事や、子供の事や、死の事や、――それをひよつと想ひ出しただけでこんなに悲しいのはどう云ふ譯だらう。やつぱり體が弱つて居るせゐではないか。二三年前、達者な時分には、悲しいには悲しくつてもこんなにエラクはなかつた筈だが、今では悲しい心持が生理的の疲勞と一緒になつて、體中の血管の中にどんよりとこだはつて居る。そのこだはりが淫慾の爲めに煽られる時、ますます重苦しさを增して來て、……彼は五月の白日の街を歩きながら、眼には外界の何物も見ず耳には何物も聞かない、そして執拗に、陰鬱に彼の心は內側へばかりめりめり込んで行く。

「もしね、買ひ物の都合でお金が剩つたら腕時計を買つてくれない？――」

あぐりはそんな事を云つて居る。――ちやうど新橋ステーションの前へ來たので、そこの大時計を見て、彼女は想ひ出したのであらう。

「上海へ行くといゝ時計があるんだがな、お前に買つて來ればよかつたつけ。」

それから又一としきり、岡田の空想は支那へ飛んで行く、――蘇州の閶門外のほとりに、美しい畫舫を浮かべて、虎邱の塔の聳える方へのどかな運河を掉して行く。――船の中には若い二人が鴛鴦のやうに仲好く並んで腰かけて居る。――

――彼とあぐりとがいつの間にやら支那の紳士となり、妓生となつて、――

彼はあぐりを愛してゐるのか？ さう聞かれたら岡田は勿論「さうだ」と答へる。が、あぐりと云ふものを考へる時、彼の頭の中は恰も手品師が好んで使ふ舞臺面のやうな、眞ッ黒な天鵞絨の帷を垂らした暗室となる、——そしてその暗室の中央に、裸體の女の大理石の像が立つて居る。その「女」が果してあぐりであるかどうかは分らないけれども、彼はそれをあぐりであると考へる。少くとも、彼が愛して居るあぐりはその「女」でなければならない、——頭の中のその彫像でなければならない、——それが此の世に動き出して生きて居るのがあぐりである。今、山下町の外國人街を彼と並んで歩いて居る彼女、——その肉體が纏つて居るゆるやかなフランネルの服を徹して、彼は彼女の原型を見る事が出來、その着物の下にある「女」の彫像を心に描く。一つ一つの優婉な鑿の痕をありありと胸に浮かべる。今日はその彫像をいろいろの寶石や鎖や絹で飾つてやるのだ。彼女の肌からあの不似合な、不恰好な和服を剝ぎ取つて、一旦ムキ出しの「女」にして、それのあらゆる部分々々の屈曲に、輝やきを與へ、厚みを加へ、生き生きとした波を打たせ、むつくりとした凹凸を作らせ、手頸、足頸、襟頸、——頸と云ふ頸をしなやかに際立たせるべく、洋服を着せてやるのだ。さう思ふ時、愛する女の肢體爲めに買ひ物をすると云ふ事は、まるで夢のやうに樂しいものぢやないだらうか？

夢、——此の物靜かな、人通りの少い、どつしりした洋館の並んで居る街を、ところどころのショウ・ウインドウを覗きながら歩いて居るのは、夢のやうな氣がしないでもない。銀座通りのやうにケバケバしくなく、埃も森閑と落ち着いて居て、何處に人が住んで居るかと訝しまれるやうな、ひつそりした灰色の分厚な壁の建物の中に、ただウインドウのガラスだけが魚の眼のやうにきらりと光つて、それへ青空が映つて居る、街とは云ふものゝ、それは恰も博物館の歩廊のやうな感じである。そして兩側のガラスの中に飾つてある商品も、鮮やかではあるが奇態に幽玄な色つやを帶びて、怪しくなまめかしく、たとへば海の底の花園じみた幻想を與へる。ALL KINDS OF JAPANESE FINE ARTS: PAINTINGS, PORCELAINS, BRONZE STATUES,…………などと記した骨董商の看板の眼に留まる。MAN CHANG DRESS MAKER FORLADIES AND GENTLEMEN…………から書いてあるのは大方支那人の服屋であらう。JAMES BERGMAN JEWELLERY………RINGS, EARRINGS, NECKLACES,………と云ふのもある。

E & B Co. FOREIGN DRY GOODS AND GROCERIES ………… LADY'S UNDERWEARS………… DRAPERIES, TAPESTRIES, EMBROIDERIES, ………………… それからの言葉は何だか耳に聞いただけでもピアノの音のやうに重々しく美しい。………東京から僅か一時間電車に乗つただけであるのに、非常に遠い所へ來たやうな氣がする。………そして、買ひたいと思ふ物があつても、寂然と扉を鎖した店つきを見ると何となく中へ這入るのが躊躇せられる。銀座あたりの商店ではそんな事はないのだが、此れが外國人向きなのであらうか——此の街のショオ・ウインドウはただ冷然と商品をガラスの奥に並べて居るだけで、「買つて下さい」と云ふやうな愛嬌がない。うす暗い店の中には店員の働いて居さうなけはひもなく、いろいろな物を飾つてはあるが佛壇のやうに沈鬱である。——が、それが一層そこにある商品を不思議に蠱惑的に見せるのでもあらう。

あぐりと彼とはその街通りを暫く往つたり來たりした。彼の懐には金がある、そして彼女の服の下には白い肌がある。靴屋の店、帽子屋の店、寶石商、雜貨商、毛皮屋、織物屋、………金さへ出せばそれらの店の品物がどれでも彼女の白い肌にぴつたり纏はり、しなやかな四肢に絡まり、彼女の肉體の一部となる。——西洋の女の衣裳は「着る物」ではない、皮膚の上層へもう一と重被さる第二の皮膚だ。外から體を包むのではなく、直接皮膚へぺつたりと滲み込む文身の一種だ。——さう思つて眺める時、到る所の飾り窓にあるものが皆あぐりの皮膚の一と片、肌の斑點、血のしたたりであるとも見える。彼女は其からの品物の中から自分の好きな皮膚を買つて、それを彼女の皮膚の一部へ貼り付ければよい。若しもお前が翡翠の耳環を買ふとすれば、お前はお前の耳朶に美しい緑の吹き出物が出來たと思へ。あの毛皮屋の店頭にある、栗鼠の外套を着るとすれば、お前は毛なみがびろうどのやうにつやつやしい一匹の獸になつたと思へ。あの雜貨店に吊るしてある青磁色の靴下を求めるなら、お前がそれを穿いた時から、お前の足には絹の切れ地の皮が出來て、それへお前の暖かい血が通ふ。エナメルの沓を穿くとすれば、お前の踵の軟かい肉は漆になつてピカピカ光る。可愛いあぐりよ！彼處にある物はみんなお前と云ふ「女」の彫像へ當て嵌めて作られたお前自身の脱け殻だ、お前の原型の部分部分だ。青い脱け殻でも、紫のでも、紅いのでも、あれはお前の體から剝がした皮だ、「お前」を彼處で買つて居る

のだ、彼處でお前の脱け殻がお前の魂を待つて居るのだ、……お前はあんなに素晴らしい「お前の物」を持つて居るの、になぜぶくぶくした不恰好のフランネルの服なんかにくるまつて居る！

「はあ、……此のお孃さんがお召しになる？——どんなのがよござんすかな」

うす暗い奥から出て來た日本人の番頭は、さう云ひながらあぐりの様子をジロジロと見た。二人はとあるレデー・メードの婦人服屋へ這入つたのである。成るべく這入りよささうな、小じんまりした商店を撰んだので中はそんなに立派ではないが、狹い部屋の兩側にガラス張りのケースがあつて、それへ幾つもの出來合ひの服が吊るしてある。ブラウズだのスカートだのが、——「女の胸」や「女の腰」が、——衣紋架けにかけられて頭の上に下つて居る。室の中央にも背の低いガラス棚がある、そしてそれにはペティコートや、シュミーズや、靴下や、コルセットや、いろいろのレースの小切れが飾られて居る。柔かい、ほんたうに女の皮膚よりも柔かい、チリチリとちぢれた縮緬だの、羽二重だの、繻子だのの、滑かな冷や冷やとした切れ地ばかりである。あぐりは自分が、やがてそんな切れ地を着せられて西洋人形のやうになるのかと思ふと、番頭にヂロヂロ見られるのが耻かしくて、快活な、元氣のいゝ彼女にも似ず妙に内氣に縮こまりながら、その癖心では「此れも欲しい、彼れも欲しい」と云ふやうに眼を光らせる。

「あたし、どんなのがいいか分らないんけれど、……ねえ、どれにしようか知ら？」

番頭の視線を避けるが如く岡田の蔭に隱れながら、彼女は小聲で、當惑したやうに云ふ。

「さうですね、まあ此處いらならばどれでも似合ふと思ひますがね」

さう云つて番頭は、白い、麻のやうな服をひろげた。

「どうです、ちよつと此れを當てがつて見て御覽なさい、——そこに鏡がありますから。」

あぐりは鏡の前へ來て、その白いものをだらだらと頤の下へ垂らして見る。そして、子供がむづかる時のやうな陰鬱な顔つきをして、上眼でぢつと眺めて居る。

「どうだね、それにしたら——」

「え〻、此れでもい〻わ」
「此れは麻でもないやうだが、何だね物は？」
「それはコットン・ヴオイルですよ、サラサラして着心のい〻もんです、――」
「いくら？」
「さうですね、――え〻と此れはと、――」
番頭は奥を向いて大きな聲を出す、
「おい、此のコットン・ボイルの服あ、此りあいくらだつけね、――え、四十五圓か？」
「體に合ふやうに直して貰はなきやならないが今日中には間に合はないだらうか？」
「え？ 今日中に？ 明日の船で立つんですか。」
「いや、さうぢやない、船へ乗る譯ぢやないんだけれど、少し急ぐんだ。」
「おい、君、どうだい、――」
と、番頭は又奥へ向いて云ふ。
「今日中に直してくれつて云つてるんだが、直してやれるかい、――直せるなら直してやつてくれ給へ。」
ぞんざいな言葉づかひの、ぶつきらぼうな所であるが、親切な、人の好ささうな番頭である。
「ぢや、直きに直して上げますがね、どうしたつてもう二時間はか〻りますよ。」
「そのくらゐは構はないよ、此れから帽子や靴を買つて來て、此處で着換へさして貰ひたいんだ。洋服は始めだもんだから何も分らないんだけれど、下へ着る物はどんな物を揃へるんだらう？」
「よごさんす、みんな店にありますから一と通り揃へて上げます。――此奴を一番下へ着てね、(と、番頭はガラス棚からするすると絹の胸當てを引き出して) それからその上へ此れを着けて、下へは此れと此れを穿くんです。こんな風に出來たのもありますが、此奴あ此處が開いて居ないから、此れを穿くと小便が出來なくつてね。だから西洋人は成るべ

く小便をしないやうにするんです。此奴は不便だから此の方がいゝでせう、此れなら此處にボタンがあつて、ほら、此れを外せばちやんと小便が出來ます。……此のシュミーズが八圓です、此のペライコートが六圓ぐらゐです、日本の着物に比べると安いもんですが、此れだつて、こんな綺麗な羽二重ですよ。……それぢや寸法を取りますから此方へ入らつしやい。」

フランネルの布の上から、その下にある原型の圓みや長さが測られる。腕の下や脚の周りへ革の物差が巻きついて、彼女の肉體の嵩と形とが檢べられる。

「此の女はいくらだね、……」

と、番頭がさう云ふのぢやないか。自分は今、奴隷市場に居るのぢやないか。そしてあぐりを賣り物に出して、値を付けさせて居るのぢやないか、——岡田はふいとそんな氣がした。

夕方の六時頃、彼とあぐりとは矢張りその街の近所で買つた紫水晶の耳環だの、眞珠の頸飾だの、靴だの帽子だのゝ包みを提げて婦人服屋の店へ戻つた。

「やあお歸んなさい、好い物がありましたかね、」

と、番頭はすつかり馴れ馴れしい口調で云つた。

「もうみんな直つて居ますよ、彼處にフイッテイング・ルームがあります、——さ、彼處へ行つて着換へて御覧なさい。」

出來上つた服、——しつとりと、一塊の雪のやうに柔かい物を片手にかゝへて、岡田はあぐりの後について、スクリーンの蔭へ這入つた。等身の姿見の前に進んで、彼女は相變らずむづかしい顔をしつゝも、靜かに帶を解き始める。——……岡田の頭の中にある「女」の彫像が其處に立つた。彼はチクチクと手に引つかゝる軽い絹を、彼女に手傳つて肌へ貼り着けてやりながら、ボタンを嵌め、ホックを押し、リボンを結び、彫像の周圍をぐるぐると廻る。あぐりの頬には其の時急に嬉しさうな、生き生きした笑ひが上る。……岡田は又グラグラと眼暈を感ずる……

（大正十一年二月稿）

編輯を了へて

◇我國で政治學の基礎を説いた者がない、十數年來殆んど政治哲學につき發表されたことがない。我國に於けるカント研究の双璧桑木氏と朝永氏が苦心慘憺の余に成るカントの政治哲學のことは我々の感謝に堪えぬ次第だ、殊に田邊氏の「文化の概念」はよく纏まつた力作だ、文化の概念をあれ丈けの紙數で纏めて下さつた博士に對し我々は多大の敬意を表する。

◇ガンヂ研究は世界の趨勢だ、米國あたりではレーニン以上に持て囃され、釋迦以來の東洋の大偉人だと崇敬されておる、印度研究についての權威たる鹿子木博士のガンヂ論は我國の現在に對して深酷なる反省を齎らすだらう。

◇三月號は論文の總てが充實した、殊にラッセル氏の極東及華府會議を論じた雄篇は近時の代表的讀みものと云ひ得やう。憂はしいのは氏の健康が未だに全快せぬことだ。

◇ことしの寒さは又別とあつて、山縣も逝く、樺山も逝くお隣で樞密院も無勢力の府になつた、ヨボ〳〵の清浦がヤットのこと樞相に成上つた。家達と利定は政友會への色彩が濃厚になつて、立派な味噌をつけおる、華盛頓では一中將と太刀打して鮮かな敗けつ振りを現はした彼も、日本ではまだ公爵どのの威光で議長がつとまる時代だ。

◇軍縮案も出た、しかし犬養の案は何等の權威のない妥協案だ、その案にさへ躊躇する憲政會の氣が知れぬ、それもその筈、根がいやしい官僚育ち、嬌ドノ育ちの加藤だもの、彼に凛とした梅花の威を望むことは望むものの無理だ。

◇司法官はどうした、鳩一をどうする。教育家はどうした、鳩一の姿をどうする、白蓮問題の如き家庭の一些事にかれこれするを止めてこの公的問題に意を注げ、平沼も密使問題をモット堂々に辯明せ、鈴木も民衆の疑惑を避けるために上院議員を罷めたらどうか

◇帷幄上奏は大體として怪我の功名だ、油が乘つた序にモットやつたらどうか、源治や、千之助は何をしとる、鳩一もこの方面にでも馬力を出したらドウか。コンナ元氣な問題をいつも老人からせしめらる若手連の顏が見たい。

◇若手所に若き尾崎士郎と其作を紹介する、改めて紹介するまでもなく彼は年齢二十五の美青年だ、その顏の美はしい如く彼の文章も麗はしい、彼が「獄室の暗影」は近ごろ稀に見るの深酷の力作でこの一文を讀んで誰か泣かぬものがあらうか、然り、彼は麗はしい感激の持主だ。友人は相寄つて尾崎に「女難」が來ねばナア……と。

改造定價

册數	定價	郵稅
壹册	八拾錢	貳錢
半ヶ年	五圓六拾錢	增大號共郵稅不要
壹ヶ年	拾壹圓廿錢	增大號共郵稅不要

註文の注意

▲御註文は凡て前金に申受く前金切の時は發送を停止す

▲增大號其他定價變更に依る前金拂込不足の時は御拂込を待つて雜誌を發送す

▼外國よりの御注文は壹部につき郵税金拾錢を申受く

▲日本御請求の向は振替又は郵券にて定價通り御拂込ありたし但し郵券代用一割增の事

▲御拂込は振替によるゝを最も便利とす

大正拾壹年二月廿日印刷納本
大正拾壹年三月一日發行

（定價金八拾錢）

編輯兼發行者 東京市芝區[illegible]子町[illegible] 平田貢一郎

印刷所 東京市京橋區[illegible]町廿七番地 秀英舍

發行所 東京芝區櫻田備前町一 改造社
電話銀座二九五四 四三〇二
振替東京八四〇二二

ドス
以上

長編小說

赭土に芽ぐむもの

本書は一幼年工が、工場勞働者として社會の下積となつて虐げられた血と汗の眞實の記錄である、本書は一般の小說の如く技工本位ではない。しかしその深

中西伊之助著

トエフスキーの作
の深刻なる傑作

刻なる著者の體驗は讀む人をして卷を掩ふて感泣せしむ。そしてその一句、その一章がそうした人間の意識と情緒とに依つて稠かに築き上げられた者であると云ふことを首肯せしめる。その題材も〇殖民地の雄大な風物、純眞な人間性をそのまゝ捕へてあるから讀む人をしてコセ〱した島國的情緒に彷徨せしむることも斷じてない。兎に角、日本人として誰でも一讀せなくてはならない國際的相對性の長編力作である。

THE KAIZO, A MONTHLY REVIEW OF POLITICS, LITERATURE, SOCIAL AFFAIRS, ETC.
PRICE: EIGHTY SEN A COPY. TWELVE YEN A YEAR
OFFICE: KAIZOSHA, 1 SAKURADABIZEN-CHO SHIBA, TOKIO

大正八年三月廿一日第三種郵便物認可
大正拾壹年貳月廿日印刷納本 第四卷 第參號 參月號 定價金八拾錢